# 夢の城

10

## 第Ⅳ部　ラトラ

第4章　リトイア

第5章　セルッカ

第6章　セルッカ

第7章　セルッカ

第8章　セルッカ

## 第４章

　わたしたちは、家であったことについて作文を書くように言われました。この孤児院に入るときには、そうすることが習慣となっているんだそうです。でも、わたしは、あんな恐ろしいことなど思い出したくありません。わたしは、未だによく夢に見るんです。おじいさんが、ほうきを持って、わたしたちが寝ている部屋へどなりこんで来るんです。わたしたちはびっくりして家中を逃げまわるんですが、おじいさんは、わたしだけを追いかけて来るんです。そして、部屋の隅にまで追いつめられて、恐ろしいめにあった夢も、もう何度か見ました。わたしは、おじいさんの家にいるときも、そんな夢を見て、夜中に何度目覚めたか分かりません。わたしは、ペンをとって、さて何を書こうかと考えたとき、急に気分が悪くなりました。あの日のときのことが思い出されたからです。わたしは、それを思い出して、ゾッとしました。冷汗さえ出て来て、わたしは書く気をすっかり失ってしまったんですが、でも、やがて思い直して、やはり書くことに決心しました。おじいさんは、わたしたちの中で、わたしだけを特によくいじめたんです。わたしは、おじいさんのそばにいるとき、いつもビクビクしていたのですが、それが気にくわなかったようです。でも、わたしだって、おじいさんのそばではビクビクせざるを得なかったんです。もとから、おじいさんは、わたしだけに朝早くからたたき起こして、水くみや朝の料理づくりを命令したんですが、兄さんがおじいさんにたてつくようになってからは、そんなことがますますヒドクなって来ました。おじいさんは、なんかあったらすぐ、わたしの頭を力いっぱいなぐるんです。兄さんが少し手ごわくなったので、兄さんにあたっているときも、かわりにわたしをなぐったり、用もないのに用事をいいつけたりして、わたしをいじめるんです。兄さんとおじいさんが初めて大げんかをした日には、兄さんもだいぶあちこちにヒドイけがをして、大きなあざをつくったり、血を出したりしていましたが、その日以来、今度は、わたしの体のあちこちに、たくさんのあざができるようになりました。そればかりではありません。わたしは、朝早くから、寝まきのままよく水をくみに行かされたのですが、そのために風邪を引いてしまったときにも、おじいさんは決して容赦してくれなかったんです。わたしは、もうほとんど倒れそうな気持ちになりながら、水をくみに行ったり、部屋の掃除をしたりしたことが何度もありました。おじいさんは、恐ろしいギラギラ光る目で、わたしがなまけていないかといつも監視しているんです。兄さんも、初めのうちはおじいさんのことが恐ろしくて、そんなわたしのことを黙って見すごしていたんですが、あの大げんかがあった日以来、ようやくわたしをかばってくれるようになりました。それなのに、兄さんは他のいろんなことでわたしたちを楽にしてくれたんですが、このことだけは、大して役に立たなかったようです。あの恐ろしい日もそうでした。おじいさんは、兄さんの目を盗んでは、わたしをいじめていたんです。その日は、おじいさんが退院してから初めての日曜日で、おじいさんも町へ行くことがなかったのでのんびりしていました。外は、この冬では珍しく晴れていて、とてもすがすがしい日でした。

兄さんは、早くからあしたの出荷のために、荷車に野菜を積んでいましたが、家の中では、わたしはその日もまた風邪を引いて熱があったので、こっそりとおじいさんには内緒でベッドの中に入って寝ていました。でも、もちろん、おじいさんのことが心配でよくは眠れませんでした。リサは、わたしが安心して眠れるように、おじいさんの見張りまでしてくれたんですが、でも、その日は不思議とおじいさんは陽気で、朝寝坊をして、また起きてからも鼻うたなんかを歌ったりしていました。おじいさんの見張りに行っていたリサも、やがて戻って来て、大丈夫、おじいさんは今、洗面所でおヒゲの手入れをしてる。お食事も、あたいが全部用意してあげたから心配ないわ、と言ってくれました。それで、わたしはまだ１０分ほどは大丈夫だと思って、ほっとして目を閉じることが出来ました。ところが、そうしてまもないときに、もうさっそく洗面所から、おい、セーラ、セーラはいるか？　今すぐわしの部屋の掃除をしてくれ、というおじいさんの声がして来たんです。わたしとリサは顔を見合わせました。せっかくうまく行くと思っていたのに、これじゃどうしようもありません。リサもすぐ、お姉さん、起きちゃだめよ。かわりにあたいがやったげるから、お姉さんは寝ときなさいよ、と親切に言ってくれましたが、おじいさんが指名したのはこのわたしなんです。わたしが行かなくて、ベッドに寝ているのが見つかりでもしたらそれこそ大変です。リサも何度もわたしを押しとどめようとしたんですが、わたしはやはり行くことにしました。おじいさんは、まだ１分もたっていないのに、またしつこく、何をしてるんだ、と言ってきたんです。わたしは、横になっていたときには割と気分がよかったのに、いざ起き上がってみると、急に頭がガンガン痛くなって来て、体もフラフラしていました。でも、掃除の間ぐらい、なんとかがんばればできないこともありません。わたしは、寝間から出ると、くつをはいて、服を着替えようとしましたが、するとそこへ突然、バタンという大きなドアのあく音と共に、おじいさんが、まだせっけんをひげにくっつけたままの顔で姿を現したんです。そしてすぐ、何をぐずぐずしてるんだ、としんきくさそうに言いました。そして、わたしが服を着替えようとしているのを見ると、おじいさんは急に顔をしかめて、なんだ、まだ起きていなかったのか、とこわそうに言います。それから続いてすぐ、じゃあ、そのままでいい、パジャマのままでいいから、とにかくすぐ掃除をするんだ、と今にもはりたおさんばかりの調子で命令したんです。わたしは、こわくなって、まだはっきりはいていなかった靴を持ってあわてておじいさんの部屋に行きました。部屋の出しなに、どうしてもおじいさんのそばを通らねばなりませんでしたが、そのときにもまた、おじいさんはわたしの頭をつかんで振るんです。それから、おじいさんの部屋に向かってわたしを突いたので、わたしはよろよろとあやういところで床に倒れそうになりました。すると、後ろでおじいさんは、そんなわたしのことをゲラゲラ笑うんです。それから、また鼻唄を歌いながら、洗面所へ戻って行きました。わたしは、くやしくてくやしくて涙が出そうになって来ました。今まで、そんなことが何度あったか分からないんですが、そのたびごとに、わたしはくやしさを押さえることができず、涙を流すことをくり返す他はなかったのです。でも、すぐリサがやって来て慰めてくれたので、そのときは思いとどめることができました。

わたしたちが、おじいさんの部屋に入ると、すぐリサは、お姉さん、大丈夫？　と心配してくれて、また、お姉さんはそこのソファーで横になっときなさいよ、あたいが全部してあげるから。なあに、心配ないわ。そこの戸を閉めとけば、おじいさんに見つからないから、とも言ってくれました。そして、リサは本当にドアを閉めてくれたので、わたしはやはり体が疲れていたし、リサの言った通り休ませてもらうことにしました。リサはさっそく、ほうきを持ってはきにかかりましたが、わたしはその間ソファーの上に横になってじっと目を閉じていました。幸い、おじいさんの部屋には暖炉があって、きのうの残り火がまだ燃えていたので、部屋の中は暖かくていい気持ちでした。でも、おじいさんはやがて顔を洗い終えたらしく、わたしたちがいる部屋の隣の居間にやって来て、食事をはじめましたから、そのことが気がかりでおちおちとソファーの上で眠っている気にはなれませんでした。わたしはこわくなって何度も起きて掃除をしようとしたんですが、そのたびにリサは、大丈夫よ。おじいさんは食事をしている間は入って来ないから、お姉さんは寝ときなさい、と言ってわたしを寝かしつけたんです。でも、隣の部屋ではずっと、おじいさんの食器をガチャガチャいわす音が聞こえていたので、わたしはドキドキしながら横になっていました。そのうち、リサはふき掃除のため、わたしをひとり残してバケツに水をくみに出て行きました。ところが、それからまもないときです。突然、おじいさんは言い忘れたことがあったのか、そうだセーラ、それからな、と言ってわたしがソファーの上に横になっている真最中に部屋の中に入って来たのでした。わたしはあまりの突然のことに、心臓がはり裂けんばかりに驚きました。すぐビックリしてソファーから飛び起きたんですが、おじいさんはもうすでにこわい顔をして目の前につっ立ちながらわたしをにらみつけていました。そして、なんだセーラ、掃除をしてなかったんか！と雷のつんざくような声でわたしを怒ったんです。わたしはこわくてとても目があけていられませんでした。わたしが立ったところから、ほんの数歩のところには、おじいさんの二本の足が見えているんです。リサはすぐ、おじいさんの声を聞きつけてビックリして戻って来ましたが、リサではどうしようもありません。お姉さんは病気なの、と泣きそうな声でリサが言っても、おじいさんは、なに病気？また病気か？セーラはいつも病気、病気ばかりじゃないか！　と言って本当にしてくれませんでした。それで、わたしはあきらめて目を閉じると、今かとなぐられる覚悟をしました。初めのうちは、こんなときこわくて泣き出してしまったんですが、もう今では少々なぐられることぐらい慣れっこになっていました。ところがどうしたことか、わたしがずっと覚悟をして待っているのにおじいさんはなかなかなぐろうとしないのです。それどころか、やっと口を開いたかと思うと、こんなことを言いました。まあ、きょうはよそう。きょうは怒るわけには行かないからな。だが、今度こんなことを見つけたら承知しないぞ。さあ、さっさとゾウキンを持って。ふたりとも掃除を続けるんだ。そう言って、それでも力こぶしを両手に握り締めながらおじいさんは居間に戻って行きました。わたしはその手を見て、いつもあんなゲンコで殴られていたのかと思うと、胸の悪くなるのを覚えました。でもとにかく、そのときはそうして許してもらえたのでホッとしました。

おじいさんはその日、友だちの来るのを待っていたので、それでそのとき許してくれたのでした。でも、もうドアを閉めることは許してもらえそうもありませんでした。おじいさんは居間のテーブルに腰をおろすと、直接わたしたちのほうを向いて、わたしたちが掃除するのを監視しはじめたんです。それにたとえドアを閉めることを許されても、もうあんな大胆なことはとてもできません。もうそういうことは一回だけでこりごりです。わたしはあいかわらず疲れていましたし、リサも心配そうにしてくれていましたが、リサももうあんなことをすすめる元気もなく、わたしはガンガンする頭の痛みをこらえながらゾウキンがけを続けました。ところで、そうしてリサと掃除をしている最中に、おじいさんはやっとさっき言いかけてすぐ忘れてしまったことを今頃思い出したらしく、あっ、そうそう、セーラ、その部屋の掃除を終えたら、次にこの居間もやってくれ、と言いました。たったそんなことのために、さっきは危うくヒドい目にあわされそうにもなり、冷汗さえかかされたんです。でもわたしは黙っているわけにもいかず、ええ、とだけ返事をしておきました。そのときリサはこっそりと、まだ掃除させる気なの。姉さん、本当に大丈夫？　と言ってくれましたが、わたしは、ええ大丈夫よ、と答えたものの、本当は今すぐにでもベッドに行って横になりたい気持ちでいっぱいだったんです。ところが、そんなために、とうとうわたしは大失敗をやらかしてしまったんです。そして、それがあの恐怖の始まりでした。せっかくおじいさんが怒らないといったラッキーデーなのに、なんと皮肉なことなんでしょう。わたしは、掃除をしている間、気がもうろうとしていたんです。そして、早く掃除をすましてベッドに横になろうとそればかり考えていました。窓ガラスを息を切らせながらやっとふき終えた後、わたしは暖炉の上をふきにかかりました。わたしはもう、ぞうきんをしぼって立ち上がるのも頭がクラクラして容易ではありませんでしたが、なんとか立ちあがると、そのまま気力に任せてやっと暖炉に来ることができました。ところが、ぼうっとしていたのがいけなかったんです。わたしの手が暖炉の上に触れたかと思うと、そうではなくて突然、何か小さなものが手に触れて下に落ちました。わたしは、はっとして目を覚ましたように下を見ましたがそれはおじいさんが日頃大切にしている木のパイプでした。しかも、それはただ床の上に落ちただけならよかったんですが、まん悪く一回バウンドしてまだ赤々と火の燃えている暖炉の中に入ってしまったんです。わたしはビックリしてそれをとろうと暖炉の中に手をつっこみましたが、あつくてすぐその手を引っ込めねばなりませんでした。でも、こんな恐ろしいことがあるでしょうか。おじいさんは、ちょっと朝寝ぼうをしただけでもガミガミ言うんです。それなのに、おじいさんのパイプを焦がしてしまったりすれば、それこそただではすまされません。わたしは、泣きたいような、また、神に祈るような気持ちで必死になって火かき棒で暖炉の火をあさりました。リサも、パイプの落ちた音で驚いて駆けて来ました。そして、ふたりで一緒にあれこれと根かぎりの手をつくしたんですが、それなのに、パイプは早くも火に包まれて無情に黒ずんで行ったんです。そのときは、幸いにして、おじいさんは居間にいなくておじいさんには分からずにすんだのですが、やっととり出したパイプを見て、わたしたちはすっかり心配になってしまいました。

おじいさんに今は見つからなくとも、こんなに焦げてしまっていたのじゃすぐ分かってしまうに違いありません。わたしたちは、なんとか元どおりにできないものかとこすったりしましたがますますきたなくなるだけでもはやどうすることもできませんでした。わたしは、すでに今にも倒れそうだったのに、そのうえあまりにも大きな苦しみがふりかかって来たので、死にたい気持にさえなりました。でもリサは、おじいさんがあるいは置いたところを忘れているかも知れないので、わたしたちでそのパイプを持っていて、おじいさんが知らぬ間に紛失したことにすればいい、と言ってくれたんです。そんなことがうまく行くかはだいぶ疑問でしたが、たとえバレたとしても、そのときにはこのまま白状するのとおあいこになるのですから、万が一うまく行くかも知れないことを願って、わたしは冒険することにしました。それで早速リサは、そのパイプを持ってわたしたちの部屋へ駆けて行きました。わたしは、ひとり居間に残されて祈るような気持でした。もし見つかれば、わたしは二発や三発のゲンコだけではもうすまされないんです。わたしはバケツを持って来て、おじいさんが戻る前から早くも居間の掃除を始めました。もう、病気で疲れていることなんか問題ではありません。ただ、わたしの運命が、幸運に向くか、不運に向くか、それだけがわたしの心を占めていたすべてのことでした。やがて、重みのある足音が。わたしはドキドキして来ました。おじいさんが庭で背伸びとあくびをした後戻って来たんです。リサはまだ戻って来ませんでした。わたしは壁を拭きにかかりましたが、おじいさんは、やって来ると、わたしを見て、どれ、部屋はきれいになったかな、と言ってとうとうあの恐ろしい部屋に入って行ったんです。わたしは、もう恐ろしくて、体中がブルブル震えていました。雑巾が、今にもふるえる手からおっこちそうでした。でも、わたしはその間、じっと耳を澄まして聞いていたんです。しばらくは、おじいさんも何事もない様子で部屋の中を見ているようでしたが、やがて、ハテ？　という声が耳に入って来ました。いよいよ、恐ろしい運命の賭けが始まったんです。リサも、そのときになってやっと戻って来ました。そして、わたしが、しっ、と合図をすると、リサも恐ろしそうな顔をして耳をすませました。おじいさんの部屋では、しきりに何か捜しているような、おかしい、という声と共に、動きまわっているらしい音が聞こえていました。わたしもリサも、その間、もう死にそうな気持ちでそこに立っていました。ところが、そうして耳をすまして立っているとき、急に、バタンという大きな音が鳴ったかと思うと、おじいさんが姿を現して、セーラ！　暖炉の上に置いてあったパイプをどこへやった！と恐ろしい目でにらむなりそう怒鳴ったんです。同時に、わたしは、気がクラクラッとなって倒れそうになりました。運命は、すっかりわたしたちにそむいたんです。リサの計画もこれですっかりだいなしになってしまったんです。おじいさんは、やはりちゃんとパイプを置いたところを覚えていたんです。わたしは、ようやく正気をとり戻しましたが、もう恐ろしいことが身にふりかかって来ることは避けられませんでした。わたしは、すっかり気をくじいた弱々しい足どりで、恐怖のパイプをとりにリサと部屋へ戻って行きました。どうしたんだ、これを！　わたしたちが持ってきたパイプを見るなり、おじいさんは大声でそうどなりました。

それから、わたしたちを交互に見つめると、おじいさんは、お前たち分かっているな。さあ、白状するんだ。どっちがやった。やったものはただじゃすまさないからな。セーラ、お前か！と恐ろしいことを言ったんです。でも、わたしはもう覚悟を決めていました。どうせ、パイプを落としたときにもうすでにこのことは決まっていたようなものなのですから。それに、なんの関係もないリサまでこんなことに巻き込まれればそれこそ大変です。わたしはうなだれながら、弱々しく、ええ、わたしが、と言いかけましたが、そう言うが早いか、突然、バカッ！という大声と共に大きな、きつい平手がわたしのほおを、まともに襲いました。どうして黙ってるんだ、パイプをメチャメチャにして！と続いておじいさんはどなりました。わたしはすでにもう心臓が止まる思いでした。リサは、わたしがほおをなぐられて、体がよろけたとたんに泣き出しましたが、おじいさんの頭にはもう怒りと憎しみしかなかったようでした。さあ、来るんだ！　おじいさんはそう言ってわたしの髪の毛をつかむなり、自分の部屋の暖炉のあるところへ無理やりに連れて行こうとしました。そればかりか、こいつは！　と言って、おじいさんはつかんだ髪の毛をゆすって、わたしの頭を振りまわしたんです。わたしは、とうとう涙が出て来ました。おじいさん、許して、とも叫びました。それなのに、おじいさんはそのままどんどんわたしを暖炉へ引きづって行くんです。わたしは、その間ただ、ちぎれそうに痛い髪の毛を、なんとかおじいさんの手からはなそうと必死になっていました。でも、おじいさんは髪の毛をゆさぶりながら引っ張って行ったので、わたしにはほとんど自分の髪の毛にさわることさえできないまま、とうとう暖炉のところまで連れて行かれました。ところがそのとき、あ！　姉さんに何するの！　やめて！　という大きなリサの叫び声が聞こえました。わたしはビックリしておじいさんを見ましたが、すると、おじいさんはいつのまにか右手に、真赤に焼けたあの火かき棒を持っていたんです。わたしはビックリしました。おじいさんはすぐわたしの手首をつかむと、火かき棒をもった手でわたしのパジャマの袖をめくりはじめました。おじいさんは、その火かき棒でわたしの腕を焼こうとするつもりなんです。わたしはビックリして泣き叫びながら、袖をめくらせまいと必死になって抵抗しましたが、おじいさんは、簡単に、わたしの額をその火かき棒の手元のところでゴツンとつっ突いたんです。わたしは痛さの余り、袖をつかんでいた手を離してしまいました。するともうそれが最後、たちまちのうちに、わたしの左腕がおじいさんの目の前に露出してしまいました。わたしは、もうとてもその腕を見る勇気がなくて振り向いて目を閉じると、ただ何度も、何度も、許して！　許して！と叫び続けました。そのとき、兄さん！　兄さん！　助けて！　おじいさんが姉さんにヒドいことしてるの！と泣き叫びながら駆けて行くリサの声が耳に入って来ました。しかし同時に、そんなことを言ってももう遅いわい、というむごたらしいおじいさんの声がしたかと思うと、急に左腕の肩に近いところに恐ろしい痛みが生じました。わたしは、わっと大声をたてて泣き叫びました。おじいさんは、とうとう、わたしの腕に、あの熱い真赤に焼けた火かき棒をギュッと押しつけたんです。その間はほんの数秒でしたが、わたしは一瞬泣き叫んだ後はじっと歯をくいしばって痛みを耐えていました。

さあ、終わった、何をめそめそしてるんだ。大したこともないくせに。数秒後に、おじいさんはそう言ってとうとう火かき棒を腕から離しました。同時に、わたしの目にはどっと涙があふれて来ました。腕を見ると、黒ずんだ長い太い一筋の筋が肩の近くについていました。しばらくは、そこが痛くて痛くて声も出ないほどでした。わたしはやっと終わったことを知りましたが、そこにつっ立ったまましばらくの間は声も出さずに涙をのみ込みながら泣いていました。

…ぼくたちの孤児院での生活は、それまでの爺さんとの生活が、体からはがれ落ちて行くような実感と平行して、春に若葉が芽ぶくように、一切が新しく生まれ変わる、新生の思いと共に始まった。

規則正しい生活の中にも祈りと労働とがあり、とりわけぼくは、仲間と共にする労働が気に入った。院の運営は、篤志家たちの寄付によってまかなわれており、もはやぼくたちが明日の生活を憂えるということはなくなった。

しかも作業の中にはバイオリンの製作という楽しいものまで含まれており、これにはみんなが熱心だった。これは、町のバイオリン製作家と院長先生とがたまたま知り合ったことから始まり、週に一度、じかにその製作家が、院の作業場まで指導に来てくれるという中味だった。もちろん善意からの無料奉仕だったが、その割にも、熱心に、親切に指導してくれ、院の仲間からも、なかなかの好評だった。

ぼくも、そのときが来るのが待ち遠しかった。というのも、そのときには、男子も女子も同じ作業場に集まって、みんな一緒に先生の指導を受け、楽しくおしゃべりを続けながら作業を続けることが出来たからだった。無論その中にはぼくの妹たちもいたし、他の、見知らぬ女の子とも一緒だった。

夜は男女別々のベッドで寝かされたので、もう妹たちに会うということはなかった。

当初、寂しさの余り、窓から見える中庭ごしに、向うの棟では妹たちが眠っているのだなと、月夜の晩、ぼくは窓の外を見つつ思ったものだった。しかしそういう生活も、時が経つうちに、次第に慣れて行った。

そのうち、ぼくは院の中で、何人かの仲間と知り合いになった。

メーチンク。レビ。ラボス。とりわけその連中と、ぼくは親しくなった。それぞれの出所、素姓は様々で、それと同様、その性格も様々だった。

メーチンクが孤児院に入った直接の理由は父が死んだためだったが、父は母親とはとおに離婚していて、生き別れの姉とも音信不通の状態だったため、やむなくこの孤児院にころがり込んで来ていたのだった。

この仲間では一番古手のボス格のレビは、ふしだらな母親に捨てられてこの孤児院にやって来た。父親は誰なのか分からず、もちろん、兄弟もいなかった。

ラボスは、子沢山のため、やむなく預けられていた。同じ孤児院に、腕白な弟が二人もいた。はたち過ぎの兄がセルッカにいて、貨物船の船乗りをしているということだった。
ラボスはその兄に会いたがっていた。そして他の仲間たちも、次第に、ラボスのその話しに耳を傾けるようになって来た。
いい加減あきあきして来たこの孤児院を脱走しよう。外にはいい生活が、きっとあるはずなのだ。セルッカに行きゃ、なんとかなるさ。ラボスの兄、ミゲルの紹介で、船乗りにありつけるかも知れない。そうなりゃ、船に乗って、広い海に乗り出して行って、見知らぬ外国に行くことだって、夢じゃない。――そんな夢のような話しが、ぼくたちのあいだで広まって行った。
しかし、その話しに乗るとしても、ぼくには気がかりなことが一つあった。
同じ孤児院にいる妹たちのことをほって脱走するにはためらいがあった。ぼくがいなくなれば、彼女たちの面倒は誰がみるだろう？
“大丈夫、気にすることはないさ”と、レビがけしかけたが、彼が妹たちのことを十分考えているとは、とても思えなかった。

季節は次第に春めいて来た。
そんなとき、村でショーが開かれた。ぼくら、孤児院にいる子供たちや、貧しい老人たちや、障害者たちを慰安する為のチャリティー・ショーで、ぼくたちはそれを見る為に動員された。
騒然とした会場の雰囲気の中で、様々なショーが催された。マジックや、道化のショーには腹の底から笑いころげた。しかし、次に場面が変わって、中央にピアノが置いてある舞台に遭遇するや、人々は緊張した面持で、声をひそめた。
やがて舞台に姿を現したのは、ぼくとほぼ同じぐらいのバイオリンを持った少年と、ピアノの前にやって来て腰を降ろした少年の二人だった。
彼らは、勝ち誇ったような、小生意気な表情を聴衆のぼくたちに向けてうやうやしく挨拶をすると、やがて呼吸を合わせて、一、二、三とバイオリンの演奏を始めた。それは、年の割には見事な演奏だった。
二人の演奏が終わったときには、会場からは割れんばかりの拍手が沸き起こった。
二人はその拍手に答えるかのように、小生意気な、つんと澄ました顔で、何度も何度も、丁寧に礼を繰り返していた。
ぼくも拍手をしていたが、それは彼の演奏が素晴らしかったからではなかった。
拍手はあくまでも、周りの人に合わせてのもので、本当は心の中で、ぼくのバイオリンは折れていたのだった…

翌日からまた元の生活に戻っても、ぼくはもうすっかり、バイオリン製作の熱意を失っていた。あれを見るまでは、あれほどバイオリンを作ることが楽しみだったのに、今では全く別の考えが頭を占めていた。貧しい孤児院の仲間たちよ、バイオリンを作ることなんかやめてしまえ！

とぼくは言いたかった。

　あんなこまっちゃくれた奴の為に、ぼくたちがバイオリン作りにかり立てられていたのかと思うと、とてもやり切れなかったのだ…

　そしてこの出来事は、ぼくの心の転換を容易にした。この孤児院が、ますます耐え難いものと感じ、脱走するという話しは魅力的なもののように思えて来た。当初障害と思えていた妹たちのことは、次第に障害とは思えなくなって来ていた。
　その日に向けて、計画は綿密に練られて行った。最大のネックはお金だった。ぼくたちが当初持っていたお金はここに入るときに全部一時預かりという名目で取り上げられていたので、ぼくたちのポケットにはただの一※※※の金もなかった。しかし仲間には賢い奴がいて、院長先生の部屋の決して開かない金庫以外に、お金がしまってある場所があって、それが机の引き出しの中で簡単にあけることができることを知っている奴がいた。しかも院長先生は、みんなで食事をとる夕食時には必ず部屋を留守にするので、そのときが部屋に忍び込めるチャンスだということでみんなの意見は一致した。幸いなことに、院長先生は、部屋に鍵をかけるということはめったになかった。だから、出発の前日に、誰かが遅刻を覚悟の上で盗みに忍び込めばいい。話し合いの結果、その役目は、一番若手のこのぼくだということに決まった。他の三人は既に仲間として出来上がっていたが、一番の新参者であるぼくの忠誠度を試す意味合いも、その中には含まれていたらしかった。ぼくは困ってしまったが、彼らの仲間に入る為にはそのことを引き受けざるを得なかった。生まれて初めての盗むという行為に、ぼくは随分と悔やんだ。しかし、仲間の一人、メーチンクの言ってくれた言葉が、ぼくの行為を正当化し、勇気づけてくれた。
　“なに、オレたちの金をここに預けてあるんだから、それを返してもらうって考えればいいんだ”
　その通りだとぼくは心の中で納得した。でも、もしここにママがいたなら、ママはこの行為を許してくれるだろうか？
　いずれにせよ、そのママも、孤独なぼくの周りには、もういなかった…

　列車の出発の時刻を調べて来たものもいた。
　脱走するのは、もうみんなが寝静まった夜の十時以降がいいと当初みんなは考えていたがそんな時刻に出発する列車は一つもなかった。
　四六時中監視されている中、適当な時間帯が一つもなくぼくたちは困ってしまったが、ただ一つ名案が浮かんだ。
　昼食後の運動場での遊びの時間、そのときがチャンスだとぼくたちは考えた。
　そのときに他の子供たちが見ている前でボールを大きく蹴飛ばして、後はぼくたちのお手前拝見というわけだった…

　いよいよその決行のときがやって来た。盗みを任されたぼくは前の晩、なかなか寝つかれなかった。うまく行けるだろうか？　もし見つかったらぼくは、ぼくたちの計画はどうなるだろう？
　そして最後に、妹たちとはもうお別れだということをぼくは感じた。ぼくのいなくなった後、妹たちはどうするだろうか？　そして今度会えるのは、いつのことだろうか？　そんなことを考えながら、ぼくはいつのまにか眠り込んでしまっていた…

　夕食時、ぼくは他の子供たちより大きく遅刻して食堂に姿を現した。当然のこと、先生は遅れて来たぼくに、その理由を厳しく問い正した。ぼくは、体の具合が悪かったので、ここへ来るかどうか随分迷ったなどと嘘をつき、同情されるどころか、こっぴどく叱られてしまった。しかしその間にもぼくは、仲間には目で成功の合図を送った。

　そしていよいよその日がやって来た。朝、食事をするときも、隅の方に坐っている妹たちのことが、心残りで仕方がなかった。でもぼくの決意はそれだけでは揺るがなかった。それに――もし都会で成功すれば、彼女たちを迎えに来てやるさ、そんな気持もぼくの心の中にはあった。
　昼食後の遊びの時間だけは、先生どもの監視の目がゆるむ時間帯だった。そのときだけは子供たちは思い思いのことをし、精一杯、昼休みの時間を楽しんだ。
　ぼくたちも、例によって仲間たちと運動場に出、他の子供たちとサッカー遊びを始めた。みんなは、運動場の隅の小さなゴールをめざしてボールを蹴るのだが、この日は違った。ぼくたち四人だけは、遥か彼方の希望という名のゴールをめざしてボールを蹴ったのだった。四人の中では一番力の強かったレビが、こん身の力を込めて、最後のボールを蹴った。それは、ゴールを大きくはずれて、真青な空の下、グングン伸びて、運動場の外の畑の方に落ちて行った。ぼくたちは雨を心配していたが、脱走の日にしては申し分のない日和だった。亜然として見守る他の子供たちを尻目に、素早い行動をとったのはぼくたち四人だった。
　“君たちはそこに待ってろよ。ぼくたちがボールを取って来るから”
　そう言い残してぼくたち四人は、外に飛び出したボールを取りに、院の外に飛び出して行った。ボールは案外に院に近い畑にころがっていたので、レビはまた思い切りボールを遠くへ蹴とばした。ぼくたちはワイワイ騒ぎながら、そのボールを追い掛けて行った。その姿は、運動場に残された子供たちの目には、いつものぼくたちの悪ふざけにしか見えなかっただろう。その裏に遠大な逃亡の意図が隠されているなんて、誰も思いもつかなかったに違いない。ぼくたちは、ボールを見失ったとか大声で叫びながら、さらに遠くへ遠くへとボールを追いかけて行った。そのうち、彼らの視界から見えなくなってしまうまで…

　“ついに成功した”と、レビは息切らせながら言った。“これで、あの牢獄とも、永遠におさらばさ。シレール、金は持って来たんだろうな”

駅に着いて、ぼくたちもみんな、ハアーハアー息を切らせていた。正直言ってこんなにうまく行くとは思ってもいず、ぼくたちは駅に着いてホッとしていたのだった。
“でも、まだ気づいていないだろうか”と、ラボスが心配そうに言った。
“大丈夫、オレたちが逃亡したなんて、誰も思っちゃいないさ”と、レビは自信ありげに言った。“いつもの悪ふざけが過ぎて帰りが遅くなった。院の奴らは、その程度しか思っちゃいないさ。もちろん捜しには出掛けているだろうが、まさかここまで来ているとはね。オレたちには金がないんだから、列車に乗るなんて、奴らには考えつかないさ”
ぼくが切符を買うと駅員に怪しまれそうなので、メンバーの中では一番体が大きく、年もふけて見えるメーチンクがその役目を引き受けた。切符はすんなり手に入れることができた。
二時半出発のセルッカ行きの列車があった。しかし、列車を待っているあいだ、随分長く時間が感じられた。このあいだにも、院の先生たちが、ぼくたちを捜しにやって来ないだろうか、そんな恐怖感があった。しかしレビの予想通り、院ではぼくたちの消失は大騒ぎにはなっていないらしかった。多分、一時的に行方不明になった程度にしか考えていないのだろう。
プラットホームで列車を待っている間、近くで、少女の呼び声がしたので、ぼくはハッとなって振り向いた。まさか、妹ではないかと驚いたのだ。だが、その声の主は、妹ではなかった。全く別の少女が、駅の外で、父親に向かって、楽しそうに声を掛けているだけだった。しかし、ぼくの様子に気づいたのか、ぼくと年齢の近いラボスがぼくに話し掛けてくれた。
“院に残して来た妹のことが気になっているのか？　ホントに可愛い子だったからな”
“いや、全然”とぼくは首を横に振った。“なんでもないさ。本当に、なんでもないさ…”

列車は、予定より十分程遅れてやって来た。心配はしていなかったが、実際何事もなく列車に乗ることができて、みんなは一様に安堵の胸をなで降ろした。中の乗客はそれほど多くはなく、空室が随所に目立った。その中の一室を、ぼくら仲間だけが占めた。みんなは楽しそうにふざけ合い、明日への希望に胸をふくらませていた。このまま順調に行けば、もうあしたの朝にはぼくたちはセルッカにいて、久し振りに海を眺めることができるのだ…

やがてガタンと列車が動き出したとき、みんなは一瞬シーンとなった。やはりみんなの心に過ったのは、長年住み慣れた町を去る一種寂しさのようなものだった。そのときのぼくの胸の内を言えば、妹たちと別れるという、はり裂けんばかりの辛い気持だった。しかしぼくはその感情を押し殺し、みんなと同じように、楽しそうにふるまった。

列車はあっという間に町を通り過ぎ、風景は、田舎の森や山やありふれた田園地帯に変わって行った。楽しいはずでも晴れない気持の中で、せめて、どんよりした曇り空の中に、ぱっとした晴間を見い出すことができたのが、幸いだった。

しばらくして、仲間のひとりがどこから持って来たのか、ポケットからトランプを取り出し、ポーカーをやろうぜ、と言い出した。それは瞬く間にみんなを熱中させ、時間はあっという間に過ぎて行った。
しかし数時間が流れ去った後、次の停車駅がリランだと分かったとき、ぼくはなんとも言えない気持になって、トランプを持った手を膝の上に置き、目は自然と窓の外に向けられた。
そうだ、いつかママに連れられてやって来た思い出の街――ママはどういうわけか、まだぼくが小さいとき、ぼくだけを連れてこの街を訪ねて来たことがあったのだった。どこをどう行ったのか、もうぼくの記憶では分からなくなっていたが、ママには随分深い思い出の街らしかった。確か、街はずれの美しい田舎の村へぼくを連れて行ってくれた記憶が残っていた。それが、今から思えば、ママが本当に小さい頃育ったロアズマの村だった。ママはそのとき、ささいなことでパパといさかいを起こし、ぼくだけを連れて、家を飛び出して、やって来たのだった…
あのときのママの寂しそうな表情が、今もぼくの脳裏に焼きついていた。ママは向うに教会の見える村の花畑に一人立って、放心したようにあらぬ方を見つめていた。そして、思い出の地を一通り巡った後、ぼくの方に振り向き、
“さあ、もう帰りましょ”と言って、ぼくを優しく抱いてくれたのだった。

その町が近くに迫っていると思うと、ぼくはトランプに熱中する気にはなれなかった。今回はただ通り過ぎるだけでしかないこのリランの駅に、いつかは必ず戻って来て、ママとたどったあの足跡を是非たどってみたいと思った。
静かな駅の構内に約二十分ほど列車は停車した後、音もなく出発した。構内にいる人々の姿を残して、列車はみるみるうちに加速して行った。
もう夕方だったので、ぼくたちは、ぼくが駅で買って来たサンドイッチやジュースをむさぼり食った。
駅を去ってからもしばらくのあいだもうたそがれとなった街の灯りは絶えることがなかった。都会の空には、一番星と、三日月とが輝いている。
ぼくの他にも、みんなが窓に顔をすり寄せて、街の様子を眺めた。
とりわけ都会の大きさに驚いていたのはレビだった。レビは話しには聞いていたが、都会というものをまだ見たことがなかったのだ。生まれ落ちて以来ずっと田舎暮らしの孤児院育ちだった。
“すげえーっ、やっぱり都会はすげえなあ”と、レビは感心したように言った。

“お前さんはまだ都会というものを見たことがなかったんだなあ”と、メーチンクが言った。
“でも、セルッカも、これには劣らないよ”とラボスが言った。“それに向うは海だしね”
“海か…”と、レビは動く窓の外を見つめながら、目を輝かせて言った。
レビには勿論、海を見るのも初めてだった。
そのうち空も暗くなり、暗闇ガラスにはもう自分たちの顔しか映らなくなってしまったので、ぼくたちは外の景色を見るのをよすことにした。
そして夜が更けるにつれ、一日の緊張と疲れとがどっと出て来たのか、誰とはなしに、それぞれの座席の上でみんなは眠りこんでしまった…

翌朝、みんなが折り重なるように座席の上で寝ている中で、ぼくは、窓明かりのせいか、目が覚めた。もうすでに座席の上に折目正しく坐って窓の外を眺めている者がいて、それはラボスだった。
“起きたのかい？”と、彼は、まだ目が覚めたばかりで寝ぼけまなこのぼくの方に目を向けて言った。
“随分早いんだねえ”とぼくが言うと、
“向うにいる兄ちゃんのことを考えていたんだ”とラボスは、ポツリと言った。“会うの、随分久し振りだからねえ”
“何年ぐらいになるの？”とぼくは尋ねてみた。
“そう、三年ぐらいかな”とラボスは言った。“一度、外国のおみやげと言って、時計を持って孤児院まで訪ねに来てくれたことがあったんだ。兄ちゃん、ぼくのこと分かるだろうか？”
そのとき初めて窓の外を見たのだが、あいにく窓の外は雨が降っていた。雨にけむった流れ行く風景が、ぼくたちの不安な先行きを暗示しているようにも思われた。
そのうち、メーチンクやレビまでも起き出して来、室内は再び、昨日のような賑やかさを取り戻した。
“もう何時だい？”と、最後に起きたレビが尋ねた。
仲間のうちでは唯一、腕時計をしているラボスが、自分の時計を見て答えた。
“六時だよ。もうすぐ着くよ”
“そうか。いよいよか…”と、レビは、一段と目を輝かせて答えた。

やがて列車は静かに終着駅のセルッカに到着した。思えば長い道のりだった。ここまで来れば、もう孤児院は遥か彼方に遠のいてしまった感じだった。
大きな、鉄骨のドーム屋根の構内は、その通行人の多さと言い、さすが大都会の駅だと思わせた。ぼくたちは列車から降りても、右も左も分からず、あふれる人々の洪水の中で、逆に迷ってしまいそうだった。

見るもの、触れるもののすべてが田舎のものとは大違いで、珍しく、大いに好奇心をそそられた。これからはここで暮らすのだと思うと、大きな野望が沸いて来そうだった。
大きなコンコースを横切って駅の外に出ると、あいにくの雨模様だったが、バスが走り、車が勢いよく駆け抜けていた。人々は傘をさし、あわただしく通勤の足を運んでいた。
“おい、お前の言っていた港へは、どう行けばいいんだい？”と、さっそくレビが尋ねた。
“歩いてでも行けない距離じゃないけど、バスに乗った方がいいって、兄ちゃんは言っていたよ”と、ラボスは自信なげに答えた。
“この雨だ。オレたちには傘がないから、バスに乗って行こう”と、レビは言った。
みんなは、駅の往来のバス乗場へと向かった。

バスが走り出すと、やがてビルの谷間から、美しい海が見え始めて来た。ぼくにとってはオディープ以来久し振りに見る海だったが、北側に属するオディープの海とは違って、こちらの海はまた違っているような印象を受けた。しかし何よりも、初めて海を見るレビには、その姿は強烈な印象を与えたようだった。
“あれが海か…”と、レビは我を忘れたように、興奮ぎみに言った。“噂には聞いていた海なんだなあ…”
やがてバスは、ヨットの一群が所狭しと並ぶヨットハーバーの海岸通りを走り出したが、もちろんぼくたちの行く所はそこではなかった。
“オレたちの行く所はどこなんだ？”と、レビは、待ち切れなくなったように、ラボスに尋ねた。
“ここじゃないよ。もっと貨物船が停泊している所…”と、ラボスは当惑顔になって答えた。
そうしているうちにもバスはヨットハーバーを過ぎて、華やかさが若干欠ける地味な倉庫などが立ち並ぶ貨物船の桟橋にやって来た。
“ここだ。兄ちゃんのいる所はきっとここだよ”と、ラボスは興奮気味に言った。“さあ降りよう…”
みんなはバスから飛び降り、雨の中を傘もささず港の方に走って行った。
そのとき、ボーッという大きな音と共に、黒煙をたてながら港を離れて行く、一そうの大きな貨物船の姿が目に止まった。
“おい、船が出て行くぜ”と、メーチンクが興奮気味に言った。
“本当だ。あんな風にして出航して行くんだなあ”と、レビが言った。“どこへ行くんだろ？　きっと遠い国なんだろうなあ…”
小雨と、風が吹きつける港に立って、ぼくたち四人はぼうぜんと、貨物船の出て行く港の風景を見守った。

船は段々と遠ざかり、小さくなって行く。それと引き替えに、向うから、傘もささず、スカーフをかぶり、レインコートに身を包んだ一人の婦人がやって来る姿が見えた。そんな婦人がいるには場違いな場所に思われたので、ぼくたち四人の視線は、自然、まだ若そうなその婦人に注がれた。しかし、彼女に対して、最初に反応を示したのは、意外にもラボスだった。

“あっ、姉ちゃんだ！”とラボスは叫んだ。

“お姉さ〜ん”と、ラボスはそう叫ぶなり、彼女の下に駆けて行った。

ぼくたちはあっけにとられて、ただその場に立ち尽くすばかりだった。

彼女も、最初は訳も分からずとまどっている様子だったが、ラボスに導かれてぼくたちの方にやって来た。

“お姉さん、まだ分からない？　ぼくだよ”と、ラボスは興奮気味に言った。“ラボス、ミゲルの弟の…”

“ミゲルの弟ですって！”彼女も驚いた風だったが、やっと分かったようだった。

“ほら、いつか孤児院にまで、兄ちゃんと来てくれたじゃないか”とラボスは言った。“姉ちゃんは忘れたかもしれないけど、ぼくは覚えているよ”

“ああ、あのときの”と、彼女は言った。“でも、どうしてここへ？”

“みんなでやって来たんだよ”とラボスは言った。“兄ちゃんに会いに。ぼくらはここで働くつもりでやって来たんだ”

“じゃ、兄さんには会わなかったの？”と彼女は言った。

“もちろん。まだ着いたばかりだもの”と、ラボスは答えた。

すると彼女は苦悩の色を浮かべて、両目を手でふさいだ。

“ああ、なんてことを！”と、彼女は叫んだ。“今、ミゲルを見送って来たばかりなのよ。たった今…”

“じゃあ、あの船かい？”と、レビが興奮気味に言った。

“そう、あの船…”と、彼女は、レビの方に向いて言った。

“じゃ、もう当分は帰って来ないの？”と、ラボスが泣き叫びそうに言った。

“そう、半年はね…”

その彼女の言葉で、ぼくたちの顔からは一斉に血の気が引けた。着いた早々から、ぼくたちは大失敗をやらかしたわけなのだ…

“おいラボス”と、レビはやがて、興奮が治まると、少し怖い顔をして、ラボスに言った。“お前はここに兄キがいるって言ってたじゃないか。連絡はとってなかったのかい？”

ラボスは、レビににらまれて、すっかりとまどってしまっている様子だった。

“でも、まさかこんなことになるなんて、思ってもみなかったんだ”と、ラボスは、声を震わせながら弁解した。

“まあまああんたたち”そこへ割って入ったのは彼女だった。“兄さんに会えなくて悲劇だったけど、気を取り直しなさい。わたしが代わりに力になってあげるわ”

そこで、ぼくたち四人は改めて、彼女の存在に気づくのだった。
“ここで会えたのも何かの縁よ。ともかく、わたしの家に行きましょ。あんたたちはあの孤児院を脱走して来たの？　嘘をついてもダメ。わたしには分かるわ。ともかく事情を聞いて、それから、あんたたちの身の振り方を考えましょうよ”
ぼくたちには不満は残ったが、ここは彼女の指示に従う他はなかった。

港から彼女の住むアパートまでは歩いて行けるということだった。そのあいだに色々なことが分かった。彼女の名はメリッサで、ミゲルの恋人で、まだ結婚はしていないし、またすることはないであろうこと。ミゲルの出航は、会社の都合で突然、予定よりも早まったこと、などだった。
“だから、ラボスを責めるのはよしなさい”と、メリッサは言った。“兄さんが行ったのは、この子のせいじゃないんだから”
“でもオレたちはここで働くつもりでやって来たんだぜ”と、レビはなおも不満そうに言った。
“あんたたちも、兄さんみたいに船乗りになる気？”とメリッサは尋ねた。
“うん、できれば…”と、レビは答えた。
“でも、まだ無理ね”と、メリッサは言った。“あんたたちはまだ小さいもの。――でも陸での仕事なら見つかるかも知れないわ。ちなみに、あんたたち、年はいくつなの？”
それに対してレビがみんなを紹介した。ぼくはまだ正式には十五の誕生日を迎えてはいなかったが、レビは年が小さいというメリッサの言葉に反発した為か、一つほど年を多く数えて紹介した。そのとき、実際の年齢は、ぼくは十四、ラボスは十五、メーチンクが十六で、一番年上のレビも十六だった。
“そう、じゃ、働けないこともないわね”と、メリッサは、年齢がごまかされているのも知らずに言った。“でも船乗りはダメよ。あれはきついし、もっと大きくなってからでないとね。でも、港湾の仕事か、それ以外の仕事ならあるわ。
その言葉で、ぼくたちの夢が打ち砕かれる思いがした。ぼくたちは船乗りになって外洋に出て行く為に、こうして脱走までして来たのではなかったのか…
“ついでに、お姉さんの年齢も教えろよ”と、レビが言った。“オレたちのだけ聞くってえのは、公平じゃねえぜ”
すると、メリッサは悪事がバレた子供のように、にっこり笑ってレビを見た。
“確かに公平じゃないわね”とメリッサは言った。“十八よ。ということは、あんたより一つだけ上というわけね”
“それから、オレたちはもう一つ心配していることがあるんだ”とレビが言った。“今晩泊まる所、それを用意してくれるんかよ”
“まあ、待ちなさい”と、メリッサは言った。“そう何もかも一度に言われても。しかもあんたたちは大勢で来たでしょ。ミゲルの話しじゃ、二人来るかも知れないってことだったのに…”

“そんな話があったのかよ”とレビは言った。“でも、オレたちは切っても切れない仲なんだ”
“そう言われてもね。実際困ってしまうのよ”とメリッサは弱ったように眉をひそめて言った。“でもいいわ。わたしたちの部屋を提供するしかなさそうね。そこもとても広いとは言えないけれど…”
“わたしたち？”と、すかさずレビは言った。
すると、メリッサの表情が、ほのかに赤らんだ。
“いやね。ミゲルとよ”と、メリッサは言った。“ミゲルは、港に来たときは、わたしのアパートに泊まっているの。正確には、わたしのアパートじゃなく、ミゲルのアパートでもあるんだけどね”
“そうか、そういうことだったのか”と、レビは納得したように言った。“――でも、どうして結婚はしないんだい？”
“だってあの人が…”と、メリッサは言いかけた。“そんな話、どうでもいいことでしょ”
“いや、是非聞きたいもんだな”とレビは、なおもしつように食い下がった。
“だってあの人は、あっちこっちの港へ行って住居が定まらないでしょ。結婚には向かないって”とメリッサはしんみりと答えた。“結婚をすれば、わたしを不幸にするんですって”
“やっぱりお前の兄キはできてるよ”と、レビは、ラボスの方に向いて言った。“自分のことをよくわきまえているさ。いくつなんだい？”
“兄ちゃんは確か、二十三だよ”と、ラボスは答えた。
そんな話しをしながら、ぼくたちはメリッサのアパートに向かった。

セーラは、眺めのよいいつもの部屋で絵を描いている。
よく晴れて、本当に心地のよい春だった。ウェルシュは、セーラの足元の床の上で心地よさそうに眠っていた。
ぼくは、花柄模様の深々としたソファーの上に坐っていて、美しい花々に飾られた室内や、窓の外に広がる広大な庭の様子を、うっとりした目で眺めていた。ここにはただ停止した時と、匂うような幸福の香りしか感じられはしない。さわやかな春風が、時折、開け放された窓から、スーッと抜けて行く…
しばらくして、ぼくはセーラに話しかけた。
“あんなときがあったなんて信じられない。すべては夢――そう、夢、幻さ…”
“一体何がよ？”セーラは、キャンバスに向かって、絵筆を握ったまま答えた。

“ぼくや、ぼくたちがくぐり抜けて来た過去がさ”とぼくは答えた。“それが夢であったとしても、少しも不思議ではない。ぼくはよく夢を見るんだ。過去の夢をね。でも、それと、ぼくらの過去とのあいだに、どんな違いがあるだろう。今残っているものと言えばぼくのこの頭の中に収められている記憶という信用のおけない代物だけなのさ。だからそれらは本当にあったのかと疑うこともできるのさ…”

“でもね。夢と現実とを区別することができるものが一つだけあるわ”とセーラは、ぼくに顔を向けることなく言った。“それは、登場人物よ。それが夢なら、兄さんの言うように、もはや兄さんの記憶の中でしか存在しない。でも、それが現実なら、兄さんだけじゃなく、相手も、兄さんのことを記憶しているということよ。あのとき、あんなことがあったということを、お互いに記憶しているのよ。夢には、それだけは、とってもマネのできない芸当でしょ…”

“共通の過去か…”とぼくは言った。“そう、それだけが、その過去が現実であることを証したてているものかも知れない。だって、夢の中で出会った人に、後になって話しかける機会があったとしても、その人がぼくのことを知らなかったり、ぼくが見も知らない人に、突然、いつかお会いしましたね、なんて話しかけられたりしたら、変だからね。当然、現実の中には、共通の経験、共通の記憶があって然るべきものなんだ…”

“それで何が言いたいの？　兄さんは”そこで初めて、セーラはぼくに振り向いた。

“この日の、この一瞬の幸せを、思いっきり胸に吸い込んで、あの世へのみやげに持って行きたい”ぼくはセーラに、笑顔を見せて言った。“もちろんそれは冗談だけとさ。ぼくはとてもじっとはしていられない。だって頭の中はこんなに、色んな思いで詰まっているんだもの。あれもやりたい。これもやりたい。――でも様々な方向に引き裂かれて、結局はここでじっとしている他ないのさ。いや、具体的にああしたい。こうしたいじゃないんだ。ぼくはただ、過去の思いに捕らわれているだけなんだ。幸せだった日々、そして、不幸だった日々…”

“そして、今は幸せ？”とセーラは尋ねた。

“半分ね”とぼくは答えた。“だって、残りの半分がぼくには欠けているんだもの。本当の幸せを得るのは、まだまだ先の話しさ…”

“…ぼくは昔、都会で暮らしていた頃、よく、オディープのような田舎で暮らすことを夢見たものさ。しかも、その田舎のたそがれ時が特に素晴らしかった。それは、こんな春の季節のたそがれ時でもいい。窓の外の色が、濃いブルーに染められて行く頃、ぼくは何か、得体の知れない未知なるものに出会えるような甘美な気持になって、体がゾクッとしたのを覚えているよ。その感覚が、なんとも言えず素敵だった。それは、昼とは違った時を迎えるための一種の期待感、あるいは、こうこつに似たような感覚だった。昼は昼で楽しかったけれど、夜は夜でまた興味ある、楽しいひとときでもあったのだ。セーラには、そんな感覚が分かるだろうか？　単にそれだけの理由じゃなく、ぼくは田舎の暮らしに憧れた…”

“そしてその頃、ぼくは田舎に行けないものだから、よく夕陽を追いかけて、港に行った。そして、陽が沈むまで、ぼくは太陽を見つめ続けた。それがセルッカの暮らしだった。何もかもなつかしい…”

“セルッカねえ”と、セーラは、ため息をつくように言った。“わたしたちが出会った浜辺、覚えてる？”

“もちろんだとも”とぼくは答えた。“みんなは裸になって日光浴を楽しんでいたのに、お前たちは違った。つばの広い、日よけ帽をかぶって、まぶしいばかりの白いドレスを着たお前たちの姿は、忘れることは出来ないよ。どうしてお前たちは、水着に着替えていなかったの？”

“リサは水着を持っていたわ”とセーラは答えた。“――でも、わたしは水着が嫌いなの…”

“そうか。そうだったね”とぼくは答えた。

その理由を、ぼくは知っていた。いつか彼女はそっと、その秘密を、ぼくに教えてくれた。

かつてあのお爺さんが、セーラの肩の辺りにつけた刻印が露出し、人の目に触れるのを、セーラは極端に嫌ったのだ。だからセーラは、他の若い娘なら誰もがするように水着に着替えることを、きっぱりと拒絶したのだった。

“正確にいえば、水着が嫌いだったの”と、セーラはしばらくしてから言葉を継いだ。“――でも、ポールが来てから、わたしは泳ぐ楽しみを覚えたわ。彼がわたしを、海へと導いてくれたのよ”

ぼくはそのとき、彼女の肩についた傷と、それでも彼女を海へ誘おうとする彼の優しさとのあいだにくり広げられたドラマを想像した。それはぼくも知ることのない、長くて、さわやかなドラマだったに違いない…

“ぼくが初めて港に着いたとき”とやがてぼくはぽつりと言った。“ここでぼくは何んでも出来る。何んにでもなれる、と思ったものさ。――でも実際は大違いで、しがない仕事にしかありつくことはできなかった”

“兄さんが初めてセルッカに行ったときのこと？”と、セーラは尋ねた。“そのときのことならわたしは知らないわ。だって、兄さんは、わたしとリサとをほって、出て行ってしまったんですもの”

“孤児院じゃ、大騒ぎだったかい？”とぼくは尋ねた。

“もちろんですとも”と、セーラは、少しふくれた顔をして言った。“例の四人はどこへ行ったんだって、みなカンカンだったわ。手分けしてあっちこっち捜しに行ったあげく、先生たちが集まって、集団脱走したんじゃないかって話になったの。そのとたん、院中は大騒ぎよ。その中に、あの、なんてったっけ、ラ…”

“ラボスだよ”とぼくは口をはさんだ。

“そう、そのラボスの弟や、わたしたちがいて、とてもショックだったし、みんなそんな顔をしていたわ”とセーラは言った。
“ぼくがいなくなって、驚いたかい？”とぼくは尋ねた。
“もちろんよ”とセーラは言った。“まさか兄さんがそんなことまでするなんて思わなかったもの。リサなんか泣き出してしまったわ。ーーでもわたしはじっと、涙をこらえていた。何事も試練と思って耐えていたの…”
“何事も試練か…”とぼくは言った。
“残されたお前たちも大変だったろうけど、ぼくだって大変だった。だって、ゼロからの出発で、何も未来は約束されていなかったものな。今となってはなつかしい思い出さ。セルッカに行ったということは…”
素晴らしい春。まどろむような春のひとときだった。ぼくとセーラしかいない空間の中で、ぼくは過去をひもどいて行く。過ぎ去ったものの奏でる調べは、現在の耳になんと心地よく響いて来ることか。それはかつて確かにあったのだし、悪夢や、夢のような出来事も、みんな等し並に、甘美な夢のごとくぼくの耳に響いて来る。ぼくはその美しい音色にそっと耳を傾けよう。すると、なつかしくもホロ苦いセルッカの時代が、まるで遠い浮島のごとく、おぼろに、やがてはっきりと、眼前に映って来ることだろう…

メリッサが連れて行ってくれたアパートは入り組んだ路地裏の、とても一度では覚え切れないような所にあった。
彼女は、一度はぼくたちをアパートに案内してくれたが、長く中に入れてくれることはなく、今から仕事だからと言って、すぐぼくたちをアパートから追い出した。
“オレたちはどうすればいいんだよ”と、レビが不服そうに言ったけど、メリッサはこう簡単に言ってのけた。
“あんたたちみたいに遊んでいるわけには行かないのよ。いいわ、夜になったらもう一度ここへ来なさい。もう雨もやんで来たし、この辺で適当に過ごせるでしょ”
そう言ってメリッサはぼくたちを部屋から追い出すと、ドアの鍵をガチャンとかけた。
メリッサが言うには、彼女は、レストランのウェイトレスをやっていて、仕事場もこの近くだということだった。
“でもいいわね”とメリッサは念を押した。“わたしのいるレストランに姿を現しちゃ絶対ダメよ。あんたたちにひともん着起こされると、困るのはわたしの方なんだから。いいこと、大人しくしているのよ。そうしたらちゃんと今晩泊まれる場所も提供してあげるから”
ぼくたちは大人しく彼女の言うことに従う他はなかった。
彼女は、ぼくたちをその場に残すと、忙しそうにレストランへと駆けて行った…

　ぼくたちは所在なくその場に立っていたが、やがて仕方なく、雨上がりの港町に向かって歩き始めた。

昼の時間の過ごし方を考えるため、初め、再び港に行ったりしたが、やがて誰かの発案で映画を見に行こうということになった。映画なら、街の映画館は初めてだし、時間を潰すこともできるだろう…

やがて、ぼくたちが初めてやって来た港の空にうっすらと夕焼けのヴェールかかかる頃、ぼくたちは再びメリッサのアパートに姿を現した。
やたらと階段が目につくそのアパートのらせん階段を二階へ上がって行くと、ドアはまだ鍵がかかったままになっていた。が、よく見ると、中には明かりがあって誰かいるらしいことが分かった。それも、くもりガラスを通して見るに、一人ではなく、他に誰かいる気配だった。
レビが思い切りドアを叩いたので、あわてて人影が、ドアの所に駆け寄って来た。
あいたドアに姿を現したのは、メリッサだった。しかし奥に、見慣れないもう一人の若い女性がいるのが見えた。
“来たのね”と言うなり、彼女はぼくたちを中へ案内した。
レビはまるで室内を物色するように、鋭い目つきで見つめていた。
“オレ達が来るのが分かっていたのに、どうして鍵なんか掛けていたんだい？”と、彼は不機嫌そうに言った。
“あら、いけなかったかしら？”と、メリッサは驚いた様子をして言った。
“あんたたち、例のあれじゃねえのかい？”と、レビは言った。
メリッサは訳も分からず、不思議な表情をしていた。
“だって怪しいじゃねえか”とレビは続けた。“あんたたち、レズをやってたんじゃねえのか？”
すると、メリッサは頭をのけぞって、声をたてて笑った。後ろに控えていた女性も、手を叩かんばかりに笑っていた。
笑いが治まると彼女は言った。
“あんたって面白い子ねえ。あたしにはちゃんとミゲルがいるのよ。そのことを忘れないでね。鍵を掛けていたことがそんなに気になるの？　女一人じゃ用心悪いでしょ。それに――実はこの子を保護する為でもあるの”
“保護？”と、レビは尋ねた。
“そんなことはどうでもいいの”と、メリッサは急いで話題を変えた。“それよりあんたたちの件ね。どうしよう？　困ったわ。何かいい知恵ない？ アメーリア”
もう一人の女性がアメーリアという名であることが、そこで初めて分かった。
“さっき話してた子供たちね”と、アメーリアは言った。
“今晩、この子たちの寝る場所、どこかないかしら？”メリッサは本当に困っているようだった。

しかしレビがきっぱりこう言った。
“オレたち、どこでもいいんだ。決して迷惑はかけねえ。床でもどこでも、眠れる所ならどこでも寝るさ”
“それでかまわない？”と、メリッサはみんなを見つめて言った。“ベッドは一つしかないし、あとは見ての通りよ。通路や床しか空いている所はないの。もちろん上掛けは提供するけど、それでかまわない？”
ベッドは当然、この二人の女性が占めるわけだし、ぼくたちはそれで納得する他はなかった。
“それで悪いけど姉ちゃん”とレビは言った。“何か食わしてくれないか。オレたちはもう腹ペコなんだ”
“あら、何か食べて来たんじゃなかったの？”と、メリッサは驚いたように言った。
“言っとくけど、オレたちは金がねえんだ”と、レビは言った。“映画館へ行って、昼飯を食べて、それで使い果たしてしまったんだよ”
メリッサはあきれた顔をしたが、すぐ観念したような表情になった。
“いいわ。じゃ何かつくりましょ。ちょうどあたしたちも、これから食事をしようと思っていた所なの”
そう言ってメリッサは、アメーリアとキッチンで仕事を始めた。
ぼくたちはそこで初めて、部屋の中をゆっくりと見ることができた。食堂と寝室のたった二部屋のみすぼらしいアパートだったが、食堂は比較的小ぎれいに整理されていた。しかし奥の寝室は、割と乱雑なままだった。

やがて食事の用意が出来、小さなテーブルを前に、ぼくたち六人が腰掛けることとなった。椅子の数が足りなかったので、一部は木箱に腰掛けた。
料理も、とってつけたようなもので、そんなに上等なものとは言えなかった。しかし腹がすいていたせいか、とてもうまかった。
“それにしても…”と、やがてメリッサは言った。“しゃべるのはいつもこの坊やばかりなのね。他の子たちはどうしたの？　全然しゃべらないようだけど、まさか唖じゃないんでしょ？”
“まさか。朝、ここへ来るとき、みんなしゃべってたじゃないか”と、またもやレビが言った。
しかし、それにはかまわずメリッサの目はぼくたちの方に向けられ、それはぼくの前で止まった。
“あんたは確か、シレールって名だったわね”と、メリッサは言った。“この中では一番可愛いけど、あんたもお仲間なの？”
ぼくはこんな体験は初めてだったので、どぎまぎしながら、彼女の目を見つめた。
“こいつはオレたちの中では一番年下なんだ”と、レビが助け船を出してくれた。“へたな質問をすると、オレが承知しないからな”

“まあ、こわいこと！”と、メリッサは再度レビを見て言った。“ちょっと話しかけただけなのに、それがいけないの。あんたは、やくざじゃないんでしょ”
“姉さん。こいつには気を付けた方がいいぜ”とメーチンクが言った。“こいつは半分、やくざなんだから。やり方次第ではどっちにも転ぶんだよ”
“お願いだからそんな道にだけは進まないでね”と、メリッサが怖そうな表情をして言った。

翌日――ぼくは見知らぬ部屋で目覚めた。多分、初めはどうしてこんな部屋で目覚めたのか分からなかったが、ぼくの隣で折り重なるように眠っている仲間たちの姿を見て思い出した。ぼくたちが、メリッサのアパートの食堂の床の上で眠っていたことを。道理で寝返りを打ったせいか、体のあちこちが痛かった。しかも朝冷えで、一枚きりの毛布では少し寒かった。
みんな目覚めるのが早く、寝覚めの悪いメリッサたちは、ぼくたちのことを驚いていた。しかし、一番遅く起きて来た彼女たちは、ぼくたちにさっそく朝食をつくってくれた。
朝食をとると、レビはさっそく港湾へ働きに行きたがった。その思いは、ぼくたちも同じだった。
その為には彼女のつてを頼むしかなく、幸い、ミゲルの友人のネクトールという港湾の男を彼女は知っていた。
“その人に頼むしかなさそうね”と、メリッサはぼくたちに言った。

朝の八時前にはもう、ぼくたちはメリッサに伴われて港に来ていた。
港では男たちが忙しそうに働いていた。クレーンで荷物を積み降ろす男たちや、それを車で運ぶ男たち。あるいは巨大なコンテナも、大きな貨物船から次々と運び込まれていた。ぼくたちはそれらの光景を目にし、ただ息を呑む思いだった。近くを通り過ぎる男たちは、けげんな目でぼくたちを見つめたが、やがて向うの方から、黄色いヘルメットをかぶった男がやって来た。
“ネクトールよ”と、メリッサは彼を見て言った。
彼は作業着に身を包み、真黒に日焼けしていた。
“それで、きのう話しがあったのは、この子たちのことかい？”と彼は、ぼくたちを見るなり言った。
“それで、なんとかなりそう？”と彼女は言った。
“まあ、なんとかもぐり込ませることはできそうだけど…”と彼は言った。“でもこの作業は危険だし、坊やら、もしやめるのなら今のうちだよ”
“オレたち、ここの仕事が気に入ってるんだよ”と、レビが言った。“そうだな、みんな”

レビのその言葉で、ぼくたちは一斉にうなづいた。
“じゃ、話は決まった”とネクトールは言った。“仕事は簡単だからすぐ覚えられる。ただ、この二人の坊やは、少し小さそうだけどね”
そう彼に言われたのは、ラボスとぼくのことだった。
“しかし大丈夫。何んとか分からないようにするさ”と、ネクトールは言った。
そう言って彼がぼくたち四人を事務所に案内しようとしたとき、そこに一人残ったメリッサがぼくたちに手を振って声援を送ってくれた。
“あんたたち、みんな頑張るのよ！”
“ああ”とぼくたちも振り向き様、彼女に手を振った。

ぼくたちに当てがわれた仕事は、いきなり荷物の積み降ろしは危険なので、倉庫での荷物の整理をすることになった。みんなヘルメットをつけると、年齢をごまかすこともでき、いっぱしの大人になったつもりになった。
ネクトールに言われるまま、みんな汗を流し、よく働いた。
そのようにして第一日目は、瞬くうちに過ぎて行った…

昼になり、港の食堂でみんな一斉に昼食をとる時間は、束の間の休息の時間でもあった。
ネクトールが、終始、ぼくたちの面倒をみてくれた。
真黒に日焼けし、額に汗をにじませながら、彼はぼくたちに話しかけた。
“君たちは海が好きか。それならここはいい場所だ。毎日海を見て仕事ができるからな。そのうち海へ出て行くのもいい”
“そんなこともできるんですか？”とラボスが尋ねた。
“求人があればな”と、ネクトールが言った。“でも君たちはまだ無理だ。年が若すぎる。陸ではバレないが、船ではいっぺんにバレてしまうからな。しかし小さな貨物船程度なら、いくらでも求人はある。ほとんどが雑役夫だけどな。しかし、遠洋航海をするのもいいよ。一度は経験してみるがいい。ただし、数ケ月は帰って来れないけどね”
そう言って彼は笑った。
“オレはもう御免だ”と彼は続いて言った。“ここの仕事が気に入っている。仲間で、海で死んだ男もいるしな。一番いやなのは、女に会えないことさ。人間、やはり陸にいるのが一番だよ”
“海で死んだ人もいるの？”とメーチングが尋ねた。
“嵐でね、荷物を積み過ぎてて、転覆したんだよ”とネクトールは言った。“いい奴だったのに。ともかく、海はこわい。決してあなどれるものじゃないんだ”
彼は色々と仕事上のことについて話してくれた。それらの話は、どれもこれも、ぼくたちの耳には新鮮に聞こえるのだった…

　ぼくたちは、初めの頃はまじめに働いた。汗水を流し、一生懸命働いた。そして初めての給金をもらったときには喜んで歓楽街へくり出して行ったものだった。ぼくたち四人は、いつも行動を共にした。相変わらずリーダーはレビで、彼の言うことなら、みんななんでも聞いた。
　ここへ来て三日後には、メリッサがぼくたちのアパートを世話してくれ、港から比較的近い所にようやくぼくたちの住まいが見つかった。安いだけのことはあって、部屋の痛み方はヒドく、また手狭だったが、二人で一つづつ、ベッドを確保することができた。男四人の生活の為、朝食のしたくは、ぼくとラボスとが交替で行った。夜になると、レビはメーチンクと、ぼくはラボスと狭い一つのベッドで、一緒に寝た。しかし、毎日は忙しく、また充実した日々でもあった。仲間と一緒にする仕事は楽しく、また街へ遊びに行くのも楽しかった。街角で、若い娘を見ると、レビやメーチンクは、誰れ彼なくからかった。彼女たちは決って不快そうな表情をし、ぼくたちの下から去って行った。ぼくたちは四人のチンピラそのもので、実際、本物のチンピラたちと危うく大乱闘になりかけたこともあった。しかしその頃はまだ実力はなく、ただ空いばりをしていただけのものだったので、みんな散り散りになって逃げ、危うく難を逃れることができた。向うは六人で、とても勝ち目はなかったが、ここが楽しい街であると同時に、恐ろしい街であることも、そのとき初めて知った。レビはしきりにくやしがっていた。
　“オレたちに実力さえあればなあ…”と彼は言った。“奴らなんか、叩きのめしてやるのに”
　彼らと喧嘩になりかけた理由は単純だった。向うからやって来る集団に、その服装やしぐさからただならぬものを感じたものの、ぼくたちは無視して通り過ぎようとした。だがそのままなら多分何事も起こらなかっただろうけれども、レビがたまたま捨てた煙草が、彼らの前に落ちたのがそもそもの始まりだった。彼らは因縁をつけに、ぼくたちの所にやって来ようとした。
　“おいっ！　お前ら”
　彼らの口から発っせられたその言葉は、ぼくたちを震え上がらせるに十分だった。
　ぼくたちは、彼らが近づいて来るまでもなく、もう早くも退散していた。
　自分たちの実力のなさをいやというほど見せつけられたこの出来事は、レビを大いに反省させた。
　まだ逃げて来て、息づかいも荒々しいぼくたちを招集して、レビはみんなに言った。
　“おい。こんな仲間じゃ、情ないと思わないか”とレビは言った。“戦わずして総くづれになるなんて、まったく情けねえ。だから今、誓おうじゃないか。オレたちの団結は一枚岩だ。そうだろ。辛いときも、困難なときも、みんな乗り切ってここまでやって来た。一人の脱落者もなくだ。この街じゃ、団結しなきゃ勝てないことを、今見せつけられたんだ。だから、今改めて誓おう。オレたちのグループに命名し、一層固く団結することを誓うんだ。なんていう名がいいかな”

　そこで飛び出した様々な名称の中から浮上したのが、メーチンクが提案した、「反社会団」だった。
　“オレたちらしくていいや”と、レビはその名称が痛く気に入ったようだった。
　“これからおれたちは、反社会団だ”と、レビは言った。“さあ、この反社会団の名の下に、みんな誓うんだ。決して、裏切り、脱退はしませんとな”
　ぼくたちはそれぞれレビの手の上に、自分の手を重ね、そのことを誓い合った。
　反社会団の名の下にみんなが手を重ね誓い合うと、自分たちが急に大きくなったような気がして来たから不思議だった。
　しかし、ただ一人を除いては、このことがその後どんな影響をもたらすことになるのかよくも考えなかったし、知らなかったのだ。ただ一人、レビを除いては…

　レビは多分、ぼくたちを、自分の悪の道に引きずり込むことを考えていたに違いない。
　その生い立ち、境遇からしても、彼が一番、悪に近い所にいた。ぼくたち仲間がついて行かなくなることを、何よりも恐れていたに違いない。が、この仲間の契りにより、レビは、思いがけない権力を手中にすることができたのだった。レビの考えていたことは、まじめにコツコツ働くことではなかった。もっと、てっとり早く金もうけができることを考えていた。

　レビにとって邪魔だったのは、メリッサと港湾の仲間たちだった。
　メリッサはときどきぼくたちのアパートに訪れたし、ネクトールから情報を仕入れたりして、ぼくたちのふるまいが危険な方向に向かっていることを察知していた。
　反社会団の誓いのことは知らなかったが、彼女が、大人しいぼくやラボスと、レビたちとを別扱いし、引き離そうとしているのが、レビには我慢がならなかったし、ある種の危険を感じてもいた。
　メリッサがある日、何気なく、
　“あんたたち、もう孤児院には帰る気がないの？”と言ったのを、メリッサがあるいは、自分たちのことを、孤児院に通報するかも知れないと、レビは恐れたのだ。
　“おい、お前たち”と、その日の晩、レビはぼくたちに言った。“あのメリッサは信用おけねえ。オレたちが孤児院から脱走して来たのを知っているんだ。もし通報したら、オレたちはどうなる。また監獄行きだぜ。あしたから、オレは別の仕事を捜すぜ。ネクトールという野郎も、メリッサと通じていて信用できねえんだ。みんな、オレの後について来るか。港の仕事が、思ってたほど面白くねえことが、分かって来たところなんだ”
　“でも、仕事を変えるって、どんな仕事を考えているんだよ”とメーチンクが不安げに言った。
　“まあ、オレに任せ。いい考えがあるんだ”とレビは言った。

翌日になって、その仕事というのが、運送屋の仕事であることが分かった。
しかし全員が鞍替えするわけにも行かなかったので、ぼくとメーチンクはそのまま残り、手初めにレビとラボスがその仕事につくことになった。
ぼくは、メーチンクとそれほど親しくはなかったが、これを機会に、二人だけで話し合うことが多くなった。
メーチンクは、ある日ふと、ぼくに自分の家族のことを打ち明けてくれた。
自分の両親は離婚した為、自分はリトイアにいたけれども、母と姉は今も故郷のテルリアパンソの町で暮らしていることを。
“姉は頭が弱いんだ”とメーチンクは声を小さくして言った。“白痴じゃないんだけど、それでよく人にバカにされてたんだ。友だちもできずにいつも一人だった。よく、つまらんことでミスを犯すんだ。言葉遣いも、思っていることと違ったことを言ってしまったりするし。でも姉は気だてがとてもいいし、そんなことでくじける姉ちゃんじゃない。家の中に引きこもったりしないで、外でみんなと遊ぶのが大好きな姉ちゃんさ。みんなに相手にされなくとも、おかまいなしにみんなの中に入って行くのさ。そんな姉ちゃんがぼくは大好きさ。一度、姉ちゃんや、母に会いたい。でも、今度テルリアパンソに帰るときは、姉や母を引き取ってちゃんと暮らせるだけの立派な大人になって帰ろうと、ぼくは心に決めたんだ。それまでは帰るわけには行かないさ。でもね、いつも、母や姉のことは、ぼくの頭の中から離れないのさ…”
ぼくはその話しを聞き、メーチンクの意外な側面を知って驚いたのだった。

しかし、まじめにやろうと考えていたぼくの耳に、意外な話しが飛び込んで来た。
レビたちが運送の仕事を始めてからひと月もたたないうちに、レビがみんなを集め、驚くべき計画を打ち明けた。
“オレたちがこの町に来てからそろそろ三ケ月になろうとしている”と、レビが切り出した。“ここでオレたちが感じていることはどんなことなんだ？　それは疎外さ。誰もオレたちのことなんか、かまっちゃくれねえ。結局、オレたちは自分で生きる他ねえのさ。この町に来てから、オレたちはいやなことを、さんざ目にして来た。オレたちには家もなけりゃ、金もねえ。おまけに女もいねえと来ている。こんな暮らしが、オレには我慢ならねえのさ。まじめにやってたところで、全然らちがあかねえ。みんな同感だろ？”
“つまり、ここでまじめにやってたってダメだっていうことなんだ”とレビは続けた。“なあみんな、もっとましな生活がしたいだろ？　こんなブタみたいな稼ぎで満足できるわけがねえ。そこで、オレが言いたいのは一稼ぎしようというわけなんだ”
“どうして？”と、ぼくとラボスが尋ねた。
“簡単なことさ。金持の家に盗みに入るんだ”と、レビは平然と言ってのけた。
ぼくとラボスは驚いて、お互い顔を見合わせた。

“シレール。お前は既に前科者なんだぜ”とレビは、怖い顔をしてぼくに言った。“今さらいやとは言わせねえ。孤児院での盗みのことは忘れていないだろうな。それに相手は金持ちさ。盗んだってこたえやしねえ。そんなに悪いことをするわけじゃないのさ…”
“でもうまいこと行くかい？　ボス”と、ラボスは言った。
“お前はなんにも分かっちゃいないな”と、レビは言った。“その為に、オレ達は仕事を変えたんじゃねえのかよ。この前荷物を運び入れたあの家ーーあそこがおあつらえ向きさ。人通りは少ないし、入り易い雰囲気だった。ちゃんと入る家の調べがついているんだ”
それでみんなは、なぜレビが仕事を変えたかを納得したのだった。
しかしその当時、みんなは飢えて、貧乏だったし、レビの提案は魅力的で、無反省に受け入れたのだった。その晩、長い時間をかけて、みんな盗みの計画に熱中した。

夏の夜の初めての強盗は見事成功した。
深夜、居間に夫婦子供の四人を椅子に縛り上げ、ぼくたちは、外に見張りに残したラボスを除き、めいめい覆面をして、室内をうろついていた。手には、めいめい、おもちゃのピストルや、本物のナイフが握られていた。全員を後ろ手に縛り上げ、ガムテープでさるぐつわをすると、レビは主人のところに歩み寄り、最後のおどしをかけた。
“おい、金はどこだ。いい加減なことを言うと、子供たちに傷がついても知らないからな”
この言葉が一番、父親には効いたようだった。
彼は頭を横に振り、何も言えないまま、足でキャビネットの引き出しを指示した。
早速ぼくが行くと、中からこれまで見たこともないほどの現金が出て来た。ぼくはそれを手に取り、仲間に合図をした。
大胆極まりない犯行だったが、初犯のことでもあり、逃げるときになって、さすがにぼくたちは恐ろしくなってしまった。逃げるときのあわてふためきようと言えば、あとになって振り返ってみれば滑稽なほどだった。
しかし目的の現金だけはしっかり手にしていた。
思いがけないほどの大金で、レビがとりあえずは自分の胸ポケットにしまい込んだ。
翌日はさっそくその金で遊びに行った。夜の盛り場で女遊びに出掛けて行き、若い娘たちが、ぼくたちのはぶりの良さに驚いているのが、いい気分だった。
そのときにしめた味は、なかなか忘れられなかった。

そんな風にして、セルッカの日々が過ぎて行った。

ぼくは、めまぐるしい生活の中で、自分が失われて行くのを感じていた。もう一度、自分を取り戻したい。そう考えたが、しかし、取り戻したいと願っている自分とは？

　セルッカでの、最初の、なんということもない夏が過ぎ、ぼくたちは、カモメが群がる港で、豪壮なヨットが静かに波を切って出て行く光景を、ただ指をくわえて見て過ごす他はなかった。たった一度の、パッと花が咲いたような夜も、もう二度と来ないかも知れなかった。レビは、次の強盗の計画を練っていたかも知れなかったが、ぼくたちは恐れを成して、なかなか乗り気にはなれなかった。

　そうして秋となり、ぼくたちは相変わらず同じ屋根の下に暮らしていたが、もう以前のようにみんな同じ行動をしている訳ではなかった。勤め先もみんなバラバラとなり、長続きのしないレビは、もう五回も職を変えていた。ぼくも、港の仕事の辛さが身にしみて分かり、今では職を変えて、ホテルのドアボーイの仕事をするようになっていた。相変わらず港に情熱を持ち続け、まじめに最初の仕事を続けていたのはメーチンクただ一人だけだった。

　セルッカで過ごすうちに、だんだんとこの街の地理も分かりかけて来たある日、ぼくは一人で街を歩いていて、ある光景に突き当たった。それはメランコリックな夕焼けが空をおおい、ぼくの気持をメランコリックにしていたときのことだった。年の頃、ぼくより少し上と思われる、十七～八才の少女が豪壮な邸宅の芝生におおわれた庭で、ちょうど絵を描き終えたのか、一日の仕事を終えてキャンバスをしまっているところだった。彼女は、美しい、白いドレスを身につけ、イーゼルをしまおうとしているその姿は、一目でぼくの目を釘づけにしてしまった。そのとき、ほんのわずかに見せた彼女の横顔は、予想を越えて清楚で美しく、強烈にぼくの胸を突き刺し、もはや忘れることはできなかった。ぼくはそんな彼女を本当に偶然に、垣根ごしに目にしたのだが、恐らく彼女の方は、ぼくの存在に気づきはしなかっただろう。彼女との出会いは、その一瞬の出会いに始まったのだが、彼女こそはまさに、後に、様々な関係を持つことになるカリーン・スカラその人であった。

　ぼくはどうしたというのだろう？　感動のない生活の中で、久し振りに自分の心が動揺し始めていることにぼくは気づくのだった。彼女が初恋の人と言えば嘘になる。美しい少女なら、ぼくは幼い頃から何度も恋したことがある。だが彼女のあの顔立ちやふるまいは、それとはまた別のものなのだろうか？　いずれにせよ、彼女に対する一方的な恋は、ぼくの気持ちを惨めにさせるばかりだった。第一身分が違い過ぎる。みすぼらしいアパートに住むぼくが、どうして彼女に接近することができるだろう？　ぼくは彼女と出会うと同時に彼女を失う惨めさを味わった。結局一方的な片思いに終わるような彼女なら、出会わなかった方がよかったのだ。ぼくは一日絶望感を味わい、ぼくの目の前から、彼女が永遠に飛び去ったことを思った。そしてそうだ、こんな物語を完成しよう。彼女は永久に主人公のことを知りはしない。主人公は、永遠のあこがれである彼女のことを想いつつ、一人寂しくこの世から去って行く。そして、時をまさしく同じくして、

あこがれの的である彼女は、彼の存在を知ることなく、理想のフィアンセと出会い、幸せな結婚へと導かれて行くーー

　ぼくは、苦しさの中で構想した自分の物語にヒドく感動し、思わず自分で涙する始末だった。
　しかしそんな風に消そうとしても、彼女のことは簡単に頭から消し去ることはできなかった。
　ぼくは仲間たちとうさ晴らしに、女遊びにでかけたりもしたが、そんなことで彼女への思いは消えるものではなかった。

　そんなときにまた久し振りに、盗みの話しが浮上した。
　“おい、オレたち、今じゃバラバラじゃねえか”とレビは言った。“この前みたいに、一つ、盗みをしてみないかい？　もうそろそろ、前の事件のことは忘れられた頃だろう。シレール、お前のホテルには金持がたくさん来てるんだろう。あの部屋に押し入るってえのはどうなんだ？”
　“危険過ぎるよ”と、ぼくは即座に否定した。
　“じゃ、何かいい名案はないのかい？”
　“名案って…”とみんなは考え込んだが、そのときになってふと、ぼくにはあるアイデアーが浮かんだ。
　あんなにもこのぼくを苦しめた彼女。それなのに、ぼくのことなど何も知らない彼女。そうだ、そんな彼女の家に押し入ってやるんだ。そして今までの苦しみを一挙に晴らして、あの彼女に復讐してやるんだ。
　“いい場所が一つあるんだ”と、ぼくは、みんなが驚くなか、話し始めた。
　それは言うまでもなく、彼女の家に押し入るという、とてつもない計画だった。

　レビもメーチンクも、もちろん誰ひとりとしてぼくの心の奥底のことまでは知らなかった。どうしてそこを知ったのか疑問に思ったけれども、ぼくは仕事で行ったことがあると言ってごまかした。彼女には気の毒で全くかかわりのないことだったかも知れないが、ぼくには自分の気持を、すっぱりと精算する必要があったのだ。

　下見に行ったとき、レビはその邸宅の立派さを気に入ってくれたようだった。
　“よし、今夜だ”と彼は言った。
　人通りは少なく、忍び込むのは容易だった。家の中に侵入するのに、この前の経験が役立った。
　この前と同じくラボスが見張り番をやり、一番身軽なぼくが、二階の窓から侵入することになった。
　窓ガラスを音をたてずに切り、内側の鍵をはずせば簡単に窓を開くことができた。

　その部屋は幸い誰も使っていない部屋だったので足音を忍ばせて廊下に出、次いで一階の裏口に出ることができた。そこには、覆面をしたレビとメーチンクとが、ぼくが中から鍵を外すのを待っていた。それは、この前と全く同じ手口だった。
　音もなく三人が室内に入り込むと、その足でさっそく寝室に向かった。
　暗がりの中で、恐らく夫婦が眠っており、ぼくたちが声を立てさせずに彼らを目覚めさせるのに手間はかからなかった。叫びそうになった口に手を当てて、彼らをベッドから引きずり降ろした。
　“叫ぶんじゃねえ。大人しくするんだ”と、レビは片手にナイフを散らつかせ、荒々しく、しかし、声は控え目に言った。“おい、お前ら二人は子供の寝室に行くんだ”
　レビに命令されて、ぼくたちは、他の寝室に向かおうとした。
　がそのとき、二階から誰かが降りて来る足音が聞こえ、ドキッとした。
　もう夜中の二時だというのに誰だろうと、ぼくたちの気持ちはいらだった。
　その足音は、一歩一歩物憂そうに降りて来る。物陰に隠れているぼくらには、そののろい歩調が腹立たしかった。
　が、やっとその足音の主が下にまで降りて来て、玄関の薄明かりに照らし出されたとき、それが、パジャマを着た彼女であることを知って、ぼくは胸が潰れる思いがした。
　しかしもうその瞬間にはメーチンクがナイフを持って飛び出していた。
　“大人しくしろ。オレたちは強盗だ”と彼は言った。
　その瞬間、彼女は身をかばうように、両腕で顔をおおった。
　“おいお前”とメーチンクは続けて言った。“他にも誰かいるかも知れねえ。二階へ行くんだ”
　ぼくは言われるまま二階に駆け上がった。
　彼女はその瞬間叫びそうになったが、あえなくメーチンクに口を押さえられてしまった。
　彼女は多分、弟に知らせようとして叫びかけたのだろう。ぼくが二階の寝室で発見したのは、強盗に入られているのも知らず、スヤスヤとベッドの上で眠り込んでいた弟の姿だった。
　かくしてこの前と同じように、この館の住人全員が居間に集められた。口にはタオルとガムテープで念入りに巻かれ、後ろ手にロープで縛られている彼らの姿は、哀れにさえ映った。
　しかも、口にガムテープを貼られている者の中に、あの娘も含まれていることを思うと、内心、ぼくは穏やかではなかった。ただぼくに見染められたというだけで、何んの罪もない彼女。その彼女が今、ぼくの目の前にいるということだけでも信じられない気持ちになると同時に、早くも、罪深いことをしたという後悔の念にかられてもいた。そんなぼくの表情は、覆面の奥で誰にも読み取られはしなかったけれども、美しい彼女を目の前にして、どうしてもふるまいがぎこちなくならざるを得ないのだった。
　しかしレビやメーチンクは、そんな彼女にもおかまいなしだった。
　例によってさっそく、弟や娘ののど元にナイフを突き立てて、親にお金のありかをはかせようとした。

この手口は効果てきめんで、父親はすんなりとお金の有り場所を白状した。
しかし今回はそれで終わりという事態にはならなかった。
レビが、いつの間にか、美しい彼女に目をつけることになっていたとは、ぼくのとんでもない誤算だった。
“おい。なかなかべっぴんじゃねえか、この娘は”とレビはやがて彼女に目をつけると言った。
その瞬間、両親も娘も過剰な反応を示した。娘の身に何か起こるのではないかと恐れたのだ。
しかしレビは、そんなことはおかまいなしに叫んだ。
“さあ、オレたちは今から宴会だ。こいつに酒をつがせるんだ。おい。冷蔵庫に行って何か食いものをとって来な”
ぼくはレビに命令されるまま冷蔵庫に走ったが、戻って来たときは、例の娘と母親だけは縄を解かれ、口のガムテープもはずされていた。
レビは本気になって彼女らに酒の相手をさせるつもりだった。
“おい、酒をつぐんだ”と、レビは、彼女とその母親に命令した。
そして、ぼくやメーチンクにもグラスを渡し、ぼくらにも、酒をふるまうことを命令した。
ぼくは胸がドキドキした。彼女が、立っているぼくにも酒をつぎに来るのだ。
彼女は、レビに命令されるまま、屈辱のせいか表情をこわばらせてレビに酒をつぎ、メーチンクにも酒をついで、ぼくの所にまでやって来た。
ぼくは、彼女のその姿を見て、耳元まで顔が真赤になった。
おい、シレール！　と心の中でぼくは叫んだ。あんなに好きだった彼女が今、目の前にいるんだ。しかも酒までついでくれるんだぞ。自分の目が信じられるか！　何か言うんだ。好きだったことを目の前にいる彼女に告白するんだ！
しかしぼくは体が震えてしまって、ぼくを見つめている彼女に、何ひとつ物を言うことができなかった。
ぼくはただ黙って、ぼくが握っているグラスにウィスキーをついでくれる彼女の顔を見つめているばかりだった。
レビは、ウィスキーを飲むと、とたんに元気になった。いつもそうだったが、女ぐせが悪くなるのも、酒場の経験から知っていた。
“おい、こっちへ来るんだ！”とレビは、恐怖におののいている彼女に向かって、怒鳴った。
父親や弟は両手を縛られている為、手だしをすることができなかった。また、フリーになった母親も、メーチンクに押さえられていて、動きがとれなかった。レビは、片手にナイフを持っているのをいい気に、いやがる彼女を無理やり自分の方に連れ込もうとした。

彼女は顔をゆがめ、彼から逃れようとしたが、レビの力の方が強過ぎた。
“まあいいじゃねえか”と、レビは、彼女をソファーに押し倒すと言った。“オレがそんなに嫌いなのか。いいことしようじゃないか”
そう言ってレビは、いやがる彼女の胸に手を当てかけたので、さすがのぼくも、もう我慢がならなかった。
ここに強盗に入ると決まったとき、こんなことをする約束ではなかったはずだ。
“ボス、やめるんだ！”とぼくは叫んで、彼の下に駆け寄り、その手を振り払おうとした。
が、レビが逆に、ぼくを押しのけようとしたとき、その振り払われた手がぼくの覆面に当たって、ぼくの覆面は、ハラリと空中に舞い上がり、もう逃れようもなく自分の顔を、家族の人や、彼女にもさらすことになってしまったのだった。一瞬、彼女とぼくは目と目が合い、彼女は驚いた表情でこのぼくを見つめた。ぼくはすぐ、その覆面をとって顔にかぶせようとしたが、もう後の祭りだった。この一連の出来事は、レビに新たな行動をとらせることを要請し、もはや彼女に注意が及ばなくなるのに役立った。
レビは、ぼくの顔がみんなに知られたことに当惑し、威嚇でそれをおおい隠そうとした。
“いいかお前たち”と彼は叫んだ。“こいつのことは誰にも言うな。今見たことは忘れるんだ。もし誰かに言いでもしたら承知しねえからな。こいつのことを言ったらどうなるか知っているか！こうなるんだ！”
そう言って彼は、振りかざしたナイフをソファーに突き刺し、それをみんなの見ている前で、ザクザクと切り刻んだ。
“どうなるか分かったな！”とレビは叫んだ。“これが、今度はお前たちの体になるんだぞ。今見たことは忘れるんだ。こいつの顔は、なかったことにするんだ。いいな！”
それが余りにも迫力のある声だったので、主人や弟たちが、思わずうなづいてしまうほどだった。
後でぼくは、レビにどやされることは分かっていた。被害者に顔を知られてしまうという、強盗にとってはあるまじき失態をしでかしてしまったのだ。
しかし、それ以上に恐れていたのは被害者たちだったことに、後になってぼくは気ついた。というのも、ぼくの顔を見てしまった以上、生きては帰してもらえないと彼らが考えたことは、容易に推し量ることができたからだった。他の強盗なら本当にそうしたかも知れない。
しかしぼくらは、強盗といっても、まだ駆け出しの強盗に過ぎなかった。彼らを殺すなどということは、レビの頭にすら、過ることのないものだった…
それはともかく、被害者たちの緊張は、極度に高まっていた。
事が一段落着くと、しかし、レビのお祭り騒ぎはまだやみそうにもなかった。
“おい、せっかく人の家に招待してもらったんだ。このまま帰る手はないぜ”とレビは言った。

そして、メーチンクに、男二人の見張りを頼むと、娘と母の手をとって、レビは、娘の寝室に行くお伴をすることを、ぼくに命じた。
二階の娘の部屋に入ると、レビは、いやがる彼女たちの表情をよそに、ベッドの上に深々と横になった。それからやおらベッドから起き上がると、娘の衣装戸棚に近づき、ドアを一気にあけると、中の衣類を次々とベッドの上に、ほうり投げるのだった。それらは、乱雑に、無残に、ベッドや床の上に散らかった。レビには、そのことがおかしくてたまらないらしかった。
そして中のいくつかを取り出すと、レビは腹をかかえて笑いこけながら、それをナイフで切り刻むのだった。
“やい、おめえら”
それからレビは、急に怖い顔になって振り向いた。“オレがただの強盗でないことを思い知ったか。こんなもの、こうしてやる！”
そう叫んでレビは、部屋に飾ってあった、写真ケースや、花瓶や、ランプなどを次々と床に叩きつけ、破壊して行くのだった。
“オレはな”とレビは言った。“気にくわねえんだ。この家の家庭臭さが気にくわねえ。我慢ならねえんだ。お前ら、命があったと思うだけでも感謝しな！”
それが、この祭りをしめくくるレビの最後の捨てゼリフだった。
娘も母親も、破壊され尽くした部屋の片隅にただぼうぜんと突っ立っていて、何がなんだか分からない表情をしていた。というより、娘は母親の陰に立って、今にも泣き出してしまいそうな表情だった。
ぼくは、彼女たちから少し離れた所に立って、彼女たちを見張りつつ、この惨劇の一部始終を見守った。
“分かったらもういい”と、レビは、彼女らに背を向け、やがて急にガックリとうなだれたようになって言った。“みんなのいる所へ帰んな。オレたちももうそろそろずらかろう…”
再び家の者全員、しっかりとロープでゆわいつけると、ぼくたちは現金を奪って家を飛び出した。
成功と言えば成功だった。ただ一つ、ぼくの顔を彼らに見られたということを除けば…

ぼくは、真暗な住宅街を逃走して行くあいだ、後ろ髪を引かれる思いがした。
もう彼女のことはあきらめるしかなかった。もう彼女に顔を知られてしまった以上、彼女の前に姿を現すことは不可能だった。しかし、その覚悟はできていた。彼女に自分の存在を印象づけること――もうその目標は達したのだから、そのことだけでもぼくは満足だった。今後、もう二度と彼女と会えないとしても、何もせぬまま――あの夢の物語のように――引き下がってしまうよりはましだとぼくは思った。そしてこのことを節目として、彼女のことは忘れようとぼくは思った。もう彼女のことで、これ以上苦しめられるのは、まっぴらだったのだ…

さっそくぼくたちは、その金で、夜の盛り場へくり出して行った。
若い娘たちが、ぼくたちの相手をしてくれたが、なぜかぼくには、あの娘のことが忘れられないのだった。とりわけ、酒をついでくれたあのときの光景が…
しかし、彼女の記憶も、時が経過していくうちに、だんだんと薄れていった。
ときたま思い出すことがあっても、結局ぼくは、彼女の名前すら、知らなかったのだ…

秋になってもぼくたちはずっと一緒だった。ただアパートの一室だけでは手狭だったので、隣りの部屋をもう一つ借りたということ以外には。しかしそれだけではなく、ぼくたちはお互いの生活を余り干渉しなくなっていた。その一つの理由に、お互いの仕事の時間帯がかみ合わないということもあった。みんな仕事がバラバラで、隣の部屋にいながら、何日間も顔を合わさないということもあった。
或る日、隣りの部屋でレビとメーチンクが、どこで引っ掛けたのか、若い娘を連れ込んで、ハデに騒いでいたことがあった。ぼくは夜遅く、仕事に疲れて帰って来るとその騒ぎだったので部屋を覗いてみると、狭い部屋の中には、女ばかりでなく、見知らぬ男の姿もあった。少し年配で、一見してやくざ風の男だった。
“おい、どうしたシレール、入れよ”と、メーチンクはシャンペングラスを片手に、ぼくに声を掛けてくれた。
おずおずとぼくが中に入って行くと、
“こいつは、ホテルのドアボーイをしているんだ”と、レビはみんなにぼくを紹介した。
やくざ風の男はタバコをふかしながら、チラッとぼくの方に目を向けた。女たちも笑いながら、ぼくを見た。
“さあさ、遠慮せずに飲めよ”とメーチンクは、ぼくにシャンペンを勧めた。“この方はな、この辺ではちょっと名の知れた、えらいお方なんだ。あいさつをしておくがいい。きっと役に立ってくれるよ”
なぜかぼくは余り気がすすまなかったが、彼にシャンペングラスをさし出し、挨拶をした。
彼らはたあいのない話しばかりをし、そのときには分からなかったが、後になって、彼が本物のやくざであることをぼくは知った。
今やメーチンクとレビがやくざの世界に手を染め出したのは明らかだったが、なぜか彼らは、ぼくやラボスにその勧誘を仕掛けることはなかった。しかしその日以後、日に日に彼らの生活が上向き、景気が良くなるのをぼくは目にした。
彼らはどこでそんな大金を手に入れたのか、時々、ぼくたちを夜の盛り場に連れて行ってくれることがあった。
“なあお前たち”と、けむりがもうもうと立ち込めるクラブの中で、ある日レビは言った。“まじめにこつこつとやるのもいいが、オレたちの仕事もやめられねえ。

確かにやばいこともある。しかしそれが大金と引き換えなら、悪くねえ取引さ。おかげでこういう店にも、ときどき来られるというわけだ。なあお前たち、オレたちは普通の方法ではダメなんだ。まともな家庭の息子らにたちうちできるわけがねえ。でもこういうやり方なら、奴らなんかに負けやしねえさ。これも仕事。オレたちも必死に汗して働いているんだぜ。シレール…”

そのはぶりの良さには目をみはるものがあり、少なからずぼくたちの心が動揺したのも事実だった。

“それでどんな仕事なんだ、レビ？”とぼくは尋ねてみた。

“なあに、簡単なことだ。薬を売るのさ”とレビは答えた。そしてやおら内ポケットから小さな瓶を取り出すと、それをつくづくと眺めながらレビは言った。“この中にはな、白い粉末が入っているんだ。これが、金の卵を生んでくれるんだよ。オレにとっちゃ、神様みたいなものさ”

“へえ〜、そんなもので…”と、ぼくは不思議そうに眺めた。

そしてそれを手にとろうとすると、レビはさっとそれを内ポケットにしまい込んだ。

“これを人に見せるわけには行かねえ。人目に触れるとまずいからな”とレビは言った。“でもな、原価は安いけれど、何十倍にもなって売れるんだよ、こいつは”

ぼくもレビの話しを聞いていて、そんな魔法の薬が欲しくなって来た。

しかしぼくとラボスは、彼らに染まることなく、相変わらずまじめに働いていた。

生活は貧しく、未来に対する希望も見えては来なかった。レビとメーチンクは薬に手を染めて、もうコソ泥には魅力を感じなくなってしまっていたが、ぼくやラボスにとっては小遣い稼ぎの為にはまだまだ魅力のある方法だった。

秋が深まった頃、ぼくたちはとうとう思いつめて、レビやメーチンクには相談せずに、自分たちだけで強盗をする計画を立てた。今では庭師の見習いをしているラボスがその家を見つけて来たのだった。

しかし、レビのようなすごみもなく、またメーチンクのような体格もないぼくたちは、うまく成功するか不安だった。

“相手は年寄り二人だけだ。間違いはない”というラボスの言葉だけが頼りだった。

夜中、ぼくたちは、かつて覚えた方法で押し入った。

手足が震え、額や背中が汗でぐっしょりだった。できるものなら、彼らに起きて来て欲しくない。そう祈る心中だった。だが、たいていは、重要な、金目のものは寝室に隠してあることも分かっていた。ぼくたちが最初に入った部屋は、どうやら書斎らしかった。懐中電灯で照らすと、書棚に立てかけてある蔵書の多さに、ぼくたちは驚いた。ぼくたちはしばらくぼうぜんと、夜の暗闇の中で、その本を照らして行った。ーーしかし、ここには金がないことは分かっていた。

入口のドアがどこにあるのかと懐中電灯で照らして行ったとき、その明かりが入口を照らしたとたん、ぼくたちはど肝を抜かれてしまった。あんなに恐ろしい経験をしたことはなかった。というのも、そこにはナイトガウンを着、年のせいでもうすっかり髪の毛が薄くなってしまっている老人が立っていたからだった。

“こら、君たち”と、老人はこちらをまぶしそうに見つめながら言ったが、その声は落ち着いていた。“わたしに見つかった以上、もう逃げられはしないよ。どんな境遇の人かは知らないが、大人しくするのなら黙って見逃してあげよう。困っているのなら、応接間にいくらかの現金がある。それを持って行くがよい。その方が、お互い事がスムーズに運ぶんじゃないのかな。ーーしかし間違ってもわたしに口封じをしようなんて思わないで下さいよ。わたしはこの年で死んでもかまわないが、君たちはまだ未来のある身だ。殺人罪で死刑になるのは君たちもちと辛いだろ？ いいか、何も悪いことはしない。じっくりと話し合おうじゃないか”

そう言うなり老人は、まだなんの身構えも出来ていないぼくたちのいる部屋の明かりを、パッとつけた。とたんにぼくたちは逆に老人の前で明かりにさらされることになり、すっかりうろたえてしまった。顔には覆面をしていたものの、老人にはぼくたちの年齢がすぐ分かってしまったらしい。

“なんだ、君たちはまだ子供じゃないか”と老人は言った。“そんな年で可哀そうに。いいから覆面をとりなさい。わたしは君たちを警察に引き渡しはしないよ”

しかしそんなことを言われても、ぼくたちはすっかりうろたえてしまっていた。こんなときにレビやメーチンクがいたら、とどんなにのろったか知れなかった。相手がラボスでは頼りなかったが、ラボスはそれでも必死の抵抗を試みようとした。

“やいじじい”とラボスは言った。“そんな言葉にオレたちがだまされると思うのかよ。大人しくするのはそっちの方だ。金を出せ！”

ラボスはそれなりに迫力はあったが、年寄りはほとんど相手にしてないようだった。

“金か？ それならこっちにある。来なさい”と老人は言って、ぼくたちを部屋の外に案内した。

そうなると、老人の言う通りついて行くぼくたちが本当に強盗なのかバカバカしい気になって来るのだった。むしろこっけいでさえあった。

老人は約束通り別の部屋にぼくたちを導き、物入れからポンと現金をさし出した。

“余り多くはないが、今ある現金のすべてだ”と老人は言った。“わたしは余り現金を持たない主義でね”

“じゃ、預金通帳を渡しな”とラボスはいきり立って言った。

“それを渡すのだけはかんべん願いたい”と老人は落ち着いて言うのだった。“いや何も大金が入っているからというわけじゃないのだよ。それには、わたしの余生を過ごして行くための年金が振り込まれるのだよ。三月に一回ごとにな。それを持って行かれると、また口座の手続きを一から始めなきゃならん。とっても面倒くさいんだよ。だからどうか、それだけは勘弁願いたい…”

“でも、これっぽっちじゃ”と、ラボスは納得行かないようだったが、たまりかねて、とうとうぼくが口出しをした。
“もういいじゃないか”とぼくは言った。“この人だって生活して行かなきゃならないんだよ。今回は、これだけ入れば充分じゃないか”
“しかし、おいっ！”と、ラボスは老人に向き直って言った。“別の通帳があるはずだろ！　株券とか、証券とか、年金だけで生活して行くわけないだろ！　それを出しな”
“ところがないんだよ、この家には”と老人は言った。“みんな銀行に預けてある。それにね君たち、そんなのを持って銀行に行けば、いっぺんに怪しまれてつかまってしまうよ。どうする気なんだい？”
そう言われると、ラボスももう口をつぐことができなくなってしまった。
“本当かよ。本当にこれっぽっちかよ”と言うのが精一杯だった。
“それで不満なら、また来ればいい”と、老人はさらに言うのだった。“今度はその覆面をとって白昼、玄関から堂々とね。小遣い程度なら、あげてやってもいい。今度年金が入るのは来月だから、そのときに来るってのはどうかな？”
“まっ、まさか…”とラボスは声を震わせて言った。“じょ、冗談じゃない。オレ達は泥棒なんだ。物乞いなんかじゃないんだ。もう二度と来ることなんかねえんだ…”
“わたしも長い人生を生きて来たが、こんなことは初めての経験だ”と老人は落ち着いて言うのだった。“君たちが金に困っているのなら、それを助けてあげるのがわたしたちの勤めじゃないのかな。そんなことを言ったからといってわたしは何も怪しい者じゃない。今年退職したばかりの大学の教授でね、今でも月に数回臨時講師として大学に行っとるよ”
“大学教授？”とラボスが言った。
“そうだ。君たちくらいの年齢の若者が相手の商売でね”と教授は言うのだった。“君たちぐらいの若者の心理は分かっているつもりだ”
“じゃ何か”とラボスは言うのだった。“先生は、心理学の先生とでもいうのかい？”
“あいにく文学の教授でね。しかし若者の心ぐらいは、心理学をやらなくとも分かろうというものだ”と教授は答えた。
“いずれにせよ、オレたちは金さえもらえれば用はねえ”とラボスは言った。“こんなとこ、早くずらかろうぜ”
そう言うなりラボスはぼくの手をとって部屋から出て行こうとしたが、そのとき、教授がぼくたちを呼び止めた。
“おいっ、君たち！”
その声が余り大きな声だったので、ぼくたちは驚いて振り向いた。
“忘れ物だよ”そう言って教授が差し出したのは他ならぬ現金だった。
ラボスは動転していて、現金を受け取るのをすっかり忘れてしまっていたのだった。そんなぼくたちとは対照的に、教授はニコニコと笑っていた。

　ラボスはばつが悪そうに、その金をふんだくって胸ポケットに入れた。そして再び立ち去ろうとしたとき、再び教授が言った。

“君たちはどうやらプロの泥棒ではないらしいな。それが証拠にラボス君、君の名前の刺繍入りのハンカチで、君は覆面をしているじゃないか。こんなへまな泥棒って、他にいないのじゃないかな”

ラボスはとうとう我慢ならなくなって、パッと覆面をとってしまった。

“教授、お願いだからオレたちのことを訴えないでおくれよ”

そう言うラボスの声は震え、すっかり弱気になってしまっていた。

教授はさらにぼくを見た。

“お連れが覆面をとった。君はとらないのかね”

さっきまでの穏やかな表情と打って変わったような鋭い表情で見つめられたので、ぼくはすっかりたじろいでしまった。

“警察に訴えないって約束するなら、こんなもの、とってやるよ”とぼくは言った。

“さっきも言った通り訴えはしないよ”と教授は穏やかに答えた。

ぼくもラボスに習って、教授の前で覆面を取った。それでも、教授の表情は何一つ変わらなかった。

“いいから、また来なさい。君たち”と教授は言うのだった。“門を叩け。されば開かれる。――何も物乞いにおいでと言っているわけじゃない。君たちのような悩める若者と是非話しがしたいのだ。何も遠慮はいらないよ。わたしはこの家の住人で、逃げも隠れもしない。君たちの住まいがどこで、何をしているかも言わなくてもよろしい。他の学生たちがそうするように、気軽に来てもらって、帰ってくれればいいんだよ。そして一度、人生を語り合おうじゃないか。君たちだって、根っからの泥棒なんかじゃないはずだ。心を変えるのなら今のうちだよ。わたしがその為に少しでも役に立てばと思って言ってるまでだ。そしてもしその気があるのなら、いつでもいいから、またこの家に来なさい。わたしはいつでも、喜んで相手になってあげるよ”

“バカな！　オレたちはもうこれで十分ですぜ、教授”とラボスは言った。“さっ、帰ろう”

“出て行くときは玄関からな”と教授は言った。

ぼくたちは外に出るなり、狐につままれたような気になった。

“なんだ、今のは？”とラボスは言った。“変わったオヤジだ。泥棒に入られて金を渡すなんて”

“でもどうする？”とぼくは言った。“また今度行くのかい？”

“冗談じゃねえや”とラボスは言った。“誰が行くもんか。今回は、これでケリさ”

“でも面白そうじゃないか”とぼくは言った。“この町に来て、友だちなんて誰も出来ないしね。なんかの相談に乗ってくれるかも知れない…”

“何んの相談だよ？”とラボスは言った。

“分からないけど、ぼくは行きたい気もするなあ”
“だったらお前ひとりで行きなよ。ただしヘマをこいてつかまるようなマネだけはするなよ。オレにとばっちりがかかるのはごめんだからな。いずれにせよ、オレは行かないぜ…”
そんなことを話しながら、ぼくたちは夜道を帰って行った。

メーチンクとレビが麻薬取引のかどで逮捕されたというニュースが入ったのはそれから間もなくしてからのことだった。
ぼくはラボスとさっそく拘置所に面会に行ったが、レビもメーチンクも以前のような威勢のよさはなく見る影もなかった。そしてぼくたちの前でしきりに長期間の刑をくらうかも知れない恐れを、涙まじりに訴えるのだった。そんな彼らの姿を見ても、ぼくたちは何も打つ手はなく、ただ内心、ぼくたちはかかわっていなくてよかったと思うだけだった。
しかし、アパートに帰って来ると、以前のような威勢のよいレビやメーチンクの姿が見られることはなく、一抹の寂しさを感じないわけには行かなかった。
レビが逮捕されたことにより、ぼくたちの求心力は急速に失われて行き、ラボスとのささいないさかいもあって、ぼくたちはそれぞれ独立してアパートに住むことになった。今や都会に来てぼくは、頼る人もなく、世界の中で自分がひとりぽっちであることを感じた。季節はもう冬になっていて、うらぶれた雨もりのするアパートが、一層その思いを強くさせた。日々の仕事に情熱は感じられなくなり、おまけに、肉体的にも精神的にも健康がむしばまれて行った。仕事は休みがちとなり、気が付いたときには、いつのまにか首になっていた。後には辛い肉体労働しか待ってはいなかったが、それはぼくには荷が大き過ぎた。たちまち健康が害され、ぼくは病気になった。しかし支払う薬代もなく、ただ家のベッドで寝込み、健康が回復するのを待つ他はなかった。見舞ってくれる人もなく、何日も何日もその状態でいる他はなかった。そのときぼくは、何度悪夢を見たか知れなかった。このまま都会の片隅で人知れず死んでしまうのではないかと何度ぼくは想像したことだろう！　しかし冷酷な現実は、そんな夢を見ることさえ打ち砕いた。家賃は勿論のこと、水道、ガス、電気代も支払われず、それらは線を切られ、家主からは、やんやの催促をされたうえ、何度も出て行くよう通告も受けた。ぼくが病気で寝ることさえ、世の中は許してくれそうになかったのだ。
ある午後、熱がまだ回復していないにもかかわらず家主が突然やって来て、ベッドで寝ているぼくは、まるでのら猫がつまみ出されるがごとく、アパートから追い出されたことがあった。血も涙もない家主でぼくを路上にほおり出すと、勢いよくドアをバタンと閉めた。もうこの家には二度と来るなよ、という捨てぜりふを残して。
ぼくは頭痛でフラフラしていた上、咳がたて続けに出て来たが、やむなく路上を歩き始めた。どこへ行くというあてもなく、しかも、ポケットには小銭がわずかにあるばかりだった。こんなに落ち込んだ気分の時はなかったし、いっそのこと死んでしまいたい気持ちだった。

しかしそんなとき、ぼくの頭に浮かんだのは、いつか強盗に入ったときのあの彼女の姿だった。一度でいいからぼくはもう一度見たいと思った。彼女を目にし、そして死んで行くのなら、自分の最後としてそれもいいと思ったのかも知れない。

どこをどのようにして歩いて来たのか、咳が余りにも激しくなったので苦しさの余りぼくはその場にしゃがみ込んでしまったが、やっと治まったとき、すぐそばで子供の声が耳に聞こえて来た。

振り向くと、いつのまにかぼくは公園に来ていたらしく、うっそうと茂る木立の向うの方で数人の少女が遊んでいる姿が目に飛び込んで来た。ぼくはその姿を見て、少しばかり気分がよくなったのかも知れない。そばにあった公園のベンチに腰掛けると、ほおずえをつき、しばらく少女たちの遊びをじっと見つめることとなった。

彼女たちは、地面に何か書き、石けりをして遊んでいるようだった。

しかし少女たちもぼくの姿に気づき、何かヒソヒソとぼくのことをうわさしているようでもあった。

そうしているうちに、偶然向うの方からわたがしのおじさんが屋台を運んで来ると、子供たちを相手に商売を始めた。ぼくのいるベンチの側に屋台を据えると、まず最初にぼくに声を掛けた。

“そこの坊や、これいらないかね？”

ぼくは振り向き、鳥打帽を被った、その下に苦労のしわを刻み、真黒に日焼けした男の顔を見つめた。

“どうだ、おいしいよ”と男は、たくさんの中の一つをぼくに勧めた。

ぼくはどうしょうかと迷ったが、その瞬間、いい考えが頭に浮かんだ。

“うん、じゃあおじさん、四つお願い。そのうち三つは、あの子たちにあげておくれよ”

そう言ってぼくはポケットからお金を取り出すと、四人分を支払い、わたがしの一つを受け取ると、再びベンチに腰を降ろした。

男は、ぼくに言われるまま、わたがしを少女たちの所へ持って行った。

“さあお嬢ちゃんたち、これをおあがり。あの坊やのプレゼントだよ”

その言葉で、少女たちは驚いて振り向き、目を丸くしてぼくを見つめた。ぼくは、自分のわたがしを軽く上げると、愛想よく微笑んだ。

少女たちはけげんな顔をしながら、それでも、男の手渡すわたがしを一つづつ受け取って行った。

“なかなか親切な坊やだね。お友だちかい？”と、男は愛想笑いを絶やさずに尋ねた。

“いえ、全然知らない子よ”と、少女たちのうちのひとりが答えた。

それから彼女たちは、おじさんから離れると、みんな一丸となってぼくの所まで駆けて来た。

“これ、ありがとう。でも、どういうつもり？”と、中でも一番背の高い少女が意気込んでぼくに言った。

ぼくは、ベンチに腰を据えたまま、落ち着いてそんな彼女たちを見上げた。
“まあ、そう怖い顔をしないで”とぼくは言った。“それ、みんなぼくのおごりだから安心して食べなよ。君たち、ぼくのことを知らないだろうけど、ぼくは君たちを見掛けたことがあるんだ”
ぼくは、とっさに出まかせを言った。
“どこで？”と、別の女の子が尋ねた。
“君たちの学校でさ”とぼくは答えた。“でも、名前が思い出せなくってね”
“わたしはイザベル。この子は…”と、彼女たちは意外と簡単に名前をぼくに教えてくれるのだった。
“そうかい。ぼくの名前はジャン”と、ぼくは、とっさに思いついた名前を言った。“よろしく。これでみんなお友だちだ”
そう言ってぼくは、彼女たちひとりひとりと握手をした。
“でも、どうしてわたしたちのことを知っているの？”と、再びさっきの少女がひつこく尋ねた。
“それは一度学校で会っているからさ”とぼくは言った。“君たち、ぼくのこと、覚えていないかい？”
“知らないわ。あんたなんか”と、その少女は答えた。
“知らないならそれでいいさ”とぼくはそっけなく言った。
もともとねつぞうしたことで、それ以上議論する気はなかったのだ。
“それより、そんなつまらない遊びをやめてさ、もっと面白い遊びを教えてやろうか”
“もっと面白い遊びってどんなのよ？”と少女は尋ねた。
“鬼ごっこさ。ひとりが目を閉じて１００数える。そのあいだにみんな隠れるのさ。見つかれば、今度はその子が鬼になる”
“そんなのみんな知ってるわ”と、少女は言った。
“まあいいからやってみようぜ。面白いよ”
ぼくはうまく彼女たちをまるめ込み、鬼ごっこ遊びをすることに成功した。自分が病気であることも忘れて、久し振りに興ずることのできた充実した時間となった。
しかし、自分の辛い境遇も、病気のことさえ忘れられる楽しいひとときは、またたくまに去ってしまった。
公園の木立ちにいつしか西陽がさし込むようになり、少女たちがもう帰らねばならない時が来た。
“ありがとうジャン。楽しかったわ。でも、もう帰らなくちゃならないわ”と、少女のひとりが言い出したとき、ぼくの心臓は再び激しくどうきを打ち始めた。
それは、彼女たちと別れることが忍びがたかったからではなく、ぼくには行くところがどこにもないからだった。ぼくは彼女たちと遊んでいるとき、何度、今晩ひと晩だけでも君の家に泊めさせてくれない？というひと言が口を突いて出て来そうになったか知れなかった。

しかしそのたびにバツの悪さが、それを言葉にするのを否定した。再び病気を思い出したのか、ぼくは激しくせきをした。
“大丈夫？　ジャン”と、少女たちはそんなぼくのことを気づかってくれた。
ぼくはたとえ口に出せなくとも、彼女たちを家まで送って行こうと考えた。どたん場になれば、ぼくだって、勇気をもって言えるかも知れない。
“ああ、大丈夫さ”とぼくは答えた。“ちょっと風邪気味でね。それより、君たちの家まで送ろう。家は何処なんだい？”
“この近くよ”と、姉妹の少女は答えた。“近くだから別に送ってくれなくてもかまわないわよ”
“いや、送らせてもらいたいんだ”
その強引さに、少女たちは少しばかりけむたそうな顔をしたが、黙って歩き始めた。
しかしやがて向う側に明かりのついた家が見えてくると少女は言った。
“ああ、あれよ。ママが炊事場にいるわ。もう帰らなくっちゃ”
それからくるりとぼくの方を見ると、姉娘の方はこう言った。
“ありがとうジャン。また会える？”
“ああ、また今度ね”と、ぼくは内心ドキドキしながら答えた。
“とても楽しかったわ”と、彼女は今日の出来事を思い出しながら言った。“また会えるのを楽しみにしているわ”
“ところでジャン”と彼女は言った。“あんたの家はどこなの？”
“ぼくの家かい？”とっさのことで、ぼくは何も考えられずに答えてしまった。“ずっと遠くさ”
しまったと思ったが、もう後の祭りだった。せっかくのチャンスをみすみす見逃し、しかももう言い直しはできなかった。
“そう？”と姉娘はけげんな顔をしてぼくを見、それからぼくから去って行こうとした。
“それじゃ、さようなら。またあしたね”
“またあした…”と、ぼくは、手を振る彼女たちに応えて、手を振った。
公園に夜の影が忍び寄り、ぼくは、彼女たちが明かりのついた我が家に入り込むのを、じっとその場に立って見守った。彼女たちは家の中に入る前にもう一度振り向いてぼくに手を振り、それからすっかり家の中に姿を消してしまった。すると急に寂しさのようなものがぼくの胸を襲い、振っていたぼくの手も自然停止するのだった。それからくるりと向きを変えると、ぼくは、やがてとぼとぼと歩き始めた。両手をポケットに突っ込みながら…　公園の木立の上を見上げると、いつしか頭上には一番星が輝いていた。その星がキラキラと輝くがごとく、ぼくの目にもやがて一粒の涙が、キラリと輝いていた。

あんなに惨めで、辛い思いをしたことはなかった。みんなには帰って行く家があったのに、そのときのぼくにはなかったのだ。

熱病に伴う頭痛が再び思い出したようにぶり返し、一切から見放された思いが、ぼくの気持を絶望的にした。物寂しい街灯りをどことも知れず過って行くぼくの頭の中は、やがてただ一つのことだけに収れんされて行った。ぼくは、神に祈るような気持ちで、ただ一言、
“ママ”とつぶやいた。

その後のことは覚えてはいない。気が付くと、ぼくは、病院の一室に収容されており、見覚えのある顔が目の前に映ったのだから。
その顔はにわかには思い出せなかったが、やがて思い出した。あの教授だ！
“やっと気が付いたかい？”と、教授は、目を覚ましたぼくに優しく声を掛けてくれた。　それから、ぼくがここに入院するに至る顛末について話してくれた。それによると、ぼくの無意識がそうさせたに違いなく、夜遅くほとんど失神寸前のぼくが教授の家のドアを叩き、教授が眠りを覚まされ出て来たときには、とたんにその腕の中に倒れ込んだのだと言う。さっそく教授は救急車を呼び、この病院に運び入れたということだった。
“君が来てくれてよかったよ”と教授は言った。“若し私の家の戸を叩いていなければ、君は或いは路上で、手遅れになっていたかも知れないからね。まあ普通の風邪だが、昨日の晩は特に冷え込みが激しかったからね”
つまりぼくは凍死するかも知れなかったということだった。ぼくは教授を知っていたおかげで命拾いをしたわけなのだ。
“まあ、ここ一両日入院するだけで大丈夫だそうだ”と教授はまじめな表情をして言った。“ちょっときょうは忙しくてね、今から出掛けるよ。あしたの朝には迎えに来るから、それまでここで大人しくしているんだよ”
そう言うなり、教授は忙しそうに病室から出て言った。

ぼくの病室には他に人はなく、窓から眺められる景色が美しかった。
ここはどこなのか分からなかったが、どうも高台にあるらしく、しかもふもとに見えるある一角が見覚えのある光景のように、ぼくには思えて来た。あの庭といい、あの建物の感じといい、ひょっとして彼女のあの家では？　そんな気がして来て、確証はなかったが、やがてぼくは、自分の心の中でそうだということに決めてしまった。
そしてその日一日は、彼女のその庭を眺めて過ごすのが楽しかった。彼女がいつそこに姿を現すか楽しみだったが、ずっと期待は裏切られ続けた。しかしむしろぼくは空想を楽しんだのだ。誰も見舞いにも来ず、世間から見放されたぼくは、こんなに自由だと感じたことはなかった。しかしそれは同時に、寂しさと抱き合わせの自由でもあった。ぼくはふと、ある一つの空想をした。そうだ、ぼくがもしこのまま死んでしまうとしたら？　この世には、もう身を寄せる誰も、このぼくにはいない。だから人知れず死んだとして、誰がそのことを嘆き悲しむだろう？　しかしそのとき、愛らしい彼女のことを思い浮かべると死ぬわけには行かないとぼくは感じた。

もしぼくが今死ぬとして、ぼくの死後も彼女は生き続けるであろうし、彼女のその素晴らしい人生を、ぼくは見とどけないわけには行かないのだ。まさに彼女のその素晴らしい人生が始まろうとしているそのときに、ぼくは闇の中に去って行くわけには行かない。それはなんと悲しむべき、恐るべき体験だろう。すると同時に、ぼくは恐るべき生への執着心が芽生えて来ることに気づくのだった。これまで不幸だったかも知れないが、このまま死んでしまうわけには行かないのだ。このまま恨んでも恨み切れないような、死んでも死に切れないような何かがあることに、ぼくは気がついたのだ。不幸で乾き切ったぼくの心に、いま、涙する心が芽生えた。ぼくはママを失ったことを泣いたのだ。そして虚無の中から立ち上がり、強く生きて行こうと決意した。

――しかし、空想はますます続く。そんなぼくの願いとはうらはらに、病魔はぼくの願いを踏みにじって行く。生きて行こうとする強い願いとは逆に、ぼくは今まさに死んで行く運命にあったのだ。だとするなら、なんという残酷。なんという戦りつ。なんという悲惨なんだろう！　世間がまさに素晴らしい新生を迎えようとしているそのときに、ぼくだけがひとり死んで行かねばならないとは。ぼくの頭は、生きようとする意志に向かってグルグルと回転した。一生が走馬灯のように駆け巡り、すべてが凝縮した形でかいま見られた。そして今まさに、心に翼が生えて、彼女の下に飛び立とうとしたそのときに、ほっさが起こり、ぼくは息絶えたのだ…

それは夜明けの頃で、世間は再び活動を開始するのだった。雨上がりの朝、新聞配達の少年は自転車で駆けて行き、電車は動き始め、まだ明けたばかりの空の下で雀がさえずっている。そして彼女のあの家の窓では、ぼくの死も知らない彼女が、さわやかな朝に窓を開け、腕を伸ばしてあくびをし、この日に行われるであろう結婚式の夢に早くも胸を踊らせているのであった。

それが一つの空想だと知ってぼくはほっとした。もう午後の三時になっていた。ぼくは死んではいなかったし、彼女もまたこの世にいた。窓外に広がる景色はなんとぼくの気持を慰めたことだろう。

そのとき、廊下をはさんだ向かいの部屋で、何か話し声が聞こえて来たので、ぼくは起き上がり、開いたドアの陰に立つと、その話し声に耳を傾けた。

向かいの部屋は個室になっていて、姿を見せないがつい立ての向うのベッドにはぼくと同じぐらいの少女が寝ているらしく、相手になっているのが見舞いに来たその少女の友だちであるらしいことが分かってきた。その女友だちの後ろ姿だけは、ぼくの所からも見えていた。

彼女たちの話しを総合すると、病人である少女は相当の重症であるらしく、腎臓をとり換えなければ助からないのかも知れないということだった。友だちはそんな少女を慰め、病気の少女は絶望的になって涙が止まらないようだった。

他人の腎臓を必要とする！　この話しはぼくの心を突き刺した。

　さっきまで空想していた物語が事実だったとして、死んだぼくの腎臓が彼女に提供されるとしたら、どんなに素晴らしい一つの物語が出来上がることだろう！　そうだ。どうせぼくなんか、さっきは生きようと決意を固めたが、生きていたって何も待ってやしない。いっそのこと役に立つ死に方を選んだ方がいいのかも知れない。少女たちの話しから、ふとそんな気がして来るのだった。
　そのとき、廊下の向う側から先生が往診にやって来た。
　ぼくがドアの陰に立っているのを目ざとく見つけると、
　“もう具合はいいのかい？”と彼は言った。それからぼくの額に手を当てたが、“まだ熱があるようだな”と彼は言った。“大人しくベッドに寝ておかなくっちゃ”
　ぼくはベッドに戻り、大人しく横になった。そして先生に尋ねた。
　“先生。隣にいる患者は腎臓が悪くて、相当重いんですか？”
　“ああ、ぼくの担当じゃないけど、そういう話しだ”と彼は答えた。“あのままだと長くて半年かそこらの命かも知れない。人の腎臓を必要としていてね、なんなら君の腎臓をあげるかね？”
　先生は冗談でそう言った。
　しかしぼくは真面目だった。
　“先生。そんなことできるんですか？”とぼくは尋ねた。
　“君がかい？”と先生は鼻からとり合わなかった。“見ず知らずの女の子の為に君が君の大切な体の一部を差し出すなんて話しを聞けば、きっと彼女、ビックリするに違いないよ”
　“でも、できるものならそうしたいんです”とぼくは言った。
　“変わったことを言う坊やだねえ”と医者は言った。“でもその為に君は命を縮めることになるんだよ。ダメだねえ。君はピンピンしているし、これから将来もある体だ。その為にも体を大切にしないと”
　“じゃもし仮に、ぼくが死ねば腎臓は提供できるんですか？”とぼくは言った。
　“そんな話しになっていればね”と医者は言った。“でもまさか、君はすぐ死ぬわけじゃないだろう？”
　医者はそのときになって、真剣にぼくの顔を覗き込んだ。
　“ともかく、変な気を起こさないことだ”と、しばらくしてから医者は言った。“君の心づかいだけは彼女に伝えておこう。きっと彼女、生きる励みになるだろうからね”
　医者はそう言って、体温計や、聴診器でぼくの体を診た後、部屋から出て行った。
　ぼくはベッドに横たえ、窓外の景色を眺めながら、このまま死ぬことができたならどれほど幸せなことだろうと考えていた。
　この病院を退院したところで行くところはないし、どうせろくな将来も待ってはいないのだ。
　ぼくが死んで彼女に腎臓が提供できれば、そのことが新聞記事となって、社会をゆり動かすかも知れない。そうして、人々の目に止まって死んで行くことができるのなら、その死は無駄でないのかも知れない。

そうだ、このまま死のう、とぼくは思った。そう思うととたんに、目の前の景色が、名残り惜しい景色に見えて来た。あれが、ぼくがこの世で見る最後の景色となるのかも知れない。それは言いようのない美しい景色として、ぼくの胸に迫ってきた。そしてさあシレール、死ぬ覚悟はできているのか？

他に患者のいない物寂しい病室でぼくがそんな空想をしていたとき、突然、隣の部屋から一人の少女がやって来た。その服装からして、隣の患者の女友達であることは間違いなかった。
“今、先生に聞きました”と彼女は言った。“どこのどなたかは知りませんけれど、彼女、とても喜んで、感激したその気持ちを伝えて下さいって言っているの。彼女、とても感激して、涙まで浮かべているのよ。本当に有り難うございました。いい励みになったと思いますわ…”
ぼくはベッドに横たわりながら、そんな彼女をじっと見つめていた。
“いいえぼくだって”とぼくは言いかけた。続いて自分の絶望的な気持ちも伝えたかったのだが、よすことにした。“いや、なんでもいいや”とぼくは続けた。“あれは冗談じゃなく正直な気持でした。でもそれで患者さんが喜んでくだすったなら、それでぼくとしても嬉しいですよ”
“一度彼女に会ってくれません？”と彼女は勧めたが、ぼくはそれだけは固辞した。
絶望的な彼女に、また違った意味で絶望的な自分を見せるのは、決して彼女のためにならないし、むしろ彼女をだますような気がして引き受ける気になれなかったのだ。
彼女にとってぼくは救いの騎士として、むしろ想像のままとどまる方がいいとぼくは判断した。
彼女がそんなぼくのことをどう自由に想像したかは知らないが、その後三ヶ月ほどして、結局腎臓の提供者が見つからないまま亡くなったという話しを、ずっと後になってぼくは耳にした。

それはともかく、ぼくの病状は回復に向かい、約束通り翌朝になって教授はぼくを迎えに来てくれた。ぼくがアパートの部屋を追い出されたことを言うと、教授はもう一度ぼくがそこに住めるようにと、家主にかけ合ってくれた。ぼくの事情を話し、金の問題も片付けると、しぶしぶ家主はぼくが戻るのを許してくれた。
おかげでぼくはまた元のアパートに戻ることができた。しかしすべてはあの教授のおかげで、ぼくは教授に一層の親密さを増して行った。
その日を境にして、ぼくは教授の家を訪れることが多くなった。
教授の書斎には数え切れないほどの蔵書があり、最初、初めて侵入したこの部屋に入るのは気が引けたが、慣れるにつれ気軽に入ることが出来、その数の多さに圧倒された。

ぼくが、あの暗い青春時代、本に触れることになったのは、教授の家を訪れることになったのがきっかけだった。それまでほとんど本に触れることのなかったぼくは、興味深げに書棚に並べられた本を見て回った。しかし、どれひとつとして興味を惹く本には出会わなかった。
しかしただひとつ、テーブルの上に無造作に置かれていた本にだけ、ぼくの目は止まった。
“愛の学校 クオレ”
ぼくは、その本を脇に抱えて帰り、アパートに帰ってからパラパラとページをめくり始めた。
最初はゆっくりと、しかしいつのまにか、その本の世界にすっかりぼくはのめり込んでいた。
先生や父との対話、そして何よりも、月に一度語られる物語にすっかりぼくは魅せられてしまった。もし世の中にこんな学校があるとすれば、それこそぼくの望んでいた学校に違いなかった。その学校を卒業しなければならないとするなら、それはなんと悲しいことだろう。ぼくはすっかり主人公に成り切って、その本の世界に浸り切った…

その本との出会いは、結局短い期間に終わってしまったけれども、その本をきっかけとして、次々と新しい本を読むようになって行った。昼間の辛い仕事を終えて帰って来ると、ぼくは孤独な自分の部屋にこもり、それらの本をむさぼるように読んだ。それと同時に、ぼくの目を開いてくれたのは映画だった。わずかばかりの金がたまると、決まってぼくは週末に、映画館へと足を運んだ…
そのような生活のせいか、ぼくは、映画や小説のような生活を望み、また世間というものに距離を置いてそれをひとり自分の目で観察する習慣が身についた。孤独な、屈折した心理が、そのような生活を境にして、急速に拡大して行ったのだった。
もう頼るべき者は誰もいなかった。転々と職を変えるその仕事場ではぼくはいつも無口だったし、教授とてそんなに親しみが持てたわけではなかった。そこはぼくにとって一つの図書館に過ぎなくて、わざと教授がしたがるその会話に乗ることを避けた。
そんなある日、ぼくは一度、あのカリーンを見かけたことがあった。
それは街の雑貨屋で、明るい日ざしがその清潔そうなショーウインドーの中にまで射し込んでいるのを、その中で買物をしている少女と共に、ガラス越しにぼくは目にしたのだった。その店なら、かつてぼくはひやかしで中に入ったことがあり、奥の方に裏口があることもぼくは知っていた。珍しいものがいろいろと置いてあり、確か、花屋のコーナーもあったはずだ。そんなことが頭をかすめたとき、その少女の横顔を見て、ぼくは心臓が止まる思いがした。忘れもしないあの彼女だ！ そう確信して、ぼくはショーウインドーに背を向けた。そして、顔を見られたらまずいと、すごすごとその場を引き上げて行ったのだった。

そしてこのことは、ぼくとカリーンとの決定的な出会いを予告するその序章というべきものだったのだろうか。

その後も、ぼくと教授との関係は続き、やたらとぼくを更正したがる教授と、その反発心から議論となることもあった。
“でもね先生”とぼくはある日教授に言ってやったことがあった。“先生はやたら文学の知識は豊富だけど、そんな先生の博識など、乞食のようなぼくの友だちにはこれっぽっちの値打ちもないんですよ。ちょうど先生が、ぼくの友だちを軽蔑しているようにね。…要するに、そんな難しい知識なんか、ぼくの友だちにとっちゃどうでもいいんだ。それでもそれなりに、結構彼らは幸福なんだ。そしてそれは、それでいいんじゃありませんか”
教授は、ぼくの反論に、ただ苦笑しているばかりだった。
どんなにぼくが貧乏で、曲がった道を歩んでいようと、ぼくの自由の中に、ぼくの人生観の中に、教授が分け入って来る権利などないはずだ。そのことをぼくは主張したかったのだ。教授はあれこれとぼくの生きかたに干渉し、正しい道をさし示そうとするのだったが、それにはどうも失敗したようだった。
人の物を盗むのはいけない。麻薬に手を染めてはいけない。それに反して、文学は人の心を豊かにする――そんなことは百も承知で、ただ教授にそんなことを言われる筋合はないと考えただけのことなのだ。
しかしぼくはある一つのことを、この前一緒に泥棒に入ったラボスを教授の家に連れて来ることを約束した。ぼくを更正できたとみた教授は、もうひとりの不良――ラボスをも更正できないはずはないと考えたのかもしれなかった。
ラボスは最初その提案にもちろん反対した。教授の家に行くことをしぶったが、ぼくが助けてもらった話しを持ち出すと、友だちのよしみでだぞと、ついに行くことに同意してくれた。
“でも、これ一回きりだぜ”とラボスは念を押した。“今後は、どんなことがあっても絶対に教授なんかの家には行かないからな”
“分かったよ。それでいいんだ”とぼくは答えた。

もう年は明けて春になっていた――
レビやメーチンクは相変わらず刑務所に入ったままで、月に一度の面会はそのときも続けていた。
彼らはぼくたちに指示を出し、黒い奴らとのつながりを保とうとしたが、ぼくたちは単に、使い走りの域を出なかった。ぼくたちは黒い世界には染まらなかったし、彼らも、そのことは決して望まなかったのだ。
貧しく、どん底の去年とは違って今年は何か起こるかも知れない――そんな期待に乗せられて、花匂う春、ぼくはラボスを連れて教授の家に向かった。

空は晴れて、春まっさかりだった。
ラボスは、去年の暮れに押し入ったあの邸宅を前にして、少しばかり緊張気味だった。
それは、山の斜面に、まるで幽霊のように伸び上がるポプラ樹の群れを背景に、白い、優雅な壁面を向けて、幾重もの城壁の上にひっそりと建っていた。
門から玄関まではずっと石畳が続いており、その両側には、可憐な花々が咲いていた。
ラボスは、こんな立派な家に招待されるのは生まれて初めてらしく、居心地の悪さを隠せなかった。
しかし、玄関のベルを鳴らし、教授が、愛想のよい表情で迎えに来てくれたときには、ラボスの表情にも幾分落ち着きが戻った。
教授は、かつてぼくたちが現金を奪い取った応接間へぼくたちを案内した。そこにも本があり、花瓶にはたくさんの花が活けられていた。教授夫人が、ぼくたちにコーヒとお茶菓子を勧めてくれた。掛時計の音がカチカチと聞こえるだけの静かな部屋だった。
そこにぼくたちは教授と小一時間ほどいたろうか。ぼくたちの仕事の話しや現在の生活、生い立ちなどについて、とりとめもなく話しが続いた。質問するのは常に教授だったが、ぼくたちの話しには一つ一つうなづいて聞き入っていた。
そのときだった。またベルの音が鳴って誰か来たらしく、教授は席を外した。
応接間にはぼくたちだけが残り、ともかくもやっと解放された気分を味わった。ラボスはぼくにさっそく不平を言った。
“あんなに質問攻めにされるとはな。おれはもうコリゴリだぜ。それに比べ、お前はよく我慢して、こんな家に来るなあ…”
“おいでよラボス。いい所があるんだ”
そう言ってぼくは、隣の書斎にラボスを案内した。
ラボスにとっては、昼間初めて見る書斎だった。
“すげえなあ！”ラボスは、改めて本の多さに感心している様子だった。
しかし彼は、男性雑誌に目を通すことはあっても、本を読むのは嫌いだった。
“こんなのを読んでいるのか。まるで年寄りみたいだな”とラボスは言った。
“でも本の宝庫だよ。ホラッ”そう言ってぼくが、古今東西の文学本に目を輝かせているとき、入口の方から教授の声がした。
“君たち、いい友だちを紹介しよう”
その声で、ぼくたちは扉の方に振り向いた。
そこには教授が立っていて、まだ紹介される当の人物の姿は見えなかった。
“彼女は本を返しに来ただけだけど、とっても明るくて、気さくな子だよ”
そう言って教授が引き下がると、続いて当の本人が姿を現した。
そのとたん、ぼくたちは驚いて、手に取りかけていた本を誤って落としそうにさえなった。ラボスなどはギクリとなって思わず後ずさりをしてしまうほどだった。

胸に本をかかえた彼女は、なんと、あの彼女だったのだ！

　彼女も、ぼくたちを見たとたん表情を変えはしたものの、すぐ我れに戻り、ぼくたちにあいさつをした。
　初め、教授にはかられたかと思ったぼくだったが、その彼女の様子から、どうも教授は知らないらしいことが分かって来た。
　しかし、ぼくたちの極度に高まった緊張が解けたわけでは決してなかった。今後どのような行動を起こすかも、すべては彼女の出方次第だった。
　“カリーン・スカラ君だ。今後ともよろしくね”と教授はぼくたちの出会いを楽しむかのように言った。“それからカリーン、向うにいるのは、シレール・ホールバラ君と、ラボス・アンフィネス君だ”
　教授はそう言ってぼくたちの名前を、すらすらと彼女にバラしたので、ぼくたちは頭に来た。
　しかしカリーンは努めて冷静に書斎の中に入って来ては、ぼくたちの立っている前を通って、自分の持って来た本を直しに行くのだった。
　それにしてもいつ彼女がぼくたちのことをバラすのか、ぼくたちは気が気ではなかった。
　彼女は、教授とは違って、ぼくたちのことを知った以上、このまま警察へ直行しないとは限らないのだ。
　努めて平静なカリーンとは対照的に落ち着きを失って立ちすくんでいるぼくたちの様子を見て、教授は不審に思ったのか、
　“どうしたんだ？　君たちは知り合いなのかい？”と尋ねた。
　しかし、極度に緊張して、冷汗さえたらしているぼくたちは、それに答えるわけには行かなかった。
　教授は同じ質問を今度はカリーンに投げかけた。
　するとカリーンは意外にも、
　“いいえ、知りません”と、さらりと教授に答えたのだった。
　だが、知らないはずはない！とぼくは心の中で叫んだ。
　初めて顔を見合わせたときのあの目は、あの驚きの表情は、知っていることを証し立てていた。彼女はどういうつもりからか、嘘をついたに違いなかった。
　“まっ君たち、こちらへ来てお茶でも飲まないか”と教授はぼくたちを誘ったが、ぼくたちはとてもそんな気にはなれなかった。
　いつ真実をバラすかも知れないそんな爆弾のような彼女と一緒のテーブルにつくわけには行かなかったのだ。
　ぼくたちは行く所があるのでと嘘をついて、早々に退散することに決め込んだ。

　やっと解放されて外に出ると、ぼくたちはさっそく相談し合った。
　“おい、どうする？　おめえ”とラボスが言った。“これもおめえのせいだぞ。あのとき、覆面をとりさえしなきゃ…”

“あれは偶然の出来事だったんだ。ぼくのせいじゃないよ”とぼくは強く反論した。
“それよりか、これからのことだ。一体どうするんだよ？　あいつ、今頃は教授にバラしているかもしれねえぞ。何かいい方法はねえかな。そうだ、待ち伏せするんだ”
“待ちぶせ？”とぼくは尋ねた。
“そうだ。あのあまがしゃべったかどうか、直接聞き出すんだ”とラボスはいきりたって言った。“そしてもしまだなら、今後口を割らないようにくぎをさしてやらなきゃ…　どこかいい場所はないかな”
すると、ぼくはとっさに思いついた。教授の家からそう離れていない所に人気のない畑があって、あそこなら待ち伏せするのにおあつらえ向きであることを。しかもあそこなら、こんもりした森もあって、そのふもとには、ちょうどおあつらえ向きの小さな無人の小屋もあったはずだ。
彼女がそこを通って来るのは間違いなく、ぼくたちはその小屋の陰に身をひそめて、彼女を待つことにした。物陰に身をひそめてから、いらいらする数十分が流れて行った。
広々した麦畑の上ではヒバリがさえずり、ぼくたちは、いらいらする空を見上げた。本当にここを通るんだろうか？　そんな疑問も頭を過り始めた。背後の森はうっそうとしていて、もし彼女の口を封じるのなら、おあつらえのような場所だった。
そうしていらいらが絶頂に達した頃、急に向うから足音がしたので、ぼくたちは声をひそめた。
物陰から見つめるぼくたちの目に映ったのは、間違いなくこちらへ来るあの彼女だった！
ぼくたちはドキドキして来た。彼女は何も知らず、本を抱えてこちらへやって来る。しかしやるのなら今だ。このときを除いて、他にはない。
彼女が寂しい地道を通って、森の方から畑へ曲がろうとしたとき、ぼくたちは小屋の陰から飛び出て、彼女を襲った。
彼女は驚いてぼくたちを見、思わず本を抱えてその場に立ち止まり、恐怖におののいた。
“どうしたの？　あなたたち…”と、彼女は、目の前に突っ立っているぼくたちを交互に見つめながら、努めて冷静を装いながら言った。
“やい、しらばくれるな、あま！”とラボスは言った。“オレたちのことを知ってんだろ。嘘をついたってダメだ。教授にバラしたのか。オレたちはそれが聞きたいんだ！”
“やっぱりあのときの…　あなたたちだったのね”と、彼女は、少しは落ち着きを取り戻して言った。“でも自信がなかったのよ。どうか信じて。わたし、何も話さなかったわ”
“本当かどうか”とラボスは叫んだ。“じゃ、嘘じゃないって証拠を見せな。こいつの顔は知ってるだろ。あのとき、しっかと見たはずさ。おめえと教授は、ぐるじゃねえのか。どうしてきょう、あの家にやって来たんだよ。何か、オレたちをゆすろうとでも言うつもりかい？”

“まさか、全くの偶然よ！”と彼女は叫んだ。“あんたたちが来ていたのも知らなかったし、あのときの強盗だって思ったけど、さっきも言ったように自信がなかったわ。――それにそんな話し、教授には言えないでしょ。お願いだから信じて。あんたたちのことは何も言わなかったわ”

“じゃ、オレたちのことは話題にものぼらなかったって言うのか？”とラボスは叫んだ。

“そう、教授とお勉強の話しをして、それだけよ”と彼女は答えた。

“そんなこと、信じると思うのか！”とラボスは言った。“教授はオレたちのことを知ってるんだ。おめえの家のことも知らねえはずはねえ。それに、百歩譲っておめえの言うことが本当だとしても、オレたちのことを疑ってかかった以上、ほおっておくわけはないだろ。どうするつもりだったんだ。サツに訴えるつもりだったのか？　おいっ、返事をしろ、あま！”

“だったら、どうなのよ”と、カリーンも向きになって言った。“まさか、わたしを殺す気なの…”

そう言うが早いか、カリーンは今来た道を引っ返そうと走り始めた。

しかしぼくたちはすぐ追いつき、彼女の手首をつかんだ。彼女は恐怖の余り、今度こそは本当に叫んだ。

“助けて！”

しかしそう叫べたのもわずかで、すぐその口をラボスによって押さえられてしまった。

ぼくたちは恐怖に震え、抵抗する彼女を無理やり元の小屋まで引きずり、さらにその裏の雑木林の所まで連れ込んだ。

彼女は全く別人のように顔は青ざめ、額に汗をにじませていた。

“大人しくすりゃ、オレたちは何もしねえよ”とラボスは言った。“今後、オレたちのことは誰にもしゃべれねえとそう約束するのなら、オレたちは何もしねえ。そうだろ、シレール”

そう言われて、ぼくもうなづいた。

カリーンは今や泣き出しそうな表情になり、わなわなと震えていた。

“お願いだから、殺さないで…”

やっと、蚊の泣くような声で、ぼくたちの耳にはそう聞こえたのだった。

“ああ、殺しはしねえ”と、ラボスは勝ち誇った者のように言った。“お前さんが、オレたちのことを誰にもバラさないと約束するのならな”

“約束するわ。だから、その手を放して”とカリーンは言った。

“本当だな！”とラボスはもう一度叫んだ。“嘘なら承知しねえぞ！”

カリーンは、ほとんど泣きそうな表情ながらうなづいた。

彼女の腕を握っているラボスとぼくは、互いに目を見つめ合った。それは、許してやるかどうかのとまどいの目だった。

“でもよ”とラボスは、ボヤくようにつぶやいた。“こいつが約束を守るかどうか信用できねえ。オレたちの手を離れたとたん、警察へ行くかもよ。チェッ！　どうすればいいんだ。そもそもお前が悪いんだぞ。あのことさえなけりゃ”

“そんなこと言ったってラボス…”とぼくも反論した。“それよりか、この娘をどうするんだよ”
ぼくたちが袋小路に入ってすっかり弱り切った顔をしていたとき、救いの船を出してくれたのは、意外なことに彼女自身だった。
“わたしのことを信用してよ”と、やがて彼女は、まるで居直りとでも言えそうな落ち着きぶりで、腕をつかんでいるぼくたちに言った。“あんたたちには、わたしを殺そうたって、そうはできないわ。見たところ、そんな人のようには思えないもの。わたしのこと、信用できないと言うのなら、取引をしましょ。今思いついたんだけど、それなら安心でしょ。あなた方は、わたしに借りがあるんだから、それを受けても不自然じゃないはずよ”
“どんな取引だ”とラボスはいきり立って言った。
“わたし今、文学のレポート作成中なの。それの、ちょっとしたお手伝いをして欲しいの”
“おいあま、オレたちをバカにする気か！”と、ラボスは大きな声で叫んだ。“そんなこと、オレが引き受けるわけ、ないだろ！”
しかしラボスは、同時にぼくを見つめた。
“おいっシレール、お前が引き受けるか？　本は好きな方なんだろ”とラボスは言った。“そもそも今回のことはお前が原因なんだから、お前に始末をつけてもらわなくっちゃなあ…”
ぼくも少しは乗り気になっていた。好きな彼女からの提案だったし、この方法以外うまい方法は、とりたてて他に見当たらなかった。
“それでどんなことをすればいいんだい？”とぼくは尋ねた。
“わたしがね、先生から借りて来たいろんな文献にしおりをしているから、そこのところを抜粋して、書き写して欲しいの”
“なんだ、そんなことか。お易い御用さ”とぼくは答えた。
“それがとても面倒くさいのよ”とカリーンは言ったが、ぼくの決心は変わらなかった。
“それで口を割らねえと言うのなら、シレール、お前引き受けてやれよ”とラボスも言った。“でも、オレは手を引くぜ。全部お前に任せたからな”
ラボスはそう言って彼女の手を放し、ぼくも放した。
カリーンはやっと解放されたとばかり、自分の両腕をさすった。
今や、ラボスにバトンを渡されたぼくは、彼女と交渉する他なかった。
“それじゃいつからかかるんだ、姉さん”とぼくは尋ねた。
“さっそく今からよ”と、カリーンは平然として言うのだった。
“でも、あの家へ行くのかい？”と ぼくは驚いて言った。“あんたの両親に分かってしまうじゃないか！”

“バカねえ”とカリーンは少し笑いながら言うのだった。“あんたをわたしの家に連れて行くわけないでしょ。わたし今、下宿で一人暮らしをしているの。そこへ連れて行くだけよ”
“へえーすげえなあ。女の一人暮らしの所へ行くのかよ”と、ラボスは脇に立ってひやかすように、ぼくに言った。
“でも取引だろ”と、ぼくは、ラボスに向っ腹をたてて言った。
それから彼女に向き直ると、
“じゃついて行くよ”とぼくは答えた。
“後は任したからな”と、ラボスはぼくたちのそばにつっ立ったまま言った。
“それじゃ行きましょ”とカリーンはぼくを見て言った。それからラボスに向くと、“あなたは？”
“オレが行くわけねえだろう”とラボスは言った。“ここでおさらばするよ”
結局、ぼくとカリーンは、ラボスをその場に残して、そこを立ち去るという奇妙な事態になったのだった。
ラボスは、先行くカリーンとその後をついて行くぼくを見送りざま、
“後のことは、また後でじっくり聞かせてもらうからな”と、ぼくに言い、それからカリーンに対しては、“おいあま！　裏切ったりしたら承知しねえぞ”と念を押すことを忘れなかった。
道中、ぼくとカリーンとは距離を置いて歩き、話すことはほとんどなかった。
“わたしの下宿屋はそう遠くない所よ”と彼女が言った割には、あちこち引きずり回されているような気がした。

そしてついに――彼女のアパートにまでやって来た。一階が店になっているその上のアパートだった。
彼女がドアを開け、中に入ると、自分のアパートの部屋との違いに驚いた。
中はきちんと整理されて上等な家具が置かれ、部屋の隅には少年と少女のそれぞれ一人づつの肖像画さえ飾られてあった。
彼女が陽光の匂う窓を開けると、その彼方には、青い空と、美事な海とが見渡せた。
“この景色が気に入ったから借りることにしたの”と、カリーンはさらりと言ってのけた。
“それで、ぼくの仕事って、どこにあるの？”と、ぼくは尋ねた。
“まあま、そんなにあわてないで、坊や”と、カリーンは、急に態度が変わって、ぼくのことを坊やと言うのだった。“そこに坐って、お茶でも入れるわ”
言われるまま、ぼくはソファーに腰掛け、ぼんやりと窓の外の景色を眺めたりしていると、奥のキッチンからカリーンはお茶を運んで来た。
彼女は楽しそうにぼくを見つめ、それから話しかけて来た。

“それでシレールって、いう名前だったわね”と彼女は言った。“あなたは何をしていらっしゃるの？　まさか泥棒が仕事ってわけじゃないでしょ”
“当たり前だよ”と、ぼくは少しむっとなって言った。“ーーでも、今は失業中さ…”
“失業中！”とカリーンは驚いたように言った。“あんたに向いた仕事ってないの？”
“そういうわけじゃないけど”とぼくは答えた。“今は体をこわしてやめているんだ。そのうち働きに行くつもりはしているけれど…”
“可哀そうに”とカリーンは同情するように言った。“あなた、両親は？”
“そんなもの、いないさ”とぼくはぶっきらぼうに答えた。
“じゃあなた、一人？”
ぼくはそうだとばかりうなづいた。
“じゃ本当に孤独な身なのねえ”と彼女は言うのだった。“そんな生活で、寂しくはない？　あのラボスとか言う人、お友だちなんでしょ？”
“あいつも今じゃ一人ぽっちさ”とぼくは言った。“境遇が似ているから友だちになったまでさ。でもぼくとあいつとでは合わない所もある”
“例えばどんな所で？”と彼女は聞いたが、ぼくはうるさく感じていたのでこう言った。
“もういいじゃないか、そんな話し。ぼくの身の上など、君には関係ないことだろ。それにーーぼくはそんなこと話す為にここへ来たんじゃないんだ”
“気に障ったのならごめん”とカリーンは謝った。“それじゃ早速だけど、手伝ってもらうことにするわ。さっきはあんなこと言ったけど、手伝うのがおいやなら、別にやってもらわなくても結構なのよ”
“いいさ、手伝うよ”とぼくは答えた。
彼女は本を数冊持って来、テーブルの上にそれを並べた。それとは別にノートと鉛筆を持って来てぼくの目の前に置いた。
ぼくが黙って仕事を始めると、いつのまにか彼女は部屋から消えてしまったようだった。
ぼくはしかし、そのことには気にせず仕事を続けた。

それから三十分ほどしたろうかーー突然バタンとドアの音がしたので振り向くと、彼女は入浴していたらしく、濡れた髪の毛と、ブラジャーとパンティーだけという、裸同然の姿でそこに立っていたのだった。ぼくはそれを見て心臓が止まる思いがしたが、そんな真剣なぼくの表情とは対照的に、彼女はただ微笑むだけで、自分の姿のことを別に気に留める風もなかった。しかも彼女はそのままの姿でぼくの所にまでやって来て、ぼくのノートの出来具合を調べようとさえした。しかしぼくは、彼女の豊かな胸やあらわな太股を間近に目にして、ただ圧倒されるばかりだった。彼女がぼくに質問をしても、しばらくのあいだぼくは上の空で、まともに答えることもできなかった。
ちょうど女を感じる年齢でもあったし、こんな経験は、もちろん初めての体験でもあった。

　カリーンはそのことを楽しむかのように、ぼくの前で生き生きとふるまった。ぼくはもう、彼女の肉体から目が離せなくなり、すっかり彼女のとりこになってしまうばかりだった。
　こんなにも早く、しかもこんな形で彼女との関係が実現するなんて、ぼくは予想だにしていないことだった。彼女はやがて、書いているぼくの手を取り、ペンを置かせて、その手を自分の胸に当てさせようとさえしたが、ぼくも別に拒みはしなかった。だってどうして拒めよう！　あんなにまであこがれていた彼女が今、ぼくの前におり、しかもあらわな姿で、ぼくを誘惑しようとさえしているのだった。しかしぼくたちの関係は大人しく、さらりとしたもので、それ以上進展することもなく終わった。
　彼女はあらわな姿のまま、やがて窓からその肉体をさらした。ぼくはそんなカリーンの後ろ姿を、欲望のまなざしでただ見つめるばかりだった…
　やがて彼女は振り向いて、ぼくに言った。
　“また来てくれるわね、ホールバラさん”
　もちろんだよ！　――ぼくは心の中で叫んだ。そして、もちろんのこと、ぼくはうなづいた。
　“嬉しいわ。あんたに来てもらって”とカリーンは、満足の微笑みを浮かべて言った。“これからもお友だちになりましょ。さあ、もう帰っていいのよ”

　ぼくはカリーンの家を出てからも、しばらくのあいだ頭がボーッとなって、今あった出来事が信じられない気持だった。それはまだ若かったぼくの極めて特別な経験だった。

　ぼくは自分の部屋に戻ってからも、しばらくのあいだこの出来事が忘れられなかった。部屋には様々な女のヌード写真などが貼ってあったが、それが現実のものになるとは。しかもその相手があのカリーンだとは、まるで夢見心地のような気持だったのだ。しかもそれは夢ではなく現実であり、また彼女の家に行くこともできるのだった。ぼくは、一人ぽっちの寂しさの後に、まるで天国が降って来たような、不思議な気持になっていた…

　カリーンとはあんな風にして別れたけれども、その後しばらくのあいだはなぜかカリーンに会いたいとは思わなかった。夢を夢のままで置いておきたいと思ったのかも知れず、あるいはあの出来事を自分なりに整理しておきたいと考えていたのかも知れなかった。
　一人ぽっちの寂しさのせいか、その頃からぼくは酒をあおるようになり、夜になるとよく安酒場に出掛けた。酒場は、男たちの熱気やタバコの煙でいつもむっとしていたが、ぼくの指定席はカウンターの隅と決まっていた。そこで一人で酒を飲み、ときたま天井をつんざくような女の笑い声などを楽しんでいた。そのうち眠くなり、よくカウンターの上で寝込んでいて主人に起こされることがあった。ぼくは金を払い、フラフラと酒場を出て、自分の安アパートへと帰って行った。

　そしてあの日も、ぼくは酒場にいた。現在のチンピラまがいの仕事、カリーンのこと、刑務所に入っている仲間のことや、将来に対する不安など、様々のことが頭の中で交錯していた。そのときだった、手に持っていたグラスから少しあふれ出たビールがカウンターの上に小さな絵図を描いたのは。意識がもうろうとしていたぼくには、その絵図は、はっとするような緊張感をもたらした。なぜなら、そのこぼれた小さなビールの跡は、ぼくには、ママの横顔にしか見えなかったのだから。ママはどこへ行ってしまったのだろう？　ぼくは寂しさの中で、そう自問した。するとぼくはもうその場にいたたまれなくなり、さっそくその酒場を飛び出した。そして夜の巷を、ママの面影を慕って、いずこともなくさ迷い歩くのだった…
　しかしその思いも、やがてカリーンの方へと振り向けられて行くのだった。ママへの恋しさは、カリーンへの恋しさでもあった。

　“どうしたの？　シレールさん。もう少し笑顔を見せてよ”
　ぼくは再びカリーンの部屋にいて、目に映る雄大な港を見つめていたが、その表情がカリーンには寂しそうに見えたのかも知れない。
　カリーンは、ぼくの後ろから、まるで恋人のようにぼくにまとわりつこうとした。
　ぼくの境遇が、彼女に同情を誘っていたのかも知れなかった。ぼくはあえて反発もせず、されるままにしていた。
　“ねえ、シレール。あんたが好き”とカリーンは言った。“わたしの大事な人。こうしてじっとしていたい…”
　しかしぼくは、彼女の恋人になれないことは分かっていた。この不自然さが、ぼくの気持を複雑なものにしていた。できるものなら、この関係を断ち切るべきだったのかも知れない。しかし失業の身に、ときどきくれる彼女の小遣いは魅力でもあった。

　カリーンとの煮え切らない関係がズルズル続いているうちに、再びもう夏となっていた。
　教授の家にはほとんど行かなくなっていた。彼は、ぼくたちの教育に失敗したのかも知れなかった。
　待望のレビとメーチンクの出所があった。犯した罪は重かったが初犯ということもあって、思いの他早く出所ができたのだった。
　ぼくには再び活気が出て来た。悪い仲間とは知りながら、やはりぼくには彼らしかいないのだった。

　ギラギラ太陽の照りつける夏、出所祝いも兼ねて、ぼくたちは浜辺に行こうということになった。
　“若い姉ちゃんをからかいに行こうや”と、久し振りの出所で、手をかざし、太陽をまぶしそうに見上げながらレビが言った。

ぼくたちがターゲットにしたのは、保養地として有名なコアンベルの海岸だった。

ホテルが建ち並び、まぶしい太陽の下で、いかにも華やいだふんいきが満ちていた。
ぼくたちは四人揃って街の商店街をヒヤかした後、海水浴客で賑わう、美しい砂浜が見渡せる展望台へと向かった。海風が常に吹き寄せるそこには、大勢の人が詰めかけていた。彼らが往きかう中に、一瞬だがぼくの目に止まる少女たちの姿があった。彼女たちは背中を向けて、展望台のてすりに身をもたせかけ、砂浜や向うの海の光景を楽しんでいるようだったが、一方の、まぶしいばかりの白いドレスを着た少女も、並んでいるジーンズをはいた少女も、共にフレッシュで、ぼくの目を楽しませてくれた。共に、スカートや髪の毛を汐風になびかせて話し合っているその後ろ姿は感動的ですらあった。しかし、ぼくの目に彼女たちの姿が映ったのはほんの一瞬だけで、すぐ他の対象に注意は向けられて行った。
“おい、ここは人が多いぜ。他へ行こうや”という誰かの声に誘われて、ぼくたちはそこを通り過ぎ、石段を降りて砂浜へ向おうとした。
砂浜のあちこちで海水浴客が寝そべったり、ふざけ合ったりしていて、海はキラキラと輝いており、空は青く、なんとなくいい気分だった。
しかし、そうしてしばらく砂浜を歩いたとき、気のせいか、浜風に乗ってぼくを呼ぶ少女の声が聞こえたような気がして、ぼくは振り向いた。
“シレール！”
もう間違いはなかった。ぼくのみならず、他の仲間もみな振り向いて確認した。
ぼくたちより十メートルほど後方に立ち、麦わら帽をかぶってこちらを見つめている少女は、さっきのあの少女たちであり、それは同時に、一年以上前に別れて成長し、随分と女らしくなったぼくの妹、セーラとリサの姿そのものであった。
ぼくは最初、青天のへきれきのようなその姿を疑ったが、麦わら帽の影の下で、ほほえみを浮かべ、目には涙さえ浮かべているその顔は、もう間違いはなかった。
彼女たちは、あの展望台からあわててぼくを追いかけて来たと見え、片側のサンダルはなくて裸足だった。二人は、振り向いたぼくを見るなり、なつかしさいっぱいの表情を浮かべて、ぼくの下へ駆けつけて来た。ぼくも、彼女たちの方に歩み寄り、やがてぼくのふところに飛び込んで来た妹たちをしっかりと抱きしめた。
“兄さん。会いたかったわ…”と、頭をぼくの胸にすり寄せるリサは、今にも泣き出さんばかりだった。
“それにしても、どうしてここへ？”とぼくは尋ねた。
“兄さんこそ、どうしてここへよ”と、逆にセーラが聞き返した。
ぼくは自分たちの事情を彼女たちに話してやったが、逆に彼女たちから聞かされた彼女たちの話しは驚くべき内容だった。
孤児院から、ルロワ夫妻に養女に迎えられ、良家の子女のような生活をしたあげく、今は保養を兼ねてこの海岸に、夫妻と共に来ているのだという。
“あの人たちがそうよ”と言う彼女たちが指さした展望台の方を見ると、確かにそれらしい人が展

望台に立っていて、ぼくたち不良仲間に向かって、あいさつを送っているのだった。

しかし、彼女たちの話しを聞かされ、世界が違うと感じたぼくや、ぼくの不良仲間たちは、そう易々とあいさつを返すというわけにも行かなかった。すっかり緊張し、ぎこちなく、そして、うとましく、彼ら老夫妻を見つめるだけだった。妹たちの命の恩人だと言えそうな人たちなのに、なぜか、ぼくはあいさつに行こうともしなかった。今までの貧しい暮らしぶりが、逆に、裕福な人たちに対する反発心を生んだのかも知れなかった。

“それで、しばらくここに滞在するのかよ”とぼくは言った。

“そう、近くのホテルで”と、さりげなくセーラは答えた。

“へえ〜、ホテル！　ホテルだってよ、みんな”と、レビがおったまげたように、肩をそびやかせて言った。

妹たちは当然、彼らのことも知っていたが、わざと視線を避け、彼らとは関わりを持ちたくないようなそぶりだった。そして、ぼくだけを相手に話し続けた。

“それで兄さんはどこに住んでいるの？”とセーラは尋ねた。“一度訪ねて行くわ。だって、このまま別れてしまうなんて、そんなことできないわ”

“ぼくはセルッカのうらぶれたアパートさ”と、ぼくはそっけなく答えた。

ぼくは既に、彼女たちとの生活ぶりの違いに、相当ショックを受けていた。そして、こんなみじめな自分を、裕福な彼女たちの前にさらすのはなんとなく気が引けたのだ。

“それじゃ分からないわ。セルッカのどこなのよ”と、セーラは、少しいらだって言った。

“でも、ぼくのアパートに来て、どうするのさ”とぼくは言った。“あんなとこ、なにもありゃしない。ただ汚いだけさ”

“でも、もう一度会わなきゃ”と、セーラは言った。

“おいおい、もったいぶらずに教えてやれよ”と、ぼくたちの話を聞いていたレビが言った。“＊＊通りの＊＊番町に暮らしているんだろう…”

“＊＊通りの＊＊番町ね”と、セーラはくり返した。“分かったわ、必ず訪ねて行くわ”

“でも、来てどうするんだよ”と、ぼくは、けげんそうな顔つきで、セーラをじっと見つめて言った。

“だって”とセーラはぼくを見て言った。“兄さんは今、生活に困っているんでしょ。だったら、おじさんとおばさんに相談して、なんとか援助を頼んでみるわ”

“ヒェーッ！ すげえや。天の助けかよ”と、ぼくたちの会話を聞いていた仲間の一人、メーチンクがヒヤかすように叫んだ。

ぼくは口を一文字に結んだまま、チラッと向うの展望台にいる二人の老人に一瞥をくれた。

“あの爺さんにかい？”と、ぼくは再びセーラに目を向けると言った。“あんな奴らの世話になるなんてまっぴらだね。来たけりゃ来るがいいけど、へんなせっかいだけはよしてくれよな、セーラ。さあ行こう…”

　そう言ってぼくは、二人の妹をその場に残し、仲間と共にそこを立ち去ろうとした。
　ラボスは、
　“いいのかい？　せっかくの再会だというのに”と言ってくれたけれど、つんとして先を行くぼくの後ろにみんなついて来た。
　しかし、そんなぼくを呼び止めたのはセーラだった。
　“待ってよ、兄さん！”とセーラは叫んだ。“こんな風にして別れたくないわ。もっと素直になってよ。あのおじさんたちなら、兄さんを助けることもできるわ。お願い！　もっとわたしの話しを聞いてよ！”
　しかし、その言葉は、ぼくの頭にカチンと来た。仲間全員ではなく、あくまでもぼくだけを特別扱いしようとするセーラの発想に腹が立ったのだ。
　数歩歩んだところでぼくは振り向いた。
　“だったら、ぼくも言わせてもらうよ”とぼくは言った。“お前はぼくに援助、援助というけれど、ぼくは誰の援助も必要としていない。なるほど今の生活ぶりじゃ、今、お前たちが味わっているようなハデな生活はできないだろうけれど、そんな生活を望んでもいないんだ。乗馬やピアノなんか、ぼくにとっちゃ肩がこるだけさ。確かに仕事は転々として、今は失業中さ。でもぼくは、まじめに生活をし、まじめに稼いでいるんだ。お前たちみたいに、遊んでばかりいて、飯を食っちゃいないんだ。確かに苦し紛れに悪事を働いたこともままあるさ。でも、これだけは言わせてもらうよ。ぼくは自分ひとりで、自分の力で生きて来たんであって、誰の庇護も必要とはしていない。逆にお前たちこそ、えらそうなことを言っているけど、あいつらの庇護がなかったら、明日から生きて行くこともできないんじゃないかな。くやしかったら、ぼくみたいな身分になることさ。誰の庇護も受けずにな。ぼくの言いたかったことはそれだけさ。じゃ今回はこれで失礼するよ。さようなら…”
　そう言い残すと、ぼくはくるりと背を向けて、その場から去って行こうとした。
　今度は誰もぼくを呼び止めようともせず、むしろすすり泣きの声さえ聞こえて来た。多分リサが、悔しさのせいで泣いていたのだろう。セーラも、もうぼくを呼び止めようとはしなかった。
　そんなぼくにレビがやって来て、耳元でささやいた。
　“いいのかい？　お前。せっかくのべっぴんなのに、あんなとこにほっておくなんてさ”
　ぼくは彼の質問に返事もしなかった。せっかくの妹たちとの再会を、こんな風にしか終われなかったその事を、ただその事だけを考え続けていた…

　短い夏が過ぎ、ぼくはまた普段の生活に戻った。
　レビやメーチンクは、出所後間もなくして悪の道に戻り始め、ぼくは失業のまま、カリーンとの関係だけがズルズルと続いていた。

しかし、夏の終わり頃になって、ふとカリーンに会いに行きたくなって、こっそりと彼女の下宿先に行ったとき、そこで目にした光景が、すっかりぼくの気持を変えてしまったのだった。

下宿先には、立派なオープンカーが一台止まっていた。誰のだろうと見ていると、やがて下宿先のドアが開いて男が姿を現し、続いてその男に手を引かれるようにしてあのカリーンが姿を現したときには、すっかりぼくは驚いてしまった。彼女は楽しそうに笑い、路上のこちら側に立っているぼくには気が付かない様子だった。やがて彼に導かれて彼女は彼のオープンカーに乗り、頭をのけぞらすように笑いながら、オープンカーは発進した。その瞬間だった。彼女は、すぐ近くまで来て立っているぼくの存在に気づいたのだ。彼女は、ハッとした表情に変わり、ぼくの方に振り向いた。そして遠ざかって行くオープンカーの上で、後ろ向きにぼくをじっと見つめていた。

この出来事が、すっかりぼくの気持ちを変えてしまった。そうか、やっぱりそうだったのだ、とぼくは思った。彼女は本来、彼のようなボーイフレンドが似合いで、ぼくなど、ほんのお遊び相手にしか利用していなかったのだ。彼女の両刀使いに気づいていなかったぼくがバカだったとぼくは思った。彼女ほどの器量の女性に、ぼく以外に男がいないなんて考えられなかったのだ。そしてもちろん、彼女は、彼のような男がいいに決まっている。

ぼくは裏切られたような思いで、再び自分のアパートに戻って来た。

この出来事は、すっかりぼくを絶望的にし、何日間もぼくを、部屋の中に閉じ篭もらせた。ぼくはもう、世間に出て行くのがいやになった。このまま死んでしまいたいとさえ思った。今まで数々の夏を経験して来たけれど、こんなにつまらない夏を経験したのは初めてだった。しかし、そんなぼくに死を思い止まらせたのは、ママの幻だった。夢とも幻ともつかないママが、ぼくの部屋に現れ、ぼくを励ました後、去って行ったのだ。

それに気づいたのはもう夕暮れ時で、ぼくはあわてて、自分の部屋の窓をあけた。

するとそこには美しい夕焼け空が広がっており、それを目にしたぼくは、そのときほどすがすがしい、再生した気持ちで、沈み行く太陽の姿を見たことはなかった。事実、ぼくは一度死んで、今生き返ったのだった。ママが導き、ぼくは生の世界に舞い戻った。それがなければ、それこそぼくは、本当に死んでいたかも知れなかった…

第５章

素晴らしい秋だった。あんなに素晴らしい秋を感じたことは他になかったのではないだろうか。

しかし、秋の素晴らしさとは逆に、ひとり暮らしのぼくの生活はすさんだものだった。

そんなぼくのボロアパートに、ある日突然、妹たちが姿を現したので、ぼくはすっかり驚いてしまった。

健康そうで、きれいなドレスを着、すっかり美しくなった妹たちがドアの向うにヒョイとその顔を見せたときは、正直言ってぼくは、まるで天の遣いがやって来たのではないかと、この目を疑ったほどだった。しかしそこに立っていた可愛い少女たちは、天使たちではなく、紛れもないぼくの妹の、セーラとリサだった。

まだ寝惚けまなこで、昨夜の飲酒のせいでぶっ倒れたままのよれよれの服を着たままのぼくは、すっかりとまどってしまった。

“どうしてここへ？”と、半分開いたドアの向うに立っている妹たちにぼくは声を掛けた。

“この場所はこの前、兄さんの友だちに聞いて知っていたわ”と、ふくよかで可愛らしいセーラが答えた。“あれからずっと兄さんのことを考え続けていたの。リサとも何度も話し合ったわ。そして、おじさんやおばさんとも相談し、その結果出た結論がこれなの。わたしたち、きょうから兄さんと暮らすわ。以前のようにね。おじさんたちもやっとそのことを許してくれたの。それでわたしたち、ここへやって来たの。お願いだから入れてよ…”

“でも、そんなことを言われても…”とぼくは言いかけたが、妹たちは、大きなトランクを引っ提げたまま、早速ドカドカと部屋の中になだれ込んで来た。

“これが兄さんの部屋？”と、小さな部屋の中に入ると、セーラは薄汚い部屋の四隅を見回した。

日光の通りが悪い薄汚れた壁には色んなものが貼ってあり、当然ながら、女のヌードの写真もあった。

“見ての通り、この部屋ポッキリさ”とぼくは弱々しく言った。“隣には食堂と、あとは浴室が一つあるだけさ。ここで三人暮らすのは無理だよ。それよりかお前たち、ここへ来て、生活はどうするんだよ。例の金持のおじさんたちは仕送りでもしてくれるのかい？”

“まさか”とセーラは言った。“当然わたしたち働くわ。そのつもりで来たんだもの”

“じゃ仕送りは一切なしなのかい？”とぼくは驚いて言った。

“まさか”とセーラは言った。“そんなに甘くはないでしょ。わたしたちは、せっかく助けて下さったおじさんたちとの関係を断ってここへ来たのよ。それくらいの決心をしなきゃ、ここへは来れなかったわ。もちろんおじさんたちは、何度もわたしたちを引き止めようとしたわ。でも、わたしたちの決心は変わらなかった。だって、貧しい兄さんをひとりにして、わたしたちだけいい生活を続けるわけには行かないでしょ”

“どうして？”とぼくは言った。“ぼくのことはかまわないから、お前たちだけでもいい暮らしを続

ければいいじゃないか”

“でもこの前会ったとき、すっかり迷いが晴れたのよ”とセーラは言った。“兄さんのひと言、あのひと言がなかったら、今でもわたしたちはあの生活を続けていたと思うわ。でも、兄さんのひと言が、わたしたちの心を変えたの。あのとき兄さんは、誰の庇護も受けない生活のことを言ったわね。あのときはくやしかったけど、やがてそうだということに気が付いたの。わたしたちは確かに恵まれるほど恵まれる生活を続けていたわ。でもやっぱりそれは上べの生活に過ぎないことが分かって来たの。本来わたしたちが受けるべき生活じゃなかったはずのものなのよ。同じ孤児院出身のわたしたちがやるべきなのは、やはり兄さんが言ったように、自分たちで稼いで生活をすることなのよ。以前よりもずっと貧しくなるかも知れないけれど、やはりそれが一番自然な姿なんだわ。わたしたちはそう考えてここへ来たの。その決心がつくまで、随分と長く時間がかかったけど…”

“何もそんなに無理をすることはないのに…”とぼくは言った。“ここでの暮らしがどんなに辛いものか、お前たちには何も分かっちゃいないんだ…”

“でも、もう決心もしたし、来てしまったわ”とセーラは言った。

“それでどうするんだよ”とぼくは言った。“お前たちの考えはよく分かったけど、ここで暮らすわけには行かないよ。見ての通り、こんなに狭い部屋さ。ここで三人は無理だよ”

セーラはくりっとした目で部屋を見回した後、

“分かったわ。三人は無理なようね。わたしとリサで別のアパートを捜してみる”と言った。

しかしその言葉を聞いてぼくは驚いた。

“まさかお前、本気じゃないんだろうね。そんなこと、ぼくが喜ぶとでも思っているのかい？正反対さ。帰れよ。これは、ままごと遊びなんかじゃないんだ。今からでも遅くはない。帰るんだよ”

“兄さんは冗談だと思っているの？”と、セーラも負けてはいなかった。“本気よ。本気でこうしてやって来たのよ”

“でもこの都会で、若い娘が二人暮らして行くことがどういうことか、お前たちは知っているのかい？”とぼくは反論した。“どういう思いでやって来たのかは知らないけれど、今すぐ帰る方が身の為さ。ぼくはお前たちに何もしてやれないし、また何かしてもらおうとも思っちゃいない。要するにぼくは誰の助けもなくここまでやって来たのさ。もしお前の気持ちの中に、ぼくに対する哀れみがあるとするなら、おかど違いというものさ。ぼくは誰の援助も受けたいとは思っちゃいない。もちろんお前たちの世話になろうなんて、これっぽっちも思っちゃいないさ。お前たちの気持ちが分からなくもないけど、ぼくとしてはそうする他ないんだ。はっきり言わせてもらえば、お前たちと暮らすわけにはいかないさ。分かったら帰んなよ。ここでお前たちと暮らすわけには行かないんだ”

“でも兄さん！”とセーラは言った。“こんなにヒドい生活をしているのに？”

ぼくは思わず自分の部屋を見回し、それから再びセーラを見つめた。

“ヒドい生活で悪かったな”とぼくは言った。“でもお前たちもこんな生活を味わいたくなけりゃ、今まで通りの生活を続けることさ。悪いことは言わないから、本当に帰ることだよ。ぼくのアパートを見舞いに来てくれたのには礼を言おう。でも、今日のところは、これだけにしよう。な、セーラ。分かったなら、もう出て行ってくれよ”

そう言ってぼくは二人を部屋の外に押し戻そうとした。

“でも兄さん！”とセーラは言いかけたが、ぼくは聞こうとはしなかった。

そして二人の大きなトランクを部屋の外に出すと、ドアをしめ、ガチャリと鍵をかけた。

ドアの外で妹たちがドンドンドアを叩いたが、ぼくはその場に立って、じっとうつ向いているだけだった。

“兄さん、わたしの話をもっとよく聞いてよ！”と、ドアの外でセーラは、なおも泣き叫ぶように言った。

しかしぼくはもう二度と、妹たちを部屋に入れようとはしなかった。

“セーラ、リサ”とぼくは最後に言った。“悪いことは言わない。ここで暮らすなんて、そんなことは考えないことさ。そんなことをしてもぼくは知らないぞ。今ならまだ間に合う。あの庇護者の下へ帰ることさ。それがお前たちにとっても一番いいことなんだ。分かったなら、大人しく帰ってくれよ。ぼくのことはいいから、そっとしておいて欲しいんだ。これ以上ぼくの生活をかきまぜないで欲しい。だから、これはぼくの忠告として言っておくよ。今すぐ帰るんだ。そしてここで暮らすなんて、そんなつまらないことは考えないことさ”

ぼくとしても、せっかく来てくれたセーラたちと別れるのは辛かった。しかし自分の生活を思うとき、この選択しか他に仕方がなかったのだ…

セーラはなおもドアを叩き、何か訴えようとしたが、ぼくは再びベッドの上に戻り、ゴロリと身を横たえたまま、彼女の訴えを聞く耳を持たなかった。

それから数分後には、ドアを叩く音もやみ、彼女たちはあきらめて帰ったらしかった。

ぼくは薄汚れた天井を見つめたまま、その音が消えたのがどこかしら、寂しかった…

ぼくの未来に待っているものは何もなかった。せっかくの天使たちの出現もぼくの救いにはならなかった。ぼくの精神は暗く、病そのものだった。

それでも、ぼくの仲間たちは必死に生きていた。悪の世界に身を染めてはいたが、その生き様はたくましさそのものだった。

やがてぼくはベッドから体を起こし、彼らに会いに行くことにした。

彼らはたいてい球戯場つきのバーでたむろし、たばこを吸ったり、音楽を聞いたり、酒を飲んだりしていて、バーのマスターとも顔なじみになっていた。

ぼくが行くと、彼らはぼくを快く迎えてくれた。

サングラスをつけ、いかにもチンピラ風になったレビが、特に親しげだった。

“よおシレール、久し振りだな”と、彼は言った。“最近はどうしているんだ。なんだか、若い娘と付き合っているそうな。うまいこと行っているのかよ”

カリーンのことだとぼくはすぐ直観したが、そのことに余り触れられたくはなかった。
“うん、ときどきね。仕事に行ってるだけさ。――でも最近は、どうしようかと迷っている”
“何も迷うことはねえじゃねえか。いい女なら行きなよ。な、そうだろ、みんな”と、レビはまるでぼくをからかうように言った。
“それでみんな、仕事の方は順調なのかい？”とぼくは言った。
“ああ、おかげ様でな”とレビは答えた。“それとも何か、お前は食いぶちにあぶれているとでも言うのかい？　まさか、職を捜しに来たというわけじゃないんだろうな”
“実はそのことで相談があるんだ”とぼくは言った。“いい仕事がなくて困っているんだ。何かぼくに出来そうな仕事を世話してくれないだろうか。なんでもやるからさ。お願いするよ、レビ”
“だがな…”と、レビは腕を組んで考え込んだ。
それから声を小さくすると、彼はこう言った。
“オレたちの仕事は、世間では声を大に出来ないヤバい仕事さ。それでもいいっていうのかよ。お前にだけはやってもらいたくないと思っていたんだがな。――でも、オレの仕事は無理としても、メーチンクやラボスがやっている仕事がある。あれならお前もできるかも。平たく言えば、パクリさ。路上で駐車してある車をパクるのさ”
ぼくは驚いたが、それに一定の魅力を感じたのも事実だった。
“おいメーチンク”とレビは言った。“きょうからこいつは、オレたちの仲間だぜ。さっそく連れて行ってやりなよ”
“よし分かった”と、メーチンクは威勢よく答えた。
彼とラボスはぼくを外に連れ出し、路上に止まっていた一台の車にぼくを案内した。
メーチンクが運転席に乗り、ぼくは助手席に乗せられた。ラボスは、後部座席からぼくたちに話しかけた。
“おいシレール。車だぜ。乗ったことはあるのかい？”
ぼくは頭を横に振った。
“バスに乗ったことはあるけど、車はね”とぼくは答えた。
“そうだろ”とメーチンクは得意気に言うのだった。“でも、簡単に手に入るんだよ。こいつはまだオンボロだが、そのうち新車にしてみせるぜ。そして可愛い姉ちゃんを乗せて、みんなでドライブに行くんだ。楽しいぜ、シレール”
“でもレビは、レビは来ないのかい？”と、ぼくは尋ねた。
“あいつは別格さ”と、メーチンクは答えた。“オレたちよりずっともうけのいい仕事をしている”
“もうけのいい仕事って、なんだよ”とぼくは尋ねた。
“知りたいか”とメーチンクは言った。

うんとばかりぼくはうなづいた。
“ここだけの話しだぜ、シレール”とメーチンクは言った。“奴の仕事はおどしよ。ゆすり、たかり、なんでもござれさ。オレたちとは違った組織にいて、主に夜、働いているのさ。しかしその分、危険も多い仕事さ。敵の組織もいて、いざこざが絶えない状態さ。オレたちも、あの仕事だけは怖くて手が出せねえ。しょせんレビは、オレたちとは器が違うというわけさ。さあ着いたぜ、シレール”
見ると、人通りの寂しい路上に、真新しそうな車が一台止まっていた。
“あれだ。ラボスと一緒に行きな”
ぼくたちは、何気ないそぶりで車から降り、その車に近付いて行った。
“いいか、よく周りを見張っているんだぞ”とラボスは言った。“それから、オレの手口をよく見ておけよ”
ラボスはポケットから小道具を取り出してみせると、いとも簡単にドアをこじあけてみせた。
それからしばらく内部でごそごそとやっているうちに、エンジンのうなる音も聞こえ出した。
そのときだった。通りの角から一人の紳士が姿を現し、ぼくたちのいる車を見ると、あわてて駆け出して来た。
“いけねえ、ラボス。見つかった！”とぼくは叫んだ。
“おい、早く乗れよ”とラボスは合図した。
ぼくがその車に飛び乗ると、車は急発進し、間一発のところで紳士の手をまぬがれたのだった。
“おい、泥棒！”と、紳士は必死に追い掛けながら叫んだが、もう後の祭りだった。
ぼくたちを乗せて来たメーチンクの車は、もうとっくに走り去っていた。
“危なかったな。冷汗をかいたぜ”と、しばらくしてからラボスは言った。“お前の初仕事早々、危ない目に会うとはな。でも、この仕事には、こんなこともあるということさ。よく肝に銘じておくがいい”
“でもこの車は、警察に見つからないのかい？”とぼくは尋ねた。
“ああ、ヤミの業者に売り飛ばすからさ”とラボスは言った。“結構金になるんだ。警察には絶対見つからない。色もナンバープレートも、全く新しい車に生まれ変わるんだ。オレたちは、それから先のことは知らないさ。メーチンクが乗っていたあの車も、その手の車さ。結構安く手に入ったんだ”
ラボスの運転で、ラボスの言うヤミ業者の所に行くと、既にメーチンクが先周りをして車を止めていた。
ぼくたちは、入った大金を胸にして帰途についたのだった。

確かにそうすれば、簡単に大金が手に入った。これはうまい仕事だとぼくは思った。

その晩は、みんなで映画を見に行き、バーで酒を飲み、夜遅く家に帰って来た。

トントンと足どりも軽快に階段を上がって自分の部屋近くまでやって来たとき、腕を組んでうづくまるように階段に坐っている少女の姿が目に入ってぼくは驚いた。その姿がみすぼらしく見えたので、初めて目にした時、それが誰だとは分からなかった。が、その少女が、ぼくの足音で視線をぼくに向けたとき、ぼくはハッとなって、それが誰れであるかを知った。
“リサッ、どうしてこんな所に”とぼくは言った。
“姉さんがよしなさいと言ったけど、わたし、待つことにしたわ。それにしても、随分遅かったじゃない”
“でも”とぼくはまだ驚きが覚めやらないまま言った。“あのとき、あきらめて帰ったのじゃなかったのかい？”
“兄さんったら、ヒドいことをするんだもの”とリサは言った。“わたしたち、近くでアパートを捜したわ。ここより少し広いぐらい。よければ兄さんに来てもらってもいいのよ。それぐらいのスペースはあっちにはあるの。姉さんは今、部屋の整理をやっている最中よ”
“じゃあやっぱり、ここで暮らすつもりなのか…”と、ぼくは気が抜けたように言った。“もう決心を変えるつもりはないのかい？”
“あしたから仕事を捜しに行くわ”とリサは言った。“だってわたしたち、手持金って、ほとんどないんだもの”
“まあともかく、ぼくの部屋に入れよ。ここにいちゃ、寒いだろ”
そう言ってぼくは、リサを部屋の中に入れた。リサは黒っぽいブラウスで、しかも半袖だったので実際震えていたのだ。
ぼくはリサの為に暖かいコーヒーを飲ませてあげた。
テーブルに腰掛け、リサはうまそうにそれを飲んだ。リサはコーヒーを飲みながら、もう一度、狭い室内を隅なく見やった。そこにはベッドがあり、タンスが一つと、壁には汚らわしい写真が貼ってあった。若い女性が、はちきれんばかりの胸を出し、微笑んでいるのもあった。リサはコーヒーを飲みながら、さりげなく、それらの写真にも目をやった。ぼくは彼女の視線をそらそうと、わざと彼女に話しかけた。
“本当に久し振りだなあ、お前とこうして二人きりになるのは。随分と大きくなったね”
“それは兄さんも同じよ”とリサは言った。“前よりずっと大人っぽくなったわ。それも苦労した為？”
“そうかも知れないな”とぼくは答えた。
ぼくの頭の中には、彼女らと別れてから、苦しみと絶望の連続の生活のことが過った。
“実際、ここでの生活は、言うほど楽なものじゃないんだ”とぼくは言った。“いいことなんて、ほとんどない。悪いことばかりさ。だから、お前たちが来ることに、ぼくは本当に心配しているのさ。とっても、いい顔でお前たちを迎えるというわけには行かないよ。それでもやるというの

なら、勝手にするがいいさ。しかしその結果生じることについて、ぼくは何もしてあげられないよ…”

“いいのよ。兄さんには迷惑をかけないから”とリサは言った。“ただわたしたちは、兄さんの近くにいるだけでいいの。兄妹が同じ所で、一緒に暮らしているというだけで、わたしたちはいいのよ。でもたまには、こうして往き来もしてね。できれば一緒の部屋に暮らすのが一番いいんだけど。姉さんも寂しがるわ”
“姉さんも寂しがる、か…”とぼくは言った。“でもぼくは、お前たちと一緒には暮らせないよ。ぼくはせっかくここまで一人でやって来れたんだ。それをブチ壊されるのはいやだからね。ぼくはこれからも一人で生きて行く。誰の支えもなしにさ。それがここでは一番ふさわしい生き方なんだ…”
せっかくのリサの来訪だったけれども、ぼくとリサとは意見の相違だけが目立った。もう夜も遅くなったので、ぼくはリサを、彼女のアパートまで送ることにした。
夜更けの通りはし〜んと静まり返り、のら猫が何かの拍子で物をひっくり返す音だけが大きく響いた。リサの暮らすアパートは、それほど遠い所ではなかった。しかし、ぼくは中まで送って行くのは気が引け、入口の所で彼女と別れた。リサは別れ際、ぼくを抱き締め、頬にキスまでした。ぼくもそんなリサをしっかり抱き締めた。
帰り道、建物の合間から見える真暗な空には、星々が燦然と輝いていた。

帰ってから、ベッドにゴロリと横になってぼくは考えた。
新しくころがり込んで来たぼくの妹たち。それにあのカリーン。ぼくは彼女たちを抱えて、どのようにして生きて行こう？

ぼくはその後しばらくは、妹たちとは距離を置いて暮らそうとした。一つは、彼女たちによって、ぼくの張りつめた心がほぐれてしまうのがいやだったし、もう一つは、そのうち彼女たちはあきらめて帰ってしまうかも知れないと期待したからでもあった。セーラはなかなか来なかったが、リサの話しによれば、それぞれすぐ就職が決まったということだった。セーラは、レストランのウェイトレスに、リサは書店の売り子に、という風に、さっそく働き始めた。ぼくはそんなリサに対して、自分の働き口については、あいまいにする他なかった。だってどうして、車のかっぱらいをしているなんて、彼女らに言えるだろう！
その屈折した気持がそうさせたのか、ぼくの心は再びカリーンの方へと揺れ動いた。彼女なら犯罪者のぼくでも、寛大に接してくれると考えたのだ。

ぼくは再び彼女の部屋にいた。窓の外からは、物を売る漁師たちの様々な掛け声や、車の行き交う音。犬の遠吠えなど、様々な世間の騒音が聞こえて来る。ぼくとカリーンは、長いあいだ一つのベッドに寝ていて、やっと今起き出した所だった。
ぼくが起きて服を着ると、カリーンはいつものように、さっと金をさし出した。
“ハイ、コレ。おこずかいに取っといて”

ぼくはそれを無造作に自分のズボンのポケットにねじ込んだ。
カリーンも、あらわな姿でベッドの端に腰掛けると、タバコを一服、吸い始めた。
“ぼくね”と、ぼくは彼女にポツリと言った。“最近、妹が、家の近くに引越して来たんだ。それで、どうしようかと迷っているんだ”
“あら、いいことじゃないの”とカリーンは言った。“それで迷っているって、どういうことなの？”
“あいつら、世間知らずさ。だのに、この街でやって行けると思っているんだ。そのうち失敗するに決まっているさ。だからぼくはやめておけって言ったのに聞かないんだ。せっかく今までいい生活をしていたのに、それを捨ててまでやることはなかったのに…”
そこでカリーンに、妹たちのいきさつについて簡単に説明してやった。
カリーンはそれを聞くなり、
“立派だわねえ、その妹さんたち”と、感嘆の言葉を洩らした。“今どきの若い娘にはなかなかできないことよ。それは、本当にあんたのことを思っているから、そうしたのよ。あんたもそれに答えてあげなくっちゃ”
“でも、やり方が間違っているよ”とぼくは反論した。“どっちみち行き詰まれば、ぼくが面倒みなければならなくなるに決まっている。あいつら、金持の夫妻にぶら下がっていて、ぼくに仕送りでもしてくれれば、その方がよっぽど有り難かったのさ。何も、ぼくの水準にまで身を落とすことはなかったんだ”
“でも、それは虫が良過ぎるというものよ”と、カリーンは言うのだった。“妹さんもそう考えて実行なさったんじゃない。えらいわ、彼女たち…”
“しかし、あいつら、何も分かっちゃいないんだ”とぼくは言った。“ぼくの仕事も、ぼくがどんなことをしているのかも。ぼくにおせっかいをやこうと思っているらしいけれど、それこそいいおせっかいというものさ”
“じゃ、わたしたちのこの関係も、彼女たちは知らないの？”とカリーンは尋ねた。“それとも、このことは、話してはいけないこと？”
ぼくは考え込んだまま、それには答えようとはしなかった。この生活をこのまま続けるのか、ぼく自身も分からなかった。今や貧しくなった妹たちとカリーン、この二人の兼ね合いを、ぼくはどうするべきか測りかねていた…

いずれ妹たちにも分かるときが来るだろう、と帰る道、ぼくは思った。以前のあのときとぼくは違うのだ。そう説明しても、多分彼女たちは納得しはしない。ぼくは彼女の囲われ者で、その収入が、ぼくの生活の一部を支えてもいる。それをどう彼女たちに説明すればいいのだろう…

秋の空は、自分の気持にも似て、うすら寒かった。この孤独な気持をどう表現していいか分からなかった。そのどんづまりの気持から逃れる為か、ぼくはよくひとりで映画を見に行った。

内容はなんでもよかったが、それが唯一、心を慰めてくれる娯楽だった。映画館のおばさんは、ぼくを見るなり、また来たのかい？と声を掛けてくれた。しかしその当時、映画は素晴らしく、胸を打った。ほとんど客のいないガラ〜ンとした客席で、ぼくはひとり映画に感動し、涙を流していた。

明日のない、よるべない生活。それがぼくの、そしてぼくの仲間たちの心の底を流れる基調だった。

同じ年齢の者なら、学校に通っている者もまだ多かった。もちろん働いている者もいたが、彼らにはまだ家庭というものがあった。しかし、ぼくらには、学校も家庭もなかった。やたら目につくのは、うらぶれた人々の生活ばかりだった。

そのうちぼくは、自分のアパートのつい近くに、印象深い母と息子が住んでいることに気が付いた。

彼女らが、どこからどういう経緯でここに住みつくようになったかは知らないが、女の年はもう四十を越えていて、小学校に通っている息子の年齢からして、かなりの晩婚であることが察っせられた。彼女の家はみすぼらしくて、また、着ている服やその姿もみすぼらしく、額にはくっきりと苦労のしわが認められるのだった。彼女の夫がどうなっているのかは、ぼくには分からなかった。しかし朝ぼくが目覚めて窓辺に近寄ると、よく彼女が大事な一人息子を学校へ送りにやっている姿を見掛けたものだった。余り賢こそうに思えないこの息子は、自分の置かれている境遇もよく理解せずに、ただ精一杯母親に手を振りながら、学校のある横町へと消えて行く。息子を見送る母親の顔は、一応微笑を浮かべてはいるものの、どこか不安げであり、息子の先行きを案じているようにすら見受けられるのだった。この母親は、心の底でこう思っているに違いない。友だちと仲良くやっているだろうか。勉強はまじめに、しっかりやっているのだろうか。通学の途中で、けがをしたりはしないだろうか、等々。それから、この年とった母親は薄暗い自分の家に引っ込み、休む間もなく身支度を整えて、近くの町工場に、晩遅くまで働きに出掛けるのだった。彼女の額に刻まれた驚くほど深いしわや、ひび割れ醜くなったどす黒い手などを、ぼくは一度、彼女とすれ違いざまに見たことがあった。ぼくは彼女らに何もしてやれなかったけれど、その頃から既に深い印象を、ぼくの胸に刻みつけていたのも事実だった。

ときたま、ほんのわずかないこいのひととき、ぼくは、珍しく、この年老いた母親が小さな息子と通りに出て、ささやかな遊びを楽しんでいる姿を見掛けることがあった。そしてぼくは、この二人の姿を見るにつれ、いろいろと想像したものだった。ぼくは、少年の将来よりもむしろ、母親の将来の方を案じていた。夜、あかあかともったあの窓の奥で、一体どんな会話がかわされているのだろう？　それが、寒い秋の夜のことだからいっそうのこと、彼女らの生活もまた寒そうに思われたのだ。あの疲れ果てた母親は、ただ一人の愛すべき息子に向かって、この日あったことについて、恐らくいろいろと尋ねるのだろう。この広い都会のなかで、この母親にとって、血の通った話しができるのは、恐らくただそれだけなのだ。

ぼくには、そうした状況が痛いほどよく分かるのだった。何も知らない無邪気な息子は、うるさいなとは思いながら、学校であったことについて答える。しかし、それが、この母親にとっては、不安の解消でもあり、生きる喜びでもあるのだ。息子がいじけることなく、素直に育っているというだけでも、それは大きな喜びにつながるだろう。母親はきっと、報われることのない単調な、貧しい生活のくり返しのなかにも、希望がそこに芽ばえていることを、感じとっているに違いない。しかし、もし邪悪な神様がいたとして、この母親から息子を奪いとってしまうようなことがあったとすれば、そのときには？　そのときにはこの母親はどうなるだろう？　そこまで想像が進んだとき、ぼくの想像はそこでぱったりとやんでしまったのだった。
　なぜなら、余りにもこの家庭が哀れだからだ。いや、哀れという言葉を、そのときぼくは使いたくはなかった。むしろ、存在のはかなさをひしひしとこの家庭の親子は感じさせたのだ。そのちぎれそうなきずなのなかにも幸福があるとしても、少なくともそれは、大地を揺り動かすような幸福というようなものではない。しかし、ぼくにとって、幸福とはそのような幸福でなければならなかったので、彼女らの、今にもこわれそうな幸福が、はかなく思われたのだ…

　そう――ぼくは当時から、本当の幸福というものが欲しかった。それを求める孤独な戦いが、当時から開始されていたと言っても、間違いではないだろう。

　風よ吹け。もっと吹け。やがて冬となり、この大地を凍らせてしまうまで…

　毎日の、出口のない生活の中で、ぼくの精神は次第に荒廃したものとなって行った。そこに、まるで天使のような妹たちの努力があったとしても、それは微々たるもので、荒廃という巨大な流れの方向は、押しとどめることができないのだった。秋の木枯らしがすべてをなぎ倒して行くように、この流れは、ぼくの生活や精神や、果ては妹たちにさえ、容赦なく襲いかかり、なぎ倒して行くのだった。

　荒廃した路地裏を歩き、風の吹きすさぶ凍えるような空を見上げては、ぼくは何度も、
　“おお、助けて下さい”と心の中で叫んだものだった。
　ぼくの生きて来たこと。これまでのすべての罪を洗い流し、もう一度生まれ変わりたかったのだった。

　妹は、そんなぼくの前に、何度となく姿を現した。それは、暗い、出口のないぼくの視界にパッと咲く、一輪の可憐な花とでも言うべきものだった。なぜなら、そこだけが春を呼び、そこにだけ日が射しているように、ぼくには思えたからだった。しかし同時にその花は、あだ花でもあった。というのも、なんら実を結ぶこともなく、うるさそうにぼくはすぐ、その花を追い散らしたのだったから。

“ねえ兄さん”と、リサは、歩いているぼくに話しかけた。
外は寒く、ぼくは大きなえり巻を、首に巻いていた。リサは可愛らしいセーターを着、ぼくに駆け寄った。
“どこへ行くのか教えて。あの人の所なら、悪い人と姉さんから聞いたわ。もしそうだとするなら、何しに行くのか教えてよ。今からどんな仕事をするのか、それを教えてよ、兄さん”
彼女は必死にぼくにすがりつこうとしたが、ぼくはうるさそうに彼女を振り払った。
“向うへ行けよ、リサ。お前には関係のないことだ”
“でも姉さんは、レビのことをやくざと言っているわ。そんなところへ行かないでよ、兄さん”
リサはなおもぼくにくらいつこうとした。
しかしぼくの歩みは、止まることがなかった。
“ぼくのことはほっといてくれ”と、ぼくは彼女に言った。“ぼくはしたいようにするさ。お前やセーラに邪魔だてはして欲しくないんだ。いいからせっかいはやめて、自分の仕事に戻れよ”
ちょうどバスがやって来たので、ぼくはリサの手をふりほどくようにして、それに飛び乗った。その瞬間、彼女は路上に倒れ、悲しそうにぼくに手を差し伸べた。しかし非情のバスは、そのまま発車して行った。その一部始終を見ていた乗客の一部は、乗って来たぼくを不審なまなざしで、ジロジロと見つめるのだった。しかしぼくは次第に遠ざかって行くリサから目をそらすようにして、心の中でこう叫んだ。
“ぼくが悪いんじゃない。悪いのはこの街だ。ぼくが生きる為には、これは仕方のないことなんだ”

久し振りに玉突き場に行って見ると、レビはぼくに対して不機嫌そうだった。
“おいお前、最近はまた足が遠のいたがどうした？”と彼は言った。“そんな中途半端なやり方だと、もう仕事を世話してやらないぞ”
ぼくは黙って聞いている他はなかった。妹たちが来てから、ぼくは実際、どうしていいやら分からなくなっていたのだ。
“それはそうと”とレビは言った。“最近この辺をかぎ回る奴がいて、どうも変だ。警察の回し者じゃないかと噂が立ったことがあるんだ。――でもよく見るとよ、なんとお前の妹じゃねえか。どうしてあんなマネをするんだ。あれじゃまるで、婦人警官か何かじゃねえか。この辺をかぎ回るのは危ないからやめなと言ってやりなよ。それにしてもお前の妹、なかなかのベッピンじゃねえか。オレは気に入ったぜ…”
どちらのことを言っているのか分からなかったが、多分セーラだとぼくは思った。こんな所までどうして彼女はかぎつけたのだろう？　いずれにせよ、そんな犬みたいなマネはやめさせなければとぼくは思った。

夜になって、ぼくは思い切って妹たちのいるアパートに行くことにした。
ぼくのいるアパートに劣らず、彼女らのいるアパートも粗末なものだった。行きずりの人に尋ねて、彼女らの部屋の近くまで階段を上がって行くと、幸いなことに、ドアから明かりが漏れていることが分かった。
思い切ってドアをノックしてみると、中から反応があり、やがてノブがくるりと回ってドアがあいた。
誰が出て来るかと思ってみれば、そこに立っていたのはセーラだった。
彼女は、薄い、黒っぽいセーターを着ていて、入口に立っているぼくを見上げた。
“あら、兄さんなの？”とセーラは言った。“珍しい。お入りなさいよ”
ぼくは言われるまま中に入ると、奥の部屋にはリサもいて、ぼくを見つめていた。
ぼくは、初めて入った誰もがそうするように、彼女たちのいる室内を物色した。
入ったすぐの場所にはテーブルがあり、今まさに夕食のしたくが整えられようとしていた。壁の所には二つのドアがあり、一つは、彼女たちの寝室。今ひとつは、キッチンに通じるものだった。室内の飾りつけは到って簡素で、ぼくの部屋と大差ないと思われた。ベッドの奥には多分、バス・ルームがあるのだろう。
“今、わたしたちで食事の用意をしているところなの。兄さんもよければどう？”とセーラは言った。
“そりゃありがたいね”とぼくは何気なく答えた。“それにしても、お前たちも、こんな所で暮らしているんだな”
“余りきれくはないけど、これがわたしたちには精一杯よ”とセーラは、つんとして答えた。“よければそこに坐ってよ。ちゃんと兄さんの分も、椅子が一つ、用意してあるのよ”
“ほう、それはありがたいね”
ぼくは言われるまま椅子に腰掛けた。
リサは、ぼくが坐ると、黙って暖かそうなスープを運んで来るのだった。ぼくはそんなリサの手をとった。
リサは、ハッと驚くようにぼくを見たが、そんなリサにぼくは話しかけた。
“リサッ、けさは御免よ。悪かった”
彼女は、ぼくの行為がショックだったらしく、すぐには返事も出来なかった。
しかしやがてポツリとリサは言った。
“いいのよ。わたし、なんとも思っていないから…”
“兄さんったらヒドいわ”と、すぐそばでセーラは言った。“リサを押しのけてバスに飛び乗るんだから。おかげでリサ、足をくじいたのよ”
“そうじゃないんだ。実はそのことで話しがあるんだ”とぼくは言った。“最近お前、ぼくの勤め先に行ったそうだね。レビがそのことを言ってた”

“あれが兄さんの勤め先？　ただの遊び場じゃないの”とセーラは言った。“あそこで何をしているのよ。どうしても腑におちないわ。兄さんはどうして暮らしているの？　お金はどこからやって来るの。何をして？”

“いいから、それを勘ぐるのはよしてくれって言っているんだ”と、ぼくは少し声を荒らげて言った。“ぼくがどうしようと、お前たちには関係のないことだろう”

“いえ、大いに関係ありよ”とセーラは反論した。“兄さんは、わたしたちの兄さんじゃない。あんな人と付き合ってもらったら困るのよ。どうみてもあの人たち、不良にしか見えないわ”

“不良で悪かったな”とぼくは言った。“それでどうしようというつもりなんだ？　ぼくを彼らから切り離して、普通の仕事につかせようと。へっ、笑わせるぜ。むしろぼくが言いたいのは、そんなスパイみたいなマネはやめてくれということなんだ。あの辺は、お前は知らないかも知らないが、余りガラのいい所とは言えない所なんだ。お前たちの身に何かが起こっても不思議じゃない所なんだ。お願いだから、これはお前たちの為に言っているんだ。あそこに近寄るのだけはよしてくれ。そう約束してくれよ、セーラ”

セーラはぼくの横に坐って、黙ってスープをすすっていた。

“でも、兄さんのことはほおっておけないわ”と、やがてセーラは言った。“兄さんがあの人たちの所へ行かないと言うんなら、わたしも行かないって約束する”

“どうしてなんだ”と、ぼくはセーラの方を向いて言った。“あいつらは友だちなんだ。お前と同じように大切な奴なんだ。そんなことできないよ。それに――もうこれ以上、ぼくのことはかまわないで欲しいんだ”

“わたしたちが何んの為にここにやって来たか分かっている？”と、セーラはすました顔で言うのだった。“兄さんが不良の仲間になって、不良になって欲しくない為よ。だって、どうみてもあの人たち、不良だし、何か悪いことをしているに違いないわ。そんな所に兄さんが行っているなんて、たまらないじゃないの”

セーラは、悲しそうに、手で目頭を押さえた。

さとすつもりで行ったのに、セーラに悲しそうな顔をされて、ぼくは弱ってしまった。セーラを泣かせるためにぼくはやって来たのじゃなかった。

“何度も言っているように、そこだけは分かってくれよ”とぼくは言った。“奴らは決して、そんなに悪い奴らじゃない。お前の気持も分かるけどさ、ぼくとしても、どうしようもないんだ…”

“意気地なし”とセーラは言った。“もういい。兄さんは、やりたいようにやるがいいわ。その代わり、わたしもやりたいようにやりますからね”

“何をどうするのさ”とぼくは少し心配になって言った。

“兄さんの言うことには従わないっていうことよ”とセーラは答えた。

“でも、傷つくのはお前の方だぜ”とぼくは言った。“そんなことを続けていれば、ヒドいめに会うかも知れないんだぜ”

“どうして？　相手がヤクザだから？”とセーラは言った。“いいわ。ヒドいめに会わせるがいいわ。でもわたしはあきらめませんからね”
セーラにはこれ以上話すのは無理だと判断した。せっかく忠告のつもりで来たのに、セーラは聞く耳を持たないのだから。
“後はどうなっても知らないぞ”と言って、もう用もなくなったので、ぼくは立ち上がる他はなかった。
セーラと意見は対立しても、ぼくは、リサとは対立したくはなかった。立ち上がったものの、一種、後味の悪さのようなものを感じながら、ぼくは部屋から出て行こうとした。
“兄さん、まだ食事が残っているわ。食べないの？”とセーラは言ったが、彼女の世話になる気にもなれなかった。
“いいよ。そんなに腹が減っていないから”とぼくは言った。実際は、腹ペコでどうしようもなかったのに。
しかし、部屋の出しな、ぼくはリサにだけ声を掛けた。
“リサ、また遊びに来いよ。遠慮しなくていいから。それじゃね”
そう言ってぼくは二人のいる部屋を後にした。
すぐドアにまで見送りに来てくれたのはリサだった。
“兄さん！”
その声で、階段を降りようとしていたぼくは振り向いた。するとリサは、とても可愛い笑顔を見せて、最後にぼくにこう言った。
“気を付けてね”
ぼくも彼女に笑ってみせた。とてもさわやかで、いい気持だった。

今にも雨の降り出しそうな、流れ行く黒雲を見上げて、ぼくはふとこう思った。
ぼくが孤児院に入ることになったときと、状況は何も変わってはいないな。あのとき、ひとり炭鉱夫になって、いっそのこと死んでしまえばよかったのかも知れない。

それはそうと、ぼくはそれから数日後、駅のプラットホームの柱に背をもたせかけて、こんなことを考えていたのだった。人々の余りいない寂しいホームにはベンチがあって、そこに可愛らしい娘が一人腰を掛けていた。彼女は週刊誌に目を通しているようだったが、ぼくは既に彼女に目をつけていた。この場限りの、もう二度と出会うことのない彼女だったかも知れないが、ぼくの心は既に燃えていた。雨にけむる、彼方に見える水平線がいっそうその気持を高ぶらせたのかも知れない。そのときぼくはひとり、こんなことを考えていた。
…ぼくがもし、彼女の側に行って、彼女に声を掛けたりすれば、彼女は驚くだろうか？でも、なんて可愛いんだろう。あの横顔といい、あのきちんと揃えた足といい、胸元といい、みんな可愛いところだらけじゃないか。まるで、神様は、彼女の為に精を出したおかげで、他の人たちの

ことなんかすっかり忘れてしまったかのようだ。

それなのに、あの彼女は、あんなところで、人目にもつかず、ひっそりとしている。人々が気が付かないのだろうか？神様に選ばれた彼女が、あそこに坐っているということが。でも、ぼくはもうとっくに気が付いている。あのときだ。彼女が、ホームの奥の方からそっとやって来ると、あのベンチを選んで腰掛けたんだ。ぼくは、ぼんやりとそれを見つめていた。で、ふと気が付いて、彼女の全体にしっかりと目を据えると、もうそれっきりだったというわけだ。彼女はまだ坐っている。ぼくは、こうして何気ないふりを装って立っているけれど、でも、ぼくの心はもうとっくに燃え立っているんだ。ああ、彼女には伝わらないのか？　ぼくのこの激しい、燃えるような心の叫びが。いったいお嬢さん、そこで何をしているんです？　どうしてまた、こんなところへやって来たんです？　まさか、誰かを待っているなんてことは言わないでしょうね。で、お嬢さん、年はいくつなんです？　ぼくはまだ十七にもなっていないんですけど、よろしければ、ぼくにお伴させてもらえないでしょうか？　ぼくは知りたいんです。あなたの、あなたの生活ってものが。これまでの生活のすべてが。ああ、彼女はどうしてこう鈍感なんだろう。ぼくが、こんなに必死になって叫んでいるっていうのに。そして、ここにこうして立っているというのに。彼女は少しもぼくの方を向いてくれない。ああ、じれったいな。そんなにその本が気に入りましたんですか？　そうじゃないんでしょ？　もっと他の用事が、つまりそう、ここにぼくがいるってことの用事があって、それで来たんでしょ？　だったら、さあ立って、本なんかその脇に置いて、そのまま何も言わずにすぐぼくの所にやって来るんですよ。チェッ！　あいかわらずあんなところに坐っている。でも、ぼくがもし彼女の友達だったら、決してあんなところへひとりぽっちの置き去りなんかしてやらないんだが。そうだ、ぼくにもできるかも知れない。きっと彼女、喜ぶぞ。こんなぼくでよろしければってまず言ってやるんだ。それからなんと言えばいいかな？　それでは、ええーと、そうだ、ちょっと失礼かも知れないけど、誰も待っていないんですか？　だったら少しばかりお付き合いを願えませんでしょうか？　彼女が驚いて、またどうして！と叫んだりすれば、ぼくはどうすればいいんだ。その、あなたはとっても美しい。これじゃちょっとぶしつけすぎるかな？　でもいいや。ぼくはとっても好きになってしまったんです。ひと目ぼれをしてしまったんですって正直に白状すればいい。きっと彼女は、そんなぼくを見捨てたりはしないさ。そうなの。気に入ってくれたの。ありがとうって、却って感謝してくれるかも知れない。それなら上出来なんだけど。でも、それからどうしよう。あるいはぼくの方が年下なのかも知れないんだぞ。でもいい、ぼくは十八才ということにしておこう。それじゃ少し怪しまれるかな？　いずれにしてもいいさ。ぼくは彼女を連れてってやるんだ。どこへって、どこへでもいい。彼女の気に入るところ。だが困ったぞ。金があまりない。そうだ、考えて見れば、今が一番しけているときなんだ。でもいい、たといあしたから食って行けなくなるようなことになろうとも、ぼくは、きょう一日の彼女との幸福の為に、有金のすべてを使い果たしてやるんだ。あしたはあしたの風が吹くっていうわけだ。でも、それにしても、もっている金はあまりにも少ない。困ったぞ。彼女に使わせるようなことは絶対にいけない。そんなこと、誘ったのがこのぼくの方だということからしても、絶対に許されたものじゃない。どうしよう？

　誘う前に、スリを働かなければならないっていうのかい？　なんて心細いんだ。それともかっ払いかい。でも、そんなことをしている間に彼女が去って行ってしまったらどうしよう。また、今度の機会まで待たなければならないなんて、なんとも心細い話しになってしまったな。でも、単に目的もなく来てるんならそれもかまわないんだけど。ひょっとすれば、あの服装からして誰かを待っているんだ。きっと、よそ行きなんだから。わざわざあんなにおめかしをしているんだから。だけど、男は来るのだろうか？　いや、来やしない。こんなに彼女を待たせているんだ。たとい来たとしても、多分彼女は、カンカンなことだろうよ。そして、けんかして、もの別れに終わってくれればいいんだ。そこへすかさず、このぼくが慰めに行く。どうしたんです、お嬢さん？　すごいけんまくで、男の人とけんかをしたりして。あの人、ビックリして逃げて行ったじゃありませんか。すると彼女は言う。いいの、ほっといて。あの人が悪いんだから。ね、あなた、どなたか知りませんけど、家まで送って下さらない？　とてもひとりで帰る気なんかなれないんですもの。こうなればしめたものだが、多分、ここまでうまく行きはしないだろう。でも彼女のためだ。できるだけ親切にしてあげなくっちゃ。いいですよ、お嬢さん。ぼくは、あなたのためなら、なんでもしてやりたいんですってズバリ言おう。すると彼女はビックリして、ぼくをにらみつけるかも知れない。またどうして、そんなことを言うの？って言って。そりゃそうだろう。初めての男にそんなことを言われれば、誰だって驚くのは分かりきっている。彼女だけが特に例外っていうわけには行くまい。でも、実はそこが狙いなんだ。でも、ぼくはあなたを愛しているんです。十日前からずっと、夜も寝られない思いでした。でも、ちょっと行き過ぎかな。なんだか、ますます彼女を驚かせることになりそうだ。そのうち、話しを最後まで聞かないうちに、彼女に逃げられてしまうことになりそうだ。これではダメだ。他の手を考えなくては。ああ、なんて難しいんだろう。ぼくは、冗談を言っている場合じゃないんだ。これは本気だ。本当に好きになっちまったんだ、あの彼女のことが。どうしよう。どうしよう。ともかく心を落ち着かせなくては。もっと冷静になろう。そしてもう一度深呼吸をして、事をハッキリさせるんだ。一体、彼女をどうしたいって思っているんだ。あの可愛い彼女。あれ、れ、れ、れ、彼女がいない。ベンチはもぬけのからだ。どこへ行っちまったんだ。ちょっと目を離したスキに。これではまるで、ぼくをからかっているみたいじゃないか。おにごっこをしようとでもいうのかい？　よし、それじゃ、鬼になってやる。どこかへ隠れてしまった彼女を、きっと見つけ出してやる。絶対にだ。ぼくは、あきらめなんかしないぞ。さて、どこだ、どこだ、ああ、やっとみつけた。あんなところを歩いている。でも、様子がちょっと変だ。なんだか、浮き立っているみたいじゃないか。しかも、駆け出した。駆け出した。向うから、割とかっこのいい男がひとりやって来る。どうなってるんだろ？　男は来ないことになっていたのじゃなかったかい。それに、もし来ても、彼女は待たされていたから腹を立てて…　ああ、手を握った。彼女は微笑んでいる。とっても楽しそうだ。男もとうとう声を立てて笑い出した。チェッ、勝手にしろよ。ぼくの筋書はどうなったんだ。男と喧嘩した後彼女を慰めるってあれは、みんな、みんな嘘っぱちだったのかい。行っちまえ！　早く。彼女なんか、男なんか、ぼくの視界から消えっちまえ。

そして二度と現れるな。もう二度と。ぼくはもう見たくない。だから早く、早く。ああ、列車が来た。彼女を乗せて、彼は行くだろう。でも、ぼくは、悲しくなんかない。そうだ、ぼくがバカだったんだ。あんな彼女に恋してしまったのがいけなかったんだ。いや、そうじゃない。ぼくは今でも君が好きなんだ。とっても、とっても、とっても。そうだ追いかけよう。そして、あの男の手から彼女を奪い返すんだ。どうしたんだ。早く、シレール、行くんだ、追いかけるんだ！

結局、列車の扉は閉まり、楽しそうな二人を乗せた列車は、ぼくのいるプラットホームから去って行ってしまった。彼女たちと入れ代わりに降りて来た人々の後ろ姿と、彼方に見える海の水平線とが、どこか物寂しげに、ぼくに語りかけていた…

やがてぼくは失意のうちに、プラットホームをとぼとぼと歩いて行った。失楽園。そうだ、ぼくは呪われた人間で、失楽園にいる人間だ。この不幸な胸の内を誰に伝えればいいのだろう？
ぼくがホームの階段を降りて行こうとしたとき、向うから三人連れの若者がやって来て何か殺気のようなものを感じた。まさにそれは図星で、彼らはぼくのそばまで来ると急にぼくに暴行を加え、そのまま、ホームに向かってものすごいスピードで駈け去って行ってしまった。階段の上で倒されたぼくは、何があったのか未だに分からなかった。ただ、しばらく後に通りがかった乗客が、不思議な表情で、階段に坐り込んでいるぼくを見つめていた。どうやらはずみでぼくは、口を切ったらしかった。しかし手に血がついた以外、大したことはなさそうだった。
ホームを出ると、もう夕方で、まるでさっきまでの雨は嘘のように、西の空は晴れ上がって、東の空には珍しく虹がかかっていた。ビルの窓も、夕陽を浴びて、金色に輝いているのがなんとも言えず美しかった。
下町のアパートのそばまで帰って来ると、そこで、ちょうど帰って来たリサとパッタリと出会った。
リサは、ぼくを見るなり、驚いた顔をして駆けて来た。
“どうしたの、兄さん？　唇を切っているわ”
“大した事はないさ。ちょっとやられただけで”
“ちょっとやられた？　誰によ！”リサはそう叫んで、ぼくを、ぼくのアパートへと導いた。
部屋の中で、リサの手になる消毒水がピリリと痛んだ。
“これでいいわ。後はガーゼで止めておけば”
“リサ、お前は本当に可愛いね”
ぼくはそんなリサを見つめながら言った。あのときの苦しい気持から見れば、ここは小さなオアシスだった。失楽園の中のオアシス。ぼくは今、それに巡り会ったのだ…

　それにしても、どうしてぼくが殴られるハメになったのか、その理由が分からなかった。
　さっそくその翌日、みんなのいる酒場に寄った。
　“おめえ、知らねえのか”とメーチンクが言った。“最近レビは、別の暴力団と抗争していて、レビの仲間は全員マークされているんだ。お前も気を付けることだな”
　“でも、ぼくは何もしていないのに、どうして奴らは、ぼくのことを知っているんだろう？”
　“奴らにとっちゃ、要するに相手は誰でもいいんだ”と、メーチンクは言った。“一人でも脱落者を出せば、敵に打撃を与えることが出来ると考えているんだ”
　“でも、レビは何をしたんだよ”とぼくは尋ねた。
　“それが分からねえ”と、メーチンクが答えた。“奴は別世界にいて、オレたちには何も教えてくれないのさ。――でも噂によると、敵の一人に、こっぴどいリンチを加えたとかいう話しさ。正確なことは分からないが…”
　“リンチ！”ぼくはその言葉を聞いて恐ろしくなった。“それでみんなどうするのさ。黙ってここにいるだけなのかい？”
　“お前の話しを聞かせらりゃ少しは考えたくもなるけどよ、どうしようもないじゃないか”とメーチンクは答えた。“お前が助かったのは、場所がよかったからじゃねえのかい。ただでさえ人目につくところだからよ。もし場所が悪かったらどうなっていたことか。いずれにせよ、もう一度あるかも知れないから、注意することだな”
　“いやだよ、そんなこと”と、ぼくは怖くなって言った。
　そのときぼくには言えなかったが、ぼくには自分の身以外に心配なことがもう一つあった。
　それは、ぼくにとってアキレスけんのようなもので、ぼく以外にも、妹たちが、この都会で暮らしているということだった。今更ながら、ぼくは、セーラが言ったように、不良の道を歩んで来たことを後悔した。しかし、もう遅すぎる！

　今からでもまじめな道を歩むことができる。そう思って、ぼくはカリーンの家を訪れたが、カリーンは家には帰ってはいなかった。失望を抱いて、ぼくはカリーンのアパートを後にした。
　すべてから見放されたような、半ば自暴自棄な気持ちになって、ぼくは、メーチンクやラボスに誘われるまま、夜の盛り場にくり出して行った。
　妹たちの勤め場所も未だ知らないぼくは、自分の冷たさにあきれ返りながら、酒の世界にのめり込んで行った。バーを出るとみんな一杯気分で、いい気持ちだった。
　“お前の妹はどこで働いているんだ？”とメーチンクはしどろもどろに言った。“いい娘なのによ、ここへ呼び出したらどうなんだ？”
　“妹に手をかけると承知しないからな”と、ぼくは少し怖い顔をして叫んだ。
　“怖いな、シレール。今のは冗談、冗談”とメーチンクは体をよろけながら言った。
“どうせオレたちにはよ、女はいねえから、映画でも見に行こうか”

メーチンクが映画と言えば、それは、アダルト映画と決まっていた。
繁華街にあるお目当ての映画館が近付いて来たとき、街明かりを背景に向う側から二人の若い娘が幸せそうに歩いて来る姿が見えた。
一人はレインコートを着、今一人は厚地のセーターを着て、何か楽しそうに話しながらやって来る。ぼくの仲間らは、もの欲しそうに一瞬、彼女らの方に目を向けたが、からかう元気もなく、そのまま、映画館の切符売場に直行しようとした。ぼくも彼らに続いて、その後を追った。
そのときだった、
“あら兄さん！”
聞き覚えのある声が背後でして、ぼくは思わず立ち止まった。
振り向くと、さっきは逆光でよくは見えなかったその顔が、今や映画館の明かりの前にハッキリと照らし出されていた。見知らぬ娘と思っていたその二人は、思いがけずもセーラとリサだったのだ。しかも、こんな所で会ってしまうとは！
“何よ、この映画”と、セーラはあきれた顔で、一面に貼りめぐらされたポスターを見つめながら言った。“この映画を、今から見に入る気？”
しかし、見つけられた以上、ぼくとしては、居直る他なかった。
“そうだよ。見たいんだから、ほっといてくれよ”とぼくは言った。“いいからあっちへ行けよ。かっこ悪いじゃないか”
“そりゃそうよ。恥ずかしいとは思わないの”とセーラは言った。“だってね、リサ”
そう言いかけてセーラは振り向いたが、リサは恥ずかしそうに、向うの方へ走って行っていた。
“ホラッ、リサはショックなのよ”とセーラは言った。“まさか兄さんがこんなことをしているなんて知らなかったのよ。それでも兄さんは入る気なの？”
“お前たちとぼくとは関係ないんだ”と、ぼくは言った。“たかが映画を見たからって、それがどうなんだよ。いいからあっちへ行ってくれよ！”
切符売場の前では、ぼくの仲間や、切符売り場の娘が、ぼくたちのやりとりを面白そうに見つめていた。
“でも兄さんはまだ子供でしょ。年齢的にはその映画館には入れないはずよ”とセーラは怒ったように言った。
そのとき、メーチンクが助けに現れた。
“お嬢さんよ。言いがかりはよして下さい”と、彼は、ていねいに言った。“あっしたちはよくこの映画館に来ているんです。全員大人で通っているんです。それに――ここの姉ちゃんとも友達なんだ。どうか、あっしたちの邪魔だてはしないで下さいまし”
セーラは、ぼくの仲間たちの楯に会って分が悪くなったのか後ずさりを始めた。
そしてついに、
“勝手にしなさい！”と捨てゼリフを吐くと、くるりと向きを変えて、リサのいる暗がりの方に向

って、去って行くのだった。

“なかなか怒った顔が可愛いじゃないか”とメーチンクはヒヤかし半分に言ったけれど、ぼくにはこのことが、後々までもずっと気がかりだった。

というのも、今、悪の道に入りつつあるぼくにとって、唯一、天国から使わされた天使たちの言葉に耳を傾けることは必要ではないかと考え始めていたからでもあった。妹たちの叫びは、天使の叫びでもあった。

その夜、ぼくが薄暗い自分のアパートに戻って来ると、しばらくして、ドアでノックする音が聞こえた。開けると、そこにセーラが立っていた。
“兄さんがあんなことするからリサが大変よ”と、セーラは言うのだった。“帰ってからずっと泣いているわ。よほどショックだったようよ。実はきょう、兄さんが寒いだろうからって、二人で兄さんの上着の買物に行って来たところなの。それなのに、何よ、あのざまは。あんな仕打ちってないわ。ーーでも、ともかく買物だけは届けることにしたわ。今度、リサに会ったら、よく謝ってよ。頼んだわ。じゃあね”
そう言ってセーラは、紙包みをぼくに手渡すと、そのまま、ぼくから逃げるように帰って行ってしまった。
ぼくが紙包みを電灯に照らしながらそっとあけてみると、中から暖かそうなセーターが出て来た。二人の妹の心のこもったプレゼントだった。それを見ていると、急に目頭が熱くなって来て、いつのまにか涙のしずくが、セーターの上に落ちているのだった。

ぼくは迷っていた。悪の道と、天使のような妹たちとの間に引き裂かれて、どちらに行くべきか、迷っていた…

その晩、ぼくは真剣に考えた。自分が生きて来たこと。そしてこれからのこと。もう一度、初めからやり直すことができる。その言葉が、何度も耳の中で鳴り響いた。妹たちが、そのいい手本ではないか。まだ日が浅いとは言え、かつては裕福だったかも知れないが、今は貧しくとも、それなりに、精一杯生きている。何も金持だけがえらいんじゃない。むしろ金は人を堕落させるものだ。そう考えると、あの金持のカリーンが急に許せなくなって来た。彼女の裕福さがうとましく、また小憎らしかったのだ。そして今、二人の妹の心のこもったセーターを見つめるぼくは、一切の迷蒙から覚めたような気がした。あのカリーンがなんだ！　レビがなんだ！　彼らなしでもぼくはもう一度、一人で生きて行く。今後もう、彼らに頼るようなことはしないぞ！

その翌日、まず手初めに、ぼくはカリーンの家に行くことにした。彼女に絶縁状を送りつけるつもりだった。

アパートのベルを鳴らすと、中からきれいにおめかしをしたカリーンが現れた。これから、誰かとのデートが待っていたのかも知れない。いつもと違った時間のせいか、カリーンは、ぼくを見て、まごついた表情をした。

“あらシレール、きょうはまた、突然ね”と彼女は言った。

“入ってもいいかい？”と、ぼくは表情を引き締めて言った。

中に案内されると、ぼくは不機嫌そうに突然がなりたてた。

“不意を突くと、あんたはいつもこうなんだ。決まった、約束の時間にしかあんたはいない。この前だって、いて欲しいと思ったときにあんたはいなかった。もううんざりだ。何もかもうんざりさ！”

“どうしたの？ きょうはいやに不機嫌ね。何か、いやなことでもあったの？”と、カリーンは、困ったような表情をして言った。

“そうじゃないんだ”と、ぼくはきっぱりと言った。“もういやになったのさ。こんな生活いつまで続くか分かりやしない。ぼくはひとりで行くことに決めたんだ”

“どういうこと？　何があったのか説明してちょうだい”と、カリーンは、ぼくを見つめるなり言った。

“つまりさ”とぼくは言った。“自分の甘えがいやになったんだ。この甘えが、ぼく自身をダメにしているような気がして来たのさ。だから、もう一度自分を取り戻す為に、この甘えを断ち切ろうと思うんだ。ぼくは、そのことを言いに、ここへやって来たのさ”

“じゃあ、もう付き合わないっていうことなの？”と、カリーンは尋ねた。

“そう”とぼくはうなづいた。

するととたんに、今度はカリーンの方が、悲壮な表情になった。

“どうしてなの。急に？”とカリーンは言った。“この前までそんなこと、そのそぶりさえなかったじゃないの。妹さんがわたしのことを悪く言ったの。ねえ、そうでしょ”

“妹は関係ないよ”と、ぼくは言った。“一度もあんたのことなんか、話したことないよ”

“じゃあどうして？　訳が分からないわ”と、カリーンはうろたえたように言った。“心変わりの原因は何んなの？　やっぱり妹さんが原因？”

“そんなこと、どうでもいいだろう”と、ぼくはうるさそうに言った。“ともかくぼくは出るからね”

そう言ってぼくは出て行こうとした。

カリーンは、そんなぼくを、必死になって止めようとした。

“待って、シレール！”と、彼女は叫んだ。“あんたに出て行かれたら、わたし、どうなるの？”

“他の、好きな男と一緒になればいいだろう”と、ぼくは言った。

“待ってよ、シレール”と、カリーンはもう一度叫んだ。顔は、今にも泣き出しそうな表情だった。“あんたは、わたしのことを誤解しているわ。きっと、わたしのことを浮気な女だとそう思っているのね。そうじゃないの。そうじゃないのよ…”

そう叫んで彼女は、ぼくの腕をとるなり、部屋に引き戻そうとした。
“そうじゃないなら、何んなんだよ”と、ぼくはそのすがる手を払おうとして、うるさそうに言った。
“とんでもない誤解よ”と彼女は言った。“あんたを愛しているのが分からないの。初めのうちは遊び心だったかも知れないけれど、今はそうじゃないのよ。嘘じゃないわ。今じゃ、あなたなしではいられないのよ。本当よ。信じて！”
しかしぼくは冷静だった。
“いつも留守にしていて信じろというのかよ。へっ！”と、ぼくは叫んだ。“ともかくぼくは出て行く。そう決めたんだ”
そう言うなり、ぼくは力いっぱい、すがりつく彼女を後ろへ押した。その反動で、カリーンは、あっ！と叫ぶなり、床の上にころがった。そのスキを縫って、ぼくは駈け出した。
“待ってよ、シレール”と、カリーンは泣き叫んだが、もう遅かった。
階段を駈け降り、秋の薄明りのさす表通りに飛び出した。少し遅れてカリーンも追いかけて来た。
“シレール！　わたしが悪かったわ。許して！　お願いだから帰ってよ”
カリーンのその叫びで、振り向く通行人もいた。しかしぼくは、その声を無視して走り続けた。
しかし、その直後、思いがけない事件がもち上がった。
ヨットが停泊している寂しい海辺の道を走って行くと、突然、物陰から数人のコートのえりをたてた男が現れ、ぼくの行く手をさえ切った。
“おいおい坊や。何をそんなにあわててるんだ”と、そのうちの一人が叫んだ。
その瞬間、背後にいた男の顔を見て、あの連中だとぼくは直感した。ぼくはあわてて引き返そうとしたがもう遅かった。彼らは追いかけて来、しっかりとぼくの腕をつかんだ。
“何を逃げることがあるんだ、こいつ”と、ボス格の男が叫んだ。
そのとき、ぼくは、向うの方から駆けて来るカリーンの姿を見た。
ぼくは彼女に分かるように、大声で叫んだ。
“何をするんだよ。離せ！”
“おい、早くしようぜ。車だ！”と男は、仲間の一人に叫んだ。
叫ぶが早いか、早くも最初の一撃が、ぼくの腹に来た。痛みのせいで気がゆるんだスキに、いつのまに来たのか、ぼくは車の中に押し込められてしまった。
両方から連行された状態で、車の中に押し込められてしまうと、追いすがろうとしているカリーンを尻目に車は急発進した。
男が怖そうな声でぼくに叫んだ。
“大人しくするんだ。お前”
それからすぐぼくは、目隠しをされてしまった。

何分が過ぎただろうか。車の中では、関係のない話しばかりを男たちがガヤガヤと話していたので、その目的が分からなかった。しかし、車が止まって目隠しがはずされると、そこは、すっかり葉を落とした林がやたらと目につく山小屋だと分かった。
やっとぼくは車から降ろされ、その寂しい山小屋の中に連行された。
中には、サングラスをかけた年配の男の他に、数人の男が待ちかまえており、ぼくは彼らを見るなり、急に、全身が震え上がってしまった。
一番年上の男の前に座らされると、さっそく厳しい取り調べが始まった。
その中味は、ぼくには全く身に覚えのない、ある男の居場所を教えろ、というものだった。
ぼくが知らないと答えると、さっそくリンチの手初めのビンタを、思い切り、ぼくの頬に食らった。
そうして、質問を受けるたびに、次第次第に、その質問の輪郭が浮かび上がって来た。
どうもレビが、この仲間の男を人質に取ったらしく、彼は、この仲間にとって重要人物らしく、どうしても取り戻したいと考えているらしいことが。彼らは、ぼくがレビの友だちだったことをよくここまで知っているとあきれ果てるほど調べ上げていた。しかし、肝心のことになると、ぼくは何も知らなかったのだ。それなのに、知っていると検討をつけていた彼らは、容赦なく、ぼくにリンチを加えて来た。
ぼくは、椅子の上で後ろ手に縛られたまま、やがて顔が真赤にはれ上がってしまい、口からは血を流すようにさえなっていた。
リンチに一区切りがつくと、彼らは、頭の上から冷たい水をぶっかけた。
それは、ヒリヒリ痛む体に、思い切りこたえた。
“奴は白状しませんぜ。あるいは知らないかも”と、仲間の一人が、ボスにささやくように言った。
“よし、考えがある。別室にほおり込んでおけ”と言うなり、ボスは席を立った。
ぼくは、もうろうとした意識のまま引きたてられ、別室の、寒々とした床の上にほおり込まれてしまった。それでも、もうリンチがないと思うと、ほっとした気持だった。

それから何時間が過ぎたろうか。朝から何も食ってなくて腹がペコペコだったし、寒さが傷口によく染み込んだが、窓からさしこむ寒々とした冬の薄明かりがやがてうっすらと暗くなりつつあった頃、再び部屋の外が騒々しくなって来た。
それどころか、急にドアがあいたかと思うや、男たちのあいだにいる者の姿を見て、ぼくは唖然となった。
なんと、そこにいたのは後ろ手に縛られたリサではないか！
“お前、どうしてここに！”ぼくは思わず叫んでしまった。
“カリーンとかいう人がわたしたちの部屋に来て、兄さんが誘拐されたことを告げたわ”とリサは、この非常時の割には落ち着いて答えた。“姉さんがパニックになってカリーンと家を飛び出し

て行ったあと、わたしが部屋で待っていたらこの人たちがやって来たのよ。兄さんの居場所が分かったというもんだから、つい信用してしまって…”

“つまりだまされてここまで来たわけか…”とぼくは言った。“それでお前、ヒドい目には会わなかったのか？”
リサは、口をつぐんだまま、首を横に振った。
“まあ、そのくらいでいいだろう”と、リサを捕らえていた男の一人が言った。“オレたちは何もしちゃいねえさ。しかし、これまでの話しだ。これから先のことは分からねえ”
“何をお前たち！”と、ぼくは腹立ち紛れに言った。“妹にどうしようというんだよ！”
“つまりさ、お前次第というわけさ”
と、彼らの間から割って入るかのように、いつのまにかボスが姿を現して言った。
“見れば見るほど可愛い娘じゃないか。こんな妹を傷つけたくないだろう。もしそうなら、オレの言う通りにすることだな”
“一体どうしろと言うんだよ！”とぼくは叫んだ。
“つまり、オレたちの仲間のカルロスと、お前の妹との身柄の交換というわけさ”とボスは言った。“やり方はお前に任せる。あすの夕方五時までに、カルロスをお前のアパートに連れて来るんだ。オレの仲間をお前のアパートに待機させるから、そこでカルロスを引き渡してくればいい。無事カルロスが山荘に着けば妹は解放というわけだ。分かったな。あすの五時までだぞ。もしそれに失敗したなら、お前の妹の命はないものと思え”
“なんだって！　そんなバカな！”とぼくは叫んだ。“そんなの無理だよ。約束なんかできるものか！”
“お前が約束しようとしまいと、そんなことはどうでもいいんだ！”とボスは怒鳴った。“今言ったことは確実に実行する。分かったな。分かったら、すぐに行くんだ！”
“でも、妹を殺す気かよ！”とぼくは叫んだ。
リサもショックで、その瞬間、ボスの顔をにらみつけていた。しかも、いつのまにこんなに気丈になったのかとあきれるほど、リサは、去って行こうとするボスに向かって、激しい言葉を吐いた。
“兄さん！　わたしのことはかまわず、警察に届けて。そして、この人たちみんなを刑務所に送るのよ。お願い！”
“こいつ！”と、仲間の一人が手荒くリサを追い立てると、別の一人がニヤリと笑って、ぼくに言った。
“さあ行こうぜ。これがお前の妹の見納めとならないようにな”
ぼくは、体が、怒りと恐れとで震えるまま、目隠しをされ、再び外で待機している車のところへ連れて行かれることとなった。

約一時間後、ぼくがアパートで解放されるなり、すぐセーラのいる部屋に向かった。
部屋に行くと、中は明るく、ノックをすると、すぐセーラが姿を現した。
“兄さんなの。大丈夫？ さあ中に入って”

　セーラはすぐぼくを中に案内してくれた。相当とり乱したらしく、その表情には疲労の色が濃く出ていた。
　“二人ともいっぺんになくしたと思っていたわ。でも兄さんが戻ってくれて一安心。一体、これはどういうことなの？　説明して”
　セーラは、一気にまくしたてた。
　“リサも心配ないよ。今のところはね”と、ぼくは言い、ひと通りのことをセーラに説明した。
　セーラは、リサの身に危険が迫っていることを知るなり、再び心を取り乱してしまった。ぼくは、そんなセーラを、なだめるしかなかった。
　“待てよ、セーラ”とぼくは言った。“ここで嘆いていても、どうしようもないだろう。ぼくは今から、兄キに会いに行ってみるよ。お前はここで待っていてくれるがいい”
　“でもレビが、大人しくカルロスを返してくれると思う？”と、セーラは心配そうな表情をして言った。
　それから少しばかり、セーラは、自分たちのとった行動について説明してくれた。
　初対面のカリーンがやって来て、一緒にレビのいる球技場へ出掛けて行ったこと。
　しかしそこにはレビがいなくて、ラボスやメーチンクがいて、カリーンはラボスのことを知っていたので、彼らと一緒にレビに会いに行ったが、自分は一人、家に帰されたこと。　ところが家に帰って来ると、今度はリサがいなくて、テーブルに走り書きで、「兄さんのお友だちと兄に会いに行く」と書いてあったので、そのメモを持って再びみんなのいる所へ行ったところ、リサはだまされたのだと知り、いっぺんに目の前が真暗になってしまったこと。すっかり気が動転してしまったので、彼らの仲間が、落ち着かせる為に、自分を再びアパートに運んでくれたこと、などだった。
　“もういやよ。兄さんが行くなら、わたしも連れてって！”とセーラは叫んだ。
　それから、セーラはついでに、カリーンのことについても触れた。
　“あのカリーンとかいう人は、誰なの？”と、セーラは尋ねた。“どうして兄さんを知っているの？”
　“今はそんなことを説明している場合じゃないだろ”と、ぼくはうるさそうに言った。“今は一刻を争う場合なんだ。カリーンがレビに会いに行ってるんなら、もう既に何かつかんでいるかも知れない。カリーンに会うことさえできりゃ…　さあ、ともかく行こう”
　そう言ってセーラの手をとり、部屋を出ようとしたとき、突然ドアをノックする音がした。
　ドキッとし、また何んだろうと思いながら、ぼくはそっと、ドアをあけた。
　すると、扉の向うに立っていたのは、なんと、あのカリーンだった。彼女の後ろには、メーチンクや、ラボスもいた。
　“あら、シレール！”と、カリーンは、ぼくを見るなり、驚いて言った。“無事だったのね。どうしてここへ”
　“リサの身代わりさ”とぼくは答えた。

“いま、外を見ると不審な車が一台止まっていたぜ！”とメーチンクが落ち着かない表情で言った。

“きっとぼくを尾行している車だ。気を付けた方がいい”と、ぼくは答えた。

“それでどういうことなんだ。説明しろよ”とメーチンクが言った。

ぼくは一通り説明した後、カルロスという男がどうしても必要だということを強調した。

“やっぱり”とメーチンクはうなづいた。“兄貴もそのことを承知だった。もし、お前たちの命と引き換えなら、カルロスのことは考えてもいいという意見だった”

“それは有り難い”と、ぼくは心がパッと明るくなった気になって言った。

“しかし、喜ぶのはまだ早いぞ”とメーチンクは言った。“あくまでもカルロスはおとりで、奴らにいっぱい食らわしてやるのが目的なんだ。オレたちは色々と知恵をしぼったが、まさか、向うから飛びついて来るとはな。面白いじゃねえか。まあ、オレたちに任せておけ”

“でもカルロスは？”とぼくは、少し心配になって言った。“カルロスを、あしたの五時までに連れて来なきゃ、リサの命はないんだ！”

“まあ、そんなに心配するなよ、シレール”と、メーチンクは言った。“兄貴の居場所を奴らに知られるのはまずいんだ。だから、ここの所は慎重にやらねえとな。なあ、そこのお方”と言って、メーチンクはセーラを見た。“電話はあるかい？”

“電話は、一階へ降りて行った入口のところにありますわ”と、セーラは、不安気な面持で答えた。

“よし、じゃ言ってくるからな”と、メーチンクは言った。“ラボス、お前も来るんだ”

そう言って、二人が部屋を出て行くと、部屋の中は、ぼくたち三人だけが残された。

カリーンとセーラが互いに向き合い、ぼくはその間に立っていたものの、一瞬、気まずい空気が流れた。

カリーンとセーラ。この二人が仲良くなれるものかは、少しばかりか、大いに疑問だった。

ぼくたちは、とくに話すこともなく、ひたすら、メーチンクらが帰って来るのを待った。セーラも、さっきの疑問を、彼女のいる前で、ぼくにぶっつけるわけにも行かなかった。カリーンも、余りにもよく知っているセーラやリサのことを、ここでベラベラとしゃべるわけにも行かなかった。カリーンとぼくとはほんの淡い関係でしかなく、そういうものとして、この場をしのぐ他はなかった。

だから、カリーンがセーラに話しかけたのは次の一言でしかなかった。

“坐っていい？”

“ええ、どうぞ”と、セーラは、カリーンをテーブルの所へ案内した。

セーラも、彼女と向き合って坐り、ぼくはそんな彼女たちが見つめるなか、イライラした表情で、狭い部屋の中を、行ったり来たりして、歩き続けた。

しばらくすると、メーチンクたちが戻って来た。

“喜べよシレール”と言うメーチンクの表情は明るかった。“すべて解決したぜ。兄貴はカルロスを

引き渡してくれるとよ。しかも同時に名案も貸してくれたよ。後で話すからよ。ともかくのどが乾いた。コーヒを一杯くれないか”

　カルロスは、ぼくが想像していたのとは少し違っていた。彼は、レビに捕らわれたとばかり思っていたのだが、実はそうではなく、元の暴力団とのいざこざで脱走し、レビにかくまわれていたに過ぎなかったこと。しかし彼は、様々な秘密を知っていたので、暴力団はどうしても彼を取り戻したいとやっきになっていたのだった。ということは、カルロスを引き渡せば、彼が、元の仲間たちにヒドい目に合うのは、目に見えていた。普通なら、カルロスは易々と引き渡しに応ずるはずはなかったのだ。
　しかし、夕方四時過ぎ頃になって、レビは結局姿を現さなかったが、メーチンクに伴われてカルロスがぼくのアパートにやって来た。ぼくはまだ内心不安でいらいらしていたところだった。カルロスは、眉毛の濃い、まだはたちを過ぎた頃の若造に過ぎなかった。
　ぼくは、約束通り、アパートの向かいの路上に止まっている車に向かって、合図の白い布を上げた。しばらくすると、階段を上がって来る足音が聞こえ、それはぼくの部屋のドアの前で立ち止まり、やがてドアが開いた。そのとたん、カルロスがビクつき出した。
　“オレはいやだ”と、彼は言った。体が震えて、今にも逃げ出しそうだったが、ぼくとメーチンクが彼の体をつかんだ。
　“やあ、カルロス”と、姿を現した男は彼に向かって言った。“久し振りだな。どこに行ってたんだ。まあ、話しは、ボスに会ってから、じっくり聞こうじゃないか”
　仲間の男はもう一人いたので、カルロスは、逃げ出すわけにも行かなかった。もう一人の男はさっそくやって来るなり、無言のまま、カルロスの体を調べた。不審な凶器を持ってはいないか、検分を始めたのだ。彼が大丈夫だと合図を送ると、兄貴分の男がぼくたちの方に向かって言った。
　“それじゃ、カルロスはオレたちが預かるぜ。御苦労だったな”
　そうして彼らが、カルロスの身柄を引き取り、行こうとしかけたときになって、ぼくは叫んだ。
　“ちょっと待って！　ぼくも行かせてくれよ。妹を約束通り返してくれるか、この目で確かめたいんだ”
　“それは間違いないよ”と彼らは言ったが、メーチンクが威嚇するように彼らに言った。
　“おい、連れてってやれよ。人質に捕われているのは彼の妹なんだ”
　男たちは振り向き、手下の男がさっそくぼくの所にもやって来て、身体検査を始めた。もちろんぼくは何も持ってはいなかった。男たちは、ぼくを連れて行くことに同意してくれた。

　それから三十分ほどしたろうか、ぼくは目隠しをされていたので外の様子は分からなかったが、静かな山道を走っているらしいことは感じていた。ぼくと同じく捕われの身であるカルロスも終始無言だった。が、車が急に止まり、運転席がにわかに騒々しくなった。
　“なんだあいつらは”と、運転していた手下の男がつぶやくように言った。“チェッ！道をふさぎ

やがって。どけろっていうんだ”

　そう言うが早いか、助手席にいた兄貴分の男が、車から降り出した。そうして、止まっている車に文句をつけに行ったらしかった。もう日はとっくに暮れていた。
　“やいやいおめえら、そんな所に車を止めるなっていうんだい。邪魔じゃねえか”
　男が文句をつける声がぼくの耳にも聞こえて来た。すると、それに対して、若い女が答えた。
　“まあまあそう怒らないで。それよりか、わたしたち二人だけじゃとても力が足りないのよ。急ぐのなら、あんたたちも手伝ってよ”
　“オレに車を押せってか？　しようがねえな”
　そのやりとりを聞いているうちに、ぼくは胸がドキドキし、額には汗がにじみ出て来た。
　ぼくには、これがどういうことを意味しているかが分かっていた。あの女の声は、彼らには分からないだろうが、間違いなくセーラの声だった。
　向うでやがて起こるであろうことは予め分かっていたので、残るは、こちらでのぼくたちのやるべきことだった。もう一刻も猶予はならなかった。こちらの運転席に残って銃を握っている手下の男をぼくたちでなんとかせねばならない。それに対しては、カルロスがいいことを思いついた。
　突然、
　“あっ、警察だ！”と叫んだのだ。
　それが合図となって、運転席の男がひるんだスキに、カルロスがその男に手錠のまま飛びついた。
　ぼくも目隠しをはずし、一緒になってその男に組みついた。しかし男は、体をねじらせながら必死になって抵抗し、ついにピストルを一発、大きな音と共にぶっ放した。
　セーラが、真青な顔をして駈けつけて来る姿がドアの向うに映った。彼女は、ぼくが撃たれたのではないかと本気になって心配したらしかった。
　しかし今や、ぼくとカルロスとで、その男を有無を言わさず組み伏せていた。そこへラボスも来て、彼を無理やり車から引きずり降ろした。
　外では既に兄貴分の男が、一人の男に銃を突きつけられていて、身動きも出来ない状態でいた。銃を突きつけていた男は言うまでもなく、レビだった。
　“けがはなかったか、シレール”と彼は言った。
　“ああ、大丈夫だよ”とぼくは答えた。
　“そうか、万事うまく行ったわけだな”とレビは満足そうに答えた。

　再びぼくたちの車は走り出した。
　今や、ぼくとカルロスの手には銃が握られていて、前にいる二人の男は丸裸だった。
　二十分ほど後、ぼくたちを乗せた車は静かな山の一軒家に着いた。真暗な中で、ただ窓明かりだけがこうこうと光っていた。

　最初、車から降りたのは兄貴分の男とぼくだった。車の音をかぎつけ、中からすぐ数人の男が出て来たが、その男に向かって、ぼくの相棒の男は言った。
　“カルロスが血を吐きやがった。容体が少しおかしいんで手伝いに来てくれ！”
　出て来た男たちが暗闇に浮かぶ車の方にあわてて駆けて行ったが、その彼らと入れ代わりにぼくと相棒の男とは小屋の中に入った。中にはボスと、用心棒の男しか残ってはいなかった。彼らは笑顔になってぼくの相棒を迎え入れたが、そのとき、部屋の隅にいたリサが、ぼくの姿を見るなり叫んだ。
　“兄さん、どうして来たの。彼らが、わたしたちをこのまま黙って帰すと思って。そうじゃないわ。この人たち、兄さんも、わたしたちも殺すつもりなのよ！”
　その叫び声で、ぼくはリサを見て驚いた。
　知らぬ間にヒドい目にあったらしく、顔には青あざがつき、髪の毛も衣服も乱れ、見るも無残な状態だった。
　“よくも妹に！”とぼくは、一気に怒りが込み上げて叫んだ。
　それと同時に相棒が叫んだ。
　“おい気をつけろ！　奴は銃を持ってるんだ！”
　しかし彼が叫ぶまでもなく、ぼくは内ポケットから銃を取り出した。
　ボスも用心棒も何も出来ずにその場に立ち尽くした。
　“両手を挙げるんだ！”と、ぼくは彼らに銃口を向けながら指図した。“リサ、来るんだよ”
　ヒドい姿になったリサは、助かったとばかりぼくの所に駆けて来て、ぼくの後ろに回った。
　外ではもう既に決着がついていた。ラボスが息を切らせながらやって来て、両手を上げているボスと用心棒の銃を取り上げた。
　“おい、早くずらかろうぜ、シレール”と、彼は言った。“外ではうまく行ったよ。みんなとっちめてやった”
　ぼくたちは奴らの車と、レビたちが乗って来た車とに分乗し、急いでその山小屋から逃げ去って行った…

　万事うまく行ったかに見えた。ぼくたちは大得意だった。こんなに見事な人質救出作戦は、いかなる官製の特殊部隊でも及ぶまい。血の一滴も流すことなく、頭脳戦で、奴らをまんまと一杯食らわせてやったのだ。
　しかし、そうしてはしゃいでいれたのも、ほんの束の間だった。いつのまに非常線を張っていたのか、車の前方に、検問の網を張っているパトカーの群れが見えたのだ。
　ぼくたちは、救出されたリサと共に後ろの車に乗っていたが、前の、レビやメーチンクやセーラが乗っている車がどう出るか心配だった。もちろんぼくたちも、彼の車の出方にかかっていることは分かっていた。検問されれば、彼らの所持していた銃のことがバレてしまう。かといって検問を突破すれば、それこそ大事になってしまうだろう。しかし、レビは後者の道を選んだのだ

°

レビに続いて、ぼくたちの車も検問を突破した。
たちまちパトカーが、サイレンを鳴らして追跡し始めた。ぼくらは必死だった。カーブの道をジグザグに走り、ぼくたちの体は、右に左に、大揺れに揺れた。一難去ってまた一難のリサは、今にも泣き叫びそうだった。
しばらく夜道を走ると、やがて広い本通りに出た。ところがパトカーは、脇から前に競り出ようとし、やがてぼくたちの車のタイヤめがけて発砲しようとさえして来たのだ。その一発は、前を行くレビたちの車に見事命中し、たちどころにレビたちの乗っていた車はバランスを崩して停車を余儀無くされてしまった。おかげでぼくたちの乗っていた車も前を塞がれた恰好となり、スピードがついていたせいか、もう少しで追突してしまいそうになった。いや、実際、大きな音をたてて、ぼくたちの車は、レビの車に突っ込んでしまったのだ。大事には至らなかったが、そこでようやく二台の車は止まった。
しかし、ぐずぐずしている時間はなかった。続いてパトカーもすぐ追いついたので、ぼくたちは叫び声をたてながら、暗闇の車外に逃れた。
そこは寂しいビル街の一角で、実際そこは大きな囲いがしてあって、どうもビルの工事現場らしかった。しかしかまうことはなかった。ぼくたちは工事現場に向かって必死に走った。が、女どもは――といっても、セーラとリサのこの二人の妹しかいなかったが、すっかり恐怖におじけついたのか、その場に立ちすくんでしまって、もう一歩も動けそうになかった。ぼくたちは彼女たちを置いて逃げる他はなかった。警察は何よりも忌み嫌うものという訓練が出来ていたのだった。
泣きじゃくる妹たちを尻目に、ぼくたちは囲いのスキ間を見つけると、そこから中へと一気になだれ込んだ。
追いかける警官たちの一部は妹たちを取り囲み、残りは全員ぼくたちを追いかけて来た。
一方ぼくたちは、中に入ってがく然としていた。剥き出しの鉄骨の建造物――あの上へぼくたちは逃げて行く他ないのだろうか？　しかし敷地は広く、迂回するという手もあり、レビは素早く工事中のビルを迂回する決断をした。ぼくたちが一丸となって巻くように建設中のビルのあいだを逃げて行ったとき、続いて警官たちもスキ間から姿を現した。そして、月夜の暗闇に照らされたぼくたちを認めるや、ただちに追跡を開始した。
いつのまに援軍が到着したのだろうか、ぼくたちの行手に、急にライトをつけたパトカーが立ちはだかり、警官がマイクを持ってぼくたちに呼びかけた。
“大人しく降伏しなさい。もう逃げ場はないぞ、君たち。君たちは完全に包囲されている。逃げるのはやめなさい！”
ぼくたちは別の針路をとろうとしたが、そちらからも警官が駆けつけて来た。
レビは、悔しそうにつぶやいた。
“畜生。こんなんで負けてたまるかよ。オレはつかまりたくねえ。つかまればまたブタ箱入りだ。いやだよ。いやだ。いやだ…”

しかし、あきらかに、ぼくたちの逃げ場はせばめられていた。
ぼくたちは、路地から広場へとじりじりと追いつめられ、互いに身を寄せ合って最後のあがきに暮れていたが、ついに捨身の行動に出た。
一人一人が散り散りになって逃げ出そうとしたのだ。しかし最後の抵抗も空しく、一人、また一人と、ぼくたちは警官に取り押さえられて行った。ぼくは広場の隅で早くも数人の警官に乱暴につかまってしまったが、中には、工事中のビルの上に実際に逃げ込もうとした者もいた。それがレビなのかメーチンクなのか、ぼくには暗くてよく見えなかった。が、間もなくビルの上から銃声がした。続いて、迎え撃つ警官たちの一斉射撃の音が。犯人は足場を失い、まっさかさまに地面に落ちて行く姿が、逮捕されているぼくにも見えた。あれはきっとレビだ！とぼくは思った。いずれにせよ、このときほど絶望的で、やり切れない思いを抱いたことはなかった。

かくしてぼくたちは全員逮捕されてしまった。レビは瀕死の重傷を負ったけれど、幸い一命はとりとめた。妹たちは一応取り調べを受けたが、この事件では被害者という立場ですぐ釈放された。しかし、ぼくたちはそういうわけには行かなかった。銃所持及び麻薬取引などその他の余罪のかどで釈放は許されなかった。カルロスも一緒につかまったので、彼の口からぼくたちと敵対する山小屋の奴らもつかまるのは時間の問題だった。
ぼくたちは一緒になることは許されず、別々に留置所にぶち込まれることになった。
長い時間、ぼくは孤独に耐えた。そして今までのこと、これからのことについて考え、気持は落ち込んで行く一方だった。
そんなとき、ふと、面会に来た者がいるという。目を上げると、それは、妹のセーラとリサだった。
おりの中にいるこんな姿を、彼女たちにぼくはさらしたくなかった。彼女たちは、逮捕されたぼくのことを罪人と思っているかも知れなかったが、ぼくにはそんな意識は全くなかった。セーラの後ろにいたリサは、あのときの傷跡も生々しく、口許にガーゼを付けていた。
“本当だ。信じてくれ”と、ぼくは彼女たちに訴えた。“確かに警察が言うようにぼくは盗みはしたさ。強盗や車のかっぱらいなどはね。でも、麻薬には手をつけてはいない。これっぽっちもさ。あれはみんな、レビがやってたことなんだ。ぼくにはなんの相談もなかった。レビが証言してくれるはずさ。ぼくは、麻薬にはこれっぽっちも手をつけていないって”
“もういやよ、こんなことになるなんて”とセーラは言った。“兄さんが変な人たちと関係するからよ。あれほどわたしたちがあの人たちと付き合うのはやめてって言ってたのに、まだ分からなかったの。――でも、もう済んだことよ。ちゃんと罪を償って、きれいになって出て来てよ。そして約束して。もう二度と、今までのようなことはしませんと。今ならまだ出来るわ。今度出て来たら、まじめになって。まじめに働いて、そして、あの人たちとは、もう二度と付き合わないでねえ。わたしたちにかけて誓ってよ”

“分かったよ。みんなぼくが悪かったよ”と、ぼくは半分ふてくされながら答えた。“お前たちまでが事件に巻き込まれたのは悪かった。ぼくはこの二日ほどよく考えたんだ。足を洗うことにするよ。それが、ぼくの得た結論さ。お前の言う通り、ここを出れば、まじめになるつもりさ。もう悪いことはしない。たとい貧しくとも、泥棒はしないさ。それだけは誓わせてもらうよ”
“でも、あの人たちとの交際は？”と、セーラはなおも追求した。
“当分は付き合わないだろうさ”と、ぼくは答えた。今のところ、それしか言えなかった。
“当分じゃだめ。きっぱりと断ってよ”とセーラは、きびしく言った。
“でも、そんなこと”とぼくは言った。“約束はできないよ。もう泥棒はしないけれど、あいつらと会ったらあいさつぐらいはするだろう。全く会わないなんて、そんなことできるものか”
“でも、あの人たちに引きずり込まれちゃダメよ”と、セーラは強く念を押した。“もうこんなことになるなんて、もう二度とごめんだわ”
セーラは用件だけ済ませると、さっさと立ち去ろうとしたが、セーラがしゃべっているあいだ何も言わなかったリサだけは、後ろ髪を引かれる思いでぼくを見つめながら、寂しそうにぼくの下から去って行くのだった…

一日経って、まだ鉄格子の奥ですっかりしょげ返っていたぼくの所に、不意にリサが姿を現した。
今度は彼女ひとりだけだったが、すっかり絶望の底に沈んでいたぼくにとって、彼女の姿は、まるで天使のように思われた。しかし彼女は別にぼくに語りかけるのでもなく、悲しげな表情をしていたが、別に嘆くのでもなく、かと言ってぼくを非難するのでもなく、ただ鉄格子の向うから、打ち沈んだ表情で、じっとこのぼくを見つめるばかりだった。その打ち沈んだまなざしが、暗く、絶望の淵に閉ざされていたぼくの心を突き刺した。あのときほど、彼女が崇高で美しく、ぼくにとってかけがえのない存在だと感じたことはなかった。できるものならぼくは、鉄格子の向うに立っているリサを、この両手で力いっぱい抱き締めたかった。そして、彼女の崇高で美しい姿を、ぼくの希望の光そのものだと言って、神の御前にささげたかった。
看守が、しばらくしてぼくに言った。
“せっかく可愛い妹さんが君を見舞いに来てくれているんだ。罪を正直に認めて、早くここを出ることだね”
そう、ぼくは今すぐにでもここを飛び出し、リサの下へと駆け寄りたかった。そして、彼女と共に、もう誰の手も届かないところへと、去って行きたかった。
ぼくは、鉄格子ごしにリサのそばに歩み寄り、正直に自分の罪を認め、頭をうなだれた。
リサは、そんなぼくの頭を、鉄格子ごしに、優しくいたわってくれた。
“取り調べ官の話しじゃ、二ヶ月ほどの刑でぼくは出られるという話しだ”とぼくは言った。“それまでリサは、待っていてくれるね…”

“ええ、待っているわ”と、リサは、真剣な表情でぼくに答えてくれた。
このときほどリサを、美しいと感じたことはなかった。
しばらく話しのやりとりをした後、リサは看守に連れられて帰って行った。
しかし、彼女が消えた後も、ぼくの胸の中には余韻のようなものが残っていた。それは、これですべてが終わったわけではなく、早く社会復帰を願う、晴れ晴れとした気持だった…

しかし、その後、裁判所の決定により、予想に反して、三ケ月の刑を、ぼくは少年院ですごすことになった。この決定は意外で、少なからずぼくや妹たちに動揺を与えたが、やむを得ないことだった。まだレビやメーチンクに比べれば軽い方で、彼らは、半年以上の不定期刑だった。
さっそくぼくは、街郊外の少年院に送りこまれ、そこで見知らぬ不良どもとの辛い日々を過ごすこととなった。
しかし、彼らにいじめられたり、けんかしたりの日々の中で、週に一度の妹の面会は、ぼくのすさみ切った心を、十分にいやしてくれるものではあった。囚人の仲間からひやかされながらも、ぼくは心踊らせながら、彼女らに会いに行った。
たまにセーラが来ることもあったが、たいてい面会に来てくれたのは、あのリサ一人だけだった。彼女はぼくのことを色々と気づかい、来るときには必ず差し入れを持って来てくれたが、それらの品々が最終的にはいじめっ子たちに取り上げられることは、ぼくには分かっていた。
面会に来る人はほとんどいないらしく、面会室はいつも静かだった。看守の目はあったものの、留置所とは違い、ぼくたちは直に触れ合うことができた。ガラーンとした部屋に、椅子とテーブルがあり、一輪ざしの花が窓明かりに輝いているのが、ぼくの気を惹いた。リサは、初めて来たときほど、もはや打ち沈んだ表情をしてはいなかった。それでもぼくを見つめる目は真剣そのもので、ぼくは痛いほど彼女の気持が読み取れた。彼女は、ぼくが早く社会復帰して、全うな人生を歩むことを、心から願っていたのだ。
ぼくは、テーブルの上で彼女の手を取った。
“もう少しの辛抱さ”とぼくは言った。“ここの環境はヒドいものさ。最悪だよ。二度と来たいとは思わないさ。残念ながら、来年の正月もここで迎えそうだけど、年が明けりゃ、間もなくここを出るからね。そのときには思いっきりいい空気を吸って、それから羽根を伸ばしてやるんだ。もう御免だよ、こんな生活は。そして、お前たちにも迷惑はかけない。一から出直して、ぼくはちゃんとやって行くさ”
“その言葉を聞けば姉さんも喜ぶわ”とリサも、珍しく笑顔になって言った。“それでね”とリサは話題を変えて言った。“きのう、姉さんが、兄さんの部屋を引き払うことにしたわ”
“ぼくの部屋をかい？”とぼくは驚いて言った。
“家賃が滞納していたし、姉さんがとても家賃なんか払えないからだって”
“じゃぼくは、ここを出ればどこへ行けばいいんだい？”

“だから、兄さんの家財道具は全部わたしたちの所へ引き払ったのよ”
“じゃ、お前たちのアパートへぼくは行くことになるのかい？”
“だって、その方が合理的でしょ”とリサは言った。“わたしたちの部屋なら兄さんも住めるし、家賃だって二重に払わなくたって済むもの”
“でもあの部屋だって、そんなに広いとは言えないはずだよ”
“確かに窮屈にはなったけど…”とリサは言った。“背に腹は変えられないもの。いいじゃないの。わたしたち三人で、これからはここで生活して行くのよ”
“まあ、家賃滞納じゃ、やむを得ないけどなあ…”
ぼくは気乗りではなかったが、現状を認める他はなかった。しかし同時に、果たして、リサはともかく、セーラとうまくやって行けるものなのか、一抹の不安を感じたのも事実だった。

ぼくが少年院を出所したのは、年が明けた三月の半ばだった。
珍しく雪が降り、運動場も、少年院前の広場も、すっかり雪化粧をしていた。この日は珍しくセーラもやって来て、ぼくは簡単な手荷物を受け取ると、二人の妹に伴われて少年院の外に出た。久し振りに見る外の景色は、雪の白さも手伝って、まぶしいほどだった。ともかく、これであの地獄のような囚人生活ともおさらばだと思うだけでも、ぼくは胸いっぱいだった。そしてぼくはこれから、素晴らしい大海へと船出して行くのだ…

しかし、果たしてそうだろうか？　確かに出所したときは、嬉しく、感動に満ちていて他には何も考えなかったけれど、世間に対する甘い夢、単なる幻想を抱いていたに過ぎなかったのではないだろうか。世間は、ぼくが思っていたほど甘くはなかったし、たちまちのうちにすぐその壁にぶつかることとなった。
少年院上がりのぼくにいい仕事が回って来るはずもなく、ぼくは、ぼくには向かない街の工場で働く他はなかった。それは息の詰まる、単調な、辛い仕事だった…

第６章

　ぼくは一体何がしたいのだろう？　ただ泣いていたい。あのほんのかすかな村のイメージが失われてしまったからと言って泣いていた小娘のように、ぼくも泣いていたい。道端で見かけた彼女とぼくのあいだには、明らかに共通性があったのだ。彼女の心が誰にも知られないように、ぼくの心の奥深い秘密を一体誰が知ることができるだろう？　この夏には様々な人と出会った。ぼくも少しばかりは、生き生きした人々の活動というものを眺めることができた。が、今はこの人里離れた、寂しい、薄暗い部屋の中でひとりぽっちだ。そうだ、ぼくはいつもそうだった。ぼくに友人や恋人がいたためしがなかった。都会にいる現在だって、人はみなすれ違って行くだけで、ぼくの前で足を止めた人はいなかった。ぼくは本当に友情というものを知らないのだ。恋愛だって同じことだ。しかし、こんなことを書いてなんになるだろう？
　ぼくはひたすら、妖精を、夜の到来するのを待った。みんなが活動している昼は、ぼくには苦手だった。しかし夜なら、とりわけ孤独の夜なら、ぼくは安らぐことができる。そしてその瞬間から、ぼくの夢の世界が始まったのだ。ぼくは明かりを消して、ベッドに横になり、あるいは、机の前にすわったまま、暗い窓の外を眺めながら、現実にはあり得ない、不思議と平和で、安らかで、美しい理想の世界を空想した。その世界は訪れるかのような錯覚にしばしば捕らわれたが、たいていは、あいまいとしたふんいきが原因だったり、いつのまにか眠っていて夢を見ていたりで、実際に訪れるということがなかった。　だが、昨晩起こったことは、あれは決して夢ではなかったのだ。だが、どうして人がそれを信じてくれるだろう？　一体妹らは信じてくれるだろうか？　だが、人に信じてもらうことなど、今のぼくにとってはどうでもいい。ただぼくさえ、あの世界があることが本当であることを知り、その世界を眼のあたりにしたときのあの驚きを、今もありありと思い出せる限りは。

　ところで、ぼくはと言えば、ぼく自身、目下のところ失業中だ。ほんの半月ほど前までは町の鉄工所で働いていたけれど、あやまって足をつめ、働けなくなって、工場をやめてしまった。おかげで今も、右足だけビッコを引いている。医師によれば、この右足の傷は、もう一生なおらないそうだ。でもなんとか、今のところは、災害保険金によって、飯を食いつないでいる。それでもいずれは、又、働きに行かなければならないだろう。昨日だって、一日中、仕事を捜しに、ぼくは出歩いたのだった。だが、ビッコのぼくを雇ってくれるような殊勝な会社はなかった。事務職も一応当たってみたが、ぼくには学歴がないから、全然問題にならなかった。今は秋の終わり――空は晴れていたが、辺りはなんと膚寒かったのだろう。こんなとき、何もないとき、ぼくは小説を読むのが一番好きだ。それはぼくに、多くの夢を与えてくれる。その日ぼくは、ズボンの後ろポケットに、例のごとくペーパーバックスを突っ込んでいた。いつでも、退屈したときの用心に一冊は入れてあるのだ。この日入っていたのは、作者の名は忘れたが、「打ちのめされた女」とかいう題の本だった。

古本屋で見つけ、パラパラとめくり、内容が面白そうなので、ぼくはすぐ買った。無論、公にはできない、いかがわしい内容の本だった。ぼくはそれを、公園の休憩所で読むことにした。しばしば、描写のどぎついのを目にして、ぼくはゴクンと生つばを呑んだ。そうしているうちに夕方となり、近くで遊んでいた子供たちもみな帰ってしまったので、ぼくも公園を引き上げることにした。イチョウの裸の木が、公園を寂しく染め、そのはるか向うでは夕陽が沈みつつあった。これで、この日も空しく終わろうとしていたのだった。ぼくは、家に帰るのがつらい思いだった。何ひとつ充実した気持ちがなく、ただ空しさだけが心を占めていた。街角を通り、見覚えのある路地を抜けて、アパートにやって来た。入り組んだ裏街に、それはあった。汚い洗だくものが、いたるところに干してある。そうしたせせこましいところを、小さな子供が、何も知らず、無邪気に走り回っていた。ぼくはアパートに入り、階段を上がって行った。

自分の部屋の前に立ち、ドアをあけようとしたが、まだかぎはかかったままだった。ぼくはあい鍵をとり出し、ドアをあけた。すると、冷え冷えとする、暗い部屋の内部があらわれた。妹たちは、まだ帰っていないのだった。ぼくは明かりをつけ、テーブルの前までくると、椅子に座り、再び例の本を取り出して、読み始めた。

本を読んでいるあいだ、テーブルの上に置かれた目覚まし時計の音だけが、この静かな部屋で聞こえていた。間もなくして、ドアー一つ隔てた廊下の方で足音が聞こえたと思うや、すぐドアの把手が動き、ドアが開いた。ぼくは一瞬、青ざめてドアの方に目をやった。ドアの向うから姿を現したのは、セーラだった。

彼女は部屋に入って来るや、“ただいま”も言わず、ぼくにくるりと背を向けて、両方の靴の泥を払い始めた。それは、いつも彼女が帰って来たときにやる仕種だった。それから、彼女は、大きな荷物を持って、つかつかとテーブルのところまでくると、まるでそこにいるぼくを無視したように、荷物をテーブルの上に置き、一息ついた。ぼくは、そんな彼女の様子を、まじまじと、すぐそばから眺めていた。こんなことはしょっちゅうで、別段、珍しいことでもなかった。それに近頃では、彼女は、ぼくのことを兄とはみなさず、まるで、やっかいな居候のようにみなして、ほとんど口もきかないのだった。

“なんだい、その荷物は？”と、ぼくは遠慮がちに彼女に尋ねた。

そう言うと、彼女は、初めてぼくの存在に気がついたように、ぼくを見下ろした。

“柱時計よ。修繕に出していたのがなおったの”と、彼女は、忙しそうに答えた。それからすぐ話題を変えて、

“ちょっと兄さん、この部屋から出てくれない？　わたし、今から服を着替えるのよ”

部屋と言っても、ぼくたちの住んでいる部屋は、この部屋一つしかなかった。そこは、居間兼、食堂兼、寝室といった、なんでも兼ね備えている部屋だった。だから、そこから出るということは、廊下にほうり出されるということを意味しているのだった。“別に、ここにいてもかまわないだろう？　お前が着替えているあいだ、後ろ向いているからさ”と、ぼくは、めんどくさそうに、答えた。

“ダメよ”と、彼女は、かたくなに命令した。“兄さんみたいに、いやらしい人がいる部屋の中で、服を着替えることなんか、とってもできないわ”と、彼女は、きっぱりと言うのだった。

ぼくには、無論、反論がないわけではなかった。しかしぼくは疲れていたし、彼女以上に、精神的にも、肉体的にも疲れていた。そのうえ、ささいなことで、不必要なトラブルを起こしたくはなかった。ぼくが彼女の着替えている姿をわざわざ見るという根拠のない彼女の言い分に対して、それ相応の応酬がないわけではなかったが、もしぼくが折れて出、廊下に出るなら、事は簡単に片づくのだった。ぼくはその通りにした。本をテーブルの上に置くと、ドアに向かって歩み出した。

こんなことはしょっちゅうだった。とりわけ、近頃では、とみに、彼女のぼくに対する風当たりが強いのだった。彼女は、明らかに、ぼくを侮蔑の目で眺め、できるものなら、家からほうり出したいと、機会を狙っているのだった。ぼくも、これが自分の妹だとは、もう思ってはいなかった。彼女のように、思いやりや、理解が欠けた女は初めてだ、という気がしていた。部屋を出、廊下に立ちながら、つくづくとぼくは、そんなことを考えていた。

数分が立ち、彼女が服を着替えたらしいので、ぼくは中に入った。彼女は、もうすっかり着換えて、普段着に戻っていた。帰って来たときのけばけばしい服装に比べれば、随分と質素な服装になっていた。ぼくが入っても、彼女は何ひとつ反応を示すことがなかった。その代わり、彼女は、エプロンをつけながら、しきりに、テーブルの上に置かれた一冊の本に見入っていた。それは、ぼくが昼間に買った例の本だった。

“一体、これ、どうしたの？”と、彼女はぼくに尋ねた。

テーブルの上に、うかつにも置き忘れて出たのはぼくの失策だったが、しかし、ぼくは別に悪びれることはなかった。

“買ったのさ、古本屋で”と、ぼくは無造作に答えた。

“じゃ、仕事を捜しには行かなかったのね。それでいて、こんな本を読むなんて！”

“悪いかい？”と、ぼくは、彼女の憤慨した様子に、向っ腹を立てて言った。

だが、このことは、悪循環を増すばかりだった。

“あんたって、不潔よ”と、彼女は、いきり立って言った。“もう兄さんでもなんでもないわ。全くの他人よ。早く出て行って！　この家から出て行って！　いつまでも、あんたの世話を看るなんて、もうゴメンよ！！”

以上のようなけんまくだった。しかし、もうこれには慣れっこになっていたし、何ぶん、ぼくの方に、弱みがある以上、彼女の機嫌をそこねないよう、ずっと心に決めて来たのだった。ぼくは彼女にポンポン言われても、ただ黙ってうなだれているだけだった。

しかし、彼女の方は、いい気になって言うのだった。

“一体、この家の家賃を誰が払っているというの！　あたしよ。それに、毎日、料理をしているのは誰？　このあたしよ。それなのに、兄さんは、何もしていないじゃない。ただぶらぶらと外に出歩いて、つまらない本を読んでいるだけだわ。本当に、毎日、毎日、しょうがないわ。あ

んたって！　全然進歩していないじゃない。それどころか後退よ。

兄さんって人は。全くのふ抜けよ！　最近、一度だって働こうって気になったことがあるの？　本当に兄さんは、将来のことを考えているというの？　本を読んでいるだけじゃ、めしは食べられないのよ。あんたがどんだけ、あたしたちに迷惑をかけているか、それが分かっているというの？　一体毎日、誰が、あんたに飯を食べさせていると思っているの？　あたしたちがどんだけ、兄さんのために苦労しているか、それが分かっているというの？　本当に、あんたって、この家から出て行けばいいんだわ”

彼女が叱っているあいだ、ぼくはぼくで、彼女とこれからもずっと同居して行くうえで、彼女のような叱り方が、果たして道理にかなったものかどうかと考えていた。ぼくが甲斐性なしの男だといった言葉は、もう彼女の口から、何度も耳にした。それにはもう慣れていたから、べつだん、この日に言われたからといって、何とも思わなかった。それに、ぼくは、彼女のキーキー声と張合って、時間を無駄にしたくなかったのだ。こういうわけで、ぼくのほうが一歩譲り、彼女の言うがままにさせ、同居を続けることができるのだった。それにしても、余りにもひどい言い方だと、内心、ぼくは思った。

“いいよ。そのうち、この家から出て行くからさ”とぼくはぽつりと答えたが、それがせめてもの抵抗だった。

“嘘じゃないわね”と、すぐさま彼女が言った。“その方がわたしにとっても、リサにとっても、はるかにいいことなんだから…　それにしても、リサ、遅いわね。どうしたのかしら？”そう言って、彼女は、台所の方へと姿を消した。

そのとたん、ぼくの心の中では、それまで抑圧していた感情が一挙に吹き出したみたいになった。“セーラなんかに分かってたまるものか”と、ぼくは憎悪に満ちた感情で吐き捨てるようにつぶやいた。

ぼくはこの日、街をさ迷っていた。このことは既に書いた。それから公園に行って、わい雑な本を読んだことも。だがその帰りに、実は、ぼくはとっても美しい雲を見たのだった。雲は、西の空の方にまで広がり、薄汚い都会のごたごたした姿の頭上で、それは清らかな姿を見せていた。都会の家並が影のように見える地平線近くでは、雲に裂け目ができて、青空がのぞき、黄色い、得も言えない輝きと、姿を見せない太陽光が投げかける、幾筋もの薄いベールのような光の筋が、はるか彼方のビルの上に、降り注いでいた。ぼくは、それを見て、こんなにも美しい世界がこの都会にあったのかと、驚きに打たれたのだった。だが、その清らかな空がかなでる、広がる雲と青空の饗宴に比して、地上の都会は、余りにも汚い姿をさらしていた。そこでは、破壊された建物、工場の騒音、車の響き、排気ガス、窃盗と、姦計と、さい疑心とが渦巻いている。貧富の差ははなはだしく、暴力ざたはしょっちゅうなのだ。巷には、失業者があふれている。ぼくも今はその一人だが、明日の運命も分からない不安な毎日だ。誰もが救いを求め、上にはい上がりたいと考えているが、幸運に浴するのはほんの一握りの人間でしかない。機会と運に見放された人は、そのつらい、下層の生活にあえぎながら暮らして行く他はない。若い娘たちは、苦しまぎれに、売春へと走るだろう。麻薬、取り締まり、手錠、逃亡、そして、死、そのくらいのこ

とは、ぼくにでも分かっている。

毎日、身にしみて、体験していることなのだから。だが、ぼくが問題にしていることは、そんなことじゃない。ぼくはただ欲しいのだ。あの雲が、あの空が…　あの地平線が暗示していた本当の世界が、ぼくは欲しいのだ。こんな都会など、もうどうなってもいい。そんなものは、崩れ去れ。焼け野原となっちまえ。だが、美しい空は、たとい都会が瓦れきになろうとも、まるで何も知らないかのように、相変わらずその美しい姿を地上に投げかけているだろう。

なんと不思議な感覚だったのか。ぼくが見たものは、原始と文明とがごっちゃになっていたのだ。清らかなものと、汚濁とが隣り合っていた。だが、それら二つは、混ざり合うことはないのだ。決して、混ざり合うことがない。都市そのものが、あのバベルの塔のごとく、天国に近づこうと意欲するのでないかぎりは。

こうしてぼくは、この日、天国をかい間みたという歓びに打たれながら、我が家へと帰って来たのだが、待っていたのは、ただ孤独と貧しいセーラの罵声でしかなかった。ああ、彼女には分からないのだろうか？　ぼくの苦しみが…

――ぼくの苦しみ、それは天国に到り着きたいという狂おしいまでの願望だった。それがどうして、ぼくの心の中に培われて来たのかは知らない。だが恐らく、小さい頃に、様々な不幸な目に出会い、その中から、現実ではダメなのだという意識が芽生えて来たのだろう。ぼくの精一杯の生活では、何ひとつ、救いをもたらすことはなかった。もともと救いとは、現実的なものではなく、はるかに精神的なものなのだ。だがそうだとするなら、一体それは、どこへ行けば求められるというのだろう？

夢の世界へか？　だが、あまた夢を見て来たが、慰みとなるものは、何ひとつなかった。

ぼくは、どうすればいいのか分からず、とほうに暮れて来た。だが、そうしたことを全く理解しないセーラは、今では、ぼくのことを変人扱いしているのだった。

“兄さんの言ってる天国なんて、あるはずがないわ”と、彼女はよく反論した。“もっとしっかりと現実を見なさいよ。そうすれば、どんなに貧しい生活をしているか、それが見えてくるわ”

セーラの決まりきった言葉。彼女は、頭から天国を信じてはいないのだ。だが、それなら、彼女自身の救いはどこにあるというのだろう？　ぼくは、そのことを逆に、彼女に一度ついてやったことがあった。

“それならセーラ、お前にとって、救いとは一体何なんだ？”

“救い？ そんなこと、考えたことがないわ”と、彼女は答えた、“生活が忙しくて、兄さんのような暇人の発想の仕方ができないのよ”とも、彼女は言った。

救いが、一つの発想に過ぎないとは、恐れ入った発想だ。それこそまさに、彼女の発想ではないだろうか？

…ぼくはベッドの上に横になり、新聞を読み始めた。そのあいだセーラは、台所で、夕食の用意を始めた。彼女の後ろ姿が、ぼくの目にも、ちらほらと見えていた。だが、ぼくの意識は、彼女の方にも、新聞のうえにも行ってはいなかった。

　要するに、ぼくはじっと考えていたのだ。一体、いつまで、こんな生活が続くのだろう？　一生は、いやだ、とぼくは思った。せめて、なんらかの変化が欲しい。別に大きなことは望みはしないけれど、小さなことであっても、かけがえのないようなものが欲しいのだ。そうしたささいな変化が、ぼくの生活を変えることになるかも知れない…
　かつてぼくは何度も、こういったことについて、セーラと議論のやりとりをしたことがある。
　“なあ、セーラよ、こんな生活を毎日続けていて、それでなんとも思わないのかい？”とぼくはある日、なんとはなしに、彼女に言ってみた。
　“だって、仕方がないでしょ。あたしの生活がこうなんだから”と、彼女は、ぶっきらぼうに答えた。その当時から、彼女は、ぼくの言うことに全く信を置いていないのだった。
　“じゃ、それで満足なのかい？”と、ぼくはさらに尋ねた。
　“満足じゃないけど”と彼女は言った、“でも、それなりに楽しいときもあるわ。ただ兄さんを見るときを除いてはね”
　“ほう、じゃ、ぼくを見ていると楽しくなくなるのかい？”
　“ええ、そうよ”と、彼女はきっぱりと答えた。“兄さんは、陰気くさいわ。ちっとも朗らかなところがありゃしない。それに、しつこいのよ。しつこい人は、あたし、大嫌い。兄さんの言っていることは、いつも同じことなのよ。この世が美しくないからって、それがなんなのよ。汚なければ汚いなりに現実を認めて、生きて行く以外にないじゃないの？　それに、兄さんが思っているほど、世の中は地獄じゃないわ。いいことだって、たくさんあるのよ。それなのに、どうして兄さんは、そうした見方ができないの？　世間が冷たいって兄さんはよく言うけど、その前に、兄さん自身が冷たいんじゃないの？”
　そう言って、彼女は、言うことはすべて言ったし、もうそれ以上議論を続けるのは御免だと言わんばかりに、その場から、忙しく立ち去ろうとした。だが、すぐぼくは、そんなセーラを引き止めた。
　“ちょっと待てよ、セーラ。そうじゃないんだって。ぼくの言っていることを、よく聞いてくれよ”と言って、ぼくは彼女の手首をつかまえて、引っ張った。
　“ちょっと放してよ”と彼女は言いかけたが、ぼくの強引さに負けたのか、すぐ元通りの椅子に腰掛けた。そして、しんきくさそうに言った、“一体何が言いたいの？　早く言って。あたしも忙しいんだから。もしこれが兄さんでなけりゃ、とっても聞いてなんかやらないところよ”
　“分かってるさ”と、ぼくは答え、一息つくと、一語一語よく選び抜きながら話し始めた、“別だん、今から言おうと思っていることは、お前に分かってもらおうと思っちゃいない。でも、よく聞いて欲しいんだ。お前の言うとおり、聞いてくれる人は、お前以外に誰もいやしないんだから。だけど、世の中じゃ誰も聞かないことだからって、ぼくの叫びまで消してしまっていいものだろうか？　それなら、まるで、ぼくの抹殺に等しいんだ。だって、そうだろう、ぼくは、本当のことが言えずに苦しんでいるのだから。じゃ、本当のことって、なんだろう？　それは、孤独なのさ。世間の陰に隠れて見えない穴なのさ。

本当に叫びたい人が、叫べずに苦しんでいる、その悲しみなのさ。こういったものが、本当に、お前にはないと言うのかい？　もし、良心に誓ってないというなら、お前は、幸福ものなのさ。ただそれだけのことで、なんの問題も生じないだろう。だが、世の中と言うものは、決して、そういった側面だけから構成されているわけじゃないんだ。ぼくなんか、むしろ、世の中とは正反対の極にいる。世の中とは、まるでなんのかかわりもないかのごとくだ。まあ、こういったことについては、別に強調しないだろう。でも、どうして、こんなことになったのか、その理由については、ぼくにはよく分かっている。それは、お前には理解に苦しむことかも知れないけれど、ぼくは、奇蹟を信じているからなのさ。現実が崩壊しても、それでもなお救いの光が訪れるような奇蹟を、ぼくは信じているからなのさ”

“じゃ、勝手に兄さんは、その奇蹟とやらを信じていればいいじゃないの”と、彼女は、冷たく言った。きっとその心の奥底には、実際的なことは何もしないで！といった非難が込められていたのだろう。ただ彼女は、あえてそのことを言い出したがらないだけなのだ。

だが、ぼくは、あえて、自信ありげに答えた。

“ああ、その通りさ。信じていれば、それはいつか必ず訪れる。それはもう間違いのないことだ。ただし信じないものには、決して訪れないけれどね”

“いいわ。好きなように言いなさいよ。あたしには、とってもそんなこと、信じられそうにないんだから”と、彼女は、きっぱりと答えた。

しかし、ぼくはもうこれ以上、彼女と議論を続けるのは無駄だと判断した。二人はただどこまで行っても、平行線をたどるだけだし、決して分かってもらえそうになかったのだから。

ぼくは、再び、自分の心の内に、閉じ篭もる他はなかった。心の世界は、こんなにいっぱいで、はちきれて、今にも外に向かって飛び出して行きそうだったのに、再び狭い世界へと押し戻されるという憂き目に会ったのだった。それも、ぼくのことをちっとも分かろうとしない、あのかたくなな、セーラのおかげだった。

だが、ぼくの心の世界は決して、抹殺されたわけではなかったのだ。どうしてそんなことができるだろう？　このぼくが死なない限りは。そして、ぼくは信じていたのだ。奇蹟とは、ほくの心の世界が解き放たれ、世の中に向かって羽ばたいて行くときに訪れるのだと。

…こういったことを想い出していたとき、二番目の妹のリサが帰って来た。

“ただいま。遅くなって御免なさいね。もう夕飯の支度はしているの？”と彼女は、姉のことを気づかって、心配気に尋ねた。

リサは、全く可愛い女だ。あどけなくて、優しくて、無垢で、そして、何よりも、ぼくのことを信頼しきっている。彼女も、人に頼らないでは生きて行けない弱い女なんだろう。まるで、ぼくが人生の予言者か何かのように、ぼくの言うことに、じっと耳を傾けてくれるのだ。こんなうぶな女は他にはいない。こちらが気恥ずかしくなるくらい、それは熱心に、彼女は耳を傾けてくれるのだ。ぼくが美的世界観を語るとき、そこに何か重大な意味が隠されているかのように、彼女は、遠い思いを込めて、じっとそれに耳を傾ける。だが語っている方のぼくにしちゃ、自分が

まるで、アルコール中毒患者のように見えて来て、無垢な彼女をだましているんではないかという侮蔑の念にかられてくるのだ。

実際のはなし、ぼくには、人を導く力なんて、どこにもない。ただ、人生の無力さ、悲しさにおぼれる、アルコール中毒患者にすぎない。その点は、セーラの言うとおりなんだ。でも、そういったぼくの言うことに、耳を傾けたいんなら、傾けるがいい。ぼくは別に、そのことを拒みはしないだろう。ただその代わり、何ひとつぼくは、その人に幸せというものを約束しないだろう。

“兄さんったら、そんなところで横になっていないで、手伝ったらどうなの！”と、突然、セーラの罵声が聞こえた。彼女は、最近よく怒るのだ。人を人とも思わない口調でだ。以前なら、まだためらいが見られた。だが今では、感情をむき出しだ。――しかしぼくの方に明らかに非が見られたので、ぼくは仕方なしに立ち上がった。急に、頭がふらついた。今日、一日の疲れのせいだろう。ぼくは、彼女が二言めの文句を言う前に、台所へ食器を取りに行った。

同じ屋根の下で、男が一人、女が二人というのは、決してよくない。そこでは、女が権力を握るのだ。たとい腹が立って、男がこぶしを振り上げても、女は決してその抵抗を止めないだろう。それどころか、猛烈な口の攻撃で、男を説き伏せようとするのだ。これには、男はどうすることもできない。女の武器は、明らかに、その口にあるのだ。そして、二人目の女は、しどろもどろの男に比べて、流れるような弁舌の第一の女のほうに、軍配を上げるだろう。セーラは、長い生活のうちに、そうしたことを知り、弁舌を第一の武器と心得ている。最近、その口は、このぼくを動かす威力すらもっているのだ。

以前のぼくは、そんなことがなかった。ぼくは明らかに、絶対的な権力を有していた。ただ決して乱用するということがなかったので、彼女らは、ぼくに対して絶対的な信頼を寄せていたのだ、もう二ヶ月程前のことだったけれども。しかし、いつのまにか、少しづつ、その権威が切り崩されて行った。ぼくのつまづきや、せっぱ詰まった生活から、ぼくは徐々に、権力を乱用するようになって来たのだ。それと共に、彼女らは身構えるようになり、もうぼくの言うことを聞かないようになって来た。それどころか、抵抗し、反抗するようにさえなって来た。それが今ではどうだ、反対にぼくに命令を下すほどの伸長ぶりだ。以前の彼女からは、決して想像がつかなかっただろう。

食事はつつましいものだった。パンとスープと野菜とじゃがいもの煮たものと玉子。いつもと同じ内容で、ぼくは別に文句も言わなかった。ぼくは、彼女らがつつましく食事をしているあいだ、新聞を読みながらその場をしのごうと、いつも心に決めていた。要するに、食事中の団らんというものは、ぼくたちの生活では、無縁のことなのだ。ぼくにはもはや、セーラに話すことなど、何もなかった。しかし、彼女の方は、ぼくに対して、いろいろと文句があるだろう。ぼくは、それを、新聞を読んでいるふりをして、わざと避けていたのだ。

食事がなかなかのどに通らなかったので、ぼくは、いくつかを食べ残した。するとセーラは、待ってましたとばかり、ぼくに文句を言った。

“全部食べなさいよ。残すなんて、もったいないわ！”

その言い草に、ぼくはむかっときた。

“一体お前は誰だ？　ママなのかい？　兄のぼくに向かって、大きな口をたたくなよ”と、ぼくは、彼女に怒鳴った。
しかし、今では、彼女も負けてはいないのだ。
“兄だからって、少しもえらくないのよ。何さ、文句だけ一人前で、実際には何もしていないくせに。食事を食べ残すというのが、何よりもその証拠よ。あたしらを見て？　兄さんの分まで働いているから、ほら、こんなに食欲が旺盛なのよ。それに比べて、兄さんったらなにさ。いつも青ざめた顔をして帰って来るくせに”
“ぼくの体の弱いのを責める気なのかい？”と、ぼくは言った。胸の中はもう痛みでいっぱいだった。ぼくは、自分の弱点を人に言われるのが、一番いやだったのだ。とりわけ、そのために様々な苦しみをなめなければならなかった病弱な自分のことを突かれるのが、一番つらかった。健康なセーラには、恐らくそれが分からないのだろう。もしぼくが健康だったら、せめて人並みにでも健康だったなら、こんなことで苦しんだりはしない。
“努力で直そうとしないんだから”と、セーラは、平然とした顔つきで答えた。
“何が努力なもんか！”と、ぼくは、心の中で叫んだ。ぼくは、様々な経験から、努力ではなおらないものがあることを知っているのだ。既にそのことを知っているのだ。しかし、ぼくは、そのことを口にはしなかった。口にしたところで、なんになるだろう？
ぼくは黙って立ち上がり、すごすごと食器をかたずけると、その足で自分のベッドに向かった。ぼくの場所からは、食事をしているセーラの後ろ姿が見えた。普段は言いたいことを言うセーラだが、その後ろ姿を見ると、急に哀れをさそった。彼女だって、恐らくは毎日苦しんでいるのだろう。その苦情が、ああいう形で、ぼくの前にあらわれるのだろう。しかし、ぼくには、彼女の悩みまで聞けるほどの余裕は、もうないのだ。
やがて、セーラはすくっと立ち上がり、黙ったまま、食器をかたずけに行った。リサはまだ、椅子に腰を掛けて、まっすぐな姿勢で食事を続けていた。その横の姿が､ぼくの方から見えていた。彼女は、あらわな足をきちんとそろえて、両靴をピッタリと床の上にくっつけている。脇腹からその上にかけて、ときどき腕でかくれたりするが、ふくよかな胸を暗示する、前に突き出た曲線が、ちらっと見えたりする。そのたんびに、見ているぼくは、ドキリッとするのだった。押さえ難い欲情の発露なのだろうか？　だがぼくはすぐ、そういった欲情を打ち消そうとした。目の前で呼吸している女を欲情の対象とすることなど、とてもぼくにはできない相談だった。まして、リサは、ぼくの妹だ…
間もなくして、セーラが台所から姿をあらわした。リサは、それとほぼ時を同じくして、食器を洗いに台所に消えた。セーラは、テーブルの前まで来ると、疲れたように椅子に坐り、手を額に当てると、そのままじっと考え込むような様子をした。彼女も相当疲れているのだろう。しかし、それだけではなく、何かを思い悩んでいるのだ。いつもは、そんな姿を見ても気にならないぼくだったが、このときばかりは、なんとなく、彼女のその様子が気になった。それで、何気なしに尋ねてみたのだ。

“一体、何を、考え事しているんだい？”

不意に、背後から予期せぬことを言われたためなのか、一瞬彼女がギョッとするのが分った。
“何をって”と、彼女は、うろたえて答えた。“別に考えごとしていることなんか何もないわ”
“隠すなよ”と、ぼくはすぐ反論した。“今のその様子じゃ、だいぶ深刻に思い悩んでいる様子だったじゃないか。本当は弱虫のくせに”
この最後の言葉が効いたのか、彼女は、鋭い目を、ぼくの方に向けた。それから強く打ち消すように、
“思い悩んでなんかいないわ。兄さんみたいに、くよくよしたりはしないんですもの。ただ少し疲れていただけよ”
“ほんとにそれだけなのか？”と、ぼくはさらに言った。“でも、ぼくは、そんなこと信じない。それどころか、お前の考えていることなど、まる分かりなのさ。そして、いまのは、化けの皮がはがれたようなものさ”
“じゃ一体、その化けの皮とはなんなのよ”と、彼女は言った。
“化けの皮とは、お前の強がり。この家の中心になろうとするお前の思い上がりだが、そんなことはそもそも、お前には無理な話しなのさ”と、ぼくは、しごく冷静に答えた。しかし、こう言うと同時に、ぼくはもう、こういったことで彼女と張り合う気がしなくなった。もうたくさんなのだ。このまま生きて行くことさえ、もううんざりだ。まして、どうして妹と張り合わねばならないのだろう？
セーラは、なおも食い下がって来ようとしたが、ぼくはもう相手にしなかった。
“兄さんって、ひきょうよ”と、セーラは額に青筋を立てて言った。“何さ、自分の言いたいことだけ言って、逆に攻撃されて都合が悪くなると口を閉ざして、逃げようとするのね。そんなこと、させないわ。兄さんって、気まぐれで、移り気なのよ。臆病で、意気地なしなのよ。悪い性質ばかり持っていて、いい性質なんて、これっぽっちもありゃしない…
移り気？　そう、ぼくは移り気だった。これぽっちだって、ぼくの意識が世界のどこかに固定されたことはなかった。ぼくは、ただ眠っていたいのだ。静かに眠っていたい。そして、やがて訪れる夢の中には一切がある。だから、ぼくは、セーラのガミガミいう声が、最後の方では、もはや聞きとれなかった。ぼくは眠っていたのだった。
すると間もなくして、孤独な夢の中から、昨夜の断片が、おぼろげに目に見えて来た。一体、あれは、どこの国だったのだろうか？　ぼくは、晴れ上がった空の下を、どこへともなしに続いている一本の道に導かれて歩いて行くと、やがて、小さな村に出会った。そこは、静かで、家も通りも店も、まるで死んでいるかのようだった。静かな光が燦々と街の至るところに降り注いでいた。そのとき、ふと小さな路地から、少女が顔をのぞかせたかと思うと、いたずらっぽくぼくの前を駆けて行った。道は、ずっと向うまで続いていた。だだっ広く、脇には小川が流れ、草むらが広がっていた。それに沿って建っている家のどこかに、彼女は住んでいるのだろうか？　駆けて行く少女は振り向き、その小悪魔のような顔を、ぼくの方に向けた。

それはまるで、ぼくに、ついて来るようにと誘っているようなそぶりだった。ぼくはつい、その少女の魅力に惹かれ、その後をついて行った。すると彼女は、小川に沿った家ではなく、やがて、辺ぴな山のふもとにある、森におおわれた一軒家に、ぼくを案内してくれたのだった。彼女は、入口にこのぼくを待たせ、薄暗い、農家風の家の中に入って行った。そして間もなくすると、

“おかあさん、あの人”という彼女の声が聞こえて来た。“ね、一晩だけでも、泊めてあげていいでしょう。あたしの部屋を使ってもらうわ。あの人、旅人らしいけど、道に迷ってしまったらしいのよ”

すると、その可愛らしい声に応えるように、しゃがれた中年の弱々しい女の声が聞こえて来た。

“いいよ。あんたのことだから、好きなようにおし。死んだお父さんだって、反対じゃないでしょうから”その声は、もはや影響力を失い、半ばあきらめといったふうだった。

するとすぐ、

“わっ、ありがとう！”という彼女の声が聞こえた。“さすがは、お母さんね”

そして、再び、家の奥の暗がりから、彼女が姿を現した。その顔は生き生きとしていた、“聞いたでしょ？”と彼女は言った。“さっ早く、荷物を、あたしの部屋に置いて。今晩は、あたしの部屋に泊まっていいのよ”

“でもさ、君はどうするの？”と、ぼくは言った。

“あたしのこと？”と、彼女は一瞬声をつまらせた。“心配いらないわ、弟の部屋でいっしょに寝るから”

“弟がいるの？”と、ぼくは尋ねた。

“ええいるわ。今はまだ学校に行っているけど。とってもやんちゃで、とっても可愛いの。帰って来たら、一度お会いになってね”

“うん、そうするよ”とぼくは答えた。

部屋に案内されると、ぼくは、荷物を片付けることにした。が、部屋の窓を見て、ぼくは驚いた。素晴らしい海の景色が一望の下に、見渡せたのだ。はるか、がけの下だったが、きり立った岸壁には波がくだけ散り、しぶきが霧のように舞い上がっていた。岬がずっと遠くまで、海上を延びている。海の色は真っ青だった。空は晴れ上がっていた。そういった明るい光景が一度に、窓を通して、ぼくの目に飛び込んで来たのだった。恐らく、この部屋に来るまでは、崖にさえぎられた山道を歩いて来たために、すぐふもとの方が海になっていたことに気づかなかったのだろう。それはまるで、夢のような光景だった。

“ねえ、景色がいいでしょう”ふと振り向くと、さっきの少女が立っていた。彼女は、ぼくの方を見ないで、窓ガラスの外を見つめたまま、続けた。“夏になれば、海水浴客で結構賑わうのよ。でも、都会ほどじゃないけどね。さてと”そう言って彼女は、ぼくの方へ振り向き、明るいまなざしの一瞥を投げかけると、その足で出口の方に向かい、再び、ぼくに声を掛けた。

“ちょっと、裏庭へ来ない？　野菜や果物などが植わっていて、とってもいいところなのよ”ぼくは、そうして、あらわな腕で手まねきする彼女の後を、言われるままについて行くことにした。彼女は、とんとんとんと階段を降り、さらに、裏口へと向かった。薄暗い廊下の突き当たりに、やがて、パッと明るい裏庭が現れた。余りの突然のことに、ぼくは、初めてそれを目にしたとき、これが庭なのかと信じられないくらいだった。彼女は、潅木の茂みに横向きに立っていて、何か、木の花の匂いを嗅いでいるようだった。“ねえ、素敵でしょう？”と、彼女は、ぼくが来るなり、言った。“かいでみなさい。とってもいい匂いよ。この庭には、こんなお花が数十ってあるのよ”ぼくも、彼女に言われるままにかいだが、初めて鼻にする、甘美で、夢見るような、心地よい匂いがした。それは、ぼくの全く知らない花だった。“一体、これは、なんていう花だい？”とぼくは、彼女に尋ねた。すると、彼女は、にっこりとして答えた。“ミモザよ。知らない？”“ううん、知らない。初めて聞いた。でも、アカシアとよく似ているね”と、ぼくが言うと、“ええ、そうよ。それと同じ仲間よ”と、そっけなく彼女は言うと、さらに、奥へ進んで行った。ぼくは、そんな彼女を、後ろから、まじまじと眺め、何か、惹かれるものを感じていた…

ふと、気がつくと、ぼくはひとりだった。部屋の中は、きちんと片付けられ、他に人がいる気配はなかった。もう辺りは明るく、昼に近かった。やがて、ぼんやりした意識のうちに、だんだん分かって来た。今はもう昼で、あれから一晩が経過し、妹たちはもう働きに出掛け、ぼくがただひとり、自分の狭いベッドに取り残されたことを。しかし、ぼくは、急には起きたりせず、ぼんやりと、そのまま、自分の部屋を眺めていた。部屋の外では、何かしら、車の音や、人のざわめきなどが、耳に伝わって来た。しかし、ぼくは、それら物音に注意を向けず、ただ、のどかな静けさのうちに安らっていた。そのうち、様々な考えが、頭に去来した。一体、妹たちはどのようにして、ぼくの目を覚ますことなく、出掛けたのだろう？　とか、また、仕事を捜しに出掛けねばならない、とか、一体、いつまでこんな生活が続くのだろう、など。そう思うと、絶望的になって来るのだった。ぼくの体のおとろえはどうしようもなく、又、意識も、だんだん仕事から遠ざかりつつあった。ぼくは、現実の何もかも忘れて、ただ、こののどかなひとときを安らっていたかった。それと共に、時が永遠に停止し、このまま何も起こらないことをぼくは望んだのだ。部屋いっぱいに満たす淡い、秋の光は、ちょうど時の停止を思わせ、そんな気持を、ぼくにもたらした。しかし、そんなまどろむような中にも、ぼくの頭は空虚ではなく、様々なイメージや考えが行きかっていた。現在、妹たちが街へ仕事に行っていることや、往来のせわしさや、それから、ふと、ずっと以前、ぼくがどこかで見た、ちょうどこんな秋の日の、広い公園のベンチで腰かけて顔を見上げたとき目に飛び込んで来た驚くべきのどかな光景などが、頭の中で交錯し、寂しさや悲しさで分からないような気持ちになって来た。体を起こし、仕事に行かねばならない気持に何度か、かられたが、その都度意識は、それを否定した。――そうこうするうちに、時は昼となり、ぼくは食事の為に起き上がった。近くのカフェまで、腹を満たすため、行かねばなるまい。ぼくは上着を着、テーブルの上に置いてあった一日の小遣いをひっつかむと、アパートから出て行った。

ぼくは、カフェに行く途中、リサが勤めている書店のそばを通って行くことにした。別に、リサに会うというつもりはなかったが、なんともいえない人恋しさがそうさせたのだろう。書店は、バスで三つ目のところにあった。バスを降りると、店まではすぐで、ぼくは、目立たないように、両手をポケットに突っ込んで歩いた。店の前を横切るとき、ちらっと中を覗いたが、ちょうど彼女が、中年の婦人を相手に話している姿が目に入って来た。無論、彼女が、ぼくに気づくということはなかった。やがてぼくはカフェに入り、軽い食事を頼んだ。ここは、人の出入りが少なく、いつもすいていて、ぼくがよく来るカフェで、座る場所もいつも決まっていた。きょうも、通りに面した窓際のテーブルに、ぼくは席を取った。しばらく、往来の人通りを眺めながら、コーヒを飲んだり、食事をしたりしているうちに、次第に、ぼくは眠くなって来た。ぼくは、うたた寝をし、いつのまにか、再び夢の世界に舞い戻ったようだった。

“あら、一体どこへ行ってたの？”と、突然、彼女が声を掛けた。“一体何処へって？”ぼくは、はっと我に返って言葉を返した。あたりは、不思議なことに、さき程の庭だった。彼女は、振り向いて、立って、このぼくを見つめていた。その彼女が口を開いた。“とぼけないで、てっきりあたしの後をついて来てるものと思っていたのに、かくれたりして。一体どこにいたの？”“どこにって…”と、ぼくは答えに窮した。すぐには答えようがなかったからだ。“まあいいわ”と彼女は言い、“さあ、こっちよ”と言って、今度はぼくの手を取り、奥へぼくを連れて行った。やがて来たところは、見事な菜園だった。規模こそ大きくはなかったが、そこには、キャベツやジャガイモやネギやにんじんなどが、所狭しと各区画ごとに植わっていた。“ねえ、見事でしょう”と、彼女は、自慢気に言った。“これ、あたしとお母さんと弟の三人でつくっているのよ、誰の手も借りずに。ねえ、素敵でしょう。あっ、こら！”と、彼女は急に叫び、手に持っていた小枝を急に振り上げた。ぼくが、彼女の目の方向を見ると、ちょうど畑の隅の方に、リスのような小動物がにんじんをかじっているのが目に入って来た。彼女は、それを見るなり、脇目もふらず、猛然と突っかかって行った。哀れにも小さな動物は、くりっとした目を一層大きくして、一目散に退散して行った。彼女は、つかまえられないのを見てとると、あきらめて、ぼくの方へ戻って来た。“あ〜あ、残念だったわ、もうちょっとだったのに”と、彼女は、口惜しそうにつぶやいた。それからぼくに向かって、“ねえ、分かるでしょ”と、彼女は言った。“あんな動物に荒らされたりするのよ、せっかくあたしたちが汗水を流してつくったという作物なのに。あんなものに荒らされてたまるもんですか！”彼女は、相当、かっかしているようだった。しかし、そんな彼女の顔も、一段と可愛いく、魅力的だった。

“さっ、帰りましょ”と彼女は言った。そして、今来た道を引っ返して行く彼女に、ぼくは声を掛けた。“あっ、この菜園の向うはどうなってるの？”“菜園の向う？”と彼女は言った。“あ〜、お山よ。木ばかりあって、何もないわ。あたしらだって、めったに踏み入れることがないところよ。でも、ところどころに小川があったりして、なかなかいいところもあるらしいわ。弟の話だけれどね。さっ、もう遅いし、帰りましょ”そう言って、彼女は、どんどん先を急いで行った。

ぼくも、その後を遅れまいとついて行った。しかし、なんとのどかなところだろう。とりわけ、後ろに広がる裏山は、霧に包まれ、神秘的な姿を見せていた。

やがて、再びぼくたちは、花園を通り、あの古びた農家に戻って来た。そのとき、家の前に一人の女が立っているのが認められた。ぼくたちが近付いたのに気づいたのか、その女は振り向いた。それは初めて見る彼女の母親の顔だったが、大きな目と整った鼻に気品が感じられる以外、これといった特徴のない、ごくひかえ目で、ほつれた髪の毛に苦労性が伺われる普通の中年の婦人だった。“あっお母さん！”と、彼女は母親を見るなり駆けて行った。そして、母親の手を取るなり、ぼくのところにやって来た。“紹介するわ”と、彼女は言った。“これが、あたしの母親でアンナ・ストラレスカ。年は秘密よ。それから、この人は…”“シレール・ホールバラです”と、ぼくはすかさず言った。“どうぞよろしく、ストラレスカ夫人”“あら、そんな改まった言い方、しなくていいのよ。うちのお母さんは、そんなお母さんじゃないもの。もっと気軽に接していいのよ”“あんたはどこから来なさった？”と、突然、その女は口を開いた。“あの、セルッカからです”“セルッカ？

聞いたことがないね。一体、それはどこにあるの？”“あ〜、お母さんったら”突然、彼女が止めに入った。そして､母親を支えるようにして家の中に入って行くと、まもなくして、彼女は戻って来た。そして、ぼくに言った。“ねっ、分かったでしょ。母親は、なんにも分からないのよ。家のことはよく働くんだけど、世間のことはとんとうとくてね。だからさっき言ったでしょ、お母さんは、そんなお母さんじゃないって。もっとも、娘時分から、この村から一歩も外に出たことがないっていうから、無理もないって思うけど。でも、それで困るのよ。なんでもあたしが代わりにしなくちゃならないから。本当にお母さんって、何も知らないのよ。この前だって、弟がけがしたとき、内科と外科のお医者さんを間違えるんだから、本当にいやになっちゃう。お父さんが生きていた頃は、そんなことはなかったけどね。だって、家のことは、なんでもお父さんがやってくれたからよ。だけど、お父さんが亡くなってからは、家もダメになってしまったわ”“へえ〜、お父さんが亡くなったの”と、ぼくは、口を差しはさんだ。“ええそうよ、事故で亡くなったの”と、彼女は寂しそうに答えた。しかし、悲しい気持ちを振り切るように、彼女は、わざと笑顔をつくろった。“近くにお父さんの墓があるわ。そのうち、そこへあんたを案内するわね”そう言うなり、彼女は、ぼくの手を取って、家の中に連れて行った…

“おい、起きなよ、お客さん！”という声で、ぼくはふと目を覚ました。気がつくと、店のマスターがぼくをゆすっているところだった。ぼくは、いつのまにか、テーブルの上に倒れて夢を見ていたのだ。“お客さん、困りますよ、こんなところで寝込まれちゃ。他の客にもいい迷惑だ。それに、もう夕方ですぜ”そう言われて、ぼくはふと窓の外を見た。確かに、往来の向かいのビルには西陽が当たり、往きかう人々の足もどこか気ぜわしそうだった。もう帰る時刻だとぼくは思った。“ごめんなさい、つい寝込んでしまって”と言って、ぼくは立ち上がった。

“気をつけて下さいよ、今後は…”とマスターは言いかけたが、彼の非難をかわすため、ぼくは、テーブルの上にチップをはずんでおいた。そしてすがすがしい気持ちで往来に出た。木枯らしの冷たい風が膚に突き刺したが、ぼくは別に寒いとは思わなかった。

ぼくがアパートに戻って来ると、部屋には既にセーラがいて、椅子に腰掛け新聞を読んでいた。彼女は、ぼくを見るなり、きつい目で、ぼくに尋問した。

“仕事は見つかったの？”

“いや、ダメだった”と、ぼくは首を横に振った。

“でも、仕事は捜したんでしょ”と彼女は、さらに詰問した。

“いや、それが…”と、ぼくは正直に答えた。別に捜しても見つからなかったと嘘をついてもよかったのだが、どうせしつこく詮索されるに決まっているから、初めから正直に言うことにしたのだ。セーラは当然のこと、鋭い非難を浴びせかけて来た。しかしぼくは、もう彼女の口攻撃には慣れっこになっていたし、黙って耐え忍んだ後、こう殺し文句を付け加えてやった。

“今は見つからなくても、そのうち見つけるさ”

それでもセーラは承知せず、一体いつになったら見つけるの、期限を設定しなさいと要求して来たのだ。

“じゃ、今月中”と、ぼくはむっとなって言った。無論、それもどうなるか分からなかったが、はずみでそう言ってしまったのだ。

“今月中ね”と、セーラは念を押したように言った。それから、こう付け加えた。“もしそれを守らないようなら、本当にこの家から出て行ってもらいますからね！”

ぼくは、それには答えなかった。ぼくのアパートを引き払ったのは一体誰なんだという反発がないわけでもなかったが、そんなことを言えば、家賃を滞納していたのは誰なの！　という反論を持ち出すに決まっているし、あえて口げんかをする気にはなれなかった。しかし、そんなことよりも、ずっとぼくの心を占めることがあったのだ。ぼくは、このアパートに帰ってくるまでの間、ずっと一つの疑問にとりつかれていた。それは、初めはあいまいとしていたが、次第にはっきりとし、真相が分かるにつれ、やがて単なる疑問から驚きに変わって来たものだった。ぼくは今や、一日のうちに、二つの夢を見たことを思い出していた。しかもその二つの夢が別々のものではなく、関連性があることに気づき、それは単なる偶然というよりは、驚きに変わったのだ。そればかりではなく、夢が、いつも見る夢ではなく、もっと密度が濃いように思われた。それは確かに夢には違いなかったが、これまで見た夢とは、根本的に違った何かなのだ。ぼくは、こうした疑問に満たされて、家に帰って来たのだった。しかし、こんなこと、妹たちに話すことができるだろうか？

食事のとき、ぼくはふと口を差し挟んだ。

“二人とも大人しいんだね。何かしゃべること、ないんかい？”

セーラと、それからまもなく帰って来たリサが大人しくスープをすすっていたが、ぼくの言葉で、二人は、ぼくを見つめた。

“だって、兄さんとしゃべることなんか、何もないでしょう”と、セーラがめんどくさそうに言った。

“じゃ、きょうは代わりに、ぼくがしゃべってやろう”と、ぼくはかまわずに続けた。“実はきょう珍しい夢を見たんだ”

リサは、興味深げにぼくの方を見ていたが、セーラがくさしたように言った。

“また、夢だなんて！　夢を見て、生活はできないのよ！　兄さんには、全くあきれてしまうわ。もっとしっかりしてよ。今は、夢なんか見ている場合じゃないでしょ！”

セーラは、頭から、ぼくの話など聞く気がなかったのだ。しかし、ぼくはじっと我慢して、セーラの話が終わるのを待って、落ち着いて重い口を開いた。

“セーラの言うことは分かっているさ。今は、仕事を捜さなきゃならないし、夢を見ている場合なんかじゃない”

“そおよ”と、セーラは答えた。

“ぼくだって別にこんな話をするつもりはなかったさ”

“じゃ、しなければいいじゃないの”と、セーラはさらにつっかかった。

“まっ、待てよ、セーラ。ぼくの言うことをよく聞けってば！”ぼくも、一段と声を大きくして彼女の妨害を制止しなければならなかった、“ぼくだって、普通の夢を見たんなら、こんな話を持ち出しはしなかったさ。でも、けさと昼間に見た夢は、どうも普通の夢には思えないんだ。

“へえーどんな夢なの？”と、リサが興味深げに、ぼくに言った。セーラが、聞きたくないって言わんばかりに顔をそらして黙っていたのとは対照的だった。

ぼくは、セーラの顔色も伺いながら、ゆっくりと話し始めた。

“ぼくも、こんな夢を見たのは初めてだ。今やすっかり思い出したけど、ぼくは全く切れ目のない二つの夢を同じ日に見たんだ”

“そんな夢など、珍しくもなんでもないじゃない”と、セーラが、バカにしたように、口をはさんだ。

“でも、それが普通じゃないんだ。けさ見た夢と昼間見た夢の場所が全く違わなかったし、それにとても生き生きしているんだ。まるで夢ではなかったみたいに”

“そんな夢、珍しくはないわ”と、またセーラが、そっけなく言った。それから、早急に話しを打ち切ろうと、彼女は、一気にまくしたてた。“そんな夢など、いくらでもあるでしょ。夢の続きを見たとか、まるで本当みたいだったとか、そんな話しはよく聞くわ。夢で聞いた音楽をよく覚えているとか、見たこともない小鳥が飛んでいたとか、そんな話しも聞いたことがあるわ。そのうち、兄さんは、夢の中に出て来た人が本物のようだったとでも言い出すんじゃないかしら。でも、今、そんな話しをしてなんになるの！”

セーラの頭には生活のことしかなく、夢のことなどどうでもいいことだった。しかし、ぼくは、是非話しておきたかった。

“ああ、その通りさ”とぼくは続けた。“セーラの言う通り、まるで本物みたいな女の子が出て来たんだ”

　それみなさいと言わんばかりに、セーラはぼくを見た。しかし、リサは逆に興味をもっているようだった。
　“その女の子、どんな子なの？”と、リサはぼくに尋ねた。
　“そう、年の頃は、十四〜五、ちょうどお前くらいか、もう少し若いっていうところだな。顔もよく覚えているよ。でもどう言ったらよいか、とってもませているようで、でも子供っぽいところもあるんだ。その子が、二度目の夢を見たとき、ぼくがいなくなったんで、捜してた、なんてことを言うんだ”
“へ〜え、面白いわね”と、リサが言った。“兄さんがいなくなったって、つまり、夢から覚めたときのこと？”
　“どうもそうらしいんだ”と、ぼくは答えた。
　そのとき、黙っていたセーラが、つまらないと言わんばかりに、口をさしはさんだ。
　“ふん、聞いていられないわ”と、彼女は、軽蔑したように言った。“夢の中に出て来た女の子がどうなのさ。その子が、待っていたとか、ませているとか、兄さんがだらしないからそんな夢を見るのはよく分かるけどさ、そんなに夢が好きなら、いっそのこと、その夢の子と結婚すればいいじゃないの”
　この悪意に満ちたセーラの言葉には、ぼくは、ガツンと来た。彼女には、ぼくの真剣さが、まるで冗談のようにしか映らないのだ。ぼくも、今度の今度は、我慢できなくなったのだった。ぼくは、かっとなって叫んだ。
　“ぼくがだらしないからそんな夢を見るって、一体それはどういう意味なんだよ！”ぼくは、そう叫んで席を立った。
　セーラは、ぼくが怒るとは予期していなかったらしく、逆上したぼくに、思わず腕で顔を隠すように身構えて、ぼくを見上げた。それは、ぼくが怒ったときに、彼女がよくやるくせなのだ。昔は、ぼくの暴力が、彼女の頭上に落ちたこともあったが、今は、その名残が残っているとでも言うのだろうか？　しかし、リサまでもがぼくをこわそうに見つめているのを見ると、ぼくは立ったまま、所在をなくしてしまった。
　“チェッ面白くないな。話す気をなくしてしまったよ！”ぼくはそう言って、セーラに腹いせをするでなく、席を蹴って、自分のベッドに戻った。
　リサがすぐやって来ようとしたが、セーラが、彼女の手首をつかんで引き止めたようだった。
　“およしよ、行くのは”というセーラの声が聞こえた。また、セーラがこうも言うのが聞こえて来た。“兄さんは気が狂っているんだから、相手にしないほうがいいの”
　ぼくは、自分のベッドに横になりながら、じっと耐えた。もう、セーラなんかに話してやるものかとも思った。そして、何もかもが、いやになってくるのだった。あ〜、こんな生活から早く脱出したい。すると、ふと、セーラが言った言葉を思い出したのだ。彼女は、確かこう言ったはずだ。“そんなに言うんなら、早く、夢の女の子と結婚すればいいじゃないの”って。あ〜、本当に、できるものなら、してみたいよ。そして、こんな世の中のこと、きれいさっぱり忘れてしまい

たい…

ふと、ぼくの肩をさわるものがいて気がつくと、そこにリサがいた。
“兄さん、どうして怒ったりしたの”と、彼女は、声を小さくして、言った。
“セーラは？”と、ぼくは、思わず起き上がって、言った。
“今、台所で食器を洗っているわ”と、リサは答えた。
ぼくは、体を起こし、床に足をつけると、しばらくうなだれたように、床の一点を見つめていた。やがて、おもむろに、ぼくはリサに向かって、言った。無論、声は小さくしてだったけれども。
“リサ、セーラは信じてくれなかったけれども、お前は信じてくれるってそう信じて、ぼくは話すんだ”
“ええ、信じるわ”と、リサは、優しく答えてくれた。
“分かってる。そうでなきゃ、ぼくも話すものか。もうセーラには、絶対に話してやらないけどね。でも、お前には話してあげる。実はぼく、あれは、生々しい夢なんかじゃなく、今では、夢じゃなかったって気がしているんだ”
一瞬、恐怖がよぎるような沈黙が流れた。
“じゃ､夢じゃなかったって、それは何なの？”リサが、不安げに尋ねた。
“さあ、ぼくにも分からない”と、ぼくは、まじめな顔をして答えた。“それが分からないんで、ぼくも悩んでいるんだ。それで、やっぱり夢だったって気もするけれど、それにしては、余りにも不思議だし、生々し過ぎるんだ。ぼくにも、未だに、何がなんだか分からない。まるで、夢じゃなく、別の世界へ連れて行かれたような気がするんだ”
“兄さんは、本当に不思議な夢を見たようね”と、リサは小声で言った。“きっと疲れているのよ。姉さんも言ってたわ。きっと疲れているからあんな夢を見たんだって。だから、風呂に入って、早く横になるといいわ”
“そうかも知れない”と、ぼくは、弱々しくつぶやいた。
“何をしているの、そんなところで！”と突然、夢を破るようなセーラの声が聞こえた。
セーラは、食器を洗い終わったらしく、エプロンで手を拭きながらやって来た。そして、ベッドに腰掛けているぼくと、そのすぐ横にすわって優しくいたわってくれるリサの二人を見つめると、急に何を思ったのか、プィッと顔をそらせると、隣の自分の寝室に向かった。しかし、やがて、隣の部屋からすすり泣きするのが聞こえて、ぼくとリサは、思わず顔を見合わせた。ぼくはゆっくりと立ち上がり、つま先立って、セーラの寝室に向かった。リサが、その後に続いた。
ドアの向うでは、セーラが、壁の鏡に向かって、髪の毛をとかしているところだった。しかし、鏡の顔を見つめているその瞳は、涙でうるんでいた。時々彼女は、髪の毛をすく手をやめて、その手で鼻をすすっていた。そんなセーラの姿を、ドアのところに立ってじっと見つめていると、やがて、彼女の悲しい気持が分かってくるような気がした。そればかりか、そんなセーラが、自分の妹ではなく、まるで、母親のように思われてくるのだった。

ぼくは、こらえきれなくなって、そんなセーラのところに歩み寄った。セーラは、足音を聞き、驚いて振り向いた。が、もう遅かった。ぼくの両手は、しっかりとセーラをつかまえていた。ぼくは、セーラを抱き締めながら言った。

“セーラ、ごめんよ、あんなことを言ったりして”と、ぼくは、あやまった。セーラは、ぼくに抱きかかえられたまま、身動きもできず、また、驚いた顔をやめなかった。しかし、その目の周囲は、可哀そうに、真赤に泣きはらしていたのだ。“もう、二度と、あんな夢のことなど、言わないよ”と、ぼくは再び続けた。“ごめんよ、ぼくが間違っていたんだ。本当に、こんなに大変なときだというのに、一体ぼくは、どうしたというんだろう。夢なんか見てさ、こんな話しなど、もち出さなければよかったんだ。いや、夢のことなど、どうでもよかったんだ。本当に、あやまるよ。ごめんね、セーラ。ぼくも、もっと真剣になるよ。もう、夢がどうだの、こうだの、そんなうわついたことは言わないよ。だからセーラ、許してよ、本当にあやまるからさ。ほら、この通り”

ぼくは、そう言って、セーラの左の頬に力いっぱいキスして、それから、彼女を放した。

セーラは、放されると、ほこりでも払うように、自分の肩や腕をはらった。その顔は、まだ決して、ぼくを許しているという風ではなかった。やがてセーラは、まるで何事もなかったように、落ち着き払って、再び鏡に向かうと、ぼくの方は無視して、黙って、髪の毛をすき始めた。ぼくは、自分の改心が、セーラに通じなかったことを感じた。でも、すぐにはあきらめなかった。ぼくは、鏡を見つめているセーラの横顔を見ながら、言った。

“まだ怒っているんだね。きっと、そうなんだよ。ぼくが、口先だけいいことを言って、やるべきことをやっていないって、きっとそう言いたいんだろ。ぼくも、そのことはよく分かっているさ。だから、今度こそ、ぼくは仕事を見つけるよ。もうぜいたくなんか言わない。職安へ行って、清掃でも、ポスター張りでも、行けばきっと何か見つかるさ。今度こそ、ぼくは、真剣になって仕事を見つけるよ”

“それ、本当なの？”と、初めて、セーラは口を開いた。

“ああ、本当だよ。嘘じゃない。あした、さっそく当たってみるつもりさ”

セーラは、やっとぼくの方を向いた。その顔は、穏やかで、真剣さに満ちていた。ぼくも緊張し、身が引き締まる思いがした。セーラは、ちらっとぼくを見ると、すぐ、顔をそらして、リサのいる出入口に向かった。

“さて、あたし、風呂に入りたいわ。兄さんが入りたいんなら、先に入りなさいよ。きょうは疲れているんでしょ。昼、カフェで居眠りをしてたって、聞いたぐらいなんだから”

そう言って、セーラは、浴室に向かった。

“分かったよ”と、ぼくは言った。“じゃ、お言葉に甘えさせてもらって、ぼくが先、風呂に入らせてもらうよ”

ぼくは、浴槽の湯かげんを調節しているセーラの後を追って、中に入った。セーラは黙って、手で湯をかき回し、湯の量を調節していた。そんなセーラの後ろ姿が、それを見たときのぼくの目に、何とも言えぬ愛くるしい気持を起こさせるのだった。ぼくはじっとセーラを見つめ、彼女

が湯をかきまぜるままに任せておいた。

“さて、ちょうどいい量になったわ”と、彼女は、体を起こして言った。そしてくるりと振り向くと、ぼくに視線を合わさず彼女は言った。“兄さんが先に入るんなら、入りなさいよ”
“ああ”とぼくは返事をし、着替えの準備をした。

最後のリサが、浴槽から上がって来たのは、かれこれ十時頃だった。ぼくの部屋はもう暗くし、ぼくもベッドの上に横になっていたが、浴室に通じる二人の寝室はまだ明るかった。二つの部屋のあいだにはドアがなかったので、ぼくの位置からは、彼女らの部屋がよく見通せた。二つ並べた彼女らのベッドは見えなかったが、さっきの壁にかかった鏡は、ぼくの位置からよく見え、それを通して、彼女らの部屋の様子がだいたい分かるのだった。やがて、その鏡の前を、浴室から上がって来たばかりのリサが横切った。彼女の頭は、まだぬれてしずくが垂れ、体には、黄色いバスタオル一枚を巻きつけてあるだけの姿だったので、ぼくは思わず、生つばをのみ込んだ。リサは、いったん姿を消した後、なにやら化粧瓶を捜し出したあげく、再び鏡の前に姿を現した。そして、髪の毛を、ブラシですかし始めた。ぼくは、そんなリサの様子を自分のベッドから、横になりながら見つめていた。リサの姿の中で、バスタオルの上の、しなやかに動くあらわな腕やうなじの他に、バスタオルの下に、すらりと伸びきった柔らかい二本の足が、特にぼくの注意をひきつけた。ぼくはじっと、彼女の二本の足や、その他の部分を見つめていた。――こんなことは、よくあることで、別に珍しくも、なんでもなかった。それに彼女らだって、そのことを知っているのか知らないのか、よく分からなかった。でもさすがに着替えるときはぼくに警戒を怠らず、ぼくは、彼女らの裸を見たことは一度もなかった。一方、セーラは、部屋が明るくしてあるので、まだ寝ずに、本でも読んでいるらしかった。彼女の読む本は、ぼくとは趣味が合わず、全くぼくは興味をもっていなかった。ぼくは、ゴロリと寝返りを打ち、暗い自分の部屋と、そして、閉めきった、ほの明るい窓を見つめた。窓枠も、汚れたカーテンも、全く簡素で飾り気がなかったが、しかし、暗い部屋の中で浮かび上がるその光景は、毎夜ぼくに、無限の思考を与えてくれたものだった。そしてこの夜も、ぼくは、それを見ながら何かしら、思いつくままに時を過ごした。昔のことや、最近のことや、あしたのこと。あるいは、遠い昔の思い出などを。そうしているうちに、ふと、ぼくは、窓を開けたくなった。なにかしら、窓の向うに、ぼくの思い出の場所か、あるいは、めぐり会いたくて未だにめぐり会えないような場所が、あるような気がしたからだった。窓の向うは、ひょっとして、まぶしい、昼間の、花園の世界かも知れない。そんな気がして、ぼくは､むっくりとベッドから起き上がり、窓に歩み寄った。そして、勢いよく窓をあけた。とたんに、冷たい風がさ～っと、中に入って来た。外は、意に反して、秋の夜空が広がっていた。当然のことだけれども、入り組んだ建物の上に秋の夜空が広がり、雲一つない空には、秋の星座が輝いていた。カーテンが揺れ、急に膚が寒くなって来た。なんと暗い、孤独な夜なんだろう、とぼくは、それを見て思った。そのとき、後ろから、小さな声が聞こえた。

“兄さん、何をやっているの？”
振り向くと、リサだった。彼女は、パジャマ姿で、寒そうに、腕組をしてやって来た。
“一体、今頃窓をあけて、何をしているの？”来るなり、リサは言った。
“いや、ただあけたかっただけ。それに、空気もいいだろう？”と、ぼくは言った。
“でも、寒いわ。隣の部屋まで寒くなりそう。姉さんは、冷たい風が入って来たんで、咳をしていたわ。
“そうかい。セーラは、まだ起きているの？”と、ぼくは尋ねた。
“もう消燈したわ”と、リサは答えた。“だって、あした早いでしょ”
“そうだな。セーラは、六時に起きなきゃならないものな”と、ぼくも答えた。“それじゃ窓を閉めて、ぼくたちもさっそく眠るとしようか”
そう言いかけて、ぼくが窓を閉めかけたとき、リサが一点を見つめて叫んだ。
“あっ、待って！　流星よ！”
ぼくも、とっさに外を見た。確かに流星だった。それは、赤い尾を引いて、林立するビルの彼方に消えて行った。流星が消えたあとには、再び、ちかちか星の輝く、秋の夜空の静けさが残った。ぼくは、思わず、リサの肩に手をまわした。すると、リサのぬくもりがこの冷たい世界の中で、直接に伝わってくるようだった。
“流星が消えちゃった”と、ぼくは、ポツリと言った。
“そのようね”と、リサも答えた。
そのとき初めて気がついたが、彼女の瞳が、外の光を受けて、キラキラと輝いていた。これが、月でも出ていたら、もっと激しく輝いたことだろう。彼女は、窓の桟に手をついて、寒さを忘れたかのように、うっとりとして外の景色を眺めた。
それは、なんの変哲もない都会の夜の景色だったが、この日の夜は、なぜか無限の奥行きと神秘とを持って、ぼくたちに迫ってくるのだった。ぼくたちは、しばらく、何も言わずに秋の夜空を、夜空に輝く星々を、星々が消え入る地平を、眺めていた。
“さて、もう遅いから寝ようよ”と、ぼくが、言った。
リサは、今や、本当に震えていた。ぼくは、リサを部屋の中に入れ、窓を閉めた。それから、彼女を連れて、彼女らの寝室に向かった。セーラは、既にベッドの中で休んでいた。彼女の横向きの姿が、暗がりの中でもよく分かった。ぼくは、入口で、リサの左頬にキスをし、彼女と別れた。そして、自分のベッドに戻って来ると、ゴロリと横になった。今度こそ、ぼくはもう眠るつもりだった。しかし、しばらくは、つい今しがた味わった夜空の神秘性について考えていた。何かしら、そこに、遠いふるさとが秘められているように、ぼくには思われて来るのだった。――やがて、ぼくは本当に、深い眠りに陥ったようだった。

気がつくと、部屋は明るさに満ちていた。それは、なんとも言えない、なごやかで、暖かなふんいきだった。ぼくは、夢見心地で目を開き、しばらく、ぼうっとしていたが、やがて、部屋の

様子が違うことに気がついた。

天井が広く、また、耳もとには遠く、波の音が聞こえて来た。ぼくは、はっとして体を起こした。すると、すぐ目に飛び込んで来た、大きな窓ガラスの向うには、無限の、青い海が広がっていた。

“あらっ、起きていたの？”

声がしたので振り向くと、例の少女が立っていた。にっこりとして、ぼくを見つめていた。

“ここは、一体、どこなんだ？”ぼくは、何がなんだか分からず、口にした。

“あらっ、もう忘れたの？”と少女は言った。“本当に忘れん坊だから困っちゃう。昨晩も、せっかく弟と引き合わせたのに、ひとりでお酒を飲んで、眠ってしまったでしょ。あんなにお酒好きだって、知らなかったわ。本当に、あんたって、見かけによらず、酒飲みなのね！”

“昨晩？　酒飲み？”ぼくには、なんのことか分からなかった。全く記憶にないことだったからだ。

“まあ、覚えていなくても、無理ないことだと思うわ”と、少女は言った。“でも、これは、酔う前に約束したことだから覚えているでしょうけれども、まさか、きょうあたしの職場の見学に来る約束まで、忘れたんじゃないでしょうね”

“君の職場？　約束？”ぼくは、相変わらず、思い出せないでいた。

“まあ、あきれた！　あんたから言い出したことじゃないの”と、少女は、心外そうに言った。“あんたが、あたしの働いているところを一度見てみたいって、言い出したのよ。本当に忘れてしまったの？　だったら、本当にあんたって、どうかしているのね！　じゃ、弟と会ったことも、もう忘れてしまったんでしょ”

“ああ、どうもその通りらしい”と、ぼくは答えた。

“じゃ、きのうの夜のことは、本当に、何も覚えていないのね”と、彼女は言った。“でもいいわ。さあ、これを飲んで。これを飲めば、きっと元気になって、思い出せるようになるわ”

そう言って、彼女は持って来たミルクとトーストをぼくに渡した。

ぼくは、何がなんだか分からないまま、トーストをぱくついた。そして一生懸命昨晩のことを思い出そうとしたが、無駄だった。何ひとつ思い出せなかった。一方、彼女は、ぼくが食べながら、しきりに思い出そうとしているのを、座りながら、ずっと見つめていた。

“弟は、今、どうしているの？”ふと、ぼくは尋ねた。

“学校へ行ってるわ。やんちゃでね、とってもあたしの手に負えないの”

食事が終わると、ぼくは、さっそく彼女と連れ立って、家を出た。家を出てしばらく行くと、素晴らしい並木道や、野原が広がっていた。近くの山も、まるで夢のように、青かった。すぐ足下には小川が流れ、名も知らない草花が、あちこちに咲いていた。空気はすがすがしく、いかにも春という感じだった。彼女は、どこまでも延びる、曲がりくねった野道を、跳びはねるようにして、先に歩いて行った。ぼくは、そのすぐ後をついて行くだけでよかった。やがて、見通しのいい野原の一角に、林立する木々の合間に白い、美しい建物が見えて来た。

“あっ、あれが、弟の通っている学校よ”と、彼女が言った。
学校は、近づくにつれ、きれいな校庭や、新しい白亜の校舎が見えて来た。しかし、子供たちは授業中と見え、グランドにはいなかった。
“晴れて、とってもいい天気だわ。こんな日に、ただぼんやりと散歩するの、あたし大好きよ”と、彼女は、振り向いて言った。
ぼくも、彼女に笑顔を見せた。空には雲が浮かび、なんとのどかで、平和なひとときだろう。なんだか、詩の一つでも創るか、口ずさみたくなるような気持になって来た。やがて、再び、さき程の小川が、盛り上がった土手の下を流れ、その向う側に、静かな民家が居並ぶ光景と変わって来た。川の水は、さらさらと浅く、とっても冷たそうで、美しかった。一体、この川はどこから流れているのだろう？　ふと、そんな郷愁を誘うような、不思議な小川だった。人々は、縁側に出て、椅子に腰掛け、日なたぼっこを楽しんでいるようだった。また、まだ学校に行かない子供たちは、何やら、人形やおもちゃを繰り出し、ままごと遊びをしているようだった。ぼくは、そんな光景を脇目にしながら、彼女の後を追って歩いた。
“とってもいいところでしょ、この村”と彼女は、ぼくに背を向けたまま、言った。“あたし、とっても好きなのよ。だから、離れたいとも思わない。他の誰も、この村を離れたいなんて思わないわ。あたしのママだって、生まれてから一度だって、離れたことがないのよ。お父さんは、例外だけれどもね！”
“ふ〜ん、なんという村なの、この村は？”と、ぼくは、何気なく、彼女に尋ねた。
“インゲルートよ。聞いたことない？”
“インゲルート？　いや…”と、ぼくは答えた。
初めて聞く名だったが、いい名前だった。ぼくも、少しづつ、この村が好きになって来そうだった。
そうこうしているうちに、放送局が、目前に迫って来るのに気がついた。それほど大きいとは思えない、むしろ小さな建物だったが、さき程の古い民家とは違って、モダンさが、ひときわ目立つ建物だった。少女は、その前に立ち止まると、振り向いた。
“ここが、あたしの働いているところ。お入りになる？　中は、大したところじゃないのよ”
“へえー、放送局に勤めていたの”と、ぼくは言った。
“そうよ、ここであたし、ディスク・ジョッキをやってるの。ポピュラーからクラシックまで、何でも担当しているわ。ここに勤めている人も少ないし、遠慮しなくていいわ”
“邪魔にならないかしら？”ぼくは、そう言って、中に入らせてもらうことにした。
彼女は、受付の案内嬢に軽く会釈すると、スタスタとリノリュウムの廊下を奥へ歩いて行った。中は、こざっぱりとしていて、清潔だった。ぼくは、彼女の後に続き、彼女が開けたドアごしに部屋の中を見たが、そこは普通のスタジオだった。男が二、三、放送の準備に当たっていた。
“ご苦労さん。準備の方、いい？”彼女は中に入ると、気軽に、男の人と話していた。

やがて、時間が来たらしく、彼女はあわてて、ガラス張りの向うの部屋に、ひとりで入った。放送時間開始というわけだった。

間もなく彼女は、ヘッドフォンをつけ、レコードプレヤーの前に座って、マイクを前に何かしゃべり出したが、こちら側には聞きとれなかった。しかし、やがてかすかに聞こえて来た音楽は、何かとってもうっとりするようなメロディーを含んでいるように思われた。一体、ぼくは今、どこにいるのだろう？　という気がして来た。ガラス張りの手前には、機械や装置を扱う男が二人、じっとしていたが、建物の周りの野や森が、肌で感じられるような気がして来た。一体、この曲は、ここの電波に乗せられて、野を越え、丘を越え、どこまで届くのだろう？　晴れた青い空が、目に浮かんで来るようだった。

…すると、彼女が立っていた。振り向くと、彼女は、髪の毛を風になびかせていた。背景には、森と雲が見えていた。ぼくは、丘の上の芝生に横たわっていた。

“もう、放送は終わったの？”と、ぼくは尋ねた。

“ええ、終わったわ”と、彼女は、笑顔で答えた。“たった今終えて、放送局を抜け出して来たところなの。ここも、とってもいいところでしょう？”

“ああ、とってもいいところだ”と言って、ぼくも彼女も、あたりを見回した。

ふもとには、学校や放送局や森や民家や小川が見え、中央には、教会と墓地が見えていた。そして、その向うは、再び山となり、空との境界に接していた。

“こうして見ると、この村も、随分と美しいんだね”と、ぼくは、ため息をついた。

“そうよ、これがあたしたちの村よ。そして、この電波は、隣の村や、その隣の村や、さらにその隣の村へと伝わって行くのよ”と彼女は答えた。

その言葉は、ぼくに言い知れぬ郷愁をもたらした。

“その隣の村とやらに、ぼくも行ってみたいな！”

“あらっ、行こうと思えば、簡単よ”と、彼女は答えた。“車に乗れば早いけど、歩いてでも行けるわ。一度行ってみる？”

“ああ、是非”と、ぼくは答えた。

それからぼくは立ち上がり、彼女ともう一度よく、ふもとを見渡した。ふもとの村は、時が停止したように、静かで、また、四月の太陽に照らされて、明るく、穏やかだった。牧草地や麦畑、果樹園などが区画され、そのあいだを小道が走っていた。ぼくはまるで、自分が子供のときに経験した故郷に自分が帰って来たような錯覚にとらわれた。ひょっとすれば、そこに、自分の家がひそんでいるのかも知れない。そんな思惑が胸を捕らえ、ドキドキして来た。見れば見るほど、自分の故郷に似ているように思われて来たからだった。とするなら、一体、この彼女は誰なのだろう？

## 第７章

急に、目の前がまぶしく感じてぼくは、目を開けた。ベッドの枕許には、窓ガラスを通して、朝の光が射し込んでいた。カーテンは、両側で結ばれていた。一瞬、ぼくは、黄金の目覚めの快さを感じたが、すぐに現実に気がついた。

“そうだ。きょうは日曜日だ”と、ぼくは、気がついた。

日光は明るかったが、冷気は、部屋の中に立ち込めていた。ぼくの毛布は、一段と暖かく感じられた。“もう少し横になっていよう”と、ぼくは考えた。

しかし、すぐ気になることがあり、ぼくは、横になったまま、隣のドアのない部屋を覗き込んだ。壁に掛かっている鏡を通して、窓際のベッドに妹らが、まだ寝たままであることが分かった。それを見て、

“間違いなく、きょうは日曜日だ”と、ぼくは思った。

普段の日なら、妹たちがこんなに遅くまで眠っているはずはなかった。彼女たちは、お互い向き合い、小さい天使のように安らっていた。髪の毛が顔にかかり、一瞬、どちらが姉なのか、妹なのか、分からなかった。

“それにしても、一体、きょうはどうして過ごそう？”ぼくは、再び天井に目を向けて、考えた。日曜日だからといって、楽しいことは何もなかった。ぼくは、先週の日曜日に何をしたか、思い出そうとした。すると思い出した。セーラが朝早くからデートだと言って家をあけ、結局リサと二人で、ブラブラと町を歩いた、それだけだった。セーラは、夜遅く、誰かに車で送られて帰って来た。とっても楽しそうだった。少し酔っぱらっていて、顔を赤くしていた。しかし、ぼくが尋ねても、セーラは、プライベートなことについて、一切、答えようとはしなかった。いずれにせよ、それで、彼女は、英気を養っているのだろう。翌日からは、また、忙しい日々が続いた。そして、一週間！　が、過ぎた。

ぼくは、すぐには、とても起きる気がしなかった。不安が、何かしら不安が、ぼくの心にとりついていた。それは、目覚めることの、起きることの、一日の活動を始めることの不安だった。ぼくは、もう随分と以前から、起きることに対する恐怖のようなものを感じていた。その為か、朝方になると、いつも思うのだった。

“このまま、時が永遠に止まってくれればいいのに！”と。

しかし、時は、どんどん経って行くのだった。そのうち、ぼくも起きなければならない時刻がやってくるだろう。ぼくはそう思うと、この瞬間を、存分に味わいたいと考えた。横になっているということは、なんといいことだろう。心地よい昔の思いが、よみがえったり、通り過ぎて行ったりするような気がする。ぼくは、ふと、村の丘を歩いている自分を思い出した。ーーいつだったか、春の或る晴れた日、妹たちと連れだって、家へ帰って来た日のことをーー　何か、昆虫採集用の網を持っていたから、多分、野に住む動物を追っての帰り道なのだろう。空気はすがすがしく、太陽も、一段と恵み多く、神秘に思われていた時代だった。

山の向うは、まだ未知なる世界であり、“幸せ”という感覚はまだ知らなかったが、何かしら、人生に対する興味や、期待のようなものがあった。ぼくたちは、意気揚々と、丘のふもとの我が家へと帰って行ったのだった…

ぼくは、そんなことを、ぼんやりと考えていた。そして、ふと我に返ると、ぼくは、急に寂しい思いにかられて来た。もう、あれらの日々は、帰って来ないのだろうか？ あれらの日々に出会うことは、不可能なのだろうか？　ぼくは、あれらの日々に比べると、どうしても今の生活というものが理解できないのだった。単調な日々――　そして、余りにも速く流れ行く時――　ただ、過去の痕跡である二人の妹が、幸いにも、未だに自分と同じ屋根の下にいた。しかし、その姿も大きくなり、色っぽさは増したものの、昔ほどの可愛らしさは、失せてしまったように思われる。ぼくには、そのことが、たまらなく、口惜しい気がしてならなかった。

“どうして、人生は過ぎて行くのだろう？　どうして、いつまでも、同じままではいないのだろう？”と、ぼくは、思った、“みんな変わって行くのに、ぼくだけが一人、変わらない…”

ぼくは、自分だけが一人、世界の仲間から取り残されているようで、恐ろしい気がした、“なんと、ぼくは孤独なんだろう。一体ぼくは、どうすれば助かるのだろう？”しかし、いい答えは見つからなかった。考えるだけで、実行しないし、また、できなかった。

部屋は、冬のきびしさの中にも、明るさが充満していた。ふと、動く物音が聞こえ、再び、鏡に目をやった。セーラが、寝返りを打ったのだった。ぼくは、その瞬間、現在の彼女の中に、昔の彼女の姿を認めた。部屋も、このアパートではなく、昔の自分の家だった。テラスや、出窓には、年中、花が絶えることがなかった。部屋の窓からは、遠く、青い山が見渡せた。晴れた日には、山や森は、一段と息づき、空は、歓迎するように、明るく輝いていた。そして、樫の木陰にあるセーラの部屋のベッドには、朝方、薄いカーテンで仕切った窓を通して、美しい木もれ陽が差し込んだ。それが、寝ている彼女の顔に当たり、彼女は、目覚めるのだった。ぼくはときどき、彼女より早く目覚め、彼女の部屋のドアをあけて、そんな彼女の姿を目にした。幼い彼女は、ベッドから体を起こし、きょとんとして、窓の外の美しい自然や山を、見つめているのだ…

その同じセーラが、今は、アパートの部屋のベッドに横になっていた。あの頃とは随分違う、世のしがらみを身につけて。やがて、セーラは、掛け布団から片腕を出し、何やら、うごめき始めた。起きる徴候なのか？　ぼくは、息を殺して、様子を見守った。

“今、何時？”というセーラの声が聞こえた。

それに答えて、リサが、はっと目を覚まし、あわてて、腕時計を手に取った。

“もう七時よ。起きなくては”と、リサが答えた。

同時に、騒がしい一日が始まった。二人とも、あくびをし、腕を伸ばしながらベッドから体を起こし、起き始めたからだ。白い寝間着を着、髪の毛のとかした二人が起き出すのを見てから、ぼくは再び、体をゴロッと向きを変えた。

ぼくは、すぐには起きなかった。このまま、もっと他のことを、いろいろと考えていたかったからだ。だが、彼女らの騒々しさが、この気持を踏みにじった。
ぼくが、彼女らの部屋に背中を向けて横たわっていると、突然、ぼくの背中を叩くものがいた。振り向くと、セーラが、そこに立っていた。
“起きなさいよ。もう七時よ。いつまでも、そんなところに横になっていられちゃ、見苦しいわ”と、彼女は言った。
静寂を打ち破られて、ぼくは少しむっとした。
彼女は、いつもそうなのだが、ぼくの寝室を寝室とは認めていず、そこで横たわっているぼくのことを、まるで通路にふさがる障害物か何かのようにしか、考えていないのだった。
しかし、彼女に叩き起こされたおかげで、ぼくは、仕方なく起きることにした。
だが、起きてはみたものの、ぼくは、少しも、さばさばした気持にはなれなかった。どういうわけか、全身がだるく、頭も重く、少しもすっきりしたところがなかった。ぼくは、何するでなく、しばらく、ぼんやりと、ベッドに腰を降ろし、一点を見つめていた。
“きょう一日…”ぼくは、ふと、口を突いて出て来た言葉を、あわてて押さえた。目の前に、けさ見たかも知れない格子窓と、その向うの広い広い緑の草地との対照鮮やかな夢のような光景が、ちらっとよぎるのを感じた。本当に、ぼくは、どうかしているのだ。
そこへ、スッスッとほっそりした、白い、二本の素足が、ぼくの目の前を横切るのが見えた。ぼくが目を上げると窓を開けたセーラが、スリップ姿のまま、洗面所に行くのが分かった。彼女のこの姿は、毎度のことで、ぼくは、見飽きるほど見て来たのだ。
“きょうはまた、どこか行くのかい？”と、ぼくは、顔を洗っているセーラに声を掛けた。
しかし、顔を洗って、しきりに鏡に顔を向けているセーラには、ぼくの声など、とんと興味がないらしかった。返事するにも値しないとでも思っているのだろうか。
そうこうするうちに、朝食となり、ぼくらはテーブルに向かい合ってすわった。日曜日の朝の光は、すがすがしかった。窓の外の景色は、夜間、闇に紛れた光景とは違って、決していいものとは言えなかったので、ぼくは、窓に映る、向かいの家の屋根や煙突などはできるだけ見ないことにし、その頭上に広がる爽やかな空や、あるいは、新聞を見ることにしていた。この朝も、ぼくだけが、新聞を読んでいた。セーラとリサの二人は、ななめ向かい同士に、きちんと坐り合い、朝食のスープなどをすする音が聞こえていたが、互いに黙り合っている二人の様子は、新聞の陰で伺い知るよしもなかった。ぼくがパンをつかむので、少し新聞の陰から二人の様子が見えたときには、二人は互いに顔を見合わせることもなく、黙々と食事をしていたのだった。その二人の、真面目くさった顔が、滑稽だった。
それは、悲劇の滑稽さだった。同じ屋根の下にいながら、これほど互いがバラバラな家族が、他にあるだろうか？　ぼくら三人は、本当に、互いに言葉を失って行くような、危機的な状況にあったのだ。

やがて、食事が終わって三十分もすると、鏡とにらめっこして真赤な口紅を塗りたくったセーラが、ひょいとハンドバッグを引っ下げると、例のごとく何も言わずに、バタンとドアを閉めて、部屋から出て行った。
寂しい部屋には、リサとぼくとが、とり残されたようにたたずんだ。
“一体、なんだよ、あいつは？”とぼくが、リサに向き直って言った。
“きっと、お友達のところへ行ったんでしょ”とリサ。リサは、よく知っているくせに、セーラが恋人のところへ行ったとは答えなかった。
しかしともかく、セーラが去って、ぼくには、一難去ったという気持がして来た。急に圧迫が去り、伸び伸びするような、自由な気持が戻って来た。しかしそれは、内容の伴わない、空っぽの自由には違いなかった。
ぼくは、空け放たれた窓の桟に手をつき、朝の新鮮な空気を吸いながら、つい、いい気持になって言った。
“なあ、リサ、いい天気だし、ちょっと街にでもぶらっと出かけてみないかい？”
“街って何処へ行くの？”
“バスに乗って、公園にでもさ”
リサの気のいい返事で、ぼくらの話は決まった。ぼくらはすぐ、出掛ける準備をした。

三十分後、ぼくらは、公園のベンチに腰掛け、ボート遊びをしている家族連れや、あひるに餌をやっている子供たちの姿を見なから、ぼんやりと時を過ごしていた。時折、冷たい風が吹き、着ているジャケッツの襟を立てなければならないほどだった。遠く、記念像の上に、ゆっくりと雲が動き、目も覚めるような冬空が広がっていて、いい気持だった。しかし、それとは別に、自分たちの運命にのしかかる暗い陰だけは、どうすることもできなかった。ぼくは、黙ったまま、暗い人生を生き抜いた歴史上の人物や、小説の主人公のことを考えた。しばらくしてから、吹き寄せる風に目を細めながら、公園に広がる池や、石橋を眺めているリサに気がついた。
“ねえ、リサ”と、ぼくは言った。“公園の池や森はこんなに美しいのに、どうしてぼくらは、こんなに不幸なんだろう？…”
“どうして？”と、リサは、驚いた顔をして、向き直った。“あたしは別に、不幸とは思っていないわ”
“じゃ幸福だって言うのかい？”
“そうじゃなくって、気持の問題よ”とリサは、目を輝かせながら答えた。“あたしは別に、兄さんみたいに不幸だって思っていないの。そりゃ特別幸福だとも思っていないけど、こうして美しい森や池を見ていると、それだけでも幸せな気持がしてくるわ。それに、毎日の生活があるし、あたしは、兄さんほど不幸に敏感な心を持ち合わせてないんじゃないかしら？”

“へえ、そうかい”とぼくは答えた。そして、ちょっと皮肉を言いかけようとも思ったがやめにした。こんなところで、リサと議論したところで始まらない。それにぼくは、リサの可愛い精神を、汚れきったぼくの精神でとっちめようとも思わなかった。

それでぼくはただひと言、

“場所を変えようか？”と彼女に言い、手を差しのべた。

ぼくらはその日、港へ行き、それから街に出て、ぼくの入場を拒む、大きなビルなどを見て、帰った。家に帰り着いたのは夕方の六時頃で、周りはもう薄暗くなり、一番星が輝いていた。朝早く出かけて行ったセーラの姿はどこにも見かけなかった。ぼくは、街に往きかう若い娘のなかに、セーラの姿を見つけようとしたが、結局果たせなかった。無論、初めから期待はしていなかったが…

ぼくらは、帰って来るなり、ぐったりした。歩き疲れたのだ。ぼくは、遅い足どりながらも、歩くのが好きだったが、リサもよく付いて来てくれた。しかし、そのリサも、さすがに歩き疲れたのか、帰るなり、椅子に腰掛け、

“車があれば、いいのにね”など、口ばしった。

それから、やおら立ち上がるなり、そのまま、リサは、浴室に飛び込んだ。しばらくして、シャワーの音が聞こえて来た。

いつものことだが、日曜日は、夕食は抜きだった。みんなが、それぞれに行動し、夕食は、外で済まして来るのが慣例となっていた。それに、妹たちは、翌日からの仕事がある為、日曜の夜は、寝るのが早かった。いつも、九時過ぎにはもう消燈していただろうか？　しかし、最近は、だんだんセーラの帰りが遅くなり、その慣例が破られつつあった。

そのセーラが、この日も、九時過ぎに帰って来た。静かな裏通りの静寂を破るような一台の車の音が聞こえ、やがて階段を駆け上がって来る音がするかと思うや、急にバタンというドアの音が聞こえ、戸口に姿を現したのがセーラだった。

ぼくは、リサと、きょう一日のことを語り合い、そろそろ話も種切れとなり、それぞれが、それぞれの作業（ぼくは読書で、リサは編物）をしながら、一日の締め括りをしようとしていた矢先のことだった。

帰って来たセーラのその姿は、ぼくらの目には、生命力がみなぎっていた。しかしそれは、ぼくの目には余り歓迎しない方向への生命力であった。

セーラは、静かに読書するぼくらには目もくれず、ぼくらの前を通り過ぎると、寝室へ消えた。しかしその顔は、今しがたあったことへの回想にふけるがごとく、にこやかだった。セーラは、この静かな部屋にあって、ひとり浮かれていたのだ。再び寝室から姿を現したとき、ぼくは、セーラに声を掛けた。

“また、飲んで来たのかい？”

しかし、セーラは、そのとき初めて、ぼくらの存在に気がついたかのごとく、ちらっと視線を向けただけで、それには答えもせず、浴室へシャワーを浴びに行った。やがて、シャワーを浴び

る音と共に、かすかに、セーラの陽気な鼻唄などが聞こえて来た。ぼくは、静けさを破られ、もうそれ以上、読書を進められなくなった。

　セーラが再び浴室から姿を現したとき、彼女は、ぼくらの存在を忘れたかのごとく、スリップ姿のまま出て来、髪の毛にはまだしずくが垂れていた。そして、ぼくらの存在には目もくれず、そのまま行こうとするその態度に、少しばかりぼくは腹が立った。
　“おい、セーラ”と、ぼくは少し声を荒げて、言った。“よく考えろよ。ここはホテルじゃないんだぞ！”
　その声の調子には、さすがにセーラも、ギクリとしたようだった。彼女は立ち止まり、ぼくの方を見た。しかしその目は、動物か何か、まるで見知らぬものを見るかのような目つきだった。
　“兄さん、何か言った？”と、やがておもむろに、セーラが言った。
　“だから、その姿…”と、ぼくは語調を強めて答えた。“ここはホテルじゃないんだぞと言ったんだ”
　セーラは、ぼくに指された自分の姿を改めて確認した。
　“だって、今、シャワーを浴びたところなのよ”と、セーラは落ち着いて、答えた。
　“でも、ここは、お前一人の部屋じゃないんだぞ。少しは、ぼくらのことも考えろよ”ぼくは、きびしく言った。
　セーラは、そう言われると、夢が壊れたのに腹を立てたのか、それには何も答えず、プイッと振り向くと、そのまま寝室へ消えた。
　やがて、髪の毛をすくうブラシの音と共に、
　“リサ、もう寝る時間よ”という、セーラの声が聞こえて来た。
　リサは、編物をテーブルの上に置くと、寝室へ向かった。

　ぼくは、再び、ひとりぽっちになった気がした。この日一日、大した収穫もないまま、終わろうとしているのだった。リサと街をブラブラしたが、楽しい気持にはなれなかった。リサは、それなりに喜んでいたようだったが、ぼくは少しも楽しくはなかった。それどころか、こうして、出て来ること事態が、苦痛だった。ぼくは、それをあらわにしたこともあったが、たいていは隠すことに努めた。それというのも、一緒に楽しもうと出て来てくれたリサに対して、申し訳ないような気がしたからだった。それで、努めて平気なふうに装っていたが、内心は、悲しくて、気が狂いそうだった。
　そればかりではない。ぼくはこうして、セーラと喧嘩ばかりしているが、本当は、セーラが好きなのだ。ぼくは昔から、セーラが好きだったし、嫌いになったことは一度もなかった。しかし、そのセーラが、あのようにして少しづつ変わって行く――その姿を見るのが、いやだった。
　ぼくは、部屋の明かりを消すと、しばらく、昔のセーラのことを考えることにした。
　ついこのあいだまで、セーラは優しく、こんなふうではなかった。セーラのその頃の姿は、今のセーラなど、とても想像できないものがあった。どちらかといえば、彼女は無口なほうで、まじめにコツコツと仕事をするタイプで、この日のように鼻唄を歌うことなど、めったに聞いたことなど、なかった。

それで、彼女が、あんな節を知っていたのかと驚かされたほどだった。彼女が、自分で仕入れたメロディーではなく、どこかで、誰かに教わったメロディーに違いなかった。

昔の彼女は大人しく、それが彼女に似合っていて、又、それが彼女の魅力だった。セーラは、母親の知性の部分を受け継ぎ、リサのように感情に流されるということは、めったになかった。母親が蒸発してからは、セーラは母親の役目を引き受けたが、もちろん今のようではなく、ひたすら献身的なものだった。リサの我儘に比べて、時には可哀そうになるほど、献身的なものだった。セーラは、自分から進んで働くことを買って出、家業やその他の苦労を、ひとりで背負い込んだ。彼女は、上級校への進学をあきらめ、妹には進学させようとしたが、そのリサも、結局は経済的理由により、中退のやむなきに到った。

それはともかく、あの苦難の時代にあって、セーラの采配には、驚くべきものがあった。一体、あの細い体のどこに、あの頑張りとエネルギーとが秘められていたのだろうか？　もちろん、無理をして体をこわすということもあったが、たいていは、そのまま仕事を続けた。そんなセーラの姿を見て、ぼくは、胸の痛くなるのを感じたが、さりとて、そんなセーラを助けるほどの力は、ぼくにはなかった。それどころか、ぼくは、そんなセーラに対しても、迷惑のかけどおしだった。

ぼくは、父の死に続き、母親が行方不明になったと知ったときには、心が凍る思いがした。先が、全く見えなくなってしまったからだった。その頃、ぼくも含め、妹たちもまだほんの子供で、生活力などあるはずがなく、親戚の家に預けられたが、やがてぼくは、妹たちを見捨ててひとり飛び出した。彼女らの面倒をみなければならないという重荷に耐えかねたからだった。

しかし、この逃避行も、結局はぼくに苦しみを教えただけで、やがて、妹たちとの再会により、終止符が打たれた。その頃、彼女らは、みちがえるほど大きくなっており、心もしっかりしていた。ぼくらは再び生活を共にすることにした。――それが、去年の夏のことだ。

彼女らは、その間に、心身共に、順調な発育を遂げていたが、しかし、ぼくは違った。ぼくは、この数年間に、人生の絶望と、人間に対する不信とが、植えつけられていた。ぼくは、彼女らと出会うまで、何度死にそこなったか、分からなかった。彼女らと再会したときには、ぼくはもうすっかり、生きる気力を失ってしまっていた。全く方向性を、見失ってしまっていた。だから彼女らと再会したときには、ぼくは、全く見る陰もなかった。

セーラはしかし、そんなぼくをも、優しく迎え入れてくれた。ぼくは、そんなセーラに心から感謝し、そして、何度も立ち直ろうと努力した。だがひとたび、セーラの目から離れると、ぼくは、昔からの悪癖が出て、ダメになるのだ。ぼくの悪癖――それは、ひと口に言って、ぼくの弱気だった。ぼくは、気を強く持とうとしたが、ダメだった。ぼくはすぐ弱気に押し流され、生きる力を失った…

もう、朝なのか、部屋の中はほの明るかった。向うの部屋では、布団をかぶった妹たちの足の部分が見えていた。ぼくは早速時計をとって見たが、朝の五時過ぎだった。ぼくは、すぐには起きずに、そのまま、今見た夢の内容を思い起こしていた。

しばらくして、セーラかリサのうちどちらかが寝返りをうったのか、何かが動き、ぼくはふと、妹たちの眠っている部屋に目をやった。

ベッドの上で、掛け布団がめくれてセーラかリサなのか、可愛い素足が向う向きに投げ出されているのが、ぼくの枕許からそのまま眺められた。手前のベッドなのだから、多分それは、リサの素足なのだろう。白いベッドの上に横たえている、五本の指のついた足の裏やふくらはぎが、なんとも言えず可愛くて、ぼくの気持をそそった。しかし、その足はすぐに動いて、暖かい布団の中に吸い込まれた。ぼくの興味は、おのずと、壁に掛けられている四角い鏡へと向かった。それは、朝起きると、いつも真先に、妹たちの部屋の様子を知らせてくれる便利な鏡だった。当初妹たちは、その鏡の存在を、ぼくに自分たちのことが見られるという理由で嫌ったが、昔から壁にくっつけてある鏡ではずすわけにも行かず、今では全く気にしないようになっていた。――しかし、残念ながら、その鏡の位置は少し高く、妹たちの寝姿を眺めるというわけには行かなかった。だが、部屋の様子は眺められ、ちょうどベッドのすぐ上に当たるレースのカーテンで締め切った、ほの明るい、何の変哲もない窓が、ぼくの場所から見えていた。そしてこの朝、その窓がぼくの注意を惹きつけた。レースのカーテンが無造作に半開きになっている、鏡に映ったその窓の様子から、向うの部屋には誰もいないのではないかという寂しさが感じとられ、ぼくは訳もなく不安になった。と同時に、窓の明かりがさし示すその雰囲気によって、ぼくは急に外の空気に触れたくなった。

ぼくは寒いのも忘れて、ベッドから跳ね起きると、自分の部屋の窓に向かい、窓を押し広げた。すがすがしい朝の空が目に飛び込んで来ると同時に、冷たい空気に触れ、身が引き締まる思いがした。しかし、ここから眺められる景色は、つい今しがた心の中で期待した、子供の頃に目にした緑多い牧場や山の景色ではなく、ただ古い建物も新しい建物も雑然と居合わせているその姿に、少なからず、失望の思いがした。しかし、空の色が青くすがすがしいのが、唯一、ぼくの心の救いのような気がした。ぼくは、寒いのも忘れて、建物の屋根や、煙突や、遠くの教会や、その上に広がる空のパノラマを眺め渡した。そして、ふと思った。どうしてぼくは、いや、ぼくと妹たちとは、こんな都会の、こんなアパートで暮らしているんだろう？　どうして子供の頃のように、田舎で住むことが許されないのだろう？　ぼくには、どう考えても、この都会の生活というものが、なじめないのだった。しかしやがて、ある理由により、田舎から追い立てられるようにして街に出て来、その後、様々な経過をたどって、現在のこの生活に到り着いたのだということを思い出した。それで、セーラもリサもぼくも、都会の片隅の、こんな小っぽけなアパートで、細々と暮らさねばならないのだ…

　そのとき、コトッという音がしたので振り向くと、リサが立って、ぼくの方へやって来た。まだ寝起きそのままといった様子で、髪の毛もくしゃくしゃで、パジャマのまま寒さに震えていたが、ガウンだけは背中に羽織っていた。足は、素足のままで、顔の前に垂れた髪の毛を振り払うリサのその様子は、いかにも哀れな娘を思わせた。その哀れな娘が、後ろからやって来て、ぼくに声を掛けたのだった。
　“寒いじゃない？　そこで何しているの？”
　その顔はまだ眠そうで、部屋の寒さにゆがんでいた。
　“いやなに、あることを考えていたのさ”と、ぼくは冷静に答えた。
　“あることをって、外を見ながら？”
　“そう”と、ぼくは答えた。
　“でも、寒くないの？　そんな姿で”と、リサは尋ねた。
　そう言われればぼくも起きたままの姿で、上には何も羽織っていないことに気がついた。
　でも、ぼくは他のことに心を奪われていたので、寒さなどいっこう気にならなかった。
　“ねえ、何が見えるの？”と言って、リサは、窓際のぼくのところにやって来て、ぼくの横に並んで立った。その目は、ようやく眠気から覚めたと見え、外の景色に大きく見開いた。
　“朝の景色って、なかなかいいわね…”とリサは、うっとりするように、街の様子を眺めながら言った。しばらく窓の外を眺めた後、リサは、不意に振り向くなり、ぼくに尋ねた。
　“あることを考えていたって、なにを考えていたの？”
　“ああ、そのこと”と、ぼくは言った。“それはね…　こうして外の風景を眺めていると、どうしてぼくたちは、ここで生活しているんだろうって、思えて来たのさ”
　“そんなことが、そんなに不思議なこと？”と、リサは、目を輝かせながら、言った。
　“そんなに不思議なことでもないかも知れないけれど、他のいろんな生活があってもいい筈だと思うんだ。だのにどうしてぼくたちは、こんな生活をしていなくてはならないんだろう？”
　その言葉を聞いて、リサは、口をつぐんだ。ぼくは、リサが黙っているのを見届けると、さらに話を続けた。
　“…こうして、広い世間を見渡していると、そこにいろんな生活が見えて来るんだ。人々の生活…　たいていは貧しくて、ぼくたちと余り変わりない生活だろうけど、でもときどき、それとは違った、華やかな生活が目に飛び込んで来ることもある。たとえば向うに見えている、割と感じのいいあの窓の家ね、あの窓の向うにはどんな生活が隠されているんだろうって、ぼくは想像するんだ。そこにはきっと、ぼくたちの生活とは違った、華やかな生活が待っているに違いない…　でもどうしてそういうことが可能なんだろうと、ぼくは考えてしまうんだ。リサは、そんなこと、思わないかい？”
　“華やかな生活のこと？”と、リサは、ようやく口を開いた。

“そうだよ”と、ぼくは、意気ごんで言った。“ぼくたちの生活とは、けた違いの生活だよ。毎日、少ない給料の為にあくせくする必要などなく、財産などいくらでもあるような生活なのさ。ねえ、リサ、お前もそんな生活をしてみたいって思わないかい？　お前の年頃で、働く必要なんかないんだ。学校に通えて、夏休みには、どこか遠い所へ旅をする。景色のいいところに別荘がお前を待っているし、そのうち、金持の誰かと出会うかも知れない。ねえ、素晴らしいだろう、そんな生活…”

“そうねえ、素晴らしいわね…”と、リサもあいづちを打った。“でもそんな生活、今のあたしじゃ、無理よ”

“どうして無理なんだよ”と、ぼくは、振り向いて言った。“現に、そんな生活をしている人だっているんだし、ぼくたちにだって、そんな生活が不可能なんかじゃない”

“でも、その為には、お金がいるのよ”と言って、リサは、ぼくを見た。

“お金か！”と、ぼくは、吐き捨てるように、言った。

“そうよ、お金”と、リサは言った。“これがなければ、今の世の中、生きて行くこともできないわ。全く惨めなものよ。それについては、兄さんは、どうするの？”

“逆に、お金さえあれば、好きなこともしたい放題というわけか…”と、ぼくは言った。“…でも、そんなに悩むこともない。お金については、そのうち、なんとかするからさ”

“でも、どうやって？”と、リサは尋ねた。

“ちょっと見ろよ”と言って、ぼくは、窓の外の街の姿に水を向けた。“あそこには、いろんな生活があり、ドラマがある。ぼくは、それを見ながら、いろいろと考えて来たのさ。そしてついに、ある一つのことを思い立った。それはね、ぼくの空想の産物である恐怖小説を書くことなんだ。ぼくは、ここんところ、そんな小説を書いてもうけている二、三の作家のことを知った。それを読んでいると、ぼくにも書けないことはないって、思い至ったんだ。もし成功すれば、こんなに近道のできる金もうけは、他にないんだ…”

“でも、小説を書くって、難しいことじゃない？”と、リサは、不安な顔をして、言った。

ぼくの顔は、思わずほころんだ。

“心配ないって”と、ぼくは、リサの不安を打ち消すように言った。“書いて売れなくって、もともとだからさ。でも、既に構想だけは、いろいろとあるんだ。今まで読んだどの作品よりも、思いきり怖くって、ぞっとするようなものを、書いてやろうって、思っているんだ。いつ完成のことやら、それは分からないけどね”

“でも、そのあいだ、兄さん自身の生活のことはどうするの？”と、リサは、なおも尋ねた。“今のままじゃ、姉さんが黙っておかないわ”

“分かっている”と、ぼくは、優しく、リサに言った。“スリラーを書く為にも、ぼくは、そのうち仕事に行くさ。いつまでも、このままぶらぶらしちゃ、いられないからね。なに、心配は無用さ。自分の生活費ぐらい、自分で稼ぐからさ…”

その言葉で、リサもやっと安心したようだった。リサは、満足深げな顔を、窓の外に向けた。

　そのとき、隣の部屋で、もう一つの音が聞こえた。セーラが起き出したのだ。
　“ああ寒い！　誰か窓をあけているの？”というセーラの声に、ぼくとリサは、思わず顔を見合わせた。
　“そうだよ。ちょっと朝の空気を吸っていたんだ”と、ぼくは、振り向いて、声の主に向かって言った。
　“朝の空気が何よ！　寒いじゃない。お願いだから、窓を閉めて”姿なき声が、部屋の奥から返って来た。
　ぼくはもう、窓の外の景色を充分堪能し、又、朝のすがすがしい空気も充分吸ったので、この際、セーラの言葉に従ってあげることにした。
　間もなく、セーラが、背伸びをしながら、部屋から姿を現した。パジャマ姿のその様は、まだ眠りから完全に覚めやらぬかのごとくだった。
　ぼくは、窓のそばに立って、狭い部屋の中を交互に行きかう二人の妹の姿を、しばらく見つめていた。
　あるとき、そんなぼくに、セーラはふと気がついたようだった。
　“何をそんなところに突っ立ってるのさ。もう顔は洗ったの？”と、セーラは、ぼくの存在に初めて気がついたのか、ふとぼくを見上げて、言った。
　“いや、まだ”と、ぼくは答えた。
　“じゃ、そんなところで何をしているの？　顔でも洗ったらどう？”と、セーラは、忙しそうに体を方向転換させて、言った。
　“見ているのさ”と、ぼくは、ただ一言、答えた。
　“何を、なの”と、セーラは、振り向くのも邪魔くさいとばかり、背中を向けたまま、言った。
　“お前たち”と、ぼくは、別に悪びれずに答えた。“こうして見ていると、面白いんだ…”
　セーラは、かっとなったように、振り向いてぼくを凝視した。その目は火花が散っているようで、むしろ怖いぐらいだった。
　“兄さんは気でも狂ったんじゃない？　朝から何を言ってるのよ。わたしらは見世物じゃないのよ。そんなところでじっとしてなんかいないで、自分のことでもしたらどう？”
　“分かった、分かったよ。今から顔を洗うさ”そう言って、ぼくは浴室に向かった。
　ぼくは、冷たい水に顔を浸しながら、その感触から、ほんの一瞬、昔の爽やかな香りがふと心に運ばれて来るのを感じた。それは、うららかな春の野面で、緑いっぱいの中に立った幼く、可愛いセーラの少女のようなイメージだったが、ほんの一瞬、心をかすめただけで、意識は再び現実に返った。
　ぼくがテーブルに戻ると、セーラは無愛想に押し黙ったまま、いつもと同じ食事を、台所とテーブルのあいだをせわしく往復しながら、次々と並べて行った。

まだ若い彼女のその仕種が、メイドのようでなかなか可愛らしかった。しかしその娘は、なかなかぼくにつけいるスキを与えなかった為に、話しかけることが出来なかった。
　ぼくは、自然にテーブルの上に並べられた、湯気の立った、ささやかなごちそうに鼻を近付けてにおいを嗅ぐと、間もなくテーブルに腰掛けたリサに声を掛けた。
　セーラは、台所でまだ働いていて、ここには来なかった。
　“なあリサ”と、ぼくは言った。“近頃のセーラは少しおかしいとは思わないかい？　何かあればすぐ文句を言うし、怒りっぽくて、まるで自分だけは、ここの住人じゃないみたいだ。早く出て行きたいとでも考えているんだろうか？　でも行ける当てでもあるのかい？”
　ぼくは、セーラに聞こえてもいいように、わざと声を大きくして、言った。
　リサは、少し姉を気づかいながら、ぼくを見つめて、言った。
　“それは兄さんの思い過ごしよ。姉さんがそんな風になったって、別に思わないわ”
　“そうだろうか？”とぼくは言った。“ぼくは逆に、セーラは変わったと思うな。昔のセーラは、あんなんじゃなかった。もっと大人しかったと思うよ”
　リサは、それには答えなかったが、ただ一言、
　“姉さんが来たわ”と言った。
　ぼくは、その声で振り向いた。
　セーラは、エプロンで、ぬれた手を拭きつつテーブルにやって来た。その様は、どこかママを思わせた。
　セーラは黙って腰掛けると、テーブルの隅に置いてあった新聞を手にとって、片手でスープをすくいながら、膝の上に新聞を置いて読み始めた。セーラは、いつものように沈黙の食事を押し通そうと考えていたのだった。ぼくは、顔を新聞の方に背けているそんなセーラをじっと眺めた。
　やがてぼくは、そんなセーラに声を掛けた。
　“そんな食べ方をしちゃ、胃に悪いよ”
　するとセーラは、ふと振り向き、ぼくを見つめた。しかし、その目つきは、どこかよそよそしく、他人行儀で、ぼくがそれ以上何も言わないのを見てとると、プイッと再び新聞の方へ目をやった。そのよそよそしい素振りが、ぼくの心にぐさりと突き刺すと共に、何かしら、滑稽でもあった。ぼくは自然、おかしい気持がこみ上げて来た。
　“セーラって、滑稽だね。見ているとおかしくなるよ”
　ぼくはつい、口に出してしまった。
　セーラは再び振り向き、うるさそうにぼくを見た。そして態度を改めたように新聞を閉じると、いどむようにぼくを見つめた。
　“朝っぱらから何がおかしいのよ”と、セーラは言った。“わたしは真剣なのよ。そんなわたしにおかしいところがあるなら言ってよ。いえ、言えないはずよ。なんでもないことでおかしがるそんな兄さんこそ、滑稽で、最低だわ”

　そうセーラは、ぼくに面と向かって、吐き捨てるように、言った。それから、もう話すのもいやとばかり、再び新聞の方に目を向けかけた。
　“セーラはよっぽどぼくが嫌いなようだね”と、ぼくは、それにはかまわず言葉を続けた。“それも無理はない。随分と迷惑を掛け続けたからね…　でもどうだい、ここらで一度、休戦協定でも結ばないかい？　せめて朝食ぐらい、なごやかに過ごすというわけには行かないのかい？”
　セーラは、うるさそうに、再びぼくを見た。
　“一体、何がお望みなの？　あんたっていう人は？”とセーラは言った。ぼくのことを、もはや兄とは呼ばず、あんたと呼んだのだった。セーラは続けて言った。“働きもせず、ぐだぐだ言うだけで、ちっとも努力もしないで、それ以上何がお望みだと言うの？　もっといい暮らしが欲しいって言うのなら、他の所に捜しに行くべきね…”
　“そんなこと言ってるんじゃないんだ”と、ぼくは言った。“朝っぱらからこんな調子じゃ、愉快じゃないだろう？　だからせめて朝食どきぐらい、みんな顔を合わせて食べようって言っているんだ。ぼくも働くからさ”
　“働く？”セーラには、この最後の言葉だけが重要だったみたいだった。セーラは、しっかりとぼくを見据えた。“本当に働く気があるの？”
　“言ってるだろう、働きに行くって”と、ぼくは答えた。“決心したんだ。こんな状態でいつまでもいられないって。だから、心を入れ変えて、本気になって仕事を捜すつもりさ”
　しかしセーラはまだ、ぼくの言葉を全面的には信頼してはいないようだった。これまでにも、何度も裏切った経験があったからだった。
　“さあ、どれぐらい本気だか”とセーラは言った。それはまだ人を疑ぐるような口ぶりだった。“いずれにせよ、結果を見てからでないと信用できないわ”
　セーラはそう言って、再びぼくから目をそらそうとした。
　“嘘じゃないってば！”と、ぼくは引き止めるように言った。“もう随分といろいろ捜して来たんだ。新聞広告や、ちらしや、職業招介所などに当たってね。その結果、街の映画館で、撮影係の求人があることを知ったんだ。ぼくは、前から映画には興味があるし、その程度なら足にも影響がないだろうと思うから、きょう早速当たって見ようと思っているんだ。うまく行けばきょうにも就職が決まるかも知れない…”
　“本当？”と言ってセーラは振り向いたが、セーラばかりでなくリサまでもが驚いたようにぼくを見たのだった。
　“もし本当にその気があるんなら当たってみることね”と、セーラは、冷静にまるでママのように言った。“でも行く以上は、もう後がないというぐらいの心構えで行くのよ”
　“分かっているよ、そんなことぐらい”と、ぼくは、少々いや気がさして言った。“ともかく決まりさえすりゃ、もうお前たちに迷惑をかけさせなくて済むわけだ。それにお前からも”と言って、ぼくは、セーラに目を向けた。

“言われのない非難を金輪際受けなくていいわけさ。これまでは失敗ばかり繰り返して来たけれどねえ、もうそんな状態は二度と御免というわけだ。そうなりゃ、お前たちも充分納得がいくんだろう？”

“決まりさえすりゃね”と、セーラはつっけんどに言った。

そのとき、柱時計の音が、ボーンと七時の時報を知らせた。

“さて、それじゃもうそろそろ行かなくちゃならないわ”

セーラはそう言って、テーブルに両手をつくと立ち上がった。“もう出掛ける準備をしなくちゃならないから後始末はリサと一緒にやっといてね”

そう言い残して、セーラは自分の部屋に引き上げて行ったのだった。

セーラが姿を消すなり、リサが小さくぼくに声を掛けた。

“知らなかったわ、いつのまにそこまで来ていたの？”

“先週知ったのさ。映画館に張紙がしてあったんだ。そりゃぼくだってどの程度勤まるか分からない。でもセーラがねえ、あんなにうるさくちゃとてもやってはいられない。それに映写の仕事ってそんなに難しくもないだろう”

“で、どこの映画館？”とリサは、けげんな顔をして言った。

“＊＊＊さ。安物の映画しか上映しない映画館だけどね”

“あそこの映画館！”と、リサはちょっとびっくりしたように言った。“でもあそこ、余りいい映画を上映しないんじゃない？”

“まあそうだけどね”と、ぼくは答えた。“でも内容なんてどうでもいいんだ。一々見ているわけでもなし。それにときにはいい映画だって上映することもあるんだ。そんなときは役得というものさ”

“でももしその映画館に採用が決まったら、姉さん、きっと驚くに違いないわ。黙っているかしら？”

“決まるだけでも万万才なんだ。中身についてまで文句を言わせはしないよ”

ぼくはそう言い切った。確かに質のいい映画館とは言えなかったが、その時のぼくの状態にあっては最上の就職先であるには違いないのだった。

やがてぼくたちも食事が終わり、後かたずけをしようという頃、セーラは、通勤服に着替えて部屋から出て来た。

“それじゃ後を頼んだわよ”

リサにそう一言くれると、ぼくには目もくれず、そのまま表のドアを開け、部屋から出て行った。

リサも食器を洗い終えた後、出掛ける支度にかかった。

彼女が家を出て行ったのは、朝の八時前だった。

時計が八時を過ぎたのでぼくは部屋を出た。アパートの外は空が曇っていて、風が少しきつか

った。薄汚れた建物のくたびれた姿とあいまって、曇った空は、ぼくの気持を暗くした。狭い裏通りの路地では、ぼくの行く先で、何も知らない子供たちが人知れず遊んでいたが、その姿はなぜかしら、哀れを誘った。

ぼくはかつて彼等のことに注意を払ったことはなかったが、どういうわけか、今や彼らの顔の一つ一つをはっきりと見分けることができるのだった。女の子も男の子もそれぞれに表情があり、自分たちだけの遊びの世界に熱中しているようだった。ぼくは、子供たちのその姿を見て、別に感傷的になったのではなかった。ただ、この曇った空の下の、こんなうらぶれた、ちっぽけなところで遊ばねばならない子供たちの姿が、ぼくの理解を苦しませたのだった。しかし、ぼくは何も言わずに、子供たちのそばを通り過ぎて行った。

ぼくは救いが欲しかった。ぼくは一体、何を求めているのだろう？　ぼくは、建て込んだ住居からかろうじて見える曇った空を見上げながら、歩いた。ぼくには分からなかった、自分の求めているものが。しかし少なくとも、自分が今歩いているこんな世界じゃない。また、今から行こうとしている仕事でもなかった。恐らくぼくは、間違った世界に生きているのだ。その意識だけが、歩くぼくの背後に絶えずつきまとっていた。ぼくは欲しいのだ、このさまよう魂を、本当に安らげてくれるような、愛情に包まれたそんな世界を。だがそれは、こんな世の中じゃない。こんな世の中であるはずがない。だとすれば、それは、どこに行けば求め得られるというのだろう。

そうこうしているうちに雨が降ってきた。雲行はいよいよあやしくなり、最初は小粒の、そのうちには大粒の雨が降り出し、傘の用意のなかった人々が急ぎ駆けて行く姿があちこちに見られた。ぼくも雨具の用意はなかった。しかし他の人々のように駆けることもせず、ぬれるままゆっくりと歩き続けた。振り向くと、さっき遊んでいた子供たちの姿ももう見当たらず、子供たちのいなくなった街の広場が寂しそうに雨にぬれていた。一台の乗用車が、ぼくのそばを通り過ぎて行き、危うくはねを掛けられそうになった。ただの一声もかけずに過ぎ去って行く車の後を目で追い掛け、“こんちくしょう！”と、ぼくは心の中で思った。誰も助けてくれはしない。孤独で寂しい、雨にぬれた都会。ところどころの物陰では、雨宿りをしている人々の姿が見られた。彼らは、空を見上げながら、何を待っているのだろう？　雨が降りやむことなのか？　それとも、人生の希望？ だが、そんなものは、この暗い世の中で永久にやって来ることはないだろう。ぼくはふと、ついさっき出掛けて行った妹たちのことが気になった。彼女たちは無事、職場にたどり着いただろうか？　雨が降るとは予想だにせず、ハンドバッグを下げて行っただけで、雨具の用意をしていなかったことだけは確かだ。あるいは、彼らと同じように、どこかの物陰で、うっとおしい空を見上げながら、雨宿りをしているのかもしれない…

そのときだった、ぼくを呼ぶ声が聞こえたのは。

“やっぱりあんただったわね。間違いないわ”

ぼくが、その声に驚き振り向くと、建物の物陰から傘をさしてやって来る一人の娘がいた。傘の陰になってその顔をはっきりと読み取ることはできなかったが、親しそうにぼくに微笑みかけているようだった。ぼくには初め、彼女が誰であるか全く分からなかった。

“可愛そうに。雨にぬれてしまって。シレールさん”
そう言って、ぼくにも傘をかぶそうと上げたその姿を見て、ぼくには分かった。そして、激しい驚きに囚われた。彼女は、あの彼女だ…
ぼくが訳も分からず茫然としているのもかまわず、彼女は、ひとりで話しを続けた。
“こんなところで会うなんて夢にも思わなかったわ。今までどうしていらっしたの？　それはまあいいわ。父の墓へ案内するって約束だったでしょ。今から案内するわ。別にかまわないでしょ？”
“うん、かまわないけど…”と、ぼくは半分、職捜しのことを気にしながら言った。
そうしているうちにも、彼女はどんどんぼくの知らない路地の中へ、ぼくを引っ張って行った。薄汚く、どこをどう来たのか分からないまま、しばらくして、ぼくたちはある建物のドアの前に立った。
“さあ、それじゃ行きましょ”そう言って彼女は、古ぼけた木のドアを開けた。
ぼくも、彼女に連れられてその中に入ったかと思うと、不思議なことに、風景は一変していた。周りには、見渡す限り、静かな山と森があるだけで、つい今しがた存在していた都会など、どこにも存在していなかった。そればかりか、ぼくたちが通り抜けたはずの古ぼけた木製のドアさえも、ぼくの前後左右、どこにもなかった。ぼくはすっかり面食らい、どうなっているのか訳が分からなかった。しかし、この静かな山奥も、都会と同じように雨模様で、空にはうっとおしい黒雲が漂っていた。ただ雨はやんでいて、道のあちこちに、水たまりが、ひっそりとできていた。
“雨はやんだようね”そう言って彼女は傘をたたんだ。“お墓はこの近くなのよ。もう少し歩きましょ”
静かな道が森の方へと続いているその小道を歩いて行く小悪魔のような彼女の後ろ姿を見つめながら、思わずぼくも後に続いた。
ぼくには未だに、何が何だか訳がわからなかった。一体どうなっているのだろう？　あの街は？　ぼくたちのアパートがあり、セーラやリサたちが住んでいるはずのあの都会はどこへ行ってしまったのだろう？　しかし今は、この静かな田舎にこの少女がいて、ぼくの前をさっさと歩いて行くのだった。
“ねえ、何度も聞くようだけど、ここはどこなの？”と、ぼくは、前を行く少女に尋ねた。
少女は、振り向いて、いたずらっぽい顔をぼくに向けた。
“あら？ もう忘れたの？ インゲルート。ここはインゲルートよ。この前、言ってあげたじゃない。あんたは、シレール・ホールバラさん。そうでしょ？”
“そうだけど…”と、ぼくはうろたえながら、答えた。
しかし、少女はかまわず話しを続けた。
“あんたはこの村に迷いこんだ旅人なのよ。一晩泊めてあげたでしょ？　居心地はいかがでしたでしょ。なんなら、もう一晩と言わず、ずっと泊まっていただいてもいいのよ。シレールさんは

、うちの家族の一員のようなんだもの”

“いや、それは困るよ”とぼくは言った。“ぼくには帰る所もあるんだしね”
ぼくの頭では、セーラやリサのことが少し気になっていた。
“あら、それは聞き始めだわ”と、彼女は言った。“それはどこなの？”
“セルッカだよ。あの大きな都会の…”
“セルッカ。ふう〜ん…”と、彼女は、その言葉を聞いても、余り関心を示さないようだった。つい今しがた、彼女とそこで出会ったというのに。
“ねえ君”と、ぼくは尋ねた。“君の名前はなんていうんだっけ？”
彼女は振り向いてにっこりした。
“そう言えば、あたしの名前、まだ言ってなかったわね。ごめんなさい。言うの忘れていたわ。レオリア・ストラレスカって言うの。よろしく。でもみんな、あたしのことをローラって呼んでいるわ。シレールさんも、そう呼んでくださっていいのよ”
“ローラ！”と、ぼくは思わず言った。“ローラ。いい名前だね。君にピッタシの名前だよ。これから君のことを、そう呼ばせてもらうよ”
“ええいいわ。どうぞ”と、ローラと名付けられた少女は、ほほえみながら答えた。
ぼくは、彼女の後を付いて行くと、不思議と気持が落ち着いて来るのだった。さきほどまでの陰欝で沈んだ気持が、なぜかしら解消されたような気になって来た。なぜかしら、アパートにいたときの、あの不安で、イライラした、思いわずらうような気持が、スーッとどこかへ去って行くような気がした。そして、次第次第に、心の落ち着きと、自然な喜びとが胸にあふれて来るような気がするのだった。それが、どういう理由によるのかは分からない。ともかく、この村の静けさと、彼女の跳びはねるような陽気さとが、ぼくにそういう気分をもたらすのだった。ぼくは、浮き浮きした気持になって、あたりの雰囲気を味わった。
“ここは実にいいところだねえ…”と、ぼくは再びローラに声を掛けた。“不思議な話しだけど、ぼくはここへどうしてやって来たのか分からないんだ”
“あら”と、彼女は再び振り向いた。“そんなこと気にしなくていいのよ。きっと、一時的に忘れてしまっているだけよ。あんたが来たときだって、あたしたちは何も聞かなかったし、あんただって言わなかったわ。でも、そのことを別に気にしていないし、ここでゆっくりしてもらっていいのよ”
“ここでゆっくりするって、そうも行かないさ…”ぼくは未だに納得がいかないまま、答えた。
そうこうするうちにも、細く、ぬれた森に通じる道も終局にさしかかり、道の脇のこんもりしたところが、どうやら彼女の言っていた場所らしかった。草がおい茂った脇道へぼくを案内し、やがてある古ぼけた石の前で彼女は立ち止まった。
“ここよ”と彼女は、それを見つめながら、ぼくに言った。

遅れてその場に到着し、彼女の見つめている石を見ると、それは紛れもない墓標で、＊＊＊・ストラレスカ（１９２８～１９６５）という墓碑銘が読み取れた。
“パパよ”と、彼女は、それを見つめながら悲しそうに言った。“パパは、ほんの一年ほど前、事故でなくなったの。パパは、あたしになんでもしてくれるいいパパだったから、亡くなったときは悲しかったわ。家中の者がみんな泣いたわ。それに村人だって。こんなときにしかめったに来ない親戚の人だってやって来てパパのことを悲しんでくれたわ。それほど、村からも、みんなからも、愛され、信頼されていたいいパパだったのよ。だのに亡くなってしまうなんて。あたし、悲しくて、棺が地中深くに埋められるまで平気で見ていられなかったのよ”
“そうなの…”と、ぼくは同情するように言ったが、同時に自分も覚えのあるパパのいなくなった日のことを、あのやり切れない日のことを、思い出していた。
“事故って、どんな事故だったの？”と、ぼくはそれとなく尋ねた。
“ヒドイ事故だったわ”と、彼女は、ぼくに背を向けながら、さも恐ろしいことを見たかのように言った。“果物や、野菜などいっぱい詰め込んだ荷物が、馬が急に暴れ出した為に、崩れたのよ。それで、ちょうどすぐその下で働いていたパパは下敷きとなり、ああ、本当にヒドイ状態だったのよ。荷馬車がまだ動かなかったら、あるいはパパは助かったかも知れなかったわ。でも、馬があとずさりした為に、パパはそのまま車にひかれてしまったのよ…”
“お気の毒に。それは、悲しかったろうね…”と、ぼくは、彼女に同情するように言った。“でも、それで気を落としてしまっちゃいけないよ”
彼女は、何も言わず黙っていた。あの日の恐ろしい出来事を、ただひとり回想しているかのようだった。しかしやがて、彼女は気を取り直したのか、表情に生気が戻ったように言った。
“でも、不思議とは思わない？　あんたが現れたのは、パパが亡くなってちょうど一年目の命日だったのよ。これも何かの縁ね”
“へえそうかい。それは知らなかった”と、ぼくは言った。“君も、お父さんを亡くして、何かと大変だね”
“そうよ。その通りよ”と、彼女は語気を強くして、言った。“お母さんは見ての通り、ああいう状態でしょ。弟だってまだ幼いし、うちではパパただ一人だけが頼りだったのよ。パパはね、若い頃は船に乗っていろんな街に行ったそうよ。もちろんとても辛い仕事だったそうだけど、その頃のいろんな思い出話を、あたしや弟に聞かせてくれたわ。パパはちょっとした怪我がもとで、死ぬ前は農園で働く仕事をしていたけれど、夢は再び船乗りになることだったの。あたしも、そんなパパの話しを聞くのが楽しみだったわ。だって、世界にはいろんなところがあって、あたしの全く知らない所がいっぱいあるんですもの――それだから、というわけじゃないけど、あたし、放送局に勤めることにしたわ。だって、電波の波は世界に広がって行くでしょ。あたしもいずれは、その波のように世界に飛んで行きたいの。放送局に勤め出したのは、ほんの半年ほど前よ”

“そうだったの”とぼくは、半分感心したように言った。“ということは、君が一家を支えているということなんだね。失礼だけど、年はいくつなの？”
“十五よ”と、彼女は悪びれずに答えた。
“十五！”と、ぼくは言った。
“そうよ。今度、誕生日が来れば、十六になるわ”
“十五”と、ぼくは繰り返した。“じゃ、妹のリサと同じ年だ。でも、その年でも放送局は雇ってくれるの？”
“ええ、特別にね”と、彼女は答えた。“ここはローカル放送だし、間違わずにちゃんと言いさえできれば、あたしみたいな年齢でもかまわないの。これでも結構、あたし、人気があってよ。ファンレターも、日に数通、届いたりもするの”
そう言って彼女は、にっこりと笑った。
“ところで今、妹とか言ったわね。妹さん、いるの？”
彼女の視線に会い、ぼくは、ドキッとしたように答えた。
“ああいるよ。二人だけど。上はセーラで、下はリサ。下のリサは、ちょうど君と同じ年をしているんだ”
“そお”と彼女は、冷静に答えた。“きっと親しくしていらっしゃるんでしょうね。それで今、どこに？”
“それがねえ…”と、ぼくは弱ったように答えた。“ついさっき会っていたような気がするし、それにしては、ここはこんなところだし。ぼくにもよく分からないんだ”
“じゃ、行方不明なの？”と、彼女は尋ねた。
“そうじゃないんだけど”と、ぼくは答えた。“要するに、ぼくがここへ来た理由がよく分からないんだ。ぼくの考えでは、ぼくは今、妹たちと別のところに住んでいるはずなんだ…”
“あら、理由なら簡単よ”と、彼女は言った。“あんたが自分で言ったもの。バスの中で”
“バス？”と、ぼくは尋ねた。
“そうよ、バス”と、彼女はいぶかしげに言った。それから、少しからかうように、“あら、覚えてないの？ あんたはバスに乗ってこの村にやって来たのよ。あたしは隣村から帰る途中、バスの中であんたと出会って。それで親しくなったの、覚えてない？　――あたしがどこへ行くつもり？　って尋ねたら、あんたは、しばらく逃れられるところならどこでもいいって言ったわ。それで、どこか泊まれるいいところがないかって言ったから、この辺には適当なところがないので、あたしのうちではどうって勧めたのよ。あんたはそれで、あたしと一緒にバスを降りて、あたしのうちまでやって来たんじゃない？”
“そうか。そうだったのか…”と、ぼくは、半分茫然としながら、言った。“ぼくは旅をして、ここまでやって来た…”
“そうよ”と、ローラは、合いの手をさしはさんだ。“随分と長い旅だったらしいわね。

一目見ただけでもよく分かったわ。随分と疲れていた様子で、顔色もよくなかったわ。でももう安心、一晩休息して回復したようね。だって、来たときよりもずっと元気そうなんですもの”

“きょうは、何日目なの？”と、ぼくは尋ねた。

“三日目”と彼女は別にいぶかることなく、答えた。“さっき、あたし隣村からバスに乗って帰る途中って言ったでしょ。あれ、パパの命日に集まってくれた人を送り返したその帰り道だったの。一年振りに沈んだ気持になっていたところへあんたが現れて、なんだかあたしにとっても不思議な気分だったわ”

“そうだったの”と、ぼくも努めて、あの日のことを思い出そうとしながら、答えた。

あの日、路地からひょっこり姿を現した可憐な彼女との出会いが初めてだと思っていたのに、その前にそういう事実があったのだとは、ぼくはすっかり忘れていた。恐らく彼女は、ぼくの先を歩き、何かの用事で路地に隠れ、それからまた姿を現したのだ。そのときが最初だとぼくは勘違いをした。しかしその前に既に、ぼくは彼女の家に泊まる約束をしていたのだ。それにしても、ぼくは一体どこからこの村にやって来たのだろう…

“それにしても世話になるねえ”と、ぼくは言った。“このお返しは、いつか必ずさせてもらうよ”

“いいえ。気にしなくていいの”と彼女は、きっぱり断るように言った。“何度も言うように、好きなだけいてもらっていいのよ。そんなにいいもてなしはできそうにないけど、できる限りのことはさせてもらうわ。こんなとき、お互いさまなんですもの。こんな話し、もうよしましょ”

そう言って、彼女は再び、墓石を見た。

墓石は、雨に濡れた荒れ果てた草むらに、寂しくしっとりと立っていた。彼女の後ろ姿は、衣服が風に震え、この寂しい風景の中で、何か物悲しそうだった。

“パパも、あんたに会うことができて、地面の中から喜んでいるわ”と、彼女はひとり言のように言った。“じゃ、これでもう行きましょうか？”

振り向いたローラの顔は、涙をぬぐった跡があったが、いかにもさわやかそうだった。

帰り道、荒涼とした草地には、寂しいうなり声をたてて、風が吹きまくっていた。どこまで行っても草や木が雑然と立っていて、人気の全くない寂しい風景がくり広げられるだけだった。

“随分と寂しいところだね”と、ぼくは草むらの前を歩いて行くローラに言った。

“ええ、お墓のあるところなんですもの”と、ローラは振り向かずに答えた。それから、少し間を置いて、彼女は考えるように言った。“でも、ときどき、海が見渡せるところにあれば、と思うときがあるわ。それも日当たりのいい小高い丘の上にね。そうすれば、陰気くさなくて、こんな沈んだ気持にならなくてすむでしょ。――それに、中に眠っている人も気持がよくていいでしょ。あんな、周りに何んにもないところより、広い海が見渡せるところの方がずっといいに決まっているもの。

それにときどき、パパの大好きだったお船も通りがかるときもあるんですからね。もしあたしだったら、断然そういうところに埋めてもらうことを望むわ。だって、永久に別荘に住んでいるような雰囲気になれるんですもの…”

“へえー、面白いことを考えるんだね、君って”と、ぼくは、彼女の言葉に感心しながら、言った。そう言いながらも、ぼくは彼女の後ろ姿に魅力を感じていた。妹とはまた違ったものの考え方、感じ方をしている少女。一体、彼女は何ものなんだろう？　初対面ではなく、ずっと以前から知っていたようにすら感じさせる彼女。しかしぼくは、彼女に魅かれる気持とともに、どこか近づき難いものも、同時に感じていた。何がそうさせるのだろう？

## 第８章

ふと気が付くと、ぼくは雨の水たまりの路上に倒れていた。周りは黒山の人だかりで、口々に、
“ヒドい車だ”などと叫んでいた。
手をついて体を起こし、頭がズキズキと痛むので、ぬれた手で額にさわると、手にはベットリと血がついていた。
そのうち、救急車のサイレンの音が聞こえ、車がやって来るなり、中から白衣の看護人が駆けつけて来た。さっそく応急措置が講じられ、オキシフルが、額の傷口に痛いほどしみ入った。さらにガーゼを貼られ、ばん創膏で痛々しい傷病人が出来上がった。しかし、体を動かしたところ、足がまだヒリヒリ痛んでいたが、他に血が出ている所はないらしかった。
“君は、引き逃げの車にはねられたんだ。病院へ行こう”と、看護人に連れられそうになったが、ぼくはその手を振り払って立ち上がった。
そして何も言わず、驚いたまなざしの人々のあいだを割って、その場から去って行った。人々は不審な顔つきでぼくの後ろ姿を見た。しかし、ぼくはまるで罪人であるかのように、初めは早足で、ついには駆け出して、その場から逃げて行った。ぼくにはやるべきことが待っていた。病院なんて、とても行ってはいられなかったのだ。

やっと場末の映画館に来て、大きな壁にまつわり付くような非常階段を駆け上がって事務室にまで行ったが、支配人はぼくの怪我の様子に驚いた表情をしたものの、ぼくに対する回答は、あいにく技師が見つかったので間に合っているという冷たいものだった。
期待していただけにそのショックは大きく、ぼくは失意のうちに、よろけるようにその事務室を出て行く他はなかった…
ぼくはその足で海に向かった。ともかく、その絶望的な気持を沈めてくれそうなものは、海しかなかったのだ。空は晴れて風は冷たかったが、ぼくは埠頭に立って何時間も遠くの水平線を見つめていた。
すべては、ここへ出て来たときのつまづきが原因だ、とぼくは思った。あのとき、兄ミゲルがいて、ぼくたちを船乗りにしてくれていたら…　そうすれば、みんなこんな苦しみを味わうことなく自由に、幸せに暮らすこともできたはずなのだ。レビも不良たちと交わることなく、もっとまともな人生を歩むこともできただろう。現在のように刑務所に入ることもなく、海を相手に生活をしていたことだろう。それにしても海は、何もかも忘れさせてくれそうだった。時々視界を横切る貿易船が、ぼくのあこがれを乗せて通り過ぎて行った。そんな海をただ見つめているだけで、ぼくの心を遥か遠くへ誘い、しばし現実を忘れさせてくれるのだった…

何をするということもなく、無為に一日を過ごした後、ぼくの行くべきところは、辛い人生を忘れさせてくれる所しかなく、足が勝手にその方向に向いていた。かつてメーチンクがよく連れて行ってくれた酒場で、そこのマスターは、ぼくのこともよく知っていた。

“最近御無沙汰だったな”と、マスターは、久し振りにやって来たぼくを見て言った。“メーチンクがム所に入っているって、本当か？”

ぼくはマスターの目を見てうなづいた。

“ぼくも、つい半年余り前少年院を出て来たばかりさ。おかげで、仕事がさっぱりなんだ”

“可哀いそうに。おめえらみたいに地方出の浮浪児にはなかなか日が当たらないんだな。まあそのうち芽が出ることもあるさ。きょうは何にする？”

“きょうは思いっきり飲みたいんだ”とぼくは言った。“ウィスキーを一杯。きついので頼むよ”

ぼくは、カウンターに出て来たグラスをグィッと飲み干した。そしてお代わりを頼んだ。

マスターは、グラスを拭いたりしながら、別の客と話しをしたりしていた。そうしているうちにも、アルコールが一気に回って来て、次第に意識がもうろうとして来た。

酒場に入ってからどのくらいの時間が経過しただろうか。突然、入口の方が騒々しくなり、ぼくが振り向くと、一人の少女が姿を現した。とても可愛らしく、からかってやりたい気にもかられるような少女だった。

その少女が、マスターに、二言三言、言葉をかわすと、すぐぼくの方に駆けて来た。

よく見ると、からかってやりたいと考えたその少女は、思いがけずもリサだったのだ。リサは、ぼくの所にまでやって来ると、

“こんなに酔っぱらってしまって。さあ、帰りましょ”と言った。

それからぼくを引きずり出そうと背負いかけたが、か弱い女手ひとつで出来るものか少しばかり疑問に思った。

ともかくどうにかぼくをアパートに運び込んだのだろう。そのときの経過は記憶がなくて、次に気が付いたときには、ぼくはベッドの上で横たわっていた。

頭がガンガン痛く、まだ気分もフラフラしていた。ぼくがベッドから起き上がろうとすると、すぐ隣の部屋からセーラがやって来た。

“起きたの？　兄さんったらまったく”と、セーラは言った。“人騒がせの、ろくでなしなんだから。わたしたちがどんなに心配したか、知ってるの？　随分捜したのよ。そして、リサが兄さんの行きつけの酒場で見つけたときには、グデングデンで、あたしたち、兄さんの帰りが余りに遅いもんだから、これは何かあったと思って映画館に電話をしたのよ。そしたら確かにそんな男の子が来たが帰ってもらった。額に怪我をしていて相当落ち込んでいたようだ、と言うじゃない。だからショックの余り、兄さんが自殺したんじゃないかと、リサは本気になって心配したくらいよ。怪我をしていたというのがどうしてだか分からなかったけど、わたしたち、さっそく家を飛び出して、兄さんの足どりを追おうとしたわ。あっちこっち捜し回って本当にクタクタ。それなのに兄さんったら、人の気も知れないで一人飲んでいるんだもの。もう知らない！”

“悪かった。謝るよ”とぼくは言った。“でも、車にはねられて怪我はするし、仕事は断られるし、やけになってしまったんだ。本当に死ねるものなら、死んでしまいたかった”
“何を弱音吐いているのよ”とセーラは言った。“車にはねられたって、兄さんがボヤボヤしているからよ。でも、大けがにならずに済んでよかったわ”
“リサはどうしているんだい？”と、ぼくは体を起こして言った。
“もう疲れて眠っているわ”とセーラは答えた。

翌日、ぼくはまた振出しに戻った。以前と変わらぬ失業中の身で、きょう一日を何して過ごそうかと途方に暮れる。あの逮捕劇のとき以来、長いこと会ったことのなかったカリーンのことがふと頭をかすめたりもした。だが彼女は、多分ぼくのことなど、もう忘れてしまっていることだろう。教授の家に通った日々のことも、今ではなつかしいことのように思い出されるだけだった。いっそのこと――とぼくは思った。いっそのこと、あの夢のような世界の中へ行ってしまいたい。そして、夢の国の中で、一生、ローラと過ごすのだ…

ぼくが目を覚ましたとき、もう二人の姿はなかった。ベッドは空っぽで、布団はきちんと片付けてあり、それを目にしたとき、急に寂しい思いがした。白々とした窓明かりが、ほの暗い部屋の様子と相まって、一層その思いを強くした。ぼくは世界中でひとり、たった一人ぽっちだった。他にすることもなく、ただうつろに、ぼうーっと立っているに過ぎない。世間のすべての人々は――妹たちも含めて、ぼくを見限って、先へ先へと進んで行こうとしている。しかし、ぼくは、彼らにとり残されて、ここでひとりぽっちなのだ。そんなぼくの後ろにもしローラが立っていたら、とはっとなって振り向いたが、もちろん彼女は立ってはいなかった。

ぼくは家を後にした。空は晴れていたが、寒い冬空だった。風が強く、ぼくはこんな日があったことを思い出していた。そう、妹たちを孤児院に押し込めて、ひとりで働きに行ったときも、こんな日ではなかったか。あのとき、もし働きに行ってたとしたら、ぼくの人生は大きく違っていたのかも知れない。孤児院に行くこともなく、従ってレビらと出会うこともなく、鉱夫の大人たちに混じって、辛いが精一杯の人生を送っているのかも知れない。どちらがよかったのだろう？　とぼくはふと思ったりもした。――できるものなら、ぼくはもう一度あの田舎に戻って、そんな仕事がしてみたいと思ったりもした。
しかし今は都会で、病んだ街のまっただ中にぼくはいた。誰もかまってはくれないし、見てもくれない。それに。ぼくは別に野心があるわけじゃない。ただひっそりと、幸せに暮らしたいだけなのだ。それにしても、ぼくの幸せとは何んだろう？

　ぼくはひたすら雲を、流れ行く雲を見続けた。それが太陽の光と重なって、刻々と変わり行く様を見続けた。これだけが、飽きさせることのない、ぼくの心の原点だった。なぜなら、この雲こそは、ここから遥か離れたあのオディープの家からも見たのだし、それを見つめながらぼくは成長して行ったのだから。今ではそのオディープから、空間のみならず、時間からも切り離されて、今、ここにぼくはいた。
　この辛い思いを、誰が分かってくれるだろう？　この冷たい、寂しい街の昼に。
　ぼくはついに寂しさに耐えかねて、リサに会いに行くことにした。
　街角の書店が近付くにつれて、ぼくは恥ずかしさの余り、中に入って行く勇気が沸いて来なかった。
　きれいに飾りつけてあるショーウィンド越しに通りから中を見ると、彼女はいた。
　うつ向いていて、ぼくには気が付かないようだった。それで、ぼくは驚かせてやろうと思ってショーウィンドのガラスをコツコツ叩くと、すぐ身を隠して、中の様子を見つめた。
　リサはその音に気が付いたみたいだった。顔を上げ、けげんな表情で、ショーウィンドの所までやって来た。そして、その可愛い顔つきで、しきりに外の様子を伺っている。
　ぼくはもう一度ガラスをノックして、今度は姿を現してやった。リサは驚いた顔でぼくを見た。
　“ぼくだよ。お邪魔していいかい？”と言ったが、中の彼女にはよく聞き取れないらしかった。
　リサは手招きをして、中に入るように言った。
　ぼくが入っても、中には誰もいなかった。
　“随分と暇なようだね。いつもかい？”と、ぼくは中の様子を見て言った。
　“しーっ。奥にマダムがいるわ。余り私語はできないの。声を小さくね”と、リサは声をひそめてぼくに言った。
　リサの青いセーターが、とても彼女によく似合っていた。
　“どうして来たの？　何か用？”と、リサは尋ねた。
　“いや、ただお前に会いたくなってさ”とぼくは言った。“かまわないだろ？　お客様のような恰好をしているからさ”
　“ふふ、そうね。その方がよさそうね”と、リサもにっこりと笑ってぼくを見た。“買わずに中に入って来る人って、マダムが一番嫌うのよ。まして、おしゃべりのお客さんなんて”
　“でも、ぼくは買えそうにないよ”とぼくは言った。“第一ポケットに金が入っていないもの。きのうは本当にすまなかった”
　“そんなことを言う為に、わざわざここまで来たの？”とリサは言った。
　そのとき、別のお客様が入って来て、リサはあいさつをした。
　“そうじゃないけどさ”とぼくは続けた。“ただお前の顔が見たかっただけ。それと、きのうのお礼も言いたかった。言う前に、お前は家を出ていたからね”

“しーっ。あまりしゃべりかけないで。マダムが見ているわ”とリサは気づかってぼくに言うと、ぼくから離れて、レジの場所に戻った。
ぼくは客のように装って、しばらくその場に立って本を見つめるふりをした。
入ってきた客は若い男で、リサがレジに戻ったのをいいことに、しきりとリサに本のことで尋ねていた。彼のおかげで随分とリサは本を捜させられたようだった。とうとう彼は目的の本を買うと、いそいそと帰って行った。
再び店内はぼくだけとなり、リサはそれとなく、ぼくの所に寄って来た。
“よく来る常連よ”とリサはぼくに言った。“来るといつも何かと話しかけて来るの。その本がないのが分かりきっているのによ”
“目的はどうやら本じゃなく、お前らしいな”とぼくは言った。“ここにいるお前はとっても可愛いもの”
リサは、にっこりとぼくに微笑みかけた。
“それじゃそろそろ失礼するよ。お前の仕事の邪魔をしちゃ悪いものな”とぼくは言った。
“きょうはいつも通りに帰るわ”とリサは答えてくれた。
ぼくは寒い通りに出て、あのマダムにはぼくが兄だと分かっただろうかとそれを考えると愉快だった。
ぼくは、もはやそんなに寂しくはなかった。ぼくにはとっても可愛い妹が、リサがいたのだ。

そして通りに出ると、吐く息が白かったが、ぼくは、自分が今、青春のまっただ中にいることを感じた。暗い人生ではあったが、そんなに真暗な人生でもなかったのだ。ぼくは、自分の生きているこの時代が、いかなる時代なのかについて考えた。最近見た場末の映画館で上映していた映画がそれを告げていた。「道」は、ぼくの心の奥底までしみ入った。それは心を揺るがせ、涙はとどまることを知らず、これこそ自分の時代だと知った。そして、フェリーニという監督の名前を、そのとき初めて知った。人生に感動を求めていたぼくにとって、映画は感動そのものだった。そしてこの時代、いかに感動的な映画があふれていたことか。ぼくは、その洪水の中で嬉しい悲鳴を上げていた自分のことを、幸せだと感じた。幸せは、予兆であり、しるしであった。そして、それらの映画は、その映画の先に、幸せのしるしのようなものを感じさせてくれた。映画のＴＨＥ　ＥＮＤが、ぼくの人生のＴＨＥ　ＥＮＤには決してならなかったのだ。ぼくは映画を乗り越えて、さらにその先へ突き進もうとした。しかし、いかなる先へなのか？　そう、これらの映画に劣らず、素晴らしい作品を作ること。それが、素晴らしい感動を与えてくれた彼らに対する恩返しにもなるだろうし、次第にぼくの人生の目標になりつつあった。

そう思うと、じっとしていられない気持になった。何かをしなければ。しかし、何をすればいいのだろう？

　通りを歩き、世間を見渡しても、ドラマは生まれては来なかった。結局、人生の感動やドラマは、自分の胸の内にしかないものなのだろうか？　それでも、燃えるような心を持つ限り、何かが生まれて来るに違いない。どんなに貧しい生活でも、その火を決して消さないことだ。そうすれば、いつかはその火は、世界をも燃焼させる火となるかも知れない。
　今、失業中で、どん底の暮らしであえいでいる自分も、決して絶望にあるのではないと感じた。
　いや、絶望であればあるほど、人は強くなるものなのだ。そうでないと、人生に負け、死の道しか待ってはいない。それに、絶望は同時に、希望の光というものを照らして見せてくれる。希望の光は多分、絶望の人間にしか見えないものなのだ。そしてぼくにとって希望の光は、今を生き、明日を生きて行くということだった。毎日のくり返しの中で、何かを見つけ出す。そうすればやがて道が開けてくるだろう…

　いつしかヨットが帆を降ろしている海岸通りをぼくは歩くようになっていた。ホテルやアパートが所狭しと軒を連ねている。カリーンのアパートも確か、このような所にあったはずだが、通りが違っていた。
　冬といってもここの港は、暖かくさえ感じられた。潮風が鼻をつき、別の岸壁では魚市が開かれている。
　なごやかな、一見何んでもないような光景を目にしながら歩いているうちに、ふとぼくは、求人広告の出ているホテルに目が止まった。ウェーターや荷物運びのホテル従業員だったが、これには経験があり、さっそくぼくはホテルに飛び込んだ。
　支配人は、ぼくが少しビッコなのに目を止めたが、それほど気にならないらしく、ぼくがホテルに勤めていたことを聞いて、さっそく採用してくれた。
　“あした、朝から来てもらうがかまわないか？”と彼は言った。
　ぼくは嬉しさの余りうなづいた。これで収入も確保できたし、少しは潤うだろう。妹たちだって、ぼくのことを喜んでくれるに違いない。

　外に出ると、ぼくはこのことをさっそくセーラに報告してやりたい気持だった。彼女のレストランにぼくが行ってどこが悪いだろう？
　セーラの勤めているレストランは、海からそう遠くないところにある。労働者相手の大衆的なレストランで、ぼくはまだ一度も行ったことがなかった。
　ちょうど昼飯どきのことでもあり、きっと驚くだろうな、と思いながらもぼくは出掛けて行った。
　ドアを開けて中に入っても、人が多くて、すぐにはどこに彼女がいるのか分からなかった。
　客の大半は男で、ビールを飲み、たばこをくゆらせ、店内は人々の声で騒然としていた。
　中にはＯＬらしい女性の客もいるにはいたが、たいていは、たくましそうな男たちばかりだ

った。

その中に、ウェイトレスやウェイターが忙しそうに立ち働いていた。そしてついに見つけた。セーラが奥の方で脇目もふらず忙しそうに働いていた。ぼくは彼女と話す為、わざと彼女の持ち場らしい場所に行って、テーブルの一つを確保した。そして、手持ちぶさたそうに注文を待っていると、やがてやって来た。何も気が付かないセーラは、ぼくを客と見て、ごく普通に声を掛けた。

“何にいたしましょう？”

ぼくが振り向くと、セーラは目を円くした。

“兄さん！”とセーラは叫んだ。“どうして来たの？　ここへは来ないという約束でしょ”

“でも、きょうは特別だからさ”とぼくは言った。“就職が決まったんだ。その報告を兼ねてね”

“でも、お金は持っているの？”と、セーラはまだ納得行かない表情で言った。

“失礼な。食事代ぐらい、払えるさ”と、ぼくは少しムッとなって答えた。

“じゃ何にするの。早くしてよ。忙しいんだから”とセーラは、面倒くさそうに言うのだった。

“まあそうせかせるなよ。ぼくだってきょうはお客さんなんだから”とぼくは言った。“それより、どこに就職が決まったか知りたくないのかい？”

“どこなの？”とセーラは、イライラした表情で尋ねた。

“ホテルさ”とぼくは答えた。“安ホテルだけど、あしたから働きに行くことが決まったんだ。嬉しくはないのかい？”

“だって、こんなに忙しいときにやって来るんだもの”と、セーラは言った。

そのとき、

“おい姉ちゃん。ビールのお代わり！”と叫ぶ、ヒゲを生やしたごつい男の声が聞こえた。

セーラは肩をそびやかせ、仕方なしにその男のテーブルのところへ行った。するとその男は、いたずらのつもりか、セーラの尻をポンと叩いたりするのだった。

しばらくして、セーラは再びぼくの所にやって来た。

“とても相手なんかしてられないわ”と、セーラは不満気に言った。“ね、どんなに忙しいか分かったでしょ”

“お前のファンも、きっとたくさんいるんだろうよ”とぼくは言った。“じゃ、ソーセージとパンをもらうよ”

“分かったわ。全く、兄さんったら、仕事の邪魔をしにやって来るんだから”

セーラはプリプリ言いながらぼくのテーブルから去って行ったが、料理だけはやがてちゃんと持って来てくれた。それから、立ち去り際にセーラはこう言った。

“お願い、これで最後にしてよ、ここに来るのは。わたし、兄さんに給仕する為にここで働いているんじゃないのよ”

“それでもお前、その姿、よく似合っているよ”とぼくはからかうようにセーラに言ったが、彼女の耳に聞こえたかどうかは分からなかった。
いずれにせよ、セーラは、自分の働いている所をぼくに見られたくないことだけはよく分かった。
ぼくはセーラにチップをはずんで、こっそりとその場を去った。

海のきらめき。明るい日ざし。活気づいた街の様子。何もかもがぼくには満足だった。セーラが、どんなに海の荒くれを相手に頑張っているか、これでよく分かったし、日頃のヒステリーの理由の謎も、少しは解けたような気がした。彼女だって辛いけれど、やめるわけにも行かないのだ。
ぼくは明るい街を歩いた。そして、空を飛ぶあのカモメより今自由だとぼくは感じた。
すべての悲しい人々に代わって、ぼくは、もっと自由にならねばならないと感じた。

いつか、両親と一緒にピクニックがてらに僧院の廃きょに行ったことかあった。空気はまだ冷たく、膚寒いような一日だったが、空はよく晴れて、緑の草地は鮮やかだった。
他に訪れる人もなく、周囲はヒッソリとしており、そこに来たのは恐らくぼくたちだけだった。
崩れ落ちた塔の先端が青い空に吸い込まれるかのようにそびえ立っていた。
周囲には、森のように深々とした木立と、草地とが広がり、こんなに神秘的で、美しい風景を目にしたのはもちろん初めてのことだった。
そして、ぼくは振り向いて目にしたのだ。
ちょうど、ママとパパが廃きょの通用口から外に出て、何か話し合いながら、一緒に並んでぼくの後について来る様を。その後ろには妹たちがいて、彼女たちはまるで、うさぎが飛びはねるみたいに、弾んでスキップをしていた。
あのとき目にした光景は、二人がぼくの後にやって来る光景は、もう二度と忘れることがない。
あの日々から、いかに多くの、苦難の日々を重ねて来たことか。
ふと、ぼくの脳裏をかすめた情景を思い出して、ぼくの求めていたものはこれだと思った。
それこそ、ぼくの求めていたことだったし、なにも思い煩うことのない日々を、あのときのように歩んで行くことなのだ…

その晩は、帰って来たリサもセーラもぼくのことを祝ってくれたし、翌日からさっそくぼくは働きに出た。
仕事は順調に行くかに思われた。ぼくも言われた仕事はきちんとこなし、支配人からも可愛いがられてもいた。

　それから十日程たったある日、ぼくは用事を言いつけられて外出したものの、帰って来るのが大幅に遅れて、初めて支配人に大目玉を食らったことがあった。弁解は無用だった。
　その日の事の他陽気に誘われて、鮮魚などを買いに行ったものの、つい海辺のベンチに坐ったのが事の始まりで、いつのまにかぼくはうたた寝をしてしまっていたのだ。
　魚市場でやりとりされている景気のいい掛け声や、カモメの鳴く声などが、ぼくの耳に心地良く響いて来た。こんなにのんびりした人生があるのに、人はどうしてあんなにもあくせくしなければならないのだろうか――そんなことをぼんやり考えているうちに、思わず時間が経過していたことにぼくは気が付き、ハッとなった。
　いけない！　魚を買わなくっちゃ。だが、もう魚を売っている時間はとっくに過ぎていることに気が付いた。これでは手ぶらで帰る他はない。どうしよう！　ぼくの目には、ガミガミ怒鳴る支配人の顔が見えて来た。しかし、たとえ叱られても、そこへ帰る他はなかった。
　だが、そうしてまごまごしているとき、どこからともなく、きれいに着飾った一人の小さな女の子が、老婆に連れられて、風船を持ってやって来た。
　その少女を見たとたん、その子が余りに可愛い子だったので、それまでの心配事はすっかり忘れてしまうのだった。
　その少女は老婆に何かしゃべりながら、ぼくのそばを通り過ぎて行こうとした。
　ぼくはごく自然に、その二人の後を付いていた。しかし、後をつけてほどなくして分かったことは、その子が貧しいこのぼくとは違って、立派な家があり、しかもちゃんとした家庭もある、恵まれた家の娘だということだった。やがて、港のはずれの、立派な門構えの家の中に入って行くことによって、ぼくはそのことを確認した。そのとたん、ぼくは、それまでの夢のような時間が覚めたような気がした。
　後に残っていたのは、支配人の罵声でしかなかった。
　が、首になることだけはまぬがれた。しかし、今度、このようなことがあれば首だと強く言われた。

　その日の出来事を帰ってから妹に告げると、リサは同情的だったが、セーラは当然のことだとばかり、ぼくのことをけなした。
　“兄さんみたいに、仕事の時間中に眠る気が知れないわ”とセーラは言った。“何がのんびりだ！って怒鳴った支配人の気持がよく分かるわ”
　“でも、支配人が代わりに買いに行っていて、よかったじゃないの”と、リサは、ぼくに同情的に言ってくれた。
　ぼくは、もうこんな話しになるくらいなら、何も話すまいと心に決めていた。

　しかし、ぼくが勤め出してからというもの、ぼくたちの関係には徐々に改善のきざしが見られ、次第に良好なものとなって行った。とりわけセーラが、以前のようにぼくに対して、ガミガミ

言わなくなったのが幸いだった。

珍しく早く帰してもらうことになったある日、ぼくは、仕事から解放された喜びに胸踊らせながら、見知らぬ界わいを通って帰ることにした。その日はずっと雨続きで、今ようやく雨が上がったところで、足早な雲が、太陽をさえ切ったり、現したりしながら、空を通り過ぎていた。街は、通りも、建物も、街路樹も、まだぬれていた。ところどころ路上には水たまりが出来ていて、それが、雨にぬれた建物や、今ようやく雲が切れかかった空を映していた。雨にぬれた車が、ところどころ寂しそうに止まっている。学校から解放された子供たちの声が、どこからともなく、ぼくの耳に聞こえていた。

どこをどう歩いたのか、寂しい裏通りのフェンスの張ってある駐車場のそばをぼくが通りがかったとき、突然ぼくを呼びかける声がしたので、ぼくは振り向いた。

すると、道路の反対側の歩道を、ぼくを追いかけるような形で、こちらを向いていたのはセーラだった。

彼女は、水色のレインコートに、傘を折りたたんで、左手にはパンの入った紙袋をかかえていた。

“兄さんじゃないの？　どうしてここに？”と、セーラはぼくに言った。

“仕事が少し暇になったんで帰らしてもらったんだ”とぼくは答えた。“ちょっと見知らぬ街を歩こうと思ってね。お前とこんな所で会うなんて知らなかった”

“この近くに、おいしいパン屋があるからよ”とセーラは答えた。“この近くにうまいコーヒ店もあるの。そこに寄ってみない？”

いつも怒った顔しか見なかったセーラの優しい顔とそのお誘いには、乗らぬわけには行かなかった。

“お前のおごりかい？　こんなの久し振りだねえ”とぼくは答えた。

やがてぼくたちは、街角の雰囲気のある小さなコーヒ店に入った。中は空いていて、ぼくたちは窓際に席をとった。

セーラがレインコートを脱ぐと、中から暖かそうなセーターが現れた。セーラは、今日はとっても楽しそうだった。

“いいのかい？　ぼくを誘ってくれて”と、ぼくはもう一度、念を押すように言った。

“いいのよ。それとも、何かおかしい？”と、セーラは、にこやかにぼくを見て尋ねた。

“だって最近、お前からこんなことってなかったもの。いつも、イヤ味ばかりいってたものなあ”

“きょうは特別”とセーラは答えた。“だって兄さんは今、まじめに仕事をやっているでしょ。だからよ”

ぼくは何も答えられず、ただセーラを見つめるだけだった。

やがてコーヒが来ると、セーラは、こっそりと紙袋からおいしそうなパンを取り出した。

“よくここでパンを食べるのよ。兄さんもどう？　ひと口”

“いただくよ”とぼくが答えると、セーラは、中のひとつをぼくによこしてくれた。
口に入れると、なるほどうまいパンだった。こんなにおいしいパンを口にしたのは、久し振りのことだ。
“焼きたてだからおいしいの”とセーラは言った。
“よくここへ来るのかい？”とぼくは尋ねた。
“ええ、よくひとりで”とセーラは答えた。“早めにひけた日なんか、よくここに来てぼうっとしているの。街を通り過ぎる人なんか見ていると、面白いわ”
“お前にもそんな趣味があったのか”と言って、ぼくは笑った。“また誰かと来てるんかとぼくは思ってた。最近のお前は楽しそうだから”
“いいえ、いつもひとりよ”とセーラは答えた。“だってこの前来たでしょ。いつもあんな調子よ。あそこから解放されて、毎日ヤレヤレよ。だから、ときどきここへ来ては、ぼうっとしているの。リサも、ここは知らないわ”
“お前の秘密の店があったというわけか”とぼくは言った。“それにしても、なかなかいい店だ”
“兄さんの方はどうなの？　仕事は順調？”と、しばらくしてからセーラは尋ねた。
“今のところはね”とぼくは答えた。“きょうは客の入りがさっぱりだから、支配人はカッカしていたけれど、ぼくの方は仕事がなくて、ホッとしていたよ。だっていつも、緊張のしづめだもの”
“そんなに暇なの？”と、セーラは、少し不安そうな表情をして尋ねた。
“まあこの季節はね”とぼくは答えた。“でも、それほどでもないさ。きょうは特別。おかげでお前にも会えたんだもの”
“兄さんは仕事が暇で喜んでいるけど、お客さんが入らなきゃ、収入もなくなるのよ”とセーラは言った。“あんまりいいことだとは思えないわ”
“でも、多分きょうだけだと思うよ”とぼくは答えた。“あしたからまた忙しくなるさ。また支配人には怒られなきゃならないし”
“支配人はそんなによく怒るの？”とセーラは尋ねた。
“ああしょっちゅうだ”とぼくは答えた。“おかげでもうすっかり慣れてしまったよ。初めてのお前なら耐えられないと思うけどな。何をボヤボヤしている、とか、人の言うことが聞けないのか、とか、もっと愛想よくしろ、とか、何かにつけてうるさいんだ。ときにはかみついてやろうかと思うこともあるけど、じっとこらえているんだ。今の仕事を失うのはいやだもんな。――でも給料は安いし、割に合わないって気がするときもあるよ”
“仕方がないわ”とセーラは言った。“わたしも一緒よ。もっといい所があれば変わりたいわ。でも、そんなにいいところなんてないし、じっと我慢しているのよ”
ぼくはじっとそんなセーラを見つめていた。
“お前ってえらいねえ”
ふと、そんな言葉が口をついて出て来た。

　間もなくしてぼくたちはコーヒ店を出た。
　支払いをし、遅れて出て来たセーラは、また元のようにレインコートを着ていたが、一人の素敵な恋人のように、ぼくには見えたのだった…

　そんな日があってからしばらくした後、ぼくは大変な目に会ってしまった。
　ネックレス騒動――そう、そう名づけるのが一番適切な事件だった…

　その日の朝、ぼくが玄関先まで丁寧に見送った泊まり客が、午後になるとすぐ、血相を変えてホテルまで舞い戻って来た。身につけていた高価な真珠のネックレスがなくなったと言い出し、このぼくにあらぬ疑いがかけられたのだ。彼らは警察まで呼び出し、おかげでぼくの前歴まですっかりバレてしまったぼくは、ますます疑わしい存在になってしまった。ぼくはやってないと主張しても、にわかには信じてもらえなかった。支配人まで、ぼくが前歴を隠していたことを罵倒し、泊まり客の前で即刻首だ！とまで怒鳴り散らした。
　しかしその件は、彼らの乗っていたタクシーの運転手が正直にも車内に落ちていたネックレスを届け出たことによってケリとなった。
　しかし、納まらないのはぼくの方だった。散々疑われ、屈辱的にもみんなの前で身体検査までされたあげく、過去まで暴かれたのでは納まりがつかなかった。支配人は、首は徹回したものの、ぼくの気持は怒りで今にも爆発しそうだった。
　その気持に火をつけたのは、他ならぬ当の泊まり客その人だった。
　返ったネックレスを身につけながら、婦人は一応ぼくにわびを入れたものの、続いて支配人に言った言葉が、ぼくをカッーとさせた。
　“でも支配人、紛らわしい子を雇うのも問題ですよ。前歴があるなんて、よくもまあ、そんなにおそろしい子を雇ってますこと”
　そこまで言ったとき、ぼくはもう我を忘れて彼女に飛びついていた。
　続いて目にしたのは、床に飛び散る彼女の大切なネックレスの真珠の玉だった。勢い余って、ぼくは、彼女の首に手をかけたつもりが、ネックレスをその拍子に引きちぎってしまったものらしい。
　ぼくはすぐ、そばにいた男たちによって引き離されたが、彼女は大げさな身振りを交えて、金切り声を立てた。
　“わたしの大切なネックレスが！”と何度も口にし、彼女はすっかり興奮状態に陥った。
　しかしぼくは決して謝らなかった。胸にたまっていた怒りをすべて、この際ぶちまけたのだ。
　“なんだい、ババア。よくもぼくを犯人扱いしてくれたな。おかげでぼくはもうメチャメチャだい。どうしてくれる！　そのうえ、まだこりないのかい。ぼくが前科者だと？　それがどうだというんだよ。生活をしちゃいけないとでも言うのかい？”

“そこまで言うのなら弁償してもらおうじゃないか”
ぼくの強気を逆手にとって出たのは、その婦人の夫と称する男だった。二人が本当に夫婦だか怪しいものだったが、それはさておき、彼は一転して強気に出たのだ。
“あれは結構高価なものなんだぞ。君に払えるかね”
頭にカッーと血が昇っていたぼくとは対照的に、支配人はすっかり気が動転してしまっていた。
“おい君。君はもう首だ。今すぐここから出て行きなさい！”
彼はそう叫んだが、言われる前にぼくはもうホテルを飛び出していた。何もかもいやになり、一直線にアパートに舞い戻ったのだ。
そして帰り着くなり、ウィスキーをあおり、そのままベッドの上に寝転んでしまった。

ぼくがホテルを出た直後、支配人はセーラの勤め先に電話をしたに違いなかった。そして、セーラはリサに、とあわただしい日が始まった。

もう夕方になっていたに違いない。閉ざされた窓の明かりが、次第に薄暗くなりつつあるのが感じられたからだ。
“兄さんったら、そんなところで寝て、どうするつもりなの？”突然セーラが、ぼくをゆするようにして言った。
“分かるだろ？　ぼくには立派なママがいたんだ”
“ママのことは分かったわ。でも、どうするつもりなの？”
“ぼくのことは、ほっといてくれよ”
“困ったわ。ほんとうに酔っぱらってさ”
“ぼくは酔っちゃいないさ。ただ悲しいだけなんだ…”
ぼくはそう言うなり、ベッドから伸び上がるような姿勢で、窓を見つめた。
“一体、何がそんなに悲しいの？”とセーラは、手のほどこしようがないとばかり、ぼくを見つめるのだった。
“お前に言ったって、分かるものか。ただ悲しい――それだけだ”
“兄さんは酔っているのよ。だから、そんなことを口走るんだわ。しっかりしてよ。そんな状態じゃ、体を悪くするでしょ”
“体を悪くしたってかまうものか。それに――お前はママじゃない”
“わたしがママじゃないって？　全く変よ。何が言いたいの？”
“お前には分かるものか。ぼくにはママがいないということが”
“兄さんって、まるで赤ん坊みたいね。いい年をして、ママがいないから悲しいなんて、そんなことで一体どうするつもりなのよ？”
“ぼくのことはほっといてくれよ”とぼくは言った。“そして、好きなだけ泣かせてくれ。ぼくは赤

ん坊でいいんだ。そして、赤ん坊のように泣きたいんだ”

“まるで、しようのない兄さん”とセーラは言った。“そんなんじゃダメよ。もっとしっかり気を持たなくっちゃ。そうでないと、体がまいってしまうでしょ”

“体がまいったってかまうものか”とぼくは言った。“だってぼくは――ぼくは死にたいからさ。生きていたって、何ひとついいことがありゃしない…”

“いいことがなくったって、人は生きて行くしかないのよ”とセーラは言うのだった。“もし本当に死ぬのがいやなら。兄さんは口先では死にたいっていうけど、本当に死ぬ勇気なんか、これっぽっちもないくせに。そして――死ねなきゃ生きていかなければならないし、生きて行く以上は働かなければならないでしょ。それなのに、どうしてやめてしまったりしたの？”

“だから、ぼくのことはほっといてくれって言ってるだろ？”

“いえ、ほっておくわけには行かないわ。だって、兄さんが食べられなくなりゃ、わたしらが養う他なくなるでしょ。他の誰が、一体養ってくれると言うの？”

“お願いだ、ぼくを眠らせてくれよ”とぼくは言った。“ともかく、ぼくは今、眠りたいんだ”

“いえダメ。眠らせるわけには行かないわ”とセーラは言うのだった。“だって今、どんなことが起きているのか、兄さんは知っているの？ リサが今、男の人の所へ謝りに行っているところなのよ”

“リサが謝りに？　一体、何んのためなんだ”とぼくは言った。

“全くあきれるわ”とセーラは叫んだ。“一体、何んのためじゃないでしょ。兄さんが女の人のネックレスを引きちぎったから、それで謝りに行ってるんでしょ”

“女の人、ネックレスだって？”ぼくはすぐには思い出せなかった。“あ、そうか…　あれか…　あれはもう、きのうのことじゃなかったのか”

“ばかな！　つい数時間ほど前のことよ”とセーラは叫んだ。“こんな大事なときに、兄さんは酔っぱらってしまうもんだから。兄さんが素直に謝りさえすりゃ、こんなに大ごとにはならなかったものを”

“ぼくが謝る？　どうしてなんだ！”と、ぼくは少し食ってかかるようにセーラに言った。

“だって、女の人のネックレスをだいなしにしたんでしょ”とセーラは平然と言ってのけた。“相手の人も最初はカッカしていたけど、落ち着いて話し合えば分かるって言ってくれているらしいの。ホテルの支配人も同じよ。あのときは冷静さを失ってあんなことを言ってしまったけど、兄さんが素直に謝りさえすれば、クビのことは水に流すって”

“それで謝れってか。誰れが謝るものか”とぼくはきっぱりと言った。

“でもリサは謝りに行っているのよ。うまく行っているか、本当に心配だわ”

“それで、ぼくの代わりに謝りに行っているのか”とぼくは言った。“全くバカなやつ！”

この言葉は、セーラをむかつかせたようだった。

“バカな奴はないでしょ！”とセーラは叫んだ。“兄さんの為にリサは身を粉にしているのよ。全く、兄さんが代わりに行けば…”

“ぼくは眠りたいんだ…”とぼくは言った。“このまま眠って、静かに泣いていたいんだ…”

“そんなこと、許すものですか。絶対に！”とセーラは叫んだ。“兄さんこそ、謝りに行くべきよ。妹のリサが、どうして兄さんの代わりに行かなくっちゃならないの。そのことを少しでも考えたことがあるの？　兄さんったら全く、いい年になって、わたしたちに迷惑をかけっぱなしなんだから…”

“ぼくがさっき見た夢。それはなんだか分かるか？”

セーラは答えようとはしなかった。

“恐らく分からないだろうよ”とぼくはひとり言のように続けた。“それが悪魔の山だったのさ。ふん、みんなはそれを見ようとはしなかったのさ。窓にはカーテンが降ろされていたし、誰もそれに触れようとはしなかった。だって、開けるのは禁じられていたからさ。でもぼくは、そのカーテンが気になった。それで、勇気をふるってぼくはそのカーテンを開けてみた。誰も見ようとしない、その窓の向う側はどうなっているのだろう？　すると、窓の向う側には山がそびえていたのさ。それまで誰も目にしたことがないような、それはそれは美しい山が。ぼくはその美しさに、しばしみとれてしまった。――しかし、それがためにぼくは、周りの連中から追われるハメになってしまった。奴らは、その山を見た者は生かしておけないと言うんだ。その為にぼくは逃亡者となってしまった。ふん、夢の中でさえこのぼくは、追放者なんだ…”

セーラは、全く無関心のように聞いていたが、しばらくしてからこう言った。

“ふん、それは兄さんが間違っているからなのよ”

“じゃあお前も、ぼくを追放する一味とぐるというわけなんだな”とぼくはすかさず反論した。

“わたしは何も、兄さんを追放するなんて言ってないわ。わたしはただ…”

そこまでセーラが言いかけたときに、突然ドアの音がして、リサが帰って来た。ぼくたちは二人とも、リサを見た。

“それでどうだった？”と、セーラは、あわただしく息を切らせながら入って来たリサに尋ねた。

リサはまだ息をハアハアさせていた。

“やっぱりわたしではダメよ”とリサは言った。“一応はおさまったけれど、ホテルで待っているって”

“ホテルで待っているって、どういうことよ”とセーラは尋ねた。“ねっ、詳しく話してちょうだい”

“つまり”とリサは言った。“感情的にはなんとか収めてくれたわ。――でも、弁償の分がね。やっぱり払ってくれって言っているの。そうでないと、告訴するって”

“告訴するって！”と、セーラはさも驚いたように叫んだ。“そりゃ大変。それで、弁償するとすればいくらなの？”

“それが…”とリサは悲しそうな顔をして言った。“あのネックレス、結構高価で、５０００※※※って言っているの。とても払い切れないわ。そんな大金”

“５０００※※※！”セーラは、目がクラクラとしたように、顔を背けた。“そんなの…　それもこれも、みんな兄さんのせいなのよ。どうしましょ”

“姉さん、払うつもりなの？”と、リサはためらいがちに尋ねた。

“バカな！　貧しいわたしらに払えるわけがないでしょ”とセーラは言った。“これもそれも、みんなこの兄さんのおかげなんだから。ああどうすればいいのよ”

“これでもわたし、精一杯謝ったつもりなのよ”とリサはすまなさそうに言った。

“何もリサが謝ることなんかないわ”とセーラは言った。“悪いのはみんな兄さんなんだから。でも本当に困ってしまった。何かいい知恵はないかしら。ねえ兄さん、起きてよ。そんなところで寝ている場合じゃないでしょ”

セーラが余り激しくゆするものだから、ぼくは仕方なく起きることにした。

“分かったよ。起きてやるよ”と言って、ぼくはゆっくりと起き上がった。

アルコールのせいで、まだ体がフラフラしていた。二人の妹は、ベッドに腰掛け、頭を抱え込んでいるそんなぼくを見つめていた。

“全くしようのない兄さん。情ないったらありゃしない…”

セーラは、ぼくを見つめながら、ひとり言のようにつぶやくのだった。しかし、ぼくももう黙ってはいられなかった。

“さっきから大人しくしてりゃいい気になって”とぼくは言った。“ぼく一人だけが悪者じゃないか。相手のことを少しでも考えてくれたことがあるのかよ。そんな、謝るような奴らなんかじゃないんだ。お前らは、そこのところがちっとも分かっちゃいないんだ”

“でも、弁償はどうするのよ？”とセーラは言い返した。“そんなに言うんならもう知らない。なによ、文句ばっかり言って。いったい、誰に面倒みてもらっていると思って”

“誰に面倒見てもらっているだって？”ぼくはカッとなって叫んだ。

早くも険悪なムードに、リサは止めに入ろうとした。

“姉さん、兄さん、やめてよ、けんかするのは！”

しかしぼくは腹の虫が治まらなかった。立っているセーラにつっかからんばかりにぼくは立ち上がると、もう一度叫んだ。

“もう一度言ってみろ。誰に面倒みてもらっているだって！　お前か”

そう叫んでぼくがセーラのえり首をねじり上げようとするのを、見るに見かねてリサは止めに入ろうとした。

“やめて、兄さん！”

しかしセーラは必死に抵抗しながら、しかしその目は冷静にぼくを見つめながら言った。

“そうよ、わたしとリサ。どうしてホテルを棒に振ったりするの？”

“なんだって！　もう一度言ってみろ。ぼくが、お前たちに養ってもらっているだと？”

　ぼくはそう叫ぶなり、片手を振り上げ、今にもセーラをなぐろうとしたが、すぐリサがその手をとって、姉をなぐらせまいとした。
　セーラは、ぼくの勢いに、怖そうに顔をのけぞらし、しかめながら言った。
　“そうよ。わたしたちがいなけりゃ、兄さんはどうして生活ができると思うの？　なにさ、ちょっと言えばすぐ暴力をふるって。兄さんには弱い者いじめするだけの能しかないというの！”
　リサも、必死にぼくの振り上げた手を握りながら叫んだ。
　“兄さん、なぐらないで。暴力はダメよ！”
　しばらくのあいだぼくは、怒りでいっぱいでフグのように口をふくらまし、力が入っていたが、やがて気が変わり、セーラのえり首を放すと、手をだらりと下げて、力なく、自分のベッドに腰掛けた。
　“分かったよ。お前なんかなぐったって、しようがない”ぼくはひとり言のようにつぶやいた。
　セーラは解放されたえりをちゃんとしながら、まだへらず口をたたくのだった。
　“なによ。強がりを見せて。本当は、ホテルさえろくに勤められない弱虫のくせに”
　“弱虫だと？　勝手に言うがいいさ”ぼくはあえて腹が立つ気にもならなかった。
　“そうよ、弱虫”とセーラは続けた。“全然いくじがないったらありゃしない。リサは兄さんのために残業まで買って出ているのよ。それなのに、どうしてホテルを棒に振るの？”
　“あんなところ、勤められるか”とぼくは言った。
　“兄さんは、泥棒の疑いをかけられたから、かっかしているのよ”と、リサが同情的に言ってくれた。
　“たかがそんなことぐらい”とセーラは言った。“疑いが晴れたんだから、後のことは水に流して、謝るところは謝って、ホテルに戻ればいいのに。それすらいやというなら、兄さんには根気がないからよ”
　“その通りだ”とぼくは言った。“根気なんか、もう遠の昔になくしてしまった。根気がなんになるというんだ。働いても働いても生活がよくなるわけじゃなし。それどころか、へっ！　借金を返す為に働いているようなもんだ”
　“でも、たった半年の辛抱じゃないの”とセーラは言った。“兄さんが昔犯した罪の償いよ。わたしたちもこうやってがんばっているんだから、兄さんもどうしてがんばれないの？”
　“半年だって？　じゃあ、半年たてば何かいい生活がやって来るとでもいうのかい？”とぼくは言った。“それから初めて、一からやり直しの生活が始まるというだけじゃないか”
　“でもそうするしかないでしょ”とセーラは言った。“そのうえ新しく５０００※※※の催促よ。いったいどうすればいいのよ。わたしたちだけで全部、兄さんの負債を返済しろっていうの？　そんなの、マッピラよ”

“ぼくはなにもお前たちに負債を返済してくれって頼んだ覚えはない”
ぼくは床を見つめたまま言った。
“なによ、えらそうな口を聞いて”とセーラは反論するのだった。“兄さんが一人で返済できるのなら、何もわたしたちもこんなに苦労することはなかったわ。ーーでも兄さんはずっと失業中だったし、わたしたちが肩代わりするしか…”
“そうよ。姉さんの言う通りよ”ここではリサもが姉の肩を持つのだった。“そんな言い方ないわ”
“だってそうじゃないか”とぼくも強気だった。”ぼくが頼んだか？　お前たちが勝手に働いて、勝手に返済しているだけじゃないか”
“じゃ聞くけど”と、セーラも怒ったように叫んだ。“わたしたちが返さなくてもいいというの？毎月返済することになっているのよ。それじゃ兄さんはどうして返せるのよ。ずっと失業中だったくせに。まったく話しにならないわ”
“逃げるさ。簡単だ”とぼくは言った。
“逃げる？”
“そうさ。お前たちはなにも返すことなんかない”とぼくは言った。“あんな金持の連中なんかに。逃げるか、さもなくば、また泥棒でもおっぱじめてやろうか”
“バカ言わないでよ。泥棒なんて”とセーラは言った。“そんなこと、もうできっこないでしょ。泥棒なんて、ますます悪循環なだけよ”
“そうよ。泥棒なんて絶対やめてよ”とリサも言った。“兄さんがホテルのお客さんから首飾りを盗んだって聞かされたとき、ホントにわたし、泣きたくなったわ”
“そうか。ぼくが本当の泥棒でなくて残念だったな”とぼくは言った。
“なんてことを言うの！”とセーラは言った。“兄さんには、わたしたちがどれほど兄さんのことを心配しているか、それが分からないというの！”
“分かったってどうっということはあるまい”とぼくは答えた。“そうだ。本当に盗んでいればよかった。真珠の首飾りだけでなく、現金も。それどころか、ホテルの金庫からもごっそり盗んでやればよかったんだ”
“バカなこと言って。どうしてそんなことを思うの？”とセーラは言った。
“だってそうだろ”とぼくは言った。“そうすりゃもっとうまい料理が食べられるし、もっとぜいたくな暮らしができる。あいつら、ホテルにやって来る連中はみんなそんな暮らしをしてるんだ。ぼくたちが、同じような生活をしてどこが悪い？”
“だってそういうわけには行かないでしょ”とセーラは言うのだった。“そのうえ、兄さんは大きな罪を犯してしまったことだし”
“大きな罪だって？”とぼくは言った。“ぼくは罪なんか、ひとつも犯してはいない”
“よく言うわ”と、セーラはあきれ果てたような顔つきで言った。“じゃあ毎月やって来る弁済の催促はどこからやって来るのよ”

“奴らはしぼりとろうとしているだけなんだ”とぼくは言った。“ぼくたちを散々苦しめて、奴隷同然にし、自分たちだけが肥え太るために”

“全くあきれてものも言えないわ”とセーラは言った。“やることをちっともやろうとしないくせに、文句ばっかり言って”

“じゃあ、ぼくがホテルに行けばいいというのかい？”とぼくは言った。“奴らに、負け犬のように尻尾を振って”

“そうよ。せっかくいい仕事が見つかったというのに”とセーラは言った。“チップだって、たくさんはずんでもらったんでしょ”

“笑わせるない”とぼくは言った。“もうたくさんだ。あんな仕事なんか。実際惨めだった。ぼくなんか犬並さ。奴らは、犬にえさをやるみたいに、ぼくにチップをくれるんだ。それに対してぼくは、作り笑いをするだけさ。自分で自分がイヤになってしまうときもあった。でもそれを続ける他ないのは、他に何もできやしねえからさ”

“そんなことであきらめるなんてバカだわ”とセーラは言った。“だってお客さんはなにも兄さんのことをそうは思っていないでしょ。兄さんが親切だから、そのお礼を込めて、チップをくれたのよ”

“親切だからか”とぼくは言った。“お前は何も分かっちゃいないんだ。金持といるときの惨めな気持というものが。お前は、相手にしているのがいつも貧乏人だから、そこのところが分からないのさ”

“貧乏人で悪かったわね”とセーラは言った。“でもどうして兄さんはそう、金持にこだわるの？”

“じゃあお前は、こだわらないっていうのかい？”とぼくは言った。“こんなに貧乏をしていて、それでもかまわないっていうのかい？”

“そうじゃないけど、でも、金持がいることがどうしてそんなに気になるのよ？”

“大ありさ”とぼくは言った。“奴らの考え方が気に入らねえのさ、ぼくは。ごうまんで、嘘つきで、そのくせ、人一倍、疑い深いと来ている。ぼくが親切だからって？　へっ！　誰が親切になんかしてやるもんか。あれは仕事だからそうしているまでさ。そうでなきゃ、誰が…　それなのに奴らは、ちょっと首飾りを失っただけなのに、さっそくぼくに疑いをかけてきやがった。分かるか？　ぼくの身体検査まで奴らは要求したんだぞ”

“まあ！”とリサはあきれたように言った。

“それも、ぼくが盗みの罪で少年院に入っていたことが分かったからさ”とぼくは続けた。“それだけでぼくはもう泥棒というわけさ。そこにいたみんなが同じ目でぼくを見つめやがった”

“それで、身体検査を受け入れたの？”とセーラは尋ねた。

“だって他にどんな方法がある？”とぼくは言った。“みんなの前で服を脱がされたさ。あんなに惨めで、恥ずかしい思いをしたのは生まれて初めてさ…”

“可哀そうに。そんなの、ヒドいわ”とリサは言った。

セーラも、そのことに対しては口をつぐんだまま、何も言わなかった。
“でも、どうしてバレたの？”と、やがてセーラは尋ねた。
“だって奴らは、大騒ぎをして、警官まで連れて来たからさ”とぼくは言った。“その警官が、ぼくのことをバラしやがったんだ。ぼくの顔を見るなり、もう犯人扱いだった。ぼくがいくら否認しても、聞き入れてはくれなかった。ぼくとしては、疑いを晴らす為に他に方法がなかったんだ”
“それで、出て来なかったんでしょ。どうなったの？”とセーラは尋ねた。
“当ったり前だ”とぼくは叫んだ。どうして出て来るわけがある？　奴らは全部調べたけど、結局出て来はしなかった。そのときになってあのババアは、タクシーではないかと思い出したんだ”
“でもさ、どうしてもっと早く疑いを晴らすことができなかったのかしら？”とセーラはひとり言のように言った。
“そんなことできるか？”とぼくは言った。“ぼくは前歴があったし、しかも泥棒だったんだ。疑われて当たり前さ”
“そして結局疑いが晴れたわけね”とセーラは言った。“みんな、謝ったんでしょ”
“もちろんさ”とぼくは言った。“タクシー会社から、警察に落とし物の届け出があることが分かって、それでケリさ。みんなは一応謝りはしたけれど、ぼくはそれで元に戻れたというわけじゃない。みんな、ぼくの過去を知ってしまったんだ。ぼくは泥棒さ。３ヶ月の刑を受けて、少年院に入っていたんだ。みんなそのことを知っちまったんだ。それで今まで通りの仕事を続けられると思うかい？”
“そんなの、問題じゃないわ”とセーラは言った。“そんなの恥じでもなんでもない。重要なのは、現在が泥棒じゃなかったこと、それだけじゃない”
“そうよ。姉さんの言う通りよ”と、リサも姉に声援を送った。
“マネージャーもいったん叫んだクビを撤回してくれたけれども、今度はこちらから断ってやった”
“どうしてそんなことをしたの？”とセーラは言った。“疑いが晴れたんだから、堂々と勤めればよかったのに”
“だってあの屈辱。あの屈辱を味わえばもう十分さ”とぼくは、じっと歯をかみしめるように言った。“あんなにまでされて、もういる気にはなれないさ。それに、その直後のあの事件さ。あのババアに、反省の色のこれっぽっちも見られなかったからさ。それなのに、あのマネージャーは、本来ぼくをかばうべき立場なのに、そのときもまた、これっぽっちもぼくの味方にはなってくれなかった。そんなマネージャーの下で勤められるものか。やつはまた、ぼくにクビを宣告したけれど、言われる前に、こっちからやめてやりたいぐらいの気持だった…”
“でも、そのときはお互い、カッカしていたからでしょ”とセーラは言った。“向うも、冷静になって、勤めに来てくれって、言ってくれているのよ。今のような仕事、めったにないのよ。それをやめるなんてもったいないわ”

“お前は、経済のことしか考えないから、そう思うんだ”とぼくは反論した。“もうあんなところへは行けないよ”

“そんなの口実よ”とセーラは言うのだった。“兄さんは何をやっても勤まらない人。それは、意気地がないからだわ。そんなこと言ってどうするのよ？　これからどこで働く気？　あれ以上の仕事が見つかると思って？”

“また、どっかで働くさ”とぼくは言った。“そうか、いっそのこと、どこかへ高飛びしてやりたい気持だ…”

“またそんなことを言って”とセーラは、失望したように言った。

しかしリサはもう少し同情的だった。

“姉さん、兄さんをそんなに責めるのはやめて”とリサは言った。“兄さんだって辛いのよ。泥棒に疑われたことがとってもショックだったと思うわ”

しかしセーラは、リサとは正反対だった。

“泥棒に疑われたと言うけと、疑われるような兄さんだったからいけないのよ”とセーラは言った。

これにはぼくも黙ってはいられなかった。

“なんだって！　ぼくがいけないだって！”とぼくは、セーラの目を見つめて叫んだ。“きょうの事件に、ぼくに責任があるというのか！　それじゃ、お前の言ってることは、あのババアが言ったことと同じじゃないか！”

“だってそうでしょ”とセーラは言うのだった。“兄さんが泥棒なんかしていなけりゃ、こんなことにはならなかったのよ”

“そうか。なんでもぼくが悪いんだな”とぼくは言った。“貧乏したことも、泥棒したことも、誰れかにどつかれて、らちされたことも、そしてきょう、真珠の首飾りがなくなったことも、それで、今の仕事をやめたことも…”

“そうよ。真珠の首飾りがなくなったのだけは兄さんのせいじゃないかも知れないけれど、その他のことはみんな兄さんの責任よ”と、セーラは言うのだった。“それなのに、兄さんはそこに自分の罪を認めようとはしないんだわ。でもそれは、兄さんの意気地なしから来ているんだわ”

“意気地なしか”とぼくは言った。“勝手に言うがいいさ。確かにそんなものはなくしてしまったさ。牛のように働いて、それがなんになるというんだ…”

“よくもそんなことが言えるわね！”とセーラは怒ったように言うのだった。“わたしたちがどんなに苦労しているか、兄さんは知っているの？　わたしたちの給料の半分近くは、兄さんのつくった借金の返済に充てられているのよ。おかげで、わたしたちのものなんか、なんにも買えやしない。遊ぶことなんて全然よ。それに、人の分まで働いているから、毎日が本当にくたくた。リサは残業までしているのよ。そんなことが兄さんには分かって？　そこまでしなきゃならないのがどうしてだか分かって？　それは、わたしたちがやらなきゃ、兄さんがますます困ることになるからよ”

“分かったよ！　お前の言ってることは分かったよ”と、ぼくはうるさそうに言った。“それでぼくに感謝してもらいたいって言ってるんだろ。――でもぼくは、さっきも言ったように、そんなことをお前たちに頼んだ覚えはないし、今でも、自分のことは自分で始末をつける気持には変わりはないさ”

“でも、どうやって？”とセーラは尋ねた。

“そんなこと、お前に言う必要性はさらさらないね”とぼくは言った。“それに、お前に恩着せがましく言われると、胸がムカついて来るんだ。養っているとか、借金を返しているとか、そんなことを聞かされるのはもううんざりさ。誰れが、妹になんかに養われてたまるものか”

“でも、実態はそうじゃないの”とセーラは言った。“それとも、わたしたちが好きでやっているとでも思っているの？”

“そうさ。お前たちが勝手にやっているだけなんだ”とぼくは言った。“勝手に働き、勝手に返しているのさ”

“フン、好きなように言うがいいわ”とセーラは言った。“そんなことより、あしたからの自分の身がどうなるか心配すれば？　すぐ働くのよ。わたしたちが働いているのに、兄さんだけ遊んでいるなんて絶対に許さないから”

“そんなこと、ぼくの知ったことか”とぼくは言った。“そうとも、遊んでやるともさ。あり金を全部使い果たして、それで食って行けなくなりゃ、また泥棒でもしてやるか。それとも、死んでやるかだ。本当に、死にたくなった”

“バカなこと言わないでよ、兄さん”と、リサは驚いて言うのだった。

しかしセーラは冷静だった。

“死ねるもんですか”と、セーラは言った。“口先だけよ、リサ。心配なんかいらないわ。兄さんには死ぬだけの勇気なんかないんだから。兄さんは、そう言って自分の弱さを隠そうとして、猫かぶりをしているだけなんだから”

セーラにそう言われてぼくは黙ってはいられなくなった。

“言ったな”と叫んでぼくは立ち上がった。“よし、それじゃ死んでやる。死ぬことぐらい簡単なことさ。生きていたって、どうせなんの意味もないんだからな。こんな世になんの未練もない”

そう言って、ぼくはフラフラとドアに向かった。

“やめてよ、どこへ行くの？”と、リサは本当に心配して、ぼくを呼び止めようとした。“姉さんに少し言われたからって、何も死ぬことなんかないでしょ”

“バカねえ、リサ”と相変わらずセーラは冷静だった。“兄さんは死にはしないわ。いっときの気紛れなだけよ”

“そうかセーラ”と、ぼくは振り向いて言った。“フン、せいぜい気長に生き、気長にせっせと、ぼくの借金を返済するがいい。お前なんかに、ぼくの気持が分かってたまるものか”

　そう捨てゼリフを言って、入口の壁に掛けてあったジャンパーをはおると、ぼくは荒々しくドアをあけて部屋から出て行こうとした。
　リサはそんなぼくを呼び止めようと必死だった。
　“兄さん、行かないで”と彼女は泣きそうになりながら叫んだ。“どこへ行くの？　何をする気？”
　しかし、ぼくこそ矛盾していて、本当に泣きたいような気持だった。いや、本当に死んでしまいたいと考えていたのかも知れない。ただあんなセーラに、弱音を見せるのだけは我慢がならなかった。
　“汽車に飛び込むか、木に縄をくくって、首つりをするか、ま、そんなところさ”
　しかし、セーラは、ぼくの言葉をあざ笑うかのように言った。
　“フン、大げさなことを言って”
　“ねえ、姉さんも止めてよ”と、リサは、ぼくの腕をつかみ、ぼくを部屋に連れ戻そうとしながら叫んだ。“兄さんは本気よ。本当に死ぬかも知れないわ！”
　そこでぼくは立ち止まり、リサの方に振り向いて彼女を見つめた。
　“リサ、心配はいらないよ”とぼくは、気持を落ち着かせて言った。“お前を悲しませるようなことだけはぼくもしたくないさ。セーラと違ってお前は本当にぼくのことを気にかけてくれているんだからな”
　“姉さんだって同じよ”と、リサは優しくぼくを見つめて言った。
　しかしぼくはそれを強く否定した。
　“それは違う”とぼくは言った。“あいつはぼくのことなんか、ちっとも気にかけてない女なのさ。お前に歩調を合わせているだけで、実際は違うところに気持が向いているのさ。ぼくもあいつのことなんか、これっぽっちも気にかけてなんかいない。お前はさっき、あいつに腹を立ててぼくが死のうとしている、というようなことを言ったね。それは違うんだ。あいつに腹をたてたってしょうがない。ましてあいつにちょっと言われたからって、死ぬわけには行かないさ。あんな奴の為に、ぼくの人生が左右されてはたまらないさ。だからそうじゃなく、ぼくはただ自分のおもむく所に行きたいだけなんだ。ねっ、分かったらぼくの手を離してくれるね”
　“でも死ぬって言ったわ”と、リサは急に心配気な顔になって叫んだ。
　“リサ、どうしてそんなに聞き分けがないんだ”と、ぼくは少し困った顔をして言った。“死にに行くんじゃない。ただちょっとでかけるだけさ。だから、手を離してくれ、リサ”
　“でもどこへよ？”とリサは言った。“今から何しに行くのよ。ねえ、うそ。うそでしょ。兄さんは死のうと思ってるんでしょ”
　そのときになってようやくセーラが口をさしはさんだ。セーラは、どういうわけか、軽く目を潤ませていた。
　“リサ、手を離してあげなさい”と、セーラは、落ち着いた口調で言った。“兄さんはおもむく所に行きたいの”

“だって姉さん”とリサは姉の方に振り向いて言った。“兄さんは死ぬつもりよ”
“離してあげなさい。絶対に死なないから”と、セーラは、妹に命令口調で、強く言った。
“いやよ、兄さん、行かないで”と、リサは泣き叫びそうになりながら言った。“せめて、死なないって約束して！”
“セーラの言う通りに離すんだ、リサ”と、ぼくはしびれを切らせて言った。
“リサ、分からないの？”と、このときばかりは、セーラはぼくの味方だった。“兄さんは少し外へ出たいだけなのよ。兄さんの言う通りにしなさい”
“さあ、分かっただろ？　ぼくは外へ出たいんだ。出してくれ、リサ”
リサは半分泣きそうになりながら叫んだ。
“知らない！”
そして、ぼくの手を離すなり言った。
“兄さんが死んだってもう知らない。姉さんのせいよ。兄さんが死んだら、姉さんの責任よ”
“ええ、分かったわ。わたしが責任をとるわ”と、セーラが冷静に答えた。
ぼくはやっと手首が軽くなり、解放された気持になった。
“じゃ行くよ。さようなら、リサ。セーラ…”
ぼくがドアをしめて、階段の薄暗い踊り場に来ると、部屋の中からワッと泣き叫ぶリサの声が聞こえて来た。
冷たい冷気が身にしみる。他の、どの部屋からかは分からなかったが、夫婦ののしり合う声と共に赤子の泣き叫ぶ声が聞こえて来た。人生の裏街道。そんな様々な雑音を耳にしながら、しかしぼくは何事にも動ずることなく、ゆっくりと階段を降りて行った。
やがて外に出ると、一層冷たい空気に触れ、ぼくはジャンパーのえりを立てた。空を見上げると、建物の合間に美しい半月が見えた。それはまるで、優しく微笑みかけるママのようでもあった。ぼくは無言の月を目にしながら、もしあれがママなら、そしてもしぼくが死んでママのふところに帰り着くことが出来るものなら、もう死んでしまってもいいと思った。

あてもなく歩いているうちにふとある考えが頭に浮かんだ。こんなとき、行ける場所はひとつしかなかった。例の酒場だ。
念の為にポケットの中から金を探してみたが、寂しいばかりだった。しかしあそこなら、金がなくとも飲むことはできる。
ぼくがドアをあけると、中は相変わらず、男たちのいきれでむせかえるようだった。タバコのけむりのせいで、奥がかすんでさえ見えた。しかし、ぼくは、いつもの指定席の、カウンターの隅を捜し出し、そこに坐った。他の客相手に忙しそうに話していたなじみのマスターは、ぼくに軽く会釈を送り、間もなくして注文をとりに来た。

“君か。この頃、顔を見せないようだけど、何かあったのかい？”
“仕事が忙しくて、なかなか来れなかったんだ”とぼくは答えた。
“ほう、どんな仕事だ”と彼は尋ねた。
“おじさん。そんなことより、ウィスキーをくれ”
彼はすぐグラスに入れてさし出してくれた。一杯飲むとぼくは続けた。
“ホテルだよ。でも、きょう首になっちまった”
“またどうして？”と彼は言った。
“ぼくが泥棒だってさ。何もやってないのに”
そこでぼくは一部始終を、マスターに聞かせてやった。途中マスターは客の注文に応じ、何度も中座したが、ぼくは何もかも嫌になってここへ来たことまで話すことが出来た。
“そうか、それで一杯というわけか”とマスターは言った。
ぼくはグィッと最後の一杯を引っかけると、
“マスター、お代わり”と言った。
“かまわないのかい、そんなに飲んで”とマスターは言った。“もう５杯目だぜ、坊や”
“ほっといてくれ”と、ぼくは半分やけになりながら叫んだ。
“それよりな、例の首飾りの件”と、マスターは言った。“５０００※※とはえらくふっかけられたものだな。君たちがまだ子供だと思って無茶を言っているに違いないんだ。どんなものかは分からないが、せめて１０００※※にしてもらえよ。１０００※※なら坊や、一か八かやってみるかい。ちょうどこの奥には秘密の賭博場があるんだ。そこでなら、元手はなくても、簡単に１０００※※ぐらいは稼ぐことができる。なに、負けそうになればやめればいいまでさ。どうだい。行ってみるかい？”
ぼくはかなり酔いながらも、マスターの言葉には真剣に耳を傾けていた。１０００※※ももうかりゃ、確かにマスターの言うように、この問題も一挙に解決するかも知れない。
“分かったよ、マスター。行くよ。どこだい？”とぼくは言った。
“君ならきっと勝つ”と、マスターは景気づけるように言った。“場所はこの奥だ。幸運を祈っているよ”
ぼくはよろよろと立ち上がり、支払おうとしたが、あいにくポケットにはいくらも残っていなかった。
“おじさん、悪いけど、また金がないんだ”とぼくは言った。“つけにやっといてくれ”
“そんなことだろうと思っていた”と、マスターは言った。“いつも、いっぺんに払ってくれたためしがないからな。それより、掛金はあるのかい？”
“なければこの時計で払うさ”とぼくは言った。“それに多分――また、ぼくの妹が払ってくれると思うよ。最近はよく、そうしているんだろう”
“ああ、この前も、君の可愛いらしい妹さんが支払ってくれたからね”とマスターは言った。“今度また来れば、請求しておくよ”

ぼくはよろよろと別室に向かった。そこは、それまでの部屋とは打って変わったように薄暗くて、数人の張り客の表情も真剣そのものだった。ぼくは空いている椅子に腰を降ろし、しばらくルーレットの回る様子を眺めていた。やがて、みんなが張るのにつられて、ぼくも現金を張り始めた。最初、ついていたせいか、面白いほど勝ち出した。そして、一時は１０００※※を超えるほどもうかったにもかかわらず、欲を出したせいか、ズルズルと今度は負けに転じ始めた。後になって思えば、あのときにやめておけばよかったのかも知れない。しかし、負けた分を取り戻そうとする欲目のせいか、いつのまにか、隣の男に金を借りて勝負を続けるというマイナスに転じていた。アルコールのせいか、ぼくが事の重大性に気づいたのは、ずっと遅くなってその男に請求書を突きつけられたときだった。なんと、彼が書いてよこしたのは、皮肉にもあの金額と同じく５０００※※だった。

“お客さん。もうこれ以上張っても仕方がない。そろそろ精算してもらいましょうか”と男は言った。

それを見て、ぼくは真青になった。それまでの酔いが、いっぺんに覚めてしまったみたいだった。

“こんな大金”と、ぼくは、目の前に置かれた請求書を見て言った。“とてもぼくには払えない”

すると、とたんに相手の男は怒り出した。

“なんだと！”と、彼はテーブルを叩いて立ち上がった。“今までの賭けが単なる冗談だと抜かすのか！”

しかしぼくは、アルコールの酔いもあり、すっかりしょげ返って男に答える元気もなかった。

男は、ぼくの胸ぐらをつかむと、激しくゆすり、数回ビンタをくらわして、ぼくを叩き起こそうとした。

と、ちょうどそのときだった。賭博場の秘密のドアが開いて、ひとりの可愛い少女が駆けて来た。彼女は、ぼくがぐったりとし、口を切っているのを見ると、驚いて駆けつけて来た。

“兄さん、しっかりして。一体、何をしたというの！”

リサは、男を払いのけると、今度は男に代わって、椅子の上でグッタリしているぼくのえり首をつかまえて、激しく揺さぶった。しかしぼくは、アルコールが回り過ぎたせいか、もうほとんど意識を失いかけていた。

そのとき、横に立って見つめていた例の男がリサに声を掛けた。

“あんた、この男の妹なのかい？”

“ええ、兄さんが何かしたんですか？”と、リサが心配しながら答えた。

すると男は、苦々しそうな顔をしながら、

“ええ、実はね、この人がこれだけの金を借りたのに、払えないと言うんです”と言って、請求書を彼女に見せた。

　その請求書を見て、リサは驚いた。本当に、兄が情けなくなった。しかも、そのぼくが、ほとんど意識がないばかりになっていたのだ…
　“で、お嬢さん”と、間を置いてから男は言った。“あんたが代わりに払って下さってもかまいませんが”
　リサは、驚いた顔をして、男を見つめた。一見、紳士面をしているが、いかにもズル賢こそうな顔つきだった。
　“でも、そんな大金”とリサは言いかけたが、プライドが頭をもたげたためか、すぐその言葉を撤回して、今度はきっぱりとした口調で言った。“ええ、払います。でも、今すぐというわけには行きませんの。ひと月ほど待っていただけないでしょうか”
　そう言ったものの、ひと月でそんな大金を工面するあてなど、どこにもなかった。
　しかし、この毅然とした態度は男を喜ばせた。男は、浅黒い顔をニヤリとさせると、
　“いいえ、そうする必要はありませんぜ、お嬢さん。今すぐ決着をつけましょう”と言って、ポケットからトランプを取り出した。
　“どうです、ひとつあんたと勝負して、あんたが勝てば、今までの借金は全部帳消しにいたしましょう。でも、あんたが負ければ、借金はさらに倍になる”
　その瞬間、周りにいた人々のあいだからはどよめきが起こり、リサがどんな反応を示すか、面白そうに注視した。ぼくも、その騒ぎで一瞬目が開き、リサに声援を送った。
　“リサ、やれよ。きっとお前が勝つ。これまでぼくが負けた分を一挙に取り戻すんだ”
　リサはなかなか決断がつきかねているようだったが、やがて決心がついたのか、
　“じゃあ”と言って、男からもぎとるようにしてそのトランプを手にとった。“どうすればいいの。ルールを教えて”
　“なに、簡単ですよ。トランプをテーブルに並べて、好きなトランプを一つ引く。数字の大きい方が勝ちというわけです”と男はルールを説明した。
　“分かったわ”と言って、リサはトランプをテーブルの上に並べて、中から一つ引いた。
　リサの引いたトランプは、ダイヤのクイーンだった。
　再びどよめきが起こり、リサはホッと胸をなで降ろした。
　男は、そんなリサを見つめながら、ニヤリとした。
　“どうやらこの勝負はあんたの勝ちのようですな”と言って、男はおもむろにトランプの一つを引いた。
　やがてゆっくりと裏返したそのトランプは、スペードのＡだった。
　この逆転劇に、再び場内ではどよめきが起こった。
　リサの顔は、たちまち険しくなった。早くも、悲しみの色がさして来た。
　しかし、男の方は、全く冷静だった。
　“分かりましたね”と男は勝ち誇ったように言った。“あした、わたしの部屋へ約束の金を持って来てもらいましょ。ただし、あんたひとりでね”

周りにいた男たちは、その言葉で、みんなため息をついた。リサは、屈辱のため、今にも泣き出したい気持だった。男には何も答えず、酔っ払ったぼくを抱えると、そのままよろよろしながら、賭博場から出て行こうとした。ドアのところにさしかかったとき、男は思い出したように、リサを呼び止めた。

“わたしの部屋は、オーシャンホテル５１１号室だ。間違わないようにな。逃げようたってダメだぞ。君の兄さんの住所は、ちゃんと控えてあるからね”

しかしリサは、何も聞こえなかったごとく、振り向きもせず、酔っ払ったぼくを抱えるようにして、その賭博場から出て行くのだった…

冷たい夜風にさらされながら、随分長い道のりを、リサはぼくを抱えて、アパートに連れ帰った。

家ではセーラがいて、例の首飾りの件の決着をみたことを嬉しそうに語っていたが、別の難問が降りかかったことを、リサは姉に話そうとはしなかった。

セーラは、５０００※※の賠償支払いの件を、もう一度当事者とよく話し合って、うまく事を納めてもらうよう、話しをつけて来たところだったのだ。相手も、かっとなって強いことを言ったが、冷静に考えてみると、自分の方にも非があり、真珠も切れただけて無くなったわけでもなく、この際は聞きわけのいいところを見せようということで折れてくれたのだった。結局、５０００※※の賠償の問題は一挙に片がついたというわけだった。

しかし、リサの悩みは深かった。セーラが、一つの難問を片づけてくれたというのに、どうして、別の難問を持ち出すことができるだろう？

みんなが消燈した後、リサはあお向きになって目を開いたまま、長い間考え続けた。だが名案は何ひとつ浮かんでは来なかった。そのまま、リサは、一睡もすることなく、やがて翌朝を迎えた。

しかし、明け方頃には、リサも眠っていたらしい。スズメの鳴き声を耳にして、ハッと目が覚めたとき、きのうの出来事は悪夢ではないかと一瞬期待もかけてみたのだった。が、夢でもなく、紛れもない現実だと知って、リサはガッカリした。

起きて、レースのカーテンをたぐり寄せてみると、朝のまだ明けたばかりの寒そうな風景が飛び込んで来る。兄も姉も、まだそれぞれのベッドの上で眠ったままだった。すっかり安心しきった姉に、どういうことがあったかということさえ記憶にない兄。

この日の朝も、いつもと変わらぬ朝のように明けて行った。やがてセーラは起き出して来、鏡に向かって化粧を始めた。兄は、きのうのアルコールのせいか、ずっと眠り続けたまま、起きて来ようとはしなかった。このまま起こさずほっておこうということで、二人の意見は一致した。リサは、片時も自分の胸の内を明かすことなく、普段と変わらぬようにふるまい、普段と変わらぬ時間に、姉と一緒にアパートを出た。しかしリサは知っていた。きょうは行き先が違うということを――

　ホテルの一室で男が顔を洗っているとき、ドアでノックの音がした。すぐ行ってあけてみると、昨夜のあの可愛い少女が間違いなく立っていた。ちょっと見たところ、清楚な服装をしたその少女は、手に何も持ってはいなかった。男は、つま先から頭のてっぺんまで覗き込むと、
　“さっ、中へ”と、少女を中へ案内しようとした。
　が、少女はためらって、中へ入ろうとはしなかった。
　“いいえ、そんなに手間はとらせません。きのうのことで、少しばかり話したいことがあるだけですから”と彼女は言った。
　すると男は、彼女が何も持っていないのを知っていながら、とぼけたように、
　“じゃ、約束のものを持って来たんだね”と言った。
　しかしリサは冷静だった。男をしっかりと見据えながら、リサは言った。
　“いいえ、わたし、きのうのことを許してもらおうと思って、やって来たんです”
　リサの瞳は真剣だったが、男はとんでもないという風に笑いだした。
　“お嬢さん”と、しばらくしてから男は言った。“とぼけちゃいけませんよ。わたしはそんなことを約束した覚えはありませんぜ。それとも何か、わたしを聖人か何かのように勘違いなさっているんじゃありませんか？”
　“でも”と、リサも負けずに言い返した。“わたしは何もお金を借りてなんかいません。ただトランプをして、あなたに負けただけじゃありませんか”
　“えらいけんまくですな”と、猛然と食い下がる負け犬のようなリサに対して、それとは対照的に、男は、落ち着いた口調で答えた。“確かに事実としては、あなたの言う通りです。しかし、勝負をそんな風に考えてもらっちゃ困りますな。賭け事には命がかかることさえある。単なる遊びとは違うんです。それに、仮に一歩譲ってあなたの通りだとしても、あなたの兄さんの為に立て替えたわたしのお金はどうなるんです？　あれは自腹を切って払った分ですからね。あれすらもう返さないって言うんですかね”
　リサはもう観念する他なかった。
　“分かりました”と、リサは沈んだ面持で言った。“払います。でも、今すぐじゃありません。わたしたち、これから働いて、そのお金で払うことにします”
　すると、男は逆に顔をほころばせた。
　“ホホウ、お嬢さん。そんなにお困りなんですか？”
　その皮肉たっぷりの言葉遣いにリサは腹が立った。自分が困っているのを、この男は逆に喜んでいるのだ。そう思うと、例えようもなく、この男が憎らしかった。
　“だって、わたしたちが、そんなにお金持のように見えまして”と、リサは猛然と反抗するように、男の顔をにらみつけて言った。
　しかし、男の方は平気だった。
　“だったら、どうしてあんたの兄さんは、あんな大金をつぎ込む気になったんでしょうね”と、薄

ら笑いさえ浮かべながら、うそぶくように、男はつぶやいた。

“兄さんは酔っていたんです。自分でも知らないうちに間違いを犯したんです。酔っていなければ、決してこんなことはしませんでしたわ”と、リサは、くやしそうに答えた。
“でも、そんなにお困りなら、考えてもいいですぜ”と男は言った。“ま、ともかく中へお入りなさい。改めて一緒に話し合いましょう”
リサも仕方なく、男の言葉に従った。
男が提供した椅子に腰掛けると、リサは困り果てたように頭をかかえ込んでしまった。
男は、ナイトガウンを羽織って、すぐ隣の椅子に腰掛けると、パイプに火をつけて、そんなリサをじっと見つめた。そしてひそかに考えた。
なんと可愛い娘なんだろう。こんな娘に、最近お目にかかったことがない。スラリとした体に、まだ成熟しきっていない胸。しかもお金に困っているとは。こんなチャンスはまたとない。なにをためらうことがあるだろう？　こんな娘を、とりわけ困っている娘を、ものにしない手があるだろうか？
やがて沈黙の中で、男の手だけがスルスルと、リサの背中の方に伸びて行った。それはやがて、リサの背に触れて、優しく愛撫を始めた。リサは最初、男の手が自分の背中に触れたことに気づかないようだったが、その手が膝小僧を触れるに至ったとき、はっとなって顔を上げた。
“一体、なんのまねなんです！”と、リサは驚いて言った。
しかし男は、まるでこたえないように にやけた薄ら笑いさえ浮かべながら、落ち着いた様子で答えた。
“まあまあ、そう興奮をしないで。じゃ、わたしの考えを、率直に申し上げましょう。あなたは現在困っている。それに見たところ、あれほどの金を返せと言っても、すぐには期待できそうもない。そこで相談だが、あの措金をご破産にする代わりに、ひとつ、わたしの頼みを聞いてもらえないかな。ただひと言、はいと言ってもらえるだけでいいんだ。それであなたの借金は消える。どうです、お嬢さん、わたしのモデルになる気はありませんか？”
“モデルですって！”とリサは目をまるくして言った。“わたしにどうしろと”
“いやなに、わたしはこう見えてもプロのカメラマンでしてね”と、男は照れたように言った。“街の風景や、少女のヌードを撮ったりしては、雑誌に投稿させてもらっているんです。これまでもたくさんの方にヌードになってもらいました。みんなさっぱりして、いい感じでしたよ。別に悪びれることもなく、気持よく裸になってくれました。もちろんギャラははずみましたがね。なに手間はとらせません。簡単に終わるんです”
他に何もなければ、リサは怒って帰ってしまったことだろう。しかしこの場は違った。背後にはとほうもない借金をリサは抱えていた。リサは、男の顔を見つめたまま、あきれて物も言えなかったが、さりとて、すぐその場を去るということもできなかったのだ。冷静に考えると、答えは一つしかないようにも思われた。しかし、こんなことは初めての経験だったし、考えるだにゾッとする中味だった。これは夢であって欲しいと願いもしたが、紛れもない現実だった。逃げ場のない状況に追いつめられて、危うくリサは失神しそうにもなりかけたが、なんとか気持だ

けは持ち直した。

そしてやがては、苦渋のうちに、リサは決心した。それは結局のところ、必然の末に同意したにすぎなかったことだけれども…

“分かりました”とリサはやがて、屈辱の思いを目にいっぱいみなぎらせながら答えた。“どうすればいいんです。教えてください”

しかしひとたび決心がつくと、リサの胸の中では、不思議な感覚が過った。それまでの屈辱的な自分を超絶したような、どこか雲の上に昇って行くような、不思議な気分だった。

“なかなかもの分かりがいいね”と言う、男の嬉しそうな声がした。“じゃすぐカメラをとって来るから、君は服を脱いで、そこに置いてあるパンティーとブラジャーと、それにシャツに着替えておいてくれ。後は、ぼくがカメラを写しながら指示する”

そう言って男は、隣の部屋に姿を消した。

リサはゆっくりと立ち上がったが、しかし、やはりまだ恥ずかしさが残っていて、すぐには思い切れなかった。額に手を持って行って目を閉じた。精神を安定させる必要があったのだ。それに本当に明せきな判断をしているか確かめる必要もあった。やがてふと目をあけたとき、入口のドアが目についた。それはわずかに開いていて、逃げようと思えば、逃げられなくもなかった。それは、あたかも天国の入口のごとく、彼女を呼び寄せているようにも見えた。だが、必然の糸の方がはるかに強く、足が動かなかった。やがて、リサはドアから目をそらすと、改めて決心をしたかのように体をしゃんと伸ばし、それから胸のボタンをはずし始めた。もはや、後にひくことはできなかった。

男が三脚のついた高級カメラを隣の部屋から持ち出して来たときには、リサは約束通りの下着姿になって、ベッドに腰掛け、窓の外をぼんやりと眺めていた。脱いだ衣服はきれいに折り畳んでテーブルの上に置かれてあった。

“とうとうやったぞ！”と男は心の中で叫んだ。“ええとうだい、あのみずみずしい体といい、きちんと畳んであるあの女の衣服といい、観念した顔つきといい、一級品そのものじゃないか。たまらない魅力だ”

リサは、寒々としたシャツ姿だったので、寒そうに腕を胸に当てて坐っていたが、その胸の隆起が、以前よりもよく目立っていた。それに、パンティーからは、人の心を捕らえずにはいられない、スラリとした魅惑的な生の素足が伸びていた。脂肪質というよりは、余りにも細くて、冷たそうだった。しかし、それはふとももまでで、それから上は、尻のなめらかな曲線を見せてくれるだけで、白いパンティーにおおわれていた。

“しかし、やがてはあの白い下着もはぎとってやるのだ”と男は思った。“そうすりゃ、全く生まれたままの体が現れる”

男は、三脚を適当な場所に据えると、リサにベッドのそばで立つように命じた。リサは黙って指示に従った。リサがベッドのそばに立って、別にポーズをとることもなく、両手をだらりと下げたまま、無表情に男の方を向くと、男はカメラから彼女をのぞいた。

“よろしい。じゃ、ゆっくりとシャツをとってくれ。ごく自然に。ただし、ストップと声がかか

ったときは、そのままの姿で動作を止めてくれ。いいね”

　さっそく仕事が始まった。リサは、カメラに対して、こころもち横になって、ゆっくりと日常の動作を始めた。ひとりでいるときは、こんなことは当たり前のことだったが、今はカメラが見つめていた。でも彼女は、今では恥ずかしさがすでに峠を越しているのを感じていた。それで、ごく普通の気持でやることができた。シャツが腹の方からめくれて行き、とうとうブラジャーがちらっと見えたときに、男はストップをかけた。リサは、言われた通り、動作を止めた。そのときに写した写真が最初の一枚だった。
　リサはついにブラジャーとパンティーだけの姿になってしまった。ここまでなら、男に見せたことがある。だって、夏の浜辺では、水着とは言え、みんなにおなじみの姿だったからだ。しかしそれ以上となると、やはり気がひけた。こころもち開いたドアから、スキマ風がスースー入って来るのが、リサの素肌に感じられた。すると、恥ずかしさと、悦楽の入混じった不思議な気持がして来るのだった。リサは一瞬、自分は今、天国にいるのだと思った。もはや、自分の裸を見ている男がいることなど、気にならなかった。全く自由で、すがすがしかった。古い観念が、すっかりぬぐい去られたのだ。
　“じゃあ、今度は、ブラジャーをはずしてくれるかい？”と男は要求した。
　するとリサは、まるで機械仕掛けの人形のように素早く手を背中に回して、ブラジャーをはずしにかかるのだった。さっきまであれほどためらわれたのに、今は全く平気だった。こころもち、 ブラジャーが胸からずれ、それからすっかりはずれて、彼女の小さな、可愛い乳房が、その下から現れた。
　男は一瞬、ゴクリとのどを鳴らした。リサは、そのことがむしろ愉快だった。男をこんなにもドキドキさせる自分とは一体何者？　わたしはきっと天使に違いない。そう確信して、リサは今初めて、自分の力と威厳とを、自分のうちに感じるのだった。こんなことが、かつて想像出来ただろうか。こんな自分の姿が、かつて予期できただろうか？　偶然のたまものとは、まさにこのことを言うのではないだろうか…
　“じゃ今度はパンティーだ”いつのまに写真をとったのか、男は再び言った。
　パンティーには、ブラジャーのときよりも大事な部分が隠されている。リサはそのことをよく知っていた。でも、どこを見られたって、今となっては同じことだった。自分の体には、もはや恥ずかしい場所など、どこにもなかった。すでに男たちが知っている場所を、実際に確かめさせてやるだけのことではないか。彼女は脱ぐことにした。少しもためらうことなく、大胆に、最後のおおいをはぎとった。

　リサが帰って来たとき、兄がすでに目を覚まして、遅い朝食のためのコーヒを沸かしていた。リサが入って来るなり、
　“きょうはいやに早いんだな”と彼は言った。
　“きょうは休暇をもらったの”とリサは、さりげなく答えた。“ほら、ホットドック”
　そう言って彼女は、白い包み紙からそれを取り出した。

“兄さんの朝食にと思って買って来たのよ”

“随分と親切なんだな”と、兄は疑うような目つきで言った。“本当にそれだけか？”
“ええ、それだけよ。他に何があるっていうの？”今度は逆にリサが聞き返した。
“だって、きのうの賭けで、ぼくが負けていただろう。あれはどうなったんだ？”
リサはドキリとした。それは、彼が知っていたからではなく、自分が負けたことを兄が知らなかったからだった。
“ああ、あれ”と、リサは、微笑みを浮かべて答えた。“まあ兄さん、知らなかったの？　しっかりしてよ。わたしが兄さんの代わりに勝ってあげたじゃない”
“勝っただって？”と兄は驚いて言った。“そうか、お前が勝ったのか。じゃあ、ぼくの負けも全部が帳消しになったんだな。よくやってくれたよ。全く、本当に、どうしようかと思っていたんだ”
“ええ、大丈夫よ”と、リサは相変わらず、微笑みを浮かべながら言った。“でも、これだけは約束よ。あんなこと、もう二度とやらないって約束して。でないと、今度も同じように勝つとは限らないもの”
“ああ分かった。もう二度とやらないさ。もう二度とやらない。あんな危険な賭けは…”
兄は、自分に言い聞かせるように言った。
“さあ、昼食にしよう。お前もまだなんだろう？”
“ええ、服を着替えてからね”
そう言ってリサは自分の部屋に行きかけたが、すぐ兄が呼び止めた。
“お前、ちょっと”
その声で、リサはドキリとした。兄に、何か見破られたのではないかと思ったからだった。
しかし、兄は口にするのをよすことにした。リサのスカートのジッパーがはずれたままになっているのを言おうと思ったのだが、そんなことは大したことではないと考えたからだった。実際、兄にとって、リサのスカートのことなど、大したことではなかった。そこには、リサのこの日の苦難の一切が物語っていたにもかかわらず、彼が、そのことを知ろうはずもなかった…

その日を境にして、ぼくは再び振出しに戻ってしまった。仕事につくのでもなく、今では完全に、妹たちに飯を食わせてもらう、やっかい者の身となっていた。しかしセーラは、以前ほどきつく当たるのでもなく、しばらく冷却期間を置きなさいとばかり、むしろ同情の目でもって、ぼくに接してくれているような気さえした。
そんな日の思い出が一つある。
ぼくは、どん底の、絶望のまっただ中にあって、なお悪いことに風邪を引いて寝込んでいた。
しかし、粗末なベッドの横には、セーラが椅子に腰掛けていて、編物をしては、ときどきぼくの方に振り向いた。外は雨がしとしとと降る、寒い冬の夜のことだった。

ぼくはしかし、おせっかいとも言えるセーラの方には向いてはいなかった。頭に水で浸した冷たいタオルを置きながら、セーラと反対側の壁の方に、ぼくの目は注がれていた。天井には、黄色い裸電球が一つ、この薄暗い部屋を照らしていた。壁に掛けられた、古ぼけた時計が、ちょうど夜の十時を打った。

“兄さん、どう？　熱の方はもうだいぶ引いて？”と、セーラが尋ねた。

しかしぼくは目をあけながらも、答えようとはしなかった。

ずっと心に思うものがあり、それが余りにも悲しいことだったからだ。

つい最近、リサは勤めの途中倒れて、病院に運ばれた。幸い、大したこともなく、一日の入院だけで済んだが、驚いて病院に見舞いに行ったとき、彼女は額に汗して、とても苦しそうだった。その原因は、ぼくら三人には明白なことだった。つまり、ぼくらはこの一週間というもの、満足なものを食べてはいなかったのだ。収入は減る一方、借金だけが残り、二人の妹がどんなに働いても、二人の安月給では財布が底をつくだけだった。セーラの話しでは、リサは最近、こっそりと、自分のコートを質に入れたということだった。

ぼくは、熱にうなされながらも、ずっと今の生活のことを考えていた。自分や、妹たちの生活が惨めな一方、それとは正反対の、豊かな人々がいることを。最近ぼくは巷を歩いていて目にしたのだった。彼らの年齢が、ぼくらと変わらない年齢であったがゆえに、その影響には深刻なものがあった。彼らの笑いや、幸せそうな表情が、ぼくの脳裏に焼きついて、なかなか消えなかった。それなのに一方では、リサは、栄養失調と貧血と過労とで倒れなければならなかったのだ。ぼくはその事実を、ずっと考え続けていた…

しばらく経ってから、ぼくはぽつりとセーラに声を掛けたのだった。

“なあセーラ、どうしてママらは都会に住まなかったのだろう？”

“またどうしてそんなことを言うの？”とセーラは、編物の手を休めずに答えた。

“だってさ、ママらが都会で頑張っていてくれりゃ、ぼくらはこんなに苦しまずに済んだもの。ママらがそれなりに、店を出したり、会社を経営していたりさえしていれば、ぼくらはこんなに苦しまなくとも、ただ階段を登って行きさえすれば、それで済んだんだもの”

この言葉を聞いて、セーラはやっと、編物の手を膝の上に置いた。

“そんなこと、ママに求めるなんて無理よ”と、セーラは答えた。“だってママは、それがいいことだと考えて、わたしたちを、あの田舎に住ませたんでしょ？”

“とするなら、とんだ計算違いをしたんだ！”とぼくは、吐き捨てるように言った。“田舎なら、ずっと田舎の生活のままでいればよかった。都会など、見なければよかったんだ！”

ぼくがそう言うと、しばらく沈黙が流れた。セーラは、そんな話は聞きたくもないとばかり、また編物を手にとって、編み始めた。ぼくはぼくで、再び寝返りを打った。薄暗い部屋の中で、ただ時計の音だけが、カチカチと鳴っていた。

ふとぼくは、何を思ったのか、セーラを横目で見た。彼女はぼくに背を向けていたが、その横顔が、かろうじて見えていた。何を考えているのか、熱心に編物をしている様は、まだほんの小娘のくせに、ほつれた髪の毛の様子といい、その着ている地味な服装といい、もうまるで年寄りを思わせた。するとぼくには急に、そんなセーラが、哀れに思えた。一体セーラは今、その小さな頭の中で何を思っているのだろう？　彼女の今の生活の中に、どんな楽しみがあるというのだろうか？　ぼくは急に、そんな彼女が可哀そうに思え、声を掛けてみたくなった。

“それ、何を編んでいるんだい？”

“ちょっと今、目を数えているところなの”と言ってから、セーラは答えた。“セーターよ。リサの冬用のセーターよ。もう間に合わないかも知れないけれど…”

“へえ～、随分とこまめなんだな”とぼくは言った。“結構時間がかかるんだろ？”

“そうでもないわ。これくらいなら四週間ほどで十分よ”と、セーラは、まだ編みかけのセーターを、手にとってつくづくと見つめながら答えた。“でも、どうして？”

“いや、なんでもないよ”とぼくは言った。“ただ退屈だから、言ってみただけさ…”

そう答えてみたものの、本当は、彼女に何かしてやりたい気持でいっぱいだった。せめて、ケーキの一つでも買って、暖かいコーヒーと一緒に、彼女に食べさせてやりたかった。あるいは、洋服の一つや、ハンドバッグの一つでも買ってやって、彼女を喜ばすことができたなら、この打ち沈んだ家は、どんなにか明るくなったことだろう。そのことができない自分がもどかしく、残念でならなかった…

…そう、あれがぼくの青春だった。暗い、長い冬を、どうにかぼくたちは暮らして行った。

希望はどこにも見えることなく、ただ絶望と背中合わせにぼくはいた。休みの日になっても一日ゴロゴロと家にいるだけで、妹たちの不興を買った。精神は荒廃し、イライラが募って、ついささいなことで、セーラと大げんかをするというのも、一度や二度ではなかった。その原因が自分の方にあるとしても、ぼくはそのことを正面切って認めたくはなかったのだ。

そしてあの日も、昼食をとっている最中に口論となり、ぼくはついカッとなって、今度は本気でセーラの頬を力いっぱい殴ってしまったのだ。

セーラは、大きな叫び声と共に床の上に倒れ、同時に、彼女の食べていたパンや、皿が床の上に砕け散った。リサは､パンを食べかけたまま、驚きの余り、声も出ない有様だった。

セーラは、床の上にうつ伏せに倒れたまま、しばらく起き上がろうともしなかったが、やがてゆっくりと体を起こし、手で口をぬぐった。口を切ったらしく、手の甲に血がついているのがぼくの所からも見えたが、ぼくは謝ろうとはしなかった。しかし同時に、心の中では後悔の思いが渦巻いていた。どうして貧しいぼくらがこんな争いをしなければならないのか、そのことが口惜しく、また悲しかった。それならばセーラにすぐその場で謝ればよかったのに、小っぽけな誇りが、そのことをはばむのだった。

やがてセーラは、ぼくには視線もかわさず、散らかった食器やパンくずを拾い集めると、そのまま黙って自室へ引き上げ、口のけがを十分に洗い落としてから、ひとり寂しく家を出て行くのだった。セーラがどういう目的で家を出て行ったのかは分からない。しかし、ぼくも面白くなく、彼女の後を追うようにして、リサの叫ぶのも聞かず家を飛び出した。

そんなとき、ぼくがよく行ったのは、近くを流れている川の堤防に沿って行ける港だった。河口近くの所では、子供や大人たちがたくさん集まって、みんな釣りを楽しんでいた。そこは都会の喧騒とは無縁の静けさが広がっており、気晴らしをするにはちょうどいい楽天地だと以前から目をつけていたが、しばし生活苦を忘れさせてくれるのにちょうどいい場所だった。人々の表情は明るく、楽しそうで、貧しい中にも、たくましさがあった。そしてぼくはよくそこの手すりにもたれ、汐風に吹かれながら、時の経つのも忘れ、食い入るように人々の楽しそうな姿を見つめながらすごしたものだった。そしてこの日も、気が付いたときには、もう夕陽が港にその影を映そうとしていた。そのときになって、ぼくはふと寒さが身にしみ入って、もうそろそろ家に帰ろうと思った。そしてそのとき、ぼくの心は、なぜか晴れ晴れとしたものに変わっていた。というのも、港に沈み行く夕陽が、一つの希望を象徴しているように、ぼくには思われたからだった。希望――それは、ママに会えるという希望だった。ぼくはその希望を胸に抱いて、我が家へと帰って行った。

しかし、再びアパートに帰って来ても、そこで目にしたのは、裸電球に照らされた薄暗い部屋と、貧しく、やせ細った二人の哀れな妹の姿でしかなかった。しかし、それを見ても、決してぼくは、失望はしなかった。妹たちは、帰って来たぼくをまるで魔物か何かのように、よそよそしく、また恐ろしげな目つきで見つめたが、ぼくは少しも気にしなかった。そして何事もなかったかのようにふるまい、自然と彼女たちの生活の中に溶け込んで行くことができたのだった…

そんな生活をくり返しているうちに、ぼくは自然と、このアパートの中で一定の地位を占めるようになって来た。セーラも、もう以前のようにぼくの失業を問題にしなくなり、一種あきらめのような目でぼくを見つめるようになり、ぼくはぼくで、その状態がごく当たり前のようにふるまうようになっていった。セーラがその問題をむし返して口うるさく言うとぼくの反発を食らうのは目に見えていたし、もう勝手にしなさいとばかり、とんと言わなくなってしまった。それをいいことに、というわけでもなかったが、ぼくはもう全く、働きに行かなくなってしまった。二人の妹は、そんなぼくの状態を案じてはいたが、あえて、そっとしておいてくれたのだ。そしてぼくはと言えば、都会の最貧部にあって、全き自由を手に入れたと同時に、都会の観察者となって行った。アパートでのぼくの一日の仕事と言えば、妹たちが与えてくれたわずかな食料だけを頼りに、昼日中、街の中をさ迷って、人々の暮らしぶりを、感傷的に観察することだった。そしてそのときを境にしてぼくは人々との生活上のつながりを断ち切った、放浪者としての人生を歩み出したということができるだろう。ぼくは、あの出来事を境として、身も心も漂泊者としての人生を歩み出したのだった。

妹たちは、決して余裕のある生活とは言えなかったが、そんなぼくの生活を許してくれたばかりか、時には小遣いさえ、ぼくに分け与えてくれたことがあった。ぼくはその金を有り難くちょうだいすると、映画を見たり、本を買うのに役立てた。

　そして、もう春になろうとしていたときのことだった。ぼくは、裏通りの寂しい道を歩いていたとき、もう風雨にさらされて、かなりボロボロになった写真雑誌が無造作に路上に打ち捨てられてあって、それが風のせいで、自然とめくれて行くのが目に止まったことがあった。ぼくの視線は、何気なくそのヌード写真に注がれたが、その写真に写っている悲しげな少女の姿を見て驚いた。なんと、そこに写っていたのは、あのリサではないか！　貧しいとは言え、いつのまにとぼくは、一瞬憤りすら覚えた。しかし、その気持ち以上に引きつけたのは、リサのみずみずしいヌード姿であり、その表情の、哀れの上の美しさだった。ぼくは、その部分だけを雑誌から引きちぎって、ポケットにしまい込んだ。そしてリサの名誉の為にも、この事実は隠しておこうと決心した。若い頃のリサの痛ましい事実の真相を知ったのは、それから随分と後のことであった…